

伝説の敵

琴乃つむぎ / WordsWeaver

第一章 第一節

子供の頃から「大いなる敵」の話を聞いて育った。立ち向かわんとする戦士を見送ったこともある。

父もそのひとりだった。母の腕に抱かれながら見送った。

ここではないどこかを見つめる父の眼差しを、母から伝わってきた憎しみとも悲しみともつかぬ感情を、イーヴは今でもはっきりと憶えている。

女達の歌う歌を、老人達が鳴らす楽器の音を憶えている。

腕を拡げて舞う父の姿を忘れることはない。

そうやって挑戦者を壮行するのは同じ村の者たちばかりではない。挑戦者が現れたとなれば、近在の村からわざわざやってくる者もいる。そういう者は大概、かつて身内や親しい者を送り出した経験があるのだという。昔、イーヴも友人の兄を壮行したことがある。

しかし送り出した戦士たちが帰ってきたことは一度も無かった。

イーヴたちエク族の間には伝説がある。

聖なる山ジャンザビには、「大いなる敵」が棲^すんでいるという。

その姿を見た者は誰も居ない。

誰ひとりとして生きて帰ってはこなかったからである。

ジャンザビに棲む「大いなる敵」は、長い年月に
^{わた}互り、イーヴたちエク族の戦士を奪ってきた。

ただの戦士ではない。

「大いなる敵」に挑むのは、^{ひときわすぐ}一際傑れた戦士である。勇者と認められた者でなければ、「大いなる敵」への挑戦を認められることはない。

とはいえ勇者であっても誰もが「大いなる敵」に挑むわけではない。何より、「大いなる敵」に挑むのは無謀なことであるという認識がある。

エク族は決して臆病な部族ではない。傑れた戦士を出すことで近隣諸国に名の聞こえた部族である。

慎重さと勇気は並立しうる。己が身の丈を知ることとは尊いことである。それらは決して^{きょうだ}怯懦ではない。

女たちは「大いなる敵」の話をしない。口に出すようなことではないと考えている。

彼女らにとって「大いなる敵」とは、夫や恋人、息子、あるいは兄弟を奪う、恐ろしい魔物でしかないからである。

対して男たちにとって「大いなる敵」とは、単なる魔物以上の、恐ろしい力の根源であった。そこに

は恐怖と同時に、いや、むしろ崇拜に近いような感情がある。無謀極まりない行為ではあっても、「大いなる敵」に挑むということには、ある種の魔力があるのである。

故^{ゆえ}にこそ、家人族人の制止を振り払っても名のあ
る戦士たちが挑戦を繰り返すのであった。

イーヴも例外ではなかった。

「大いなる敵」の話を幾度となく聞き、帰ることのない戦士を見送ってもなお、いや、それがゆえなのか、「大いなる敵」に心惹^ひかれた。その心のままに、傍目^{わきめ}も振らず、己が身を鍛えに鍛えた。己もまた、「大いなる敵」に挑戦するのだと。

日々の修練は、イーヴの顔つきを精悍なものにし、その肉体を逞^{たくま}しく緊縮^{ひきし}まったものにしていった。エク族の地の強い陽射しは、イーヴの金髪に深^{ふか}み味^みを与え、その肌を小麦色に焼き上げていった。

そんなイーヴを心秘かに慕^{した}う女は、少なからずいた。しかし、女たちの気持ちとは裏腹に、イーヴの心は常に「大いなる敵」に占められているのだった。

六日前のことである。遂^{つい}にイーヴは村を発^たった。

聖なる山ジャンザビに向かうことを告げると、村の者たちは皆、どこか納得したような様子だった。母でさえも。

「いつかはこうなると思っていたよ」

そう言った母の顔には、諦めの微笑が浮かんでいた。胸に痛い微笑だった。

後ろめたさに、母の顔をまともに見るができなかった。父がいなくなっからの母を知っている。不自然な笑顔しかできなくなった母を知っている。それなのに、こんな親不孝ができる己というものが、我がことながら不可解であった。

強く反対する者はひとりもいなかった。それは、今までのイーヴの修練を近くで見ている所^{せい}為^いもあるだろうし、イーヴの父がやはり同じようにジャンザビに向かい、そして還らなかったことを知っていたからだろう。

「山までの道は遠い」

長老は言った。もし、一週間経って山に受け入れられることがなくば、村に帰ることを約束してはくれまいか……。

消極的な願いだったが長老の気持ちは理解できた。

村のためだけではない。自分のため、老いた母のため、イーヴの無謀な挑戦を何とか未然に終わらせてしまおうと思っているのだろう。

イーヴは^{りょうしょう}諒承した。

ジャンザビを目指して歩き、一週間かけて中に入

れなければ村に戻ってくると。

聖なる山ジャンザビは「大いなる敵」が棲まうのみならず、それ自体が神秘を持っている。

緑少ない白茶けた荒野の直中^{ただなか}に在って、ただ一点緑に^{あふ}溢れている。

それは誰もが^{いぶか}訝しむ光景だった。

そして青青としたその姿が見えてもなお、辿り着けるとは限らぬ山なのだ。

ある者は何の苦もなく山にまで辿り着くが、またある者は一日歩いても近づくことができない。それが何故なのかは誰にも分らぬ。

尤も^{もっと}、「大いなる敵」に挑む者でもない限り、辿り着いても山中に入ることはない。精精^{せいせい}が山の周囲を歩いて帰ってくるだけであった。

今までにもイーヴは山に近づいたことがある。それらの時でも長くて三日、大抵は苦もなく到着したものだから、いかにジャンザビが神秘の聖山であろうとも、まさか一週間近くも歩かされることはないだろうと思っていた。

だが今、遂に「大いなる敵」に挑戦すべく向かってみると、運命の皮肉か、イーヴは延延と荒野を歩かされているのであった。

前進していることが感じられぬ。

変化に乏しい荒野をどれほど歩いたことか。

いつしか乾いた大地に伸びる己の影が、二つに分かれて見えていた。

己の影だけではない。よくよく見れば産毛のように生えている草も、石さえも、いや、見えるもの全てが二つの影を地に伸ばしている。

光源が二つなければできないはずのない影である。
訝^{いぶか}しんで辺りを見回す。白日^{はくじつ}に晒^{さら}された荒野が広がっている。光源どころか人影も無い。陽炎^{かげろう}だけが揺らめいている。

イーヴは息を呑んだ。

かつてこの大地は雨よりも多く血を吸っていたという。ここは二つの大国、ヴァルカンティとリンドベリの、かつての国境地帯であった。開けた荒野は両軍がぶつかり合うには恰好^{かっこう}の場所であったろう。

——何があってもおかしくはない……か？

影が二つになった原因を、古戦場に付きものの魑^{ちみ}魅^{もうりょう}魍^{もうりょう}魎^{もうりょう}に求める。

陳腐な発想だ。幼稚と言ってもいい。

魑^{ちみ}魅^{もうりょう}魍^{もうりょう}魎^{もうりょう}などあって堪^{たま}るか。

第一、そんなものが顕^{あらわ}れるにはあまりにも早過ぎる。昼食を終えたのはつい先程のはずだった。

その証拠に、陽はまだ高く……

と、群青色の天を見上げて、目を瞠^{みは}った。

太陽が二つある。

目を瞬^{しばた}き、己の手指に目を落とす。十本ある。腰に佩^はいた剣を抜き放つ。一直線の白刃が現れる。二重にぶれたところはどこにもない。目がおかしくなったわけではないようである。

二つに分かれた己の影と、双子のような太陽を交互に眺める。そうして何度も繰り返すうちに、あり得^{うべ}可からざる光景が、現実のものとしてイーヴの心身に刻まれていった。それと共に、嫌な汗が背筋を滑り落ちていった。

裁^{とき}きの刻

百年に一度、神は地上の総^{あら}ゆる生命に裁^{くだ}きを降すという。二つの太陽で、すべてを隅^{くま}無く照らし出し、その種^{しゅ}を地上に存在させておいてよいものかどうかを調べるのである。不要な種であると判断された場合、その種は地上から根絶させられる。

無論、伝説である。

生まれてこの方、いまだかつて滅び去った種の話など、イーヴは聞いたことがない。

神殿に暮らす聖職者たちは、口を開けば神の奇蹟と神罰とを語り、暇さえあれば喧伝して歩いている

が、実際、そんなものなどありはしない。

いや、あつて堪^{たま}るかという思いがある。

——神の裁きも、罰も、ありはせぬ。

そう考えてはいるが、やはりいい気分はしない。

イーヴは、首に下げた「勇者の護符」を衣服の上からぐっと握り締め、行く手に聳^{そび}える山を恨めしげに仰ぎ見た。

起伏も緑も乏しい荒野の中、一ヶ所だけこんもり青青としている。

すぐにも辿り着けそうで、それでいてなかなか辿り着けぬ。このままでは本当に約束の一週間を使い切ってしまうかも知れぬ。

心なしか焦りを覚えつつ、イーヴは足を速めた。

二つの太陽にはやはり二つ分の熱があった。

頭から分厚^{がいたう}い外套を被っているにもかかわらず、そんなものなど無いかのように、肌がじりじりと焼かれていく。体中の水分がどんどん失われていく。

そのように二つの太陽に炙^{あぶ}られながら歩いていると、「神の裁き」の伝説は満更^{まんざら}でもない気がしてくるのだった。

元より、昼と夜では別世界ともいうべき寒暖差のある土地である。

緑は少なく、木のような立派な植物は生えていな

い。つまりここに生えている植物は、厳しい気候の中で生き抜いてきた、謂わば歴戦の兵ともいえるものであった。それが今、どれもこれも地に臥して干乾びてしまっている。

植物だけではない。先刻、遠目にちらりと見えた狼たちも、えらく気怠げな様子であった。イーヴを獲物と認めたとしてもこちらに向かってくる気力は無いように見えた。

有り難いことである。向かってこられたら応戦する気力はイーヴにも無い。無論、気力が充実していたとしても流石に狼の群相手にひとりで勝てる気はしないが。

このままでは焼け死んでしまうかも知れぬ——そんな不安が頭を過ぎる。

聖なる山ジャンザビ以外に、強烈な陽射しを避けられるような起伏や凹凸は、この荒野にはどこにも無い。

干乾びるのが先か。

ジャンザビに辿り着くのが先か。

そう考えて苦笑が浮かんだ。

おとなしく帰ればよいのだ。

ジャンザビは去る者を引き留めはしない。すぐに村に帰り着けるだろう。

だが——

そんなつもりはなかった。

ともかく、ただ歩き続けるより外ない。それが腹立たしい。己が剣をぶつけようのないもの、抗いようのないものを相手にするのはもどかしかった。

——「大いなる敵」が相手ならば……

イーヴはジャンザビを睥^{にら}みつつ歩んだ。

狂おしい思いが、熱気で朦朧^{もうろう}とする心身を駆けめぐっていた。

灼熱の空気に赤味が混じり始めた。

二つの太陽が真っ赤に燃え盛りながら、それぞれ東と西に分かれて沈みつつあった。

夕方である。

にもかかわらず、そんな気がしない。

このまま二つの太陽が沈みきって、いつもと変わらぬ夜がやってくるとは到底思えなかった。

沈むと見せて折り返し、再び昇ってくるのではないか。あるいは大地の向こうに沈むとしても、今度は大地自体を煮え滾^{たぎ}らせるのではないか。大地が火を噴き、鎔鋳^{ようこうろ}炉の鉄の如く赤く融^とけることがあるという話を聞いたことがある。

そんな想像したくもない想像に否応もなく苛^{さいな}まれながら歩いていると、不意に、空気の膜を突き抜けた感覚があった。砂漠で時々遭遇する、あの目に見

えぬ壁である。

壁の前後で空気の温度が大きく変わるあの壁である。

どうしてそんなことが起きるのかは分からない。

砂の魔神のいたずら悪戯だと言う者もある。

イーヴにとってはどうでも良い話だった。

だがこの荒野であの壁に出会えるとは思わなかった。意外な感じがした。

意外だと思ふ間もなく鋭い閃きひらめが起こって、イーヴは足許に落としていた目を反射的に上げた。

そして大きく目を見開いた。

目に映ったのは白茶けた荒野でも、乾いた大地でも、干乾びた草でもない。

鮮やかな緑。

草木が青青と生い茂る斜面が、眼前に立ち塞ふさがっていた。

イーヴは声も無く、誘いざなわれるように、あるいは惰性のように歩みを進めて、立ち並ぶ木々の合間に入り込んだ。

これまでとは別世界の空気がイーヴを包んだ。

すなほこり砂埃にまみれた鼻孔の中を青臭い草葉の匂いが、甘やかな花の香りが通り抜ける。風と己自身が発する音を捉えるだけであった耳に、草木の騒ざわめきが、鳥や虫たちの声が聞こえてくる。

ほて 火照り、かわ 渴き、ところどころみずぶく 水脹れの浮いた体
に、涼やかさとみずみず 瑞瑞しさがじんわりとしみ込んでい
く。それと共に熱気と疲労で朦朧としていた意識
が、次第にはっきりとしてきた。

イーヴはみぶる 身顫いした。

——ジャンザビに到達した！

歓喜と共に、そう叫び出したい衝動が湧き上がった。

だがその思いをぐっとこら 堪えた。

喜ぶのはまだ早い。喜んでいる場合でもない。敵
の領域に足を踏み入れたのである。

森の奥深くに目を向ければ、夜を前にしてすで
に、そこは闇の支配下にあった。闇にいろど 彩られた草木
が手招くように揺れ、あざけ 嘲るようにざわ 騒めいている。

イーヴは思わずあとじさ 後退った。その闇自体が「大いなる敵」であるかのように。

「大いなる敵」とはいかなるものであるか、イーヴ
は知らぬ。いや、誰も知らぬ。知り得たであろう者
は帰ってこなかった。

神殿の聖職者たちはジャンザビを神が降臨する聖
地とみな 見做しており、「大いなる敵」の存在など認め
ていない。ジャンザビへ向かう者は神を畏れぬ背教

者であり、帰ってこぬのは聖域を汚した神罰故であるという。

最近ではそんな部外者の言を真に受ける者もごく少数ながら居るものの、部族の言い伝えに^よ拠れば、この山には「大いなる敵」が^す棲みついているという。イーヴはそれを信じている。

信じてはいるのだが、仮に神殿の聖職者たちの言うようにこの山に神が居るのならば、それはそれでおもしろいとも思っている。神に挑むのも悪くはない。

挑むのが神であれ、「大いなる敵」であれ、恐れを感じぬわけではない。死を覚悟してはいるが、死ぬつもりもない。現に、思わず後退ってしまい苦笑した。

ただ、ざわりと鳥肌が立つ瞬間が心地良くはあった。死を前にして生に触れている感じがするというのは妙なものだが。

イーヴは^{きびす}踵を返して、道無き道を引き返した。

臆したわけではない。満を持して「大いなる敵」と^や殺り合いたいのである。

それには闇が深過ぎるし、体調も万全ではなかった。休息を兼ねて朝まで待つのが賢明である。そうしたところで、今更「大いなる敵」は逃げも隠れもせぬであろう。

神の偏愛振りが極端に^{あら}露わになっている大地の境目近く、どこからも身を隠せそうな茂みの中に、イーヴは腰を下ろした。

その途端、^{ほぞ}臍を^か噬むこととなった。

休息の体勢を取ることで、意識と肉体を繋いでいた何かが完全に途切れてしまった。地の底に墜落していくような疲労感にどっと襲われた。睡魔に不意を^つ衝かれた。

肉体は否応も無く屈服させられて、大地に倒れ込んだ。

イーヴは愕然とした。己の情けなさに狼狽した。

敵地である。^{おおいびき}大躰をかいて寝られるような場所などどこにもない。いつでも動ける態勢で、休息するはずであった。

それがなんたる無様であろう。

^{ようや}漸くの休息を得て、手前勝手に喜びの声をあげる肉体を叱咤して、イーヴは大地を引っ掻き、草を^{むし}芟って、半身を起こした。

手近な樹木に身を^{もた}凭せて大きく息を吐いた。頭上を見上げれば、幾重にも重なり合う枝葉の合間に、赤赤とした空が見えていた。

その視界も一瞬にして暗転した。睡魔に^{まぶた}瞼が閉じようとしている。

すぐさま目を開いたが、疲労の極みにあって、ま

んじりともせず夜を明かすなど、どだい無理な話であると悟った。

イーヴは周囲に注意を払いつつ、浅い眠りに就くことにした。

＊

朝は何事も無くやってきた。

ふたつの太陽は、沈むと見せかけて再び昇ることも、大地を煮え滾たぎらせることもなかった。

夜明け前に目覚めたイーヴは、たったひとつの太陽が、東の彼方から何食わぬ顔で昇ってくる様を確かに見ていた。

十八年間毎日迎えている、いつも通りの朝である。

結局、「裁きの刻とき」とはなんであったのか？

イーヴには皆目分らなかった。

天頂でふたつに分かれた太陽が、世界を真夏よりも熱して東西の彼方に沈んだ——ただそれだけのことであったように思える。

耳に心地良い小鳥たちの囀さえずり、朝露と草花の匂いを含んだ清澄な風、すべてを輝かせる朝の柔らかな陽光——世界のそうした美しさに触れていると、この世界の何かが滅びたとは到底思えなかった。

——なべて世は事も無し。

思わずそんな言葉が浮かぶ。

言うならば、それは勝利宣言である。生者の傲慢、あるいは欺瞞^{ぎまん}である。

世界は常に闘争に満ちていて、そこには必ず勝利と敗北が、生と死があるはずであった。

なんとなれば世界の美しさとは、生者の歓声と死者の嘆声^{かな}が奏でる和音であるのかも知れぬ。

卒然、イーヴは羞恥に襲われた。己をひどく醜いと感じた。

世界に対する考察など、戦士がすることではない。闘いの中には、考察も解釈も、一切が入り込む余地がない。生か死かという、偽りのない真実だけがそこにある。そんな単純明快さに、イーヴは惹^ひかれているのであった。

肉体が疼^{うず}いていた。昨日とは違う。いつでも闘える状態にあった。眠りは浅かったものの、若く逞^{たくま}しい肉体は、驚くべき恢復^{かいふくりよく}力で生氣を取り戻していた。

しかし、その前に遣るべきことがある。

咀嚼^{そしゃく}していた干し肉を呑み込むと、イーヴは徐^{おもむ}ろに立ち上がった。携帯してきた食糧はこれで尽きた。まずは水と食糧を確保することが先であった。

「大いなる敵」の探索には、どれほど時間がかかる

か判らぬのである。

イーヴは水と食糧の確保を第一に、「大いなる敵」の探索とジャンザビの探査を兼ねて、山中を歩いた。

ジャンザビは大きな山ではない。外周はぐるりと歩いて一日、山麓から山頂までは目測するに半日の距離である。

もちろんその距離に対する時間は、ジャンザビが丸裸の岩山であればの話である。

緑深い道無き道を進むのは、かなり骨が折れた。丈高く強靱な草が行く手を阻^{はば}み、さらには地形を誤^ご魔化^{まか}していた。唐突な高低差に足を取られることは屢^{しばしば}々であった。崖^{がけ}に向かって踏み出しそうになったこともあった。

そもそもイーヴはこのような山歩きには馴れていない。生まれ育ったエク族の地は平原であるし、これほど緑には恵まれていなかった。

目にする植物は多種多様で、これまた見馴れぬものばかりであった。木の実や茸^{きのこ}なども見かけたが、イーヴが手を出せるようなものはほとんどなかった。得体の知れぬものを食べるわけにはゆかぬ。

動物は、蛇、兎^{うさぎ}、鼠^{ねずみ}、鳥、鹿などを見かけた。獲物は豊富に居たが、馴れぬ場所での狩獵^{てこず}は手古摺^{てこず}った。漸^{ようや}く兎を捕まえたと思ったら、兎ほどにも肥え

た鼠だった。驚いた。

水場^{みずば}は、そこへ向かう動物たちの痕跡^{こんせき}を辿^{たど}って探索した。大きな水場には行き当たらなかったが、ともすると見過ごしてしまいそうな湧き水が、そこここにあった。

もしかしたら、ジャンザビは地下水^{ゆうしゅつぐち}の湧出口であるのかも知れぬ。荒野^{ただなか}の直中に繁茂せる緑の秘密は、そこにあるのかも知れぬ。

そう考えたものの、イーヴはジャンザビの不思議にさして興味があるわけではなかった。

神の存在など信じておらぬが、仮に神がいるとして、ジャンザビを創造していたとしよう。だがその御心など、知りようもなければ知ったことでもないのではないか？

神殿であれだけ崇められているくせに、神はいつだって身勝手ではないか。人間のことなど、地上のことなど、何ひとつ考えていやしない。現実を見れば、そうとしか思えぬ。

そんなイーヴからしてみれば、事ある毎に、奇蹟だの神罰だのと言っている聖職者たちは滑稽でしかなかった。

とはいえ己とて彼らとなんら変わらぬのではないかと思う。「大いなる敵」という得体の知れぬものに踊らされて、ここまでやってきたのだ。

イーヴは舌打ちした。

——また、くだらぬことを考えている。

思考が鬱陶^{うっとう}しい。そんなものによつたいなんの意味があろう。何も考えずに、ただ闘いたかった。

しかし、その日の内にイーヴの願いが叶うことはなかった。「大いなる敵」と出逢うどころか、その痕跡にすら行き当たらなかった。

そうした状態が二三日続くと、樹下を寝床とするのは心許^{こころもと}無くなってきた。

昼夜の寒暖差が激しい外の荒野に比べて、ジャンザビの内は遥かに過ごしやすく、就寝時の防寒にもそれほど気を遣う必要はなかった。時期は乾季であるし、雨の心配もほとんど無い。

それでも外で寝ていれば何が起こるか判らない。

「大いなる敵」は元より、どんな敵が潜んでいるのか知れぬのである。身を護^{まも}れる場所が必要であった。

そのような適当な洞窟を探し出すのには、それから二日ほどかかった。

洞窟の入口は、幕のように垂れた蔦^{つた}の群生に覆い隠されていた。入口付近は少し身を屈^{かが}めねばならぬが、十歩ほど進むと、驚くほど大きな空間が炬火^{たいまつ}に照らし出された。自在に槍が振り回せるほど——いや、それ以上の空間である。高さは槍^{ふたすじ}二筋分、広さ

は村長の家の広間よりなお一回り以上あろうか。

見回してみたところ、先住者はヤモリくらいのものであった。もしや「大いなる敵」、あるいは己と同じくジャンザビにやってきた先人たちの痕跡がありはせぬかと思ったが、どこにも見当たらなかった。なんとなく物寂しさを覚えた。

取り敢えず、イーヴはここに腰を据えることにした。ひとりで起居するには大きすぎる洞窟ではあったが、近くに比較的大きな水場があった。飲料・生活用水として使えるのは元より、水を飲みに来る獲物を捕獲することもできよう。

こうして拠点を持つことで、闇雲になりがちだった探索も遣りやすくなった。イーヴは洞窟周辺から探索を始め、今日は東へ明日は西へと、大まかな地図を頭の中に作りながら探索範囲を拡げていった。

しかし、ジャンザビを半分以上探索したと思われても、「大いなる敵」の影も形も一向見当たらなかった。

そうするうちに、ジャンザビに足を踏み入れて一ひと月つきが経とうとしていた。

——まだ一月だ。

そうは思っても何ひとつ収穫のない探索に、氣勢そが殺がれていっているような気分が拭えない。

ジャンザビに入るまでは目に見えるジャンザビを

目指すだけでよかった。「大いなる敵」があそこで待ち構えている——そう思いつつ、ジャンザビを目指した。ジャンザビに入ることさえできれば、あとはもう闘うだけのような気がしていた。

ジャンザビは「大いなる敵」の縄張りである。それを犯したのだから、なんらかの動きがあつて^{しか}然るべきであった。

それが何も無いというのはどういうことなのか？

こちらの様子を窺っているのか、それとも、こちらの侵入に気づいておらぬのか。

後者であれば、怒りと失望を禁じ得ぬ。縄張りを犯されてのうのうとしているなど、「大いなる敵」にあるまじきことである。

いや、そんなものが「大いなる敵」であるはずがなかった。そんなものが、エク族の戦士たちを駆り立て、奪い去ったはずがなかった。年老いた母を置き去りにしてまで、己が挑もうとしている相手であるはずがなかった。

イーヴは乾いた唇を引き結んだ。溜息を呑み込みながら天を見上げた。

赤味が差しかかった天があった。あと一刻もすれば日は落ちるだろう。今日の探索はこれで終わりのようである。イーヴはのろのろと踵^{きびす}を返し、洞窟へと帰る道^{たど}を辿った。

物思いに沈んでいた所^{せい}為か、あるいは、洞窟に帰るだけの道に気が弛^{ゆる}んでいたのか、イーヴは直前までその存在に気づかなかった。

突如、頭上から――幾重にも重なり合う枝葉の天井から、不自然な葉^{はず}擦れの音が聞こえてきた。同時に、そこから何かが降ってくる――いや、やってくる気配を感じた。

考える間もなく身体^{からだ}が動く。戦闘態勢に入る。

が――

左肩に衝撃が走った。盾が弾け飛んだ。

身体の反応に問題は無かった。気づくのが遅過ぎたのだ。

崩れた体勢を立て直しつつ、視界を過ぎ^よった影の方に剣を向ける。しかし影の方がそれよりも速い。

見開かれたイーヴの灰色の瞳に大きく鋭い牙が飛び込んできた。獣^{あぎと}の顎である。イーヴの喉目がけて矢のように迫ってくる。

――くらう！

戦慄と共に意識が凍りついた。

だが長年の鍛錬の成果だろう。反射的に身体が動き、すんでのところで^{かわ}躲し得た。

牙がイーヴの肩口^{かす}を擦り、牙の持ち主の体が体当たりのように激突してきた。

鋭い当たりだった。互いに弾かれた。

イーヴは近場の木に凭^{もた}れて転倒^{てんとう}を免^{まぬが}れた。そのまま木を盾にして恐る恐る相手を窺う。

褐色に黒の縞^{しま}模様が入った毛並み。四つ足の獣である。豹^{ひょう}に似た体軀をしているが、顎の中に収まりきらぬ長い牙が二本、剥き出しになっている。

獣は喉を振るわせて激しくイーヴを威嚇していた。

見たことの無い獣である。見るからに肉食獣であったが、ジャンザビで肉食獣^{でくわ}に出遇すのも初めてである。

しかし「大いなる敵」ではない。

直観的にそう思った。

獣の牙と爪には血がこびり附いていた。己の血であるとイーヴは悟った。

傷のことを気に掛ける余裕など無かった。イーヴと同じく弾かれたはずの獣は、すでに飛び掛かる体勢を整えて、低い呻り声をあげながらイーヴを睥^{にら}んでいた。

一触即発の張り詰めた空気が漂う。

このような場合、逃げる素振りや怯えた様子を決して見せてはならぬ。また、合わせてしまった目をそ外^そらしてもならぬ。そうした途端に獣は飛び掛かってくる。

このままじっと見据え続けていても、やはり闘い

になるのを避けられまいが、必要以上に闘う必要はない。獣たちは闘うために闘うのではなく、生きるために闘うのである。命懸けの闘いをするのではない。こちらが強いということ、獲物に成り得ぬということを示せば去っていく。

最も効果的なのは逆上して見せることである。あまり見られた様子ではないが、狂い猿のように振る舞って見せると、獣は去っていくことが多い。闘いを避けるのなら、これが得策であろう。

イーヴは考えをめぐらしながら、獣をじっと見つめた。獣は毛を逆立てたまま、呻り声を発し続けている。長い尻尾を上下に^{しな}撓らせ、猫族特有の長い^{ひげ}髯を大きく拡げている。

「^か咬みつかれそうになったら、^ひ髯を引^{つか}っ掴んで睥んでやれ」

不意に、^{しし}獅子と闘ったことがあるという、友人の兄の言葉を思い出した。彼もまた、ジャンザビに消えた戦士のひとりであった。

イーヴの胸の内に、対抗意識めいたものがふつつつと湧いてきた。

——馬鹿な真似はよせ！

理性が制止の声をあげる。

無駄な闘いは極力避けるべきであった。獣と闘うためにジャンザビにやってきたわけではない。ここ

で無理をして怪我を負ったら、それどころか死んでしまったら、これまでのことが、「大いなる敵」と闘うためにやってきたことが、すべて無駄になる。

しかし、そう思う一方で、闘いの予感に胸は高鳴り、身体は熱くなっていた。己の力の^{ほど}程を試したくもあった。獣すらあしらえずに、「大いなる敵」に勝てるとは思えぬ。

イーヴは^{まばた}瞬きも呼吸も忘れて獣を睥み、じりじりと獣に近づいた。獣は逆立てた毛を^{ざわ}騒めかせ、イーヴを押し返さんとするかのように大きく呻った。

ふたつの距離が^{せば}狭まっていく。その間の空気が圧縮されていくように緊張が高まっていく。仮に間に入る者があれば、^{すさま}凄じい威圧感に息もできなくなるかもしれぬ。

それは戦う両者がお互いに真っ向から^{あいたい}相対することでしか生まれえぬものだった。イーヴと獣は、反発し合うことで^{つな}繋がってもいるのだ。

ところが、突然それは横合いから飛んできた枝切れに断ち切られた。

枝切れは獣に^あ中たった。獣はびくりと^{ふる}慄えた。イーヴもびくりと慄えた。獣の慄えがイーヴに伝わったのだ。

その瞬間、ふたつを繋いでいたものが断ち切れた。

我に返って、イーヴと獣は素速く跳び退^{すさ}った。互いの距離が大きく開く。

そのまま再び睥み合う。だが先の感覚が完全に断たれてしまったことを確認し合うだけだった。間にあるのは白け切った空気だけである。

獣はぱっと身を翻し、仄^{ほの}暗い森の奥へ走り去った。

その様を見送るまでもなく、イーヴの意識は獣から離れた。

こうした物別れの要因となった枝切れは自然に飛んできたものではなかった。明らかに故意に投げられたものだった。それもイーヴを助けようとしたのものと思われた。

——いったい何者が……？

訝^{いぶか}りながら、枝切れが飛んできた方に目を向けた。

第一章 第二節

「あの……だいじょうぶ、ですか……？」

か細く、高い声だった。

イーヴは灰色の瞳を見開いた。

茂みの中に、えらく場違いな様子の少年が立っていた。

見たところどこかの兵のようである。行軍する騎士に付き従う従士といった風情だが、どうにも頼りない感じである。

もしもイーヴが小姓という言葉を知っていたら、主人から逸れたどこかの小姓ではないかと推測したかもしれぬ。しかし生憎、イーヴは小姓という存在自体を知らなかった。

そこで目の前の相手をよく知るために目を凝らして観察した。

そしてイーヴは驚いた。無論その驚きを面に表すようなことはせぬ。しかし内心では結構な驚きをイーヴは感じていた。

少年かと思えた相手がそうでなかったからだ。

いや、よくよく見れば少年にしては線が円いし、胸に膨らみがあった。

つまりは少年のような扮装をした若い女である。

白い肌には艶が無く、短い金髪には乱れがあり、

青い瞳には張り詰めたものがあった。疲労と塵埃^{じんあい}にまみれてはいるものの、その身内には確とした規律があると感じられ、隠すべくもない高貴さを漂わせていた。

すらりとした肢体を包んでいる衣服も、その身に合ってはいたが、この場には合っていなかった。丈の短い上着にズボンと、一見簡素で動きやすい恰好^{かっこう}ではある。

しかしこれまたよくよく見れば、いかにも上質そうな生地^{えりもと}の衣服で、襟元^{そでぐち}や袖口には手の込んだ刺繍^{ほどこ}が施されている。ところどころ破れたり解^{ほつ}れたりしているのも、無理からぬことであった。山中を歩くのに有用な衣服ではない。

腰には短剣が差してある。見たところ武器はそれだけのようである。いや、背負袋^{せおいぶくろ}の中にも何かあるのかも知れぬが、それにしても、武器の扱いに馴れている人間とそうでない人間は見ただけで判る。イーヴには短剣だけが彼女から浮き上がって見えた。つまりはその身に馴染んでいない、使い馴れていないということである。余程^{よほど}の不意を衝^つかれぬ限りは、己が殺^やられることはないだろうとイーヴは考えた。

重要なのは、己の敵か否かということである。

「枝切れを投げたのはお前か？」

イーヴの口調は打切棒^{ぶっきらぼう}だった。元より愛想の良い方ではないが、見ず知らずの人間に愛想を振り撒^まくような性質^{たち}ではない。

女の青い瞳がわずかに揺らいだ。気遣わしげな表情に緊張が走った。

「……もうしわけありません。余計なことをしてしまったようですね」

非難されているのだと思ったらしい。

「いや……」

余計なことと言えば余計なことだった。闘いを邪魔された。

しかし、一方では有り難いことだった。あのまま闘っていたら、「大いなる敵」どころではなくなっていたかも知れぬ。

複雑な気持ちではあったが、助けられて非難するつもりはなかった。

「責めているのではないんだ。随分と不用意なことをすると思っただけ」

結果として獣は去ったが、場合によっては女を襲ったかも知れぬのだ。

「怪我を負っていらっしゃるので、手助けをした方がよろしいかと思ったのです」

「怪我……？」

言われて思い出した。

己の体を見てみると、左の肩から腕、そして胸の辺りまで、革鎧が血に染まっていた。

イーヴは眉間にわずかに皺^{しわ}を寄せた。血を見た途端に、今までなんともなかった左肩が痛み出した。

「先に治療をしましょう。すぐそこに水場がありますから、そちらへ」

女はイーヴに背を向けて歩き出した。イーヴが後に従^ついてくることを疑わぬ様子である。

そんな彼女に反して、イーヴは逡巡^{しゅんじゆん}して立ち尽くした。

このまま従^ついていってもよいものか。

なんらかの絡繰^{からく}りがありはしまいか。

どうにも妙な女である。

闘^{すべ}う術を持たぬであろうに、そうした身でジャンザビに在るということが、イーヴには不可解でならぬ。

ジャンザビは危険極まりない山である。「大いなる敵」は元より、最前のような肉食獣までが棲^すまう山である。

そこへ、ひとりでのこのこやってくるということは……

——頭が弱いのか、狂っているのか。

そう思いかけて思い直した。

己こそどうなのか、と。

闘う術を持つ戦士であろうと、ジャンザビに在ることは十分に危険である。いや、強かろうが弱かろうが、ジャンザビにやってくること自体が狂気的なことなのだ。端から見れば、イーヴと女は似たようなものだった。

しかし、女が「大いなる敵」を斃^{たお}しにやってきたとは考えにくかった。やはり武器を持って闘う彼女の姿が、イーヴにはまるで想像が付かない。

それに今はひとりであるにせよ、仲間と共にやってきたとなれば、話はまた変わってこよう。闘える仲間が居れば、彼女自身が闘える必要は無いのである。

無論、「大いなる敵」が目的とは限らぬだろう。いや、むしろ、「大いなる敵」のことなど知らぬのではあるまいか。

彼女はこの辺りの人間ではなかろう。言葉遣いがイーヴのそれとは少し異なっている。それが身分差によるものなのか、地域差によるものなのかはイーヴには判らない。身分の高い人間の言葉を耳にするどころか、その姿を目にしたことすらほとんどなかったし、あちこち旅をしたこともなかった。しかし、恐らく両方だろうとイーヴは考えた。

となれば、偶然ジャンザビに迷い込んだのか……

そこまで考えてイーヴは小さく息を吐いた。

考えても詮無きことに思えてきた。警戒し過ぎているような気もする。ジャンザビに在って、警戒し過ぎることなどなからうが。

「どうされました……？」

その声で我に返った。

恐る恐るといった様子で、女がこちらを見ていた。

女はイーヴの右手を一瞥^{いちべつ}し、徐ろ^{おもむ}に口を開いた。

「……警戒、なさってるんですね」

緊張と、わずかな失望が混じった声である。

イーヴの右手には、いまだ抜き身の剣が握られていた。

イーヴは何やら気不味くなって、そそくさと剣をおさ^{おさ}収めた。

「すまない……」

「……いえ、無理もないことです。見ず知らずの仲ですし、場所が場所ですし。わたくしも、あなたを警戒していないとは申せません」

女の口振りは、ジャンザビのことを知っている風である。

「お前、なぜこんなところに居る？」

イーヴはそう言いかけたが、それを遮^{さえぎ}るように女は背を向けた。イーヴが従^ついてこようとこまいと関係なさそうに歩いていく。

イーヴは漸く^{ようや}女の後を追った。

女の素っ気ない素振りから、女を怒らせてしまったのではないか、女に見限られてしまったのではないかと思ったのである。

それで後を追うというのは、なんとも情ない話ではある。しかし、反撥^{はんぱつ}してこのまま訣別^{けつべつ}するのも惜しい気がした。

ジャンザビで人に出^であ^あったのである。

「大いなる敵」が棲^すまうジャンザビで。

足を踏み入れたが最後と謂^いわれるジャンザビで。

予想だにせぬことであった。

信じ難いことであった。

だが現に、女はイーヴの目の前を歩いている。となれば、何か有用な話を聞き出せるかも知れない。

この山はどこか怪訝^{お か}しい。

元より神秘の聖山として畏怖されてきた山である。

しかし、実際に足を踏み入れてみて感じたのは、神秘さよりもむしろ不可解さであった。

この山はなんなのだ――。

女の背中が少し離れた。イーヴは足を速めた。

取り敢えず、今は女に従^ついて行こう。考えるのは後でよい。

イーヴは黙りこくって女の後を追った。

そうしている内に、見覚えのある場所にやってきた。イーヴもよく利用している水場である。

女は布を出して水に浸した。

「鎧をお脱ぎになって下さい」

イーヴは驚いた。てっきり、治療する気も失せているのではないかと思っていた。

「……治療、してくれるのか？」

女の目が丸くなった。突拍子も無いことを聞いたとでもいう風である。

「そのつもりで従^ういていらっしゃったのではないのですか？」

「いや……お前、怒ってないのか？」

女の目がさらに丸くなった。

「そんな……怒るだなんて……わたくしには怒る理由なんてありません」

「しかし、お前は俺を助けてくれたのに、俺はお前を怪しんだ」

「それは先にも申しました通り、無理もないことです。それに、わたくしは見返りを求めてあなたをお助けしたわけではありません。——いえ、実際のところ、あれがあなたの助けになったのかどうか……」

「いや、助かった」

弱弱しげになった女の言葉を、イーヴは途中で断

ち切った。余計な手出しで邪魔されたという気持ちはあるにせよ、助けられて安堵している気持ちに偽りは無い。

「そうですか」

女は羞じらうような笑みを見せた。

イーヴは少しどきりとした。不意を衝くような、愛らしい笑みだった。

「では、鎧をお脱ぎになって下さい」

気恥ずかしさを誤魔化すように、イーヴは無言で鎧を脱いだ。

日に焼けた、逞しい肩から胸にかけて、爪で引っ掻かれたような痕があった。

傷の状態を調べて、イーヴは安堵した。出血の割にはさしたる傷ではなかった。傷口は大きいが、深くはない。下山せずに「大いなる敵」と闘える。

それでも女は一瞬怯みを見せた。こういうことにはあまり馴れていないらしい。血を拭う手付きもぎこちなく、イーヴが思わず呻きを漏らすと、我が事のように痛そうな顔をするのだった。

一通り拭い終わると、女は干し薬草と乳鉢・乳棒を取り出した。

旅人ならば、干し薬草のひとつやふたつは持ち歩いているし、その使い方もそれなりに心得ているものである。しかし、旅に馴れているとも、治療に馴

れているとも見えぬ女である。薬なんぞ作れるの
だろうかとイーヴは思った。

ところが、思いの外、女の手際^{てぎわ}はよかった。見る
間に、干し薬草^すを搗^すって粉にし、水で練り上げた。
そして恐る恐る、イーヴの傷に塗りたくった。

イーヴの鼻腔に、苦味のある匂いがつんと突き抜
ける。嗅^かいだことの無い匂いであった。

「この薬草はなんだ？」

「トラームです。傷薬としてよく使われます」

「ふうん……」

聞いたことも無い薬草である。この女と同様、こ
の辺りのものではないのだろう。

薬が塗られると、その上に布切れが被^{かぶ}せられ、薬
が患部に密着するよう固定された。

「ひとまず、これでよいでしょう」

ひと仕事を終えたといった感じで、女は小さく息
を吐いた。

それもそうだろう。馴れておらぬであろうこと
を、やけに真面目くさった顔でやっていた。

「ありがとう」

礼を言うと、女は安堵の混じった微笑みを見せ
た。

イーヴは再びどきりとした。

気恥ずかしくなっていて女の顔を見ていられなくなっ

た。

そんなイーヴを知ってか知らずか、女の方が先に目を外らしてくれた。

「綺麗な首飾りですね」

イーヴはなんのことかと訝^{いぶか}った。己には首飾りをするような習慣は無い。

女はイーヴの胸元を指し示した。

そこには、虹色に輝く大きな鱗^{うろこ}があった。

「ああ……竜の鱗の護符だ」

首飾りと言われたので判らなかつた。出立の日に村長から手渡された、「大いなる敵」の挑戦者の證^{あかし}——「勇者の護符」である。

「竜の……？」

女は不思議そうに「勇者の護符」を見た。

「——と、謂^いわれている。実際のところは判らない。ガルナーガの谷底によく落ちているらしいが、俺が知っている限りでは、竜の姿を見た者はいない。……まあ、この山の主も似たようなものだが」

イーヴはわずかに苦笑した。

「この山の主……？」

女は小さく首を傾^{かし}げて、訝^{つぶや}しげに呟いた。

予想していたことではあったが、イーヴの顔は硬張った。

「『大いなる敵』を知らないのか？」

イーヴから何かを察したのか、女は緊張した面持ちで^{うなず}頷いた。

「お前、どこから来たんだ？」

「……都です」

「都!？」

イーヴは驚いた。

「随分遠くから来たんだな。この山は都でも有名な
のか？」

「いえ……そういうわけではないのですが……」

女は^{くちごも}口籠った。

それから意を決したように口を開いた。

「あなたは――」

何かを恐れるように、一度、言葉を句切り、

「あなたは、地元の方でいらっしゃるんですか？」

「ああ」

イーヴが頷くと、女は心なしか安堵した様子を見せた。

「『大いなる敵』というものは存じませんが、この
山が不思議な山であることは^{うかが}伺っております」

イーヴは鼻を鳴らし、苦笑を混じえて言った。

「^ぼ神殿の^う聖職者どもから^ず聞いているのか？ 神が降臨する山だとか、山に入った者には神罰が下るとか、^{おおかた}大方そんなもんだらう？」

「……ええ」

「俺たちの部族には伝説があつてな。それによれば、ジャンザビには――この山には、恐るべき魔物が棲みついているという。俺たちはそいつを『大いなる敵』と呼んでいるんだ」

「魔物が……」

女の顔が再び^{ひきし}緊縮まった。何かを考えるような顔付きになる。

「……では、この山の不思議は、その魔物が起こしていることなのでしょうか？」

「さあな……よく分らん。部族の云い伝えによれば、『大いなる敵』とは関係無く元元不思議な山のようだが、^ほ神殿の^う聖職者^ずどもによれば、『大いなる敵』など存在せず、すべてはこの山に棲まう神の仕業であるという」

「……」

「いずれにしろ、この山に何かがあることは確かだろう。実際に、たくさん人間がここで消えているわけだしな」

「たくさん人間が……」

女は息を呑み、小さく^{みぶる}身慄いた。

イーヴはその様子を見て、

「お前、ひとりでここに来たのか？」

「……はい」

「悪いことは言わん。山を下りた方がいい」

その言葉に打たれたように、女は小さな唇を引き結んだ。

「……そういうわけにはまいりません」

^{にら}睥むようにイーヴを見る。

「危険は承知の上で、こちらへ参ったのです」

「目的はなんだ？」

「真実の確認です」

「真実……？」

「あなたはどうかのですか？」

「俺は『大いなる敵』に用がある」

女は啞然となった。

「……先程、おっしゃいましたよね？ 『大いなる敵』は恐るべき魔物であると」

「ああ。なればこそ、己がすべてを賭けるに値する存在と謂えよう」

「……？」

女はイーヴの言葉を理解できぬようだった。

だが、^{ほど}程無くして、

「まさか……『大いなる敵』と闘われるために、ここに……？」

イーヴは頷いた。

女はさらに啞然となった。

「俺たちエク族の間では、^{ことさら}殊更珍しいことじゃあない。エク族の戦士たちは、昔から『大いなる敵』に

挑み続けてきた。……誰ひとり帰ってきはしなかったがな」

女は再び息を呑んだ。そして治療したところを不安気に見た。

「でも、その傷では……」

「大した傷ではない」

「完治してからでは駄目なのですか？」

「完治させるとなれば、一度山を下りねばなるまい。そうするわけにはいかないんだ」

下山するのは『大いなる敵』を斃^{たお}したその時のみ——そう、心に決めている。

そんなイーヴにただならぬものを感じたのか、女は気遣わしげな顔をしながらも口を噤^{つぶ}んだ。

「それよりも——お前、何か見なかったか？ 『大いなる敵』らしきものの姿とか形跡とか」

「……いえ、何も。あなたも何か見かけませんでしたか？ 人の姿とか形跡とか」

「いや、ここで人を見るのはお前が初めてだ。驚いたぞ。よもや人に^{であ}出遇うことがあるうとはな。——人を捜しているのか？」

「……ええ。……そのようなものです」

何かを堪^{こら}えるような硬い表情で、女は曖^{あいまい}昧に言った。

何やら只^{ただ}ならぬ事情があるようである。しかし、

イーヴには追及する気も興味も無かった。「大いなる敵」と関係無いのならば、なおさらである。

イーヴは女から目を外らし、上を見上げた。

「昏くらくなるな……」

影そのものとなった枝葉の向こうに、薄青と薄紅が混じり合う空が見えていた。

「お前、寢床は決めてあるのか？」

「いえ……特には……」

「なら、俺のところに来ないか？」

「え……？」

女とイーヴの目が合う。

「寢床にちょうど丁度良い洞窟が――」

そう説明しかけてから、イーヴは重大なことに気づいた。

己は男で、相手は女であった。

うっかりしていた。

「念のため言うが、妙な意味は無い。単なる寢床の提供だ。しかし、お前が不安に思うなら、俺は他に行ってもいいし、この提案を聞き流してくれてもいい」

女はイーヴをじっと見つめた。

「よろしいのですか……？」

「ああ」

「では、ありがたくご提案をお受けしたいと思いま

す。――申し遅れましたが、わたくし、クリステル
と申します」

「イーヴだ」

第一章 第三節

ふたりが洞窟に着く頃には陽は沈みきっていた。

イーヴはいつものように入口に焚火^{たきび}をし、クリステルと一緒に中に入った。

「どこでも、好きなところで寝るといい」

言ってしまってからイーヴは考え直した。

「いや、お前さえよければ俺の寝床を使ってもいい」

イーヴは普段自分が寝ている場所を指差した。草を^ふ葺いてあるので、直に洞窟に寝るよりは大分楽だろう。

「いえ、お気持ちだけ有難くお受けいたします」

クリステルはやんわりと辞退して、イーヴからかなり離れた洞窟の端^{すわ}に坐った。

単に眠るだけならば洞窟よりも外の方がましである。しかし外で眠れば、何が起こるか判らない。先程のような野獣に襲われることは十分考えられる。

比較的安全かと思われるのが樹上だが、こちらは技術が必要だ。

消去法で考えていけばイーヴの洞窟を選ぶのが一番というわけだが、だからといって、イーヴを完全に信用しているわけではないのだろう。外で寝るよりはまし、といったところなのかも知れぬ。

「待っている。下に敷くものを取ってくる」

イーヴは鉋^{なた}を取って外に出て行った。

適当な枝や草を払い、それらを抱えて戻るとクリステルの傍に置いた。一度で足りるはずもないから、何度か往復する。

クリステルは手伝うと言ったが、外は暗いし、見るからに慣れておらぬであろう作業をさせて、怪我でもされたら馬鹿らしい。イーヴはすげなく断り、ひとりで黙々と作業した。

どうにか寝床に足りる分を床に積み上げると、クリステルに言った。

「広げるのは自分でやってくれ」

「ありがとうございます」

自分の寝床に横になるとイーヴは目を閉じた。

しばらくはクリステルが寝床を作る音が、がさがさと鳴っていたが、やがてそれも静かになった。

洞窟内が静かになると、入口から入ってくる音が鮮明になった。

獣の啼^なき声と焚火が爆^はぜる音、そして、沸き立つような虫の音である。

この山に来るまで、イーヴには虫の音を聞きながら眠る習慣はなかった。部族の地に夜聞こえてくるのは、風の音のような獣の雄叫^{おたけ}びか、獣の雄叫びのような風の音か、いずれにしる、耳をよく澄まさね

ば聞こえぬほど、^{かす}微かなものであった。イーヴにとって、夜とは静かなものと決まっていたのである。

^{くら}昏くなると共にいや増さる騒がしさに、最初は随分と^{へきえき}辟易させられた。^{ほうほう}這這の体でやってきた一夜目こそ、虫の音どころでなく寝入ってしまったが、二夜目からはなかなか寝つけなかった。

しかし、馴れというのは恐ろしいもので、一週間もしないうちにどうということもなくなった。今や虫の音に気づかぬこともある。目を閉じれば速やかに眠りが訪れる。

それがどういうわけか、今夜に限って眠くならない。

イーヴは目を閉じ、ジャンザビの夜の音を聞きながら、ただじっとしていた。

そうしているうちに、やがて疑問が頭に浮かんできた。

——そもそもなぜ、あの女はジャンザビにいるのか？

貴族の道楽という感じではなかった。もっと差し迫った理由があるようだった。

それはいったい何なのか……。

他人を^{せんさく}穿鑿する趣味はないが気になった。

^{お か}怪訝しい。

普段ならばこのように相手の内情について考えたりすることはない。

山中で遭遇したという事実、ふたりきりであるという状況がそう仕向けるのかも知れない。

——ひょっとして、山中の怪異に出逢^{でくわ}したのかも知れぬ。

あの女は人ではない——そんな考えさえ頭をかすめた。

馬鹿馬鹿しい。

ぼ^ほう^うず^ず神殿の聖職者どもでもあるまいし、怪異などあってたまるか。この世に血肉を持たぬ存在などあるはずがない。

ジャンザビの神秘にしても、まだその仕組みを理解した者がおらぬだけで、必ずそこには理^{ことわり}があるはずだ。

イーヴはそう信じている。

だからあの女も、確かに都から来た貴族に違いない。

だとしたら、いったいなぜこの山にやって来たのか……

思考が振り出しに戻ってしまった。

イーヴは目を閉じたまま、不愉快げに眉を寄せた。

「……もう、おやすみになりましたか？」

闇の中、不意に女の声が聞こえた。

イーヴはどきりとした。

なぜだか恐ろしいような気がした。

こちらの考えを読まれていたのではないか——そんなことさえ思った。

「あの……」

「起きている」

短く答えると、安堵したような気配が返ってきた。

だが言葉はそれきり返ってこない。

^{しばらく}暫くの間、イーヴは耳を澄まして待ったが、クリステルは何も言ってはこなかった。

ふたりの沈黙を埋めるように、虫の音が絶え間なく響いている。

奇妙な沈黙に^た堪えきれなくなってイーヴは寝返りを打った。洞窟の天井に体を向け、目を開いた。

無論、天井は闇に沈み、何も見えはしない。ただ足元の方から弱い明りが入ってきている。入口にある焚火の光だ。

「眠れないのか？」

「……はい」

「山に入ってどれくらいだ？」

「昨日入ったばかりです」

「じゃあ、二度目の夜というわけか」

「はい」

「この虫の音では、なかなか寝つけないだろう？」

「そうですね。街や庭の虫とは違いますね。あちらはもう少しおとなしいですから」

「庭か……。お前、^{くすし まじないし}薬師か呪師なのか？」

「いえ、違います」

「違うのか？ それにしても、薬を作る^{てぎわ}手際がよかったが……」

「それはまあ……。ですが、さしたる知識や技術があるわけではありません。それに薬のためだけの庭ではありませんので……」

「どういう意味だ？ 薬以外のなんのために……？」

イーヴにはクリステルの言葉が理解できなかった。庭と言えば、野菜や薬草を育てる場所であると決まっている。少なくともイーヴの認識ではそうである。

「どうやら薬草園と勘違いされているようです。わたくしのお家の庭は観賞も兼ねているんです」

「カンショウ？ カンショウって、なんだ？」

「観て楽しむことです」

「薬草を……。観て楽しむのか？」

イーヴは少し呆れたように言った。

「薬草ばかりではありません」

「ふうん？」

クリステルはあれこれと草花の名前を挙げた。部族の地には植物が少ない上に、元よりあまり興味がない所^{せい}為か、イーヴが聞いたことのないものばかりであった。

そもそも、観て楽しむために育てるというのがよく解らない。違和感がある。野に咲く花を観るのとは違うのだろうか？

「都の庭はそういうものなのか？」

「そうですね……そういう庭が多いかもしれません」

「都はどんなところだ？」

「大きな建物がたくさんあって、いろんな人がたくさんいて……賑やかなところですよ。この辺……この山ではなく、この辺りの地方一帯ですが、それよりも緑がずっと多く、暑過ぎることも寒過ぎることもありません」

「ほう……」

噂や旅人から聞き知っている話ではある。しかし、いつもながらイーヴにはまるで想像が付かない。

「失礼ながら、このようなところに人が暮らせるとは驚きでした。あなたがたは昔からここで暮らしていらっしゃるんですか？」

「ああ」

「ここは……どなたかのご領主のご領地ですよ
ね？」

「いや、ここは俺たちの土地だ」

エク族はどここの国にも領地にも属していない。誰かに対する納税や奉仕の義務も無い。

「お前、貴族なんだろう？」

「はい……」

「貴族の女ってのは、ひとり旅をするもんなのか？」

「……」

クリステルの沈黙に、イーヴははっとした。

「ああ、いや、特に深い意味はないんだ。お前のご
とを穿鑿^{せんさく}するつもりはない」

そのはずだ。意図があって言ったわけではない。
単なる素朴な疑問だった。

「貴族って、よく知らないんでな。こうして言葉を
交わすのも初めてなんだ」

事実である。それなのに、何やら白白^{しらじら}しい言い訳
をしているように感じるのはどういうわけだろう？

どうにも怪訝^{おか}しかった。

いつになく饒舌^{じょうぜつ}でもある。

貴族とお近づきになれたからといって、有り難が
るような性質^{たち}ではない。

女とふたりきりになれたからといって、躁ぐよう
な性質たちでもない。

貴族かつ女であっても、また然しかりである。

しかし、思えばひとつき一月もひとりきりであった。

そう思って、イーヴは苦笑した。

——幼児でもあるまいし。

この山に在あって、寂しいだの、恋しいだの、そんな感情を懐いだいたことは一度もない。そんな感情を懐かねばならぬ理由など微塵もなかった。この山には「大いなる敵」が居るのだから。

「……そういえば、お前、二つの太陽を見たか？」

「……え？」

「ひとつきほど一月程前のことだ。太陽が二つになって、恐ろしく暑くなって……ありゃあ、いったい、なんだったんだらうな？」

「……太陽が……ふたつ……」

クリステルは弱弱しく呟いた。

「ちょうど丁度その時、俺はこの山に向かっている途中だったんだ。まったくえらい目に遭あった。日陰のあるところといたら、この辺、この山しかないだらう？ 歩いて歩いて辿り着けなくてな。陽が沈もうかという時になって、ようや漸く辿り着けた」

「……」

「お前が居たところではどうだった？」

「……」

「……おい？」

「……」

「……寝たのか？」

返事は無かった。

虫の音が騒騒しく響いていた。

しばらくの間、イーヴは虫の音を聞いていたが、やがて寝返りを打ち、静かに目を閉じた。

地鳴りのような虫の音が、いつの間にやら鳥の囀さえずりに変わっていた。

夢と現を往き来するだけの、眠りとも謂えぬ眠りから、イーヴは緩やかに目覚めた。

洞窟の入口から清澄な風と光が入り込んでいるが、洞窟内を隅無く満たすまでには到らない。洞窟の中は暗く、奥の空気は淀んでいた。

イーヴは女の方へ意識を向けた。互いに、入り口から見て左右両端を寝床としているはずであった。しかし、なんの気配も感じられない。洞窟全体に意識を向けてみても、それは同じだった。

イーヴは身を起こし、躊躇ためらいがちに目も向けてみた。ものの輪郭が判るかかどうかという明るさの内なかで、じっと目を凝らす。やはり、女の姿はどこにも見当たらない。

しかし、昨日の出来事が夢でなかった証拠に、女が寝ていた場所には草が敷かれている。触れてみれば、すでに^{ぬく}温もりはない。いなくなってから、それなりに時間が経っているようである。

イーヴは己の^{うかつ}迂闊さを噛み締めた。すぐ^{そば}傍に居ながら、出て行ったことに気づかぬとは。

しかも相手は、武術の心得があるわけでもない女である。——いや、それがゆえに気を弛めてしまったのか？

いずれにしろ、迂闊であったことには変わりない。

いったい、あの女はどこへ行ったのか？

どこへ行こうと勝手ではあるが、得体の知れぬ女である。注意しておく必要はある。

そう己を戒め直して、イーヴは洞窟の外に出た。

輝かしい朝陽と清しい空気が、^{たくま}逞しい肉体を包んだ。^{まぶ}眩しさに目を細めつつ、大きく伸びをした。

その背に——

「おめざめですか？」

どきりとした。

さっと振り返った。

女が、居た。

洞窟の入口の脇に、女が——クリステルが、^{たたず}佇んでいた。

髪を洗ったのか、濡れた金髪が朝陽にきらきらと輝いていた。その片腕には青青とした草と瑞瑞しい果実が抱えられ、その足許あしもとには薪たきぎが積まれていた。

どこかへ行ってしまったわけではなかったらしい。

「あの……どうされました？」

半ば啞然としていたイーヴに、クリステルは怪訝けげんな面持ちで話しかけた。

「いや……それはなんだ？」

拍子抜けを誤魔化ごまかして、イーヴはクリステルの腕の中を目で示した。

「あなたの傷に当てる薬草と、食料です」

「今、採ってきたのか？」

「はい」

「この山の植物が分るのか？」

「ほんの少しですが」

「……そうか」

立ち尽くすイーヴにクリステルは近寄り、腕の中の草や果実を半分差し出した。

「どうぞ」

「……ありがとう」

そのまま受け取ってからイーヴは少し考え、

「火を焚いて待っててくれるか？ 罨いに何か掛かっているかも知れない」

受け取った食料をクリステルに戻して、木々の合間に消えた。

＊

「お力をお貸し願えませんか？」

クリステルがそう切り出したのは、食事を終え、治療もし直して、一息吐いた時だった。

イーヴはクリステルの顔を見た。何やら張り詰めたものがあつた。

「なんだ？」

イーヴが促すと、クリステルは一息呑み込み、

「昨日申しました通り、わたくしはここで人を捜しております。ですが入山したばかりで右も左も判りません。お聞きしたところによれば、あなたは一月ほどここにいらっしゃり、わたくし同様、探しものをしていらっしゃるとのこと。先人として、そのお力をお貸しいただけないかと思った次第です」

格式張った物言いに、イーヴは頭が痒かゆくなった。頭を働かせようとするかのように、無雑作に頭を掻きつつ、

「……つまり、お前の人捜しに協力しろってことか？」

「はい」

クリステルはイーヴをじっと見つめた。

イーヴはあらぬ方に目を遣り、無言で頭を掻き続けた。

「もちろん、お礼はいたします」

イーヴの沈黙をそのように受け取ったらしい。

「いや、礼なんぞはいい。獣から^{たす}救けてもらったし、治療もしてもらった。しかし――」

イーヴはクリステルの^{しんし}真摯な顔をちらりと見遣った。

「こう言うてはなんだが――もし、万が一、人捜しの最中に『大いなる敵』に^{でくわ}出遇したら、俺はお前にかか^{かかず}ず拘ら^かってはられない」

「承知しております」

「お前を^{たす}救けたり^{まも}護ったりはできないということだぞ？」

「承知しております」

「それどころか――」

イーヴはクリステルの青い瞳を見つめた。

「お前を盾にするかも知れない」

^{おど}脅しではなかった。

いざとなったら、その可能性は充分にある。

クリステルの人捜しを手伝うために、ここに居るのではない。「大いなる敵」と闘うために、ここに居るのである。

さすがにそれ以上口に出すことは^{はばか}憚られたが、
「大いなる敵」との闘いに邪魔であると判断した
ら、盾にするどころかこの手で殺すことも辞さぬ。
女だからといって^{とんちやく}頓着などしない。

そのようなことを言外に含めて、イーヴはクリス
テルを見つめた。

当然、^{おび}怯えるだろうと思った。

ところが予期に反して、クリステルは真っ直ぐな
眼差しでこちらを見つめ返してきた。

「かまいません」

静かな声だった。

恐れや強がりはどこにも感じられない。

「わたくしひとりで捜しているところに『大いなる
敵』が現れたら、わたくしが生き延びる可能性はほ
とんどないでしょう。しかし、あなたと一緒になら、
わたくしはあなたを^{おとり}囷にして逃げることができるか
もしれません」

思いも寄らぬ返答である。

イーヴは驚きと共に、おもしろみを覚えた。

都の女とは、あるいは貴族の女とは、こういうも
のなのか……。

実際のところ、その覚悟がどれほどのものなのか
は、その状況になってみねば判るまい。

しかし少なくともこの女は無様に取り乱したりは

しないのではないか。そう思わせるものがクリステルにはあった。

ともあれ、その問題は^{さてお}扱措いても、人捜しに協力すること自体はどうということもない。「大いなる敵」を探^{つい}す序^{ついで}である。

「解った。協力しよう」

イーヴが承諾すると、クリステルの顔が^{やわ}和らいだ。

「ありがとうございます」

「そうとなれば、まず、お前の捜し人はどんな奴なのか、教えてもらおうか」

得体の知れぬ「大いなる敵」ならともかく、得体の知れぬこともない人間を、^{しらみ}蝨潰しに捜し回るのは得策ではない。捜し人の行動を予測するための手掛かりが必要であった。

すぐさま返答はなかった。

何かを考えたのか、^{ためら}躊躇ったのか、ほんのわずかな間があった。

「……都の、貴族です」

「ほう……」

何やらきな臭い。

とは言え、己に関係なければどうでもよい話である。

「となれば、山の北側から入山したとみてよい

か？」

都はここから北にある。

「……どうでしょう。なにぶん、この山に入るまでも不思議があるそうですし」

妙な口振りである。

「まるで聞いてきた話みたいに言うな」

「ええ。わたくしはすんなりと入山できましたので。——聞くところによれば、目の前に見えていてすら、容易に^{たど}辿り着けぬとか」

「ああ。お前は運が^よ好いな。俺は一週間近くかかったぞ」

最後の一日——太陽がふたつになったあの日は、思い出ただけで暑苦しくなる。

「じゃあ、お前は北側から入山したのか？」

「いえ、どちらかと申しますと北東側でしょうか。真っ直ぐこの山に向かったわけではありませんので。しかし、北東側からそのまま真っ直ぐに入れました」

「俺は東側からだが真っ直ぐ入れた」

「では、彼らも北側から入ったと観てもよいかもしれませんね」

「彼ら？　ひとりではないのか？」

「ええ。供回りの者たちもおりますので。総勢十数人といったところでしょうか」

「ふむ。そうとなれば、すぐに見つかるかも知れんな」

それほどの大人数が歩き回っているのなら、必ず目立った形跡があるはずである。

「で、そいつらはいつ頃入山したんだ？」

「三週間近く前です」

「三週間近く前!？」

驚いた。もっと最近のことかと思っていた。

三週間近く前となると、己の入山よりも少し後になるではないか。となるとこの山のどこかで遭遇していてもおかしくはない。いや、遭遇しない方がむしろ不自然である。

しかし、その姿形や形跡をまったく目にしていないのだ。

妙であった。

すでにこの山の半分以上は探査しているのである。無論、まだ足を踏み入れておらぬ残りの部分に、何かがあるのかも知れぬが。

「本当に、三週間近く前からここにいるのか？ そりゃあ……」

クリステルの顔に^{かげ}翳が差した。

「おそらくは、すでに亡くなっているのではないかと……」

「下山してどこかへ行ったということは？」

「それはないと思います。用が済んだらすぐに都に戻るはずですが。しかし、わたくしが都にいた時点では、まだ帰ってきてはいませんでした」

「そうか。――てことは、そいつらの屍体か痕跡を探ることになるか……」

うっすらと浮いた^{ぶしょうひげ}無精鬚^なを撫でながら、イーヴは^{つぶや}呟いた。

「大いなる敵」や、昨日のような肉食獣に襲われて、殺されたか喰われたか、そのどちらかに違いはない――イーヴはそう考えている。いや、そう信じている。

――十数人が皆殺し。

そう思って^{ふる}顫えた。

^{むしゃぶる}武者奮いである。

「……なあ、そいつら、強いかな？」

「えっ？」

クリステルの目が丸くなった。なぜいきなりそんなことを聞くのか、とでも言いたげである。

「貴族の供回りってのは、強いんじゃないのか？」

「……まあ、そうですね。その貴族は文人ですし、腕が立つという話は耳にしたことはありませんが、このようなところに来るのですから、当然精鋭で身の回りを固めるでしょうね」

「ふうん」

知らず、笑みが溢れた。

俄然、遣る気が出てきた。

この探索によって、「大いなる敵」の手掛かりを掴めるかも知れぬ。「大いなる敵」の力の程を探れるかも知れぬ。

「で、そいつらの目的はなんだったんだ？」

これまたすぐさま返答はなかった。

何やら不快げな様子である。

「大したものではありません。申し上げるならば、品の無い勘繰り、とでも申しましょうか、そういった類のものです」

「大したものでなければ、話してもよからう？ そいつらの目的が判らねば、探索に手間がかかる。そうならば、『大いなる敵』と遭遇する可能性が高くなると思わんか？」

クリステルは押し黙った。言いたくないことなのだろう。

イーヴとしても他人の事情を穿鑿するつもりはなかったが、搜索する相手の目的が判っているのといかないのでは、搜索の難易度が大きく変わってくる。

だからできれば、その辺の事情を聞いておきたかった。

やがてクリステルは観念したように口を開いた。

「……彼は、この山に財宝が隠されていると思って
いたようです」

「ほう」

そんな話は、部族の伝説にもなければ聞いたこと
もない。しかし事実はどうあれ、話としてはあり得
そうなものではあった。

むしろこういった山にこそ付きものではあるまい
か。

「北側からそれらしいところを探ってゆくとして…
…よもや生きて歩き回っているとは思えんが、取り
敢えず、俺とお前がすでに探査したところは最後に
しよう」

イーヴは小枝で地面に地図を書いた。そこに己が
探査した地域を書き示す。クリステルも同じく書き
示す。

山の東側から入山したイーヴは、東側のほぼ中腹
部を拠点として東側全域を探査していた。山の北東
側から入山したクリステルは、イーヴがすでに探査
したところをごくごくわずかに探査していた。未探
査の地域は西側全域であった。

「まずここから北側に向かって、西側の方へ進んで
いこう」

「はい」

「最後にひとつ聞いておくが、お前の捜し人は敵か味方か？」

クリステルは^{けげん}怪訝な顔をした。

「味方ではありませんが……」

「ならば、いざという時は殺しても問題無いな？」

クリステルは^{きょうがく}驚愕した。

「そんな、殺すだなんて！」

「敵ではないのか？」

「敵、というか……どちらかと申しますと敵ですが……そういう問題ではありません」

「じゃあ、どういう問題だ？」

「どういう問題って……」

信じ難いものでも見るように、クリステルはイーヴを見た。

「人を殺すのはいけないことです。悪いことです」

イーヴは一瞬啞然とし、やがて苦笑した。

「^{ぼ う ず}神殿の聖職者みたいなことを言うんだな。敵を殺すんだぞ？ それのどこが悪い？」

「敵だからといって、殺してよいわけがありません。同じ人間ではありませんか」

「同じではないさ。敵は敵だ。敵は殺すより^{ほか}外無い」

クリステルは不快げに顔を曇らせた。

「なんて乱暴な……」

「じゃあ、どうすりゃいいんだ？」

「話し合うという方法があるではありませんか」

イーヴは^{わら}嗤った。思わず^{こうしょう}哄笑しそうになって口を押さえた。

そんなイーヴを、クリステルは心外そうに見た。

「あのなあ……敵ってというのは、話の通じない相手なんだぞ？」

「最初の内はそうでしょう。ですが、じっくりと話し合えば解り合えるはずです。それなのに、そういった努力もせずに、^{はな}端から解り合えないと決めてかかって、あろうことか殺すだなんて……おかしいです。そのようなことが許されてよいはずがありません」

イーヴは苦笑混じりに^{ためいき}溜息を^つ吐いた。

そしていきなりクリステルの口を^{ふさ}封ぎ、そのまま地面に押し倒して、クリステルの上に馬乗りになった。

クリステルは何が起こったのか判らぬ様子だった。恐怖と驚愕を浮かべた目を大きく見開いて、イーヴを見上げていた。

「さあ、言ってみろよ。話し合いとやらをしてみろよ」

「……」

「この状態で何が言える？ 何か言えたところで聞

いてもらえるとも思っているのか？ 話し合う余地などどこにも無い。犯されて、殺されて、それで終わり。それが現実だ」

クリステルの青い瞳が揺れた。

「お前が何を考えようと勝手だが、それがお前以外の人間にも通用すると思うなよ。話し合いってのはな、話の通じる相手とするもんだ。話の通じない相手と話し合いがしたけりゃ、こうして力尽くで押さえ付けて、話し合わせるんだな」

言うだけ言うとイーヴはクリステルから離れ、洞窟の^{なか}内へ戻った。荷物を取るためである。今までとは反対側を探索するのだ。この洞窟には当分戻ることはないだろう。

荷物を取って出てくると、クリステルはまだ押し倒されたままの^{かっこう}恰好で呆然としていた。

今の己の行動はクリステルには少し刺激が強すぎたのかも知れない。

いきなり男に押さえつけられて^{おど}恫されるなど、これまでの彼女の人生では一度も無かったのではないだろうか。いや、それどころか想像すらしたことも無かったのかもしれぬ。

しかしイーヴとしても悪意があったわけではない。

クリステルのあまりにも楽観的な思いこみが、い

かに現実離れしているかを指摘し、その危険性に気付かせてやるのも本人のためだろうと思っただけであり、何も驚かせたり、怯えさせたりするつもりはなかったのである。

だが確かに、多少^{からか}揶揄い半分の気持ちがあったことは否めない。

人の善い相手を必要以上に^{おど}脅かし、怯えさせてしまったかと思うと、微かな痛みのようなものがイーヴの胸に生まれた。

「……早く立て。行くぞ」

それを誤魔化すようにイーヴは急かした。

クリステルは呆然としたまま、^{おもむ}徐ろに立ち上がった。

イーヴは先に立って歩き出した。ところがクリステルが^っ従いてこない。^{いぶか}訝しんで後ろを振り返った。

クリステルは立ち尽くしていた。硬い顔で^{うつむ}俯いている。

「何を考えている？」

クリステルはきゅっと唇を引き結び、イーヴを見た。

「あなたのおっしゃることは正しいと思います。――ですが、人を殺すということだけは、わたくしには受け容れられません」

イーヴは自嘲気味にかすかに嗤った。

やはり、話し合いなんてものは無駄なものだと思う。

言葉なんかで何が解ろう。体験に勝^{まさ}るものは何も無い。かと言って、死ぬ^{まぎわ}間に解ってもなんの意味も無い。

「……まあ、いいんじゃないか？ 受け容れる受け容れないなんてのは、どうでもいいことだ。そう
いった意思とは無関係に、否応^{いやおう}も無く動いているのがこの世というものだ。己の信条を守りたいのなら、人捜しなんぞはやめて、すぐに帰るべきだな。
お前が生きてきた世界では、それでも生きてこれたんだらう？ お前はその世界から出るべきではなかったんだ」

「……」

クリステルは俯^{うつむ}いた。

「どうする？」

沈黙が落ちた。

鳥の囀^{さえず}りが響いていた。

暫^{しばら}くしてクリステルは口を開いた。

「……人捜しは、やめません」

かす^{かす} 呟れた声だった。

「できれば……わたくしの捜し人は殺さないで下さい。話のまったく通じない相手ではありません」

「それは俺が決めることじゃない。その時の状況が

決める」

「……」

「とまれ敵と接触しなければ、そういう事態は避けられる。お前の捜し人であると確認できたら、俺は去ろう。後は、話し合うなり殺されるなり、好きにしたらいい。——それで満足か？」

クリステルは無言で^{うなず}頷いた。

ふたりは^{ようや}漸く歩き出した。

第一章 第四節

「ここからだ。ここから先は、まだ足を踏み入れていない」

^{がけ}崖というほどでもない、緑の急斜面を^{そっか}足下に望み、イーヴは振り返った。

三十歩ほど向こうから、丈高い草を掻き分けて、クリステルがやってきている。

戦士でもない、貴族の女である。

イーヴとしてはゆっくりと歩いているつもりでも、気がつけばこうして引き離してしまっていることがままあった。

しかしクリステルはイーヴに、疲れただけの、ゆっくり歩いて欲しいだのと言うことはなかった。ただ^{もくもく}黙黙とイーヴの後を^っ従ってくるだけであった。

近間にやってきたクリステルには疲労の色が見えた。前髪が汗で額に貼り付き、息も少し上がっている。

「少し休むか？」

「いえ、^{さきほど}先程休んだばかりです」

「と言っても、あれからもう一刻は経つんじゃないのか？」

イーヴは太陽の位置を見ながら言った。昼とも夕方ともつかぬ頃合いである。先の休憩は昼食を兼ね

たものであった。

「だいじょうぶです」

クリステルは水を一口飲み、^{いささ}些か語気強く言った。

「こういった山だ。さっさと用事を済ませて脱出したい気持ちは解らんでもないが、先は長くなるかも知れん。^{ひとつき}一月は観てもよいだろう。常にある程度の余裕を持っていないと、いざという時には、俺を^{おとり}囚にして逃げることもできなくなるぞ」

軽い口調でイーヴが言うと、クリステルは^{うつむ}俯いた。山歩きですでに上気していた顔が、さらに^{あから}赧んでいる。

指摘が的を射ていたのか、己の言葉をそのまま返されたのが^{しゃく}癢だったのか、そのどちらかだろうか——クリステルの反応をイーヴはそのように解釈した。

何か言い返してくるのではないかと思ったが、そんなことはなかった。

「……その通りですね。少し休みましょう」

羞恥を隠すように^{なにげ}何気なくイーヴに背を向けて、クリステルは倒木に腰を下ろした。

クリステルが落ち着くのを待ってから、イーヴは口を開いた。

「これからのことだが、まず水場を探そう。十数人

となれば、必ず水を確保しようとするはずだ。水場に沿って探せば手掛かりが得易いと思う」

「同感です」

「それから、財宝が隠されていていそうな場所……という
うと、やはり洞窟なんか^{だとう}が妥当だろうな。でなければ穴を掘って埋めるか、^{たきつぼ}滝壺に沈めるか……」

しかしイーヴの知る限りでは、この山にそれほど大きな滝はない。そもそも滝と呼べるほどのものを見かけたことがない。

地に埋めたとしても、何か目印になりそうなもの^{そば}の傍に埋めるはずである。こちらはまだ可能性があると言えるが、宝を隠す立場から言えば、それよりも洞窟を利用した方が手っ取り早い。

「洞窟だな」

イーヴは確信ありげに^{うなず}頷いた。

「では参りましょう」

クリステルは立ち上がり、先に立って斜面を下り始めた。

わずかな休憩であったが、それでもそれなりに^{かい}恢復したらしい。幾分虚勢が^{うかが}窺えるものの、先よりもしっかりした様子である。滑り落ちぬよう、丈夫な草を握り締めながら下っていく。

「おい、気をつける。足を滑らせたら大変だぞ」

クリステルに注意を^{うなが}促しながら、イーヴも斜面を

下り始めた。

西側も東側同様、鬱蒼^{うっそう}としていた。幾重^{いくえ}もの枝葉の天井に蓋^{おお}われて、昼なお暗い。

しかし、斜面を下って四半刻も歩かぬうちに、前方に明るさが見え始めた。

「おい」

早^{そう}早^{そう}に追い越してしまったクリステルを、イーヴは振り返った。クリステルは五歩ほど後ろで立ち止まっていた。

「開^{ひら}けたところに出るようですね」

イーヴは少々訝^{いぶか}しんだ。

「見えないのか？」

「何がですか？」

「たくさんの木が倒れている。いや、薙^なぎ倒されている。……土砂崩れのような」

クリステルは、眉^{みけん}間に皺^{しわ}を寄せて目を凝らした。

「……よくお見えになりますね。わたくしには明るいことしか判りません」

「そうか。この辺の人間なら、誰でも見える距離なんだがな」

都人^{みやこびと}は目が弱いと聞いたことがある。情けない話だが、このくらいでも見分けられないのだろう。

「迂廻^{うかい}なさるおつもりですか？」

「そうした方がよくないか？ いつまた崩れてくる

とも限らんだろう？」

「最近崩れたものなのでしょうか？」

イーヴは目を凝らした。

「ん——……草木が邪魔でよく判らん。しかし、あれだけの土砂崩れなら、この山のどこに居ても判りそうなもんだ。俺が居るこの^{ひとつき}一月、そんな音はまったく耳にしなかった。少なくとも一月以上前のことだろう」

「では、もう少し近づいてみてもだいじょうぶではないでしょうか？」

「そうだな」

そのまま歩を進めてみると、最近のものではないことが見て取れた。薙ぎ倒された木々はすでに朽ちており、なだれた土砂の上には新たな草木が^{ぼうぼう}蓬蓬と^{めぶ}芽吹いている。

ふたりはさらに歩を進め、天に^{さえぎる}遮るもの無き陽射しの下、^{もと}風化しつつある土砂崩れを目の前にした。水平方向に歩いてきたふたりと垂直に交わる形で、三百歩分ほどごっそりとなだれている。下の方を見れば、崩れ落ちた土砂や倒木などが^も揉みくちゃになって^た溜まり、こんもりと盛り上がっていた。

——と、その中に、イーヴは異質なものを見つけた。

「ここで待て」

クリステルに言い置いて、滑るように斜面を下った。

それは布の切れっ端のように見えた。近づいてみると案の定、それに相違無い。薄茶の^{ぼろ}襷切れが、緑芽吹く土砂の中から飛び出ていた。

イーヴはそれを引っ張って見た。だが土砂は思いの外固く締まっており、そのまま引っ張り上げることはできなかった。かといって無理に引っ張れば、容易に^{ちぎ}千切れてしまいそうだった。

イーヴは手近に落ちている枝切れを拾い上げ、襷切れを掘り出してみた。

元元は白かったのであろうか。土砂に埋もれていた部分は、日に^{さら}晒されていた部分よりも白っぽかった。

端には折れた棒が^{くく}括り付けられている。もしかしたら旗であるのかも知れぬ。

広げてみると真ん中に意匠があった。黒い盾形の中で赤い^{くじゃく}孔雀が羽を広げているが、孔雀など知らぬイーヴには奇妙な鳥にしか見えない。

「紋章……？」

イーヴが^{つばや}呟くと、すぐ近くで息を呑む声が出た。

見上げると、いつの間にやらクリステルが下りてきていた。何やら恐ろしいものを見たとでもいうような顔付きで、イーヴが掘り出したものを覗き込ん

でいる。

「知ってるものか？」

クリステルは^{うなず}頷き、

「……捜している人間の、家紋です」

震え気味の声でそう言った。

「ほう？」

妙な話だと思った。

しかしそれを考える間もなく、クリステルが口を開いた。

「まずいかもしれません……もしかしたら……」

クリステルは意味ありげにイーヴをじっと見つめた。あまりにも深刻な眼差しだった。イーヴは何やら^{うす}薄ら寒くなった。

「……なんだ？ 俺がどうかしたか？ まずいって何が？」

クリステルが口を開いた。

その瞬間――

クリステルの^{あしもと}足許が崩れた。

イーヴよりも高いところに立っていたクリステルは、そのままイーヴに向かって倒れ込んだ。

イーヴはクリステルを受け止めようとしたが、足場が悪かった。受け切れずに^{もろとも}諸共地面に転がった。

怪我をしても^{お か}怪訝しくない状況だったが、^{さいわ}幸いにイーヴが下敷きになるだけで済んだ。これがもっと

上の斜面であったなら、転がり次第転がって、突き出た倒木などに衝突していたかも知れぬ。

クリステルはイーヴの肩に顔を^{うず}埋めていた。

「……大丈夫か？」

その言葉で我に返ったように、クリステルの顔が上がった。

「あ……」

間近で目が合った。

が、すぐさま^そ外らされた。

「も、もうしわけありません……」

頬をわずかに赤く染めて、クリステルはそそくさとイーヴから離れた。

そんなクリステルを見ていたら、イーヴもなんとなしに^{きま}気^ま味^ずなくなった。クリステルから目を外らし、^{おもむ}徐ろに体を起こした。

「怪我はなかったか？」

「……はい。——あ！ あなたの怪我は……」

クリステルはイーヴを振り返り、怪我を負っているその肩を見た。

つられて、イーヴも己の肩を見る。怪我のことなどすっかり忘れていたが、どうということもなかった。

「いや、大丈夫だ」

クリステルは^{あんど}安堵したように息を吐いた。

イーヴはクリステルが足を取られたところを見上げた。どうやら旗を掘り出したところが崩れたらしい。人ひとり^{もぐ}潜り込めるほどの穴が開いている。

そこに、また何かを見つけた。

穴の中から助けを求めるように、ぬっと突き出ているものがある。

白過ぎる、細過ぎる、五本の指――

骨の手だった。

「これがお前の捜し人……」

と言いかけて、

「……な、わけないよなあ」

苦笑混じりに打ち消した。

捜し人は三週間近く前に入山したということであつた。この山で死んだとしたら、当然その^{したい}屍体は死後三週間以内のものであるはずである。目の前の骨はそういったものには見えなかった。

三週間で人体は白骨化するのかどうかといえ、これは状況による。外気に^{さら}晒されていたり、獣に喰われていたりすれば、白骨化は格段に速まる。

無論白骨化と言っても全身綺麗に骨だけになることを意味しない。それには野晒しになって長期間がかかる。

その意味ではこれは部分的白骨化というべきなの
だろう。

しかし屍体は土砂に埋まっていたようだし、獣に
喰われたにしては骨の状態があまりにも綺麗過ぎ
た。多少折れたり罅割れたりしているところはある
ものの、獣が齧り付いたような痕はなかったし、そ
もそも解けて散乱してもいなかった。伸ばされた手
が、そのまま土砂に埋もれて、そのまま白骨化した
——そんな感じである。

そして、それを埋め潰したであろう土砂崩れもま
た、ここ三週間以内のものではあり得なかった。少
なくとも一年以上は経っているに違いない。

何となく気になるのは、その指に嵌っている指輪
である。おそらくは金であろう、持ち主の身分の高
さを窺わせるが、問題はそれに彫られている意匠で
あった。捜し人の家紋であるという、旗のそれと同
じものなのである。

「下山、しましょう」

かす
嘎れた声で、クリステルが言った。

「は？」

何を唐突に——と、訝しみながら振り返ると、ク
リステルが青冷めていた。

さきほど
どうも先程から様子が怪訝しい。

さては、屍体を目の当たりにして怖気づいたか——

—そう思って、イーヴはなんとなくつまらなくなつた。

「てことは、人捜しはこれで終わりか？」

クリステルは^{うなず}頷いた。

イーヴは^{ためいき}^っ溜息を吐いた。

「……まあ、いいけどな。好きにしたらいい。——それじゃあ、これでお別れだな。助けてくれてありがとうとな。道中、気をつけてな」

軽く手を挙げてから、クリステルに背を向けた。

が——

「あなたも一緒です」

後ろから腕を^{つか}掴まれた。

振り返ってみると、クリステルは青冷めつつも^{けわ}険しい顔をしている。何がなんでも引き留めるといった様子である。

イーヴはまた溜息を吐き、己の腕を強く^{つか}掴んでいるその手を、そっと^の退けた。

「麓まで送れってのか？」

「はい。お願いします」

懇願の^{まなざ}眼差し——^{いな}否、そのような謙虚なものではなかった。強要するような鋭い眼差しが、イーヴを見つめた。

イーヴは少々^{けお}気圧された。^{あぜん}啞然としたと言ってもよいかも知れぬ。

だがここまで付き合ったのだ。この際、麓まで付き合ってもよからう。このまま別れて、この女の屍体を発見でもしたら寝覚めも悪いことである。

「……^{わか}解った。送ろう」

「ありがとうございます。――では、急ぎましょう。急がないと、日が暮れるまでに麓に着けません」

そう言うなり身を^{ひるがえ}翻し、クリステルは走るように歩き出した。

送ってもらうに^{ずいぶん}しては、^{たくま}随分と遅しさを感じさせる、一連の言動であった。

半ば^{あき}呆れながら、イーヴは後を追った。

＊

「ここまででいいか？」

^{いら}応えはなかった。

激しい息遣いが聞こえていた。

^{おびただ}夥しい汗と熱を^{おびただ}発しながら、クリステルが肩で息をしていた。

イーヴはともかく、クリステルにとってはかなり無理をした下山であった。

イーヴに気遣いが無かったわけではない。それを^は撥ね^の除けて、クリステルが先を急いだのである。

その甲斐^{かい}あって、陽が沈む前に麓^{ふもと}に辿^{たど}り着くことができた。夕陽に照らされた荒野が、木々の合間に見えている。あと数十歩も歩けば、ジャンザビの外である。

クリステルは大きくゆっくりと呼吸した。何度もそうして息を整え、落ち着いたところでイーヴを見^み据^すえた。そしてきっぱりと言い放った。

「よくありません」

理解しかねる言葉だった。

「そりゃどういうことだ？」

「あなたもこの山を出るのです」

まったくもって理解しがたい言葉だった。

啞然としつつも、さすがに苛^{いらだ}立ってきた。茶番には付き合っていない。

「……お前、なんか勘違いしてないか？ 俺をお付きの騎士かなんかだと思ってないか？」

クリステルの顔がぱっと赤くなった。驚愕^{きょうがく}と羞恥^{しゅうち}の色である。

「……もうしわけありません。そんなつもりはありませんでした。気分を害されたのなら謝^{あやま}ります。しかし、ここで話をしている場合にはありません。まずは外に出ましょう」

「断る」

クリステルの表情^{かお}が固まった。

「外に出るのは『大いなる敵』を斃^{たお}してからだ」

「……っ」

クリステルは反射的に何かを言いかけたが、すぐに思い直したように口を噤^{つぶ}んだ。

内心の焦りを無理矢理に抑え込んだという風であった。

何がクリステルをこれほど焦らせているのか。

イーヴの中に疑問が生まれたが、それを検討するつもりはなかった。己にとっては山を出るように要求されたことの方が遥かに問題であって、その言動の不可思議さに対する疑問など、それに比べれば全く問題にはならなかったからだ。

「……あなたの目的は承知しております。しかし、今は外へ出て、わたくしのお話を聞いて下さい。それから山に戻っても、なんの問題もないはずです」

イーヴは苦笑混じりに溜息^{ためいき}を吐^ついた。

「解^{わか}ってないな。そういう問題じゃない。『大いなる敵』を斃^{たお}さぬうちは、何があろうと下山しない——そう決めてあるんだ。そう誓^{ちか}ったんだ」

——己自身に。

己自身に掛けた誓いを破るということは、己自身を裏切ることである。己自身を裏切るということは、己自身を否定することである。

己自身を否定して、どうして生きていけようか。

どうして闘^{たたか}うことができようか。

生きるということは闘うことで、闘うということは己自身と他者との殺し合いである。

闘いに勝利し、生き残るためには、絶対的な、揺るぎない、己自身が必要不可欠なはずであった。

「その誓いを破ってまで、お前の話を聞かねばならん理由など無いし、いや、そもそも、俺はお前の話になんぞ興味は無い」

「……」

クリステルの顔が険^{けわ}しくなった。

「『大いなる敵』に関する話でも、ですか？」

イーヴは思わず鼻で嗤^{わら}ってしまった。選^よりに選^よってそう来るか。だが、そんなちゃちな手には乗らない。

「『大いなる敵』に関する話って、お前が何を知ってるって言うんだ？ 俺が話すまで、お前は『大いなる敵』の存在すら知らなかったじゃないか。話にならん。何を勿^{もったい}体ぶってんのか知らんが、話したいことがあるならここで話せよ」

「……」

クリステルの険しい顔付きに、沈痛なものが混じった。

「あなたを見捨てたくないのです」

懇願するように言う。

これまた妙なことを言うと、イーヴは訝^{いぶか}しんだ。

「話が見えないな。さっさとはっきり言ったらどうだ？ 急いでるんだらう？」

「時間のかかる話です。——いえ、あなたが納得なざるには時間がかかる、と申し上げた方がよろしいでしょうか」

「俺が納得するかどうかはお前が決めることじゃない。俺が決めることだ」

「……」

イーヴの言葉を噛^かみ締^しめるように、クリステルは唇を引き結んだ。しかし、やがて観念したように溜^{ため}息^{いき}を吐^ついた。

「解^{わか}りました。お話ししましょう」

クリステルの話は信じ難いものであった。

天に太陽が二つ現れる時、ジャンザビは人の世の^{ことわり}理から外れ、外の世界とは異なる世界に変わってしまったのだと云う。

そこに足を踏み入れると、容易には外に出られなくなってしまう。運^よ好く出られたとしても、油断はならない。ジャンザビの外は、元の世界——入る前に己が居た世界とは限らないのである。遥^{はる}か遠くの、何処^{いずこ}とも知れぬ世界になってしまっているのだと云う。

「謂^いうならば、この山の真の姿とは、人の世の^{ことわり}理を

超えた乗り物なのです。太陽が二つになったその時だけ扉が開かれて、乗ることができ、閉ざされて移動している時は降りることができない」

そして今まさに、己らが真のジャンザビに乗り込んでいる可能性があるとうるのである。

イーヴとしては、^{あぜん}啞然を乗り越して^{わら}嗤うしかない話であった。

しかも、^{むじゅん}矛盾しているところがある。

「確かに、俺がこの山に入った時、太陽は二つ在った。しかし、あれが最初で最後だった。あれ以来、太陽が二つになることはなかった。それなのにお前は俺よりも後から入ってきたんだろう？ お前の話^よに拠れば、太陽が二つにならない限り、その……異なる世界のジャンザビとやらには入れないのではなかったか？」

「その通りです。それゆえ断定しかねているのです。……もしかしたら、太陽がひとつであっても、入ることができるのかもしれませんが」

「こじつけだな」

「ですが、^{したい}そうでも考えませんと、あの屍体の説明がつかなくなります」

「ほう？」

「あの屍体は、三週間近く前に入山したはずの、わたくしの捜し人です。しかし、あなたもご覧になっ

た通り、あれは死後三週間以内のものには見えませんでした。少なくとも一年以上は経っているはず。つまり、わたくしたちが今居るこのジャンザビは、一年以上先の世界のジャンザビだということです」

「屍体の状態に関しては同感だが……あれは本当にお前の捜し人だったのか？ 疑うべきはそこではないのか？ 人間であることしか判らん、ただの骨だったじゃないか。お前の捜し人の家紋入りの指輪をしてはいたが、さて、どういった来歴でそいつの手に渡ったものやら……。そう考えれば、なんの不思議も無いはずだ」

クリステルはイーヴを非難するように見た。

「やはり、わたくしのお話を信じていらっしゃいませんね？」

イーヴは苦笑した。

「いきなりそんな話をされて、信じる方がどうかしてると思わんか？」

「だから申し上げたではありませんか。納得なさるには時間がかかると」

「一応言っておくが、お前の厚意だということは理解してる」

屍体を発見してからのクリステルの奇妙な言動は、なるほど、そう言われてみれば納得できるものがあった。己を麓^{ふもと}まで連れてくるための口実を作り

はしたが、この突飛^{とっぴ}な話の内容自体は本当なのだろう。クリステルにとっては。

「しかし、お前の厚意であっても、俺が信じるか信じないかは別だ」

「信じる必要などありません。外に出てみれば解^{わか}ることです。出ようとしても出られなければ、信じざるを得なくなるはずです。しかし、あなたはそれはできないとおっしゃる。『大いなる敵』という存在が、あなたをここに繋^{つな}ぎ止めている」

「ああ」

「でも……」

クリステルは沈痛な面持ちで、躊躇^{ためら}いがちにイーヴを見た。

「最初に申し上げますが、わたくしはあなたの目的を奪いたいわけではありません。また、あなたを外に連れ出したいがために、これからのことを申し上げるわけでもありません。……ただ、この山を彷徨^{さまよ}い続けるであろうあなたを想うと、あまりにも不憫^{ふびん}で……」

知らず、イーヴの顔が険しくなった。

この女はいったい、何を喋^{しゃべ}ろうとしているのか…

…

「考えるに、あなたの部族の戦士たちは、『大いなる敵』に挑んだのではなく、この山の犠牲になった

のではないかと……つまり、『大いなる敵』というものは存在していないのではないかと……」

イーヴは^{わら}嗤った。

^{のど}咽の奥でくつくつと嗤った。

「^{ずいぶん}随分と都合が良過ぎる話じゃないか？ 『大いなる敵』に挑んだ戦士たちは、ひとりやふたりではない。俺が実際に見送った戦士だけでも三人はいるし、俺たちの挑戦は昨日今日始まったものでもない。その全員が、どこかへ消えたってのか？」

「あるいは、この山を^{さまよ}彷徨い^く続けて朽ちたか……」

「付き合えんな。お前はお前が信じる通りにすればよからう。俺もそうするまでだ。それでなんの問題もないんじゃないのか？」

ふたりは冷えた視線を合わせた。

「あくまで、下山なさらないとおっしゃるのですね？」

「『大いなる敵』を^{たお}斃すまではな」

「そうですか。ご立派な覚悟です。しかし、その覚悟——」

クリステルは小さく嗤った。

「失礼ながら、わたくしには^{うわべ}上辺だけのものに思えます」

「なに？」

イーヴはクリステルを^{にら}睥んだ。クリステルは静か

に受け止めた。

「『大いなる敵』を斃すまでは下山しない——その言葉の本質は、『大いなる敵』を斃すことに対する覚悟の表明ではありませんか？ 覚悟そのものではないはず。それなのに、あなたはそんなものに獅^し噛^がみ付いていらっしゃる。そうでもしなければ消えてしまうような覚悟なのではないでしょうか？ 下山したところで消えてしまうような覚悟なのではないでしょうか？」

「……っ！」

言葉に詰まった。

きべん
詭辯だと思ふ。

へりくつ
屁理窟だと思ふ。

しかし、言い返せない。

腹立たしい女だと思った。

イーヴは舌打ちひとつして、

「……^{わか}解った。俺の覚悟を見せてやろうじゃないか」

まんまと乗せられていると思いつつ、外に向かって歩き出した。

さえぎ
遮るものの何も無い、一面の荒野の遙か向こうで、天と地を赤く灼^やきながら陽が沈みかけていた。

それを左前方に眺めつつ、イーヴはジャンザビの^{きわ}際^{きわ}で立ち止まった。

「いいか？ 行くぞ？」

「お待ち下さい」

クリステルが右手を差し出してきた。

「手をつなぎましょう。何が起こるか、判りませんか
ら……」

イーヴは差し出された手を見つめた。白く細い手
だった。

何かが起こるとは思えなかったが、その手を取っ
た。こんな茶番はさっさと終わらせよう。

ふたりはしっかりと手を繋ぎ、ジャンザビの外へ
向かって同時に踏み出した。

第一章 第五節

ふたりは影の中で立ち尽くしていた。

本来ならば、山は背後に、目の前には夕陽に照らされた荒野が、広がっているはずであった。

だが前方には、夕闇に落ちた山が^{そび}聳えていた。左前方に在ったはずの夕陽は山の背後に隠れ、^{ほむら}炎のような陽の^{ざんし}残滓をわずかに見せていた。

イーヴは呆然とその光景を眺めていた。

呆然と眺めるより^{ほか}外無かった。

何がどうなったのか、^{かいもく}皆目判らない。

答えを求めるようにクリステルを見れば、今にも倒れそうなほどに青冷めていた。

「……大丈夫か？」

「……」

返答は無い。

「これはどう考えればいいんだ？」

「……」

「外に出られなかったってことなのか？」

「……」

「ここはさっき居た場所とは反対側だよな？」

「……」

クリステルは青冷めた顔で山を見続けている。

イーヴも再び山を眺め、考えを^{めぐ}回らした。

先程のクリステルの話からこの状況を考えれば、己らが居た世界とは異なる世界のジャンザビに居るということになる。

いや、異なるのはジャンザビの外か。

それともジャンザビが異界であるがゆえに、外が異なっているのか。

イーヴには判らなかつた。

^{もっと}尤も、山の内と外との、どちらが異なる世界であろうが、己らが置かれた状況に違いはない。

いずれにせよ、外に出ることができないのだから同じことである。

ともあれクリステルの話が事実であるならば、この^{ひとつき}の一月もの間、己は異なる世界を探索していたことになる。

確かに、異なる世界と言えは異なる世界には違いはなかつた。ここには見たことも無い動植物が^{あふ}溢れている。

無論、己の知見など^{たか}高が知れている。その己の尺度で、ここが異なる世界かどうかを測ることなど、できるとは思えぬ。現に己が見たことも無い植物をクリステルは知っていた。

そもそも「異なる世界」とはいったいなんなのか、いまいちぴんと来ない。神殿の聖職者が言うところの死者の世界、「あの世」のようなものなので

あろうか？

そう考えるといよいよ胡散臭い。事実とは思えない。

結局真実がどうであるにせよ、今、外に出られなかったことは確かである。

これはどう考えるべきなのか？

考えられることは二つある。

一つはクリステルの話が全て真実であった場合だ。だがそれは、あまりにも恐ろしいことのように思えた。

もう一つならば解りやすい。

「大いなる敵」である。

どういう技を使ったのかは判らぬが、獲物を逃さんとして、己らの下山を阻んだのではあるまいか？

そうとしか考えられなかった。

そうに違いなかった。

だが――

一度も姿を見せなかったくせに、今になって行動を起こすだろうか？

それともこれが奴の手管――エク族の戦士たちを消耗させてきた罠なのであるだろうか？

判らなかった。

考えれば考えるほどに判らなくなる。そしてこれが「大いなる敵」の仕掛けてきた手である場合、己

が迷うほどに、悩むほどに、奴が有利になるのだ。

冷静にならなければならない。

イーヴは深く息を吸って、吐いた。

「意外と冷静なのですね」

いきなり話し掛けられて驚いた。

先まで、声を掛けてもうんともすんとも反応が無かったのだから、こちらこそ意外である。

山に目を向けたまま、イーヴは答えた。

「^{あわ}慌てたところで、どうなるもんでもないだろう。

いや、むしろ状況を悪化させるだけだ」

いかなる時も常に冷静であること。

それが生き残るための道である。

なかなか難しいことではあるが。

「外に出られませんでしたね」

「ああ」

「信じる気になられましたか？」

「まさか」

「では、この状況をどうお考えで？」

「『大いなる敵』の^{しわざ}仕業ではないかと思っている」

小さな^{ためいき}溜息が聞こえた。

「……そうですか」

「今のところは、な。なんにせよ、判断材料が少な過ぎる」

「引き続き、『大いなる敵』の探索をなさるおつも

りですか？」

「ああ。——お前は どうする？」

「わたくしは出口を探します。太陽が二つなくとも入れたのですから、出ることもできるかもしれません。——ですが、その前に、もう一度あの屍体^{したい}を確認^{したい}したいと思います。今^{しばら}暫く、ご協力願えませんか？」

「いいだろう」

＊

翌日、ふたりはあの土砂崩れの場所に向かった。

ジャンザビの不思議、あるいは「大いなる敵」の^{しわざ}仕業で、山の反対側に飛ばされてしまったふたりであったが、そうしてやってきたのと同様、外に向かって進むと、元居た場所に戻ることができた。その後もまた、やってきた道^{たど}を逆に^{たど}辿っていった。

土砂崩れの近くにやってくると、その^{そば}傍に天幕と思しきものを見つけた。最初に土砂崩れを見つけた時にも、あったかどうかは判らない。あったとしても、他のことに気を取られていて、見逃してしまった可能性が高い。

イーヴは木陰に身を寄せて、クリステルに目配せした。察しの良いクリステルは、身を^{かが}屈めて静かに

こちらにやってきた。

イーヴは小声で言った。

「向こうに天幕がある」

クリステルの顔に驚きと緊張が走った。

「人は……居るんでしょうか？」

「観た感じでは、居ないようではあるな」

「確かめてみましょう」

ふたりは草木に身を隠しながら、辺りに注意を払いながら、慎重に天幕に近づいていった。

天幕は全部で二つあった。いや、^{かろ}辛うじて原型を留めているものが二つ、と言うべきか。土砂崩れに^ま捲き込まれたものがいくつもあるらしかった。天幕の^{ざんがい}残骸と思しきものが、土砂の中から見えていた。

原型を留めているその二つも、天幕の形を成してはいるものの、どこもかしこも風化して、破れたり^{いた}傷んだりしている。張られてそれなりの時が経っているに違いなかった。

天幕内に人の気配は感じられない。恐る恐る^{なか}内を^{のぞ}覗いてみれば、^{うさぎ}兎が数匹出てきたくらいで、やはり人の姿はどこにも無い。生活道具が^{むそうさ}無雑作に転がっているだけであった。

注目すべきは、天幕に描かれた紋章である。黒い盾に赤い^{くじゃく}孔雀——クリステルの捜し人の家紋に違いなかった。

「どうお考えになります？」

クリステルが聞いてきた。

「外で飯でも食ってる時に、土砂崩れが起こった——そんな感じじゃないか？」

「やはり、事故だと思われませんか？」

「そりゃあ、まあ、見たまま解釈すれば……」

イーヴははたと気づいて、

「『大いなる敵』の^{しわざ}仕業、か？」

「いえ、そうではなく、彼らの死が人為的なものである可能性はあるのかどうか、ということです」

人為的な死——それがクリステルにとって特別な意味を持つであろうことは、容易に推察できた。クリステルには、殺人に対する^{きひ}忌避意識がある。

「この土砂崩れを人の手で起こせるとは到底思えない」

「では、人の手で殺された後に、土砂崩れが起こったというのは？」

イーヴは考え込むように^{うな}唸った。

「奴ら、十数人という話だったよな？ 全員、黙って首を差し出したってんなら話は変わってくるが、それだけの人数を殺すとなると、相手方にもそれなりの人数が必要だし、その人数で戦闘になれば、土砂で埋まらなかったところにもなんらかの形跡があって^{しか}然るべきだと思うが……」

見たところ、そんな形跡はどこにも無かった。

「一応、あの屍体を掘り出してみるか」

ふたりで屍体を掘り出し、調べてみた。

屍体はすべて白骨化していた。体液によるものであろう、黒ずみと異臭が染み込んでいる衣服に包まれていた。

人為的な傷痕^{きずあと}は無いようであった。土砂に押し潰^{つぶ}されたためと思いき、骨や衣服の損傷が見られるだけであった。

腰には剣が佩^はかれていたが、使われた形跡はまったく無かった。

イーヴは確信した。

「やはり、事故だな」

「……」

クリステルからの応え^{いら}は無かった。

振り返ってみると、クリステルは泣き笑うような顔をしていた。形振り構わぬ大きな安堵^{あんど}が、そこにあった。

イーヴはすぐさま目を外^そらした。所詮は行きずりの関係である。その己が見てよいものではないと思ったのである。

イーヴはクリステルを置いて、静かにそこを去った。

＊

その時を境に、ふたりはそれぞれに行動を始めた。

イーヴは「大いなる敵」の探索に、クリステルは出口の探索に向かった。

別行動ではあったが、数日に一度、顔を合わせて情報交換はする。

しかし、その^{たび}度に互いの徒労を知るばかりのこととなった。

もしや、あちらには何か収穫があるのではないか？

少なからず、そんな期待が互いにあった。

それが顔を合わせる度に打ち碎かれるのだ。徒労感はいや増した。

諦めれば楽になることは承知していた。

しかし、諦めれば大切なものが崩壊する。

その^{はざま}狭間で心が揺れた。

イーヴにとっての諦めは、「大いなる敵」の不在を認めることである。「大いなる敵」に^か懸けてきた、これまでのすべてを無に^き帰すことである。^ひ延いては、「大いなる敵」に挑んだはずの戦士たちの名誉を汚すことであった。

彼らは「大いなる敵」との正堂堂たる闘いに^{やぶ}敗

れたのではなく、ジャンザビの神秘に、訳も解らず、^{あらが}抗いようもなく、消されたのだと――。

認めるわけにはゆかなかった。

それゆえイーヴは歩き続けた。

日が昇り、暮れるまで、当てもなくジャンザビを^{さまよ}彷徨った。

そうしてまた一月が過ぎた頃である。^{ひとつき}

イーヴはある異変に気づいた。

クリステルに寝床として提供したことのあるあの洞窟、今は待ち合わせ場所のひとつとして使っている洞窟に、いつの間にやら、^{こまごま}細細とした道具や薪、^{たきぎ}食糧、薬草などが備蓄され始めたのである。しかも^{きれい}綺麗に^{せいりせいとん}整理整頓されている。そして、これまたどこからそんなものを持ってきたのか――いや、いつの間にそんなものを作ったのか、何十本もの枝を^{こうし}格子状に組んだ造りの棚が置かれ、その中には、干された肉や魚、薬草が^{おさ}収められている。いかにも風通しの良さそうな棚は、^{ひもの}干物を置いておくには最適なものと思われた。

イーヴは^{あっけ}呆気にとられつつ、深い感動を覚えた。

己には^{とうてい}到底できそうにもないことである。

こんなことをするのはただひとり、あの女、クリステルしかいまい。

――これが貴族というもののなのか……。

貴族というものは、多くの人間に^{かしず}傳かれて威張っているだけの存在だと思っていたが、どうやらその認識を改めねばならぬようである。やはり、そうされ、そうするだけの能力が、貴族にはあったのだ。

イーヴはそう考えた。

無論、安易な考えである。しかし、貴族のことなどよく知らぬイーヴである。その考えの安易さなど判らぬし、そう考えてしまうのも無理からぬことではあった。

それはともかく、イーヴはこの状況を^{いぶか}訝しんだ。

これはいったいどういうことなのか？

——これではまるで……

「どうされました？」

いきなりの声に、イーヴは驚いた。

振り返ると、影のように頼り無げな様子で、クリステルが立っていた。

精神的にも肉体的にも、隠しようも無いほどに疲労が^{あら}露わである。無論、イーヴとて似たようなものであったが。

「……いや、これはどういうことなのかと思ってな。ここに腰を^す据えるつもりなのか？」

クリステルは^{うなず}頷いた。

「……もちろん脱出を諦めたわけではありません。待つことにしたのです」

「待つ？ 太陽が二つになる時をか？ 誰かが救^{たす}けにやってくる時をか？」

「脱出できるその時を」

「待ち続けた先に、脱出があるとは限ら^んののだぞ？」

「歩き続けた先に、脱出があるとも限らないでしょう」

ふたりは硬い表情のまま、暫^{しば}し目を合わせた。

先に目を外らしたのはクリステルの方だった。

「……いえ、嫌^{いや}みを言いたいわけではないのです。この山の不思議は人智を超えたものです。それに対して、どうすることが最善かなんて、判りようがありません。また、それと同様に、脱出できるその時がいつ来るかも、判りようがありません。取り敢えずははっきりしているのは、その時が来る前に死ぬわけにはゆかないということです。この状況です。つい気ばかりが焦って、自分の足^{あし}許を見失いがちになりますが、それで死んでしまっ^ては元も子もありません」

「……ふむ」

イーヴは唸^{うな}った。唸らされた。

クリステルはかなり追い詰められている。それは見ただけで判る。

だがその精神は明^{めい}晰^{せき}さを失っていないのだ。諦め

でもない。

^{みごと}
見事だと思った。

「なあ……」

「なんででしょうか？」

「その、貴族ってのはみんな……お前みたいなのか？」

そのように強い心を持っているものなのか？

「おっしゃることの意味がよく解りませんが……」

「いや、いい。気にするな」

イーヴは話を切り上げた。自分でも、なぜそんなことを口に出してしまったのか解らなかった。

感心している場合ではない。己とて同じ立場にあるのだ。

「……^{しばら}暫く休むか」

イーヴの呟きにクリステルが目を向けた。

「どういう意味でしょうか？」

「このまま山歩きを続けても、奴が姿を現すとは思えない。ならばその間、お前の手伝いでもしようかと思ってな」

出口探しとやらはともかく、日々の食糧集めやその加工など、やるべきことはあった。

今までは探索の片手間に行っていた作業を集中してやるわけだ。

そしてそういうことは、クリステルの方が得意そ

うであった。

「お前の指示に従おうと思う」

イーヴが言うと、クリステルはちょっと驚いたようだったが、何も言わずに^{うなず}頷いた。

クリステルは馬鹿ではない。一緒に生活をしてきて、そのことははっきりと判る。

その能力は信頼に足るものだし、人柄の方も信頼に値すると思う。

とにかく効率的に食糧を蓄え、生活の基盤を強化しなくてはならない。

無論、いつまでもこの山で暮らすつもりはない。

「大いなる敵」を^{たお}斃すまでの話だ。

奴はいつか必ず、この己の前に姿を現すだろう。

必ず……。

第一章 第六節

「おい、これ、食えるやつなんじゃないか？」

イーヴは目の前の野草を指し示した。クリステルが教えてくれた、食べられる野草に見えたのである。

近くで野草採りをしていたクリステルは、すぐさまやってきた。

「ゼナムと勘違いしたようですね。葉の先を見て下さい。ほら、^{まる}円いでしょう？ ゼナムは^{とが}尖ってますから」

「……そうか」

イーヴは小さく^{ためいき}溜息を吐いた。

クリステルの手伝いを始めて一週間が経つ。

食べられる野草について、クリステルの教えを受けたものの、まだうまく見分けられない。

「そう、気を落とさないで下さい。人には得手不得手というものがあります。わたくしは狩猟がうまくありませんから、わたくしたち、互いに^{おぎな}補い合っているではありませんか。それでよいではありませんか」

慰めるようにクリステルは^{しごくもつと}至極尤もなことを言うが、イーヴとしては^{しゃくぜん}釈然としない。

「ここではこれくらいにしましょう。次はあちらで

す」

採集物を入れてある、干し草で編んだ籠^{かご}と、柴^{しば}の束^{たば}を小脇に抱え、クリステルは歩き出そうとした。

「貸せ」

イーヴはクリステルから柴を取り上げた。

「ありがとうございます」

クリステルは微笑み、先に立って歩くべく、身をひるがえ翻した。金の髪がふわりと揺れた。

いつの間にこんなに伸びたんだろう、と、イーヴはふと思った。

であつた頃は、肩にも届かぬほどの髪だった。それが今や、肩に触れている。

——それほど時が流れたということか……。

よもや、これほどジャンザビに留^{とど}まることになるうとは、思いも寄らぬことであつた。いまだ「大なる敵」と相見えること叶^{かな}わず、その代わりのように貴族の女と出遇って、こうしてふたりで生活することになるうとは。

どうにも落ち着かぬ気分だった。

もしや己は、どこか違う場所に入り込んでしまったのではないか？

クリステルの話を真^まに受けるわけではないが、そう感じてしまう時がある。

己が立っているはずのこの現実、ひどく違和感

を感じてしまう時がある。

それゆえクリステルが不可解であった。

このような望ましくない状況にも拘らず、どこかでそれを受け容れているようなところが、彼女から感じられるのである。しっかりと地に足を着けて、この状況を生き抜こうとする^{たくま}逞しさが感じられるのである。

いったい、その細く小さな体のどこに、そんな力が秘められているのか……。

クリステルの背中を見ながらそう思っていると、次第にその先が明るくなり、視界が開けた。

見晴らしの良い場所だった。

山の外が、遙か彼方までよく見える。

まだ乾季であるから、当然、天気も良く、群青色の空の下、^{もと}白茶けた荒野がどこまでも広がっている。

ひょっとしたら部族の村まで見えるのではないか？ ——そんな風に思えるが、見えないことはすでに判っている。ここにやってくるのは初めてではないのだ。

それでも何かしら見えやしないかと目を向けると、そう遠くもないところで巨大な土煙が上がっていた。

「ありやなんだ？」

一瞬、たくさんの蟻^{あり}が動き回っているように見えた。

もちろん考えるまでもなくそんなはずはない。人間である。

まるで穀物の実を撒^まいたかの如^{ごと}くに大勢の人間が蠢^{うごめ}いている。馬も混じっている。

濛濛^{もうもう}たる土煙の中、様々^{さまざま}な旗や幟^{のぼり}がいくつも立ち、刀槍^{とうそう}や甲冑^{かっちゅう}が燦^{きら}めいていた。

戦争であろう。

イーヴは戦争というものを見るのは初めてであったが、それでも容易に判断がついた。

遠雷のように雄叫^{おたけ}びが聞こえてきた。

すると押し合い^へ庄し合いをしていた一角が動き、絶叫と、金属の激突する鋭い音が、激しい雨のように立て続けに鳴った。

大きな音ではない。

遠く重く、しかし強烈な存在感を持って聞こえてくる。

イーヴは意識を奪われた。最大の注意をもって目の前の戦争を注視した。考えることよりも観察することが優先した。

と、不意に背後で荷物を抛^{ほう}り出すような音がした。クリステルだ。彼女しかいないのだから。

しかし物を投げ出すような真似^{まね}をするとは意外で

あった。そういうぞんざいさとは無縁の人間だと思っていたからだ。

^{いぶか}訝しみながら、その意味するところを考えようとした時、クリステルが^{なりふ}形振り構わず駆け出した。

「おい、どうしたっ!？」

イーヴの呼び掛けにも答えない。^{ふもと}麓に向かっているようだった。

あの戦争に何かあるのだろうか？

ともかく後を追った。

女の足だ。追いつくのは^{そうさ}雑作もない。

追いついたところで、イーヴは何かしらの気配を感じ取った。

——「大いなる敵」!？」

そう思うが早いか、クリステルの腕を^{つか}掴んだ。^{うめ}呻くような悲鳴があがった。細い腕だった。折れるのではないかと一瞬^{あや}危ぶんだが、気にしている場合ではない。すぐさま引き寄せて^{くちばや}口早にささやいた。

「何か来る。ここで待て」

クリステルを置いて、^{ひそ}秘やかに、かつ^{すみ}速やかに山を下った。気配は下の方からやってくる。

胸の高鳴りが、^{よろこ}歡びが、抑えられない。

ところがほとんど間を置かずに失望させられた。

「大いなる敵」ではなかった。

人の気配、それも複数だ。

——外から人が……？

己とクリステル以外の間人は、ここにはいなかったはずである。つい最近、外から入ってきた者たちに違いなかった。となれば、あの戦争の兵士である可能性が高い。

イーヴは草木に身を^{ひそ}潜めながら、慎重に近づいていった。

案の定、それらしき人間が四人見えた。

イーヴと同じくらいの年恰好の若武者が一人と、彼を護るように取り囲んでいる壮年の戦士が三人。その様子と身^{みな}扮りから、若武者の身分の高さが^{うかが}窺えた。

返り血なのか自身の血なのか判らぬが、四人とも血と埃に^{ほこり}まみれ、疲労の極限にありながらも何か^せ急つかれるように歩を進めている。

^{おちむしゃ}落武者だと思った。

あの戦争から逃げてきたのだろう。

^よ選りに^よ選ってこんなところに逃げ込んでくるとは。知ってて破れかぶれなのか、知らずに運が無いのか……。

ともかく、接触するべきか否か、どうしたものかと考えながら観察していると、己の背後からも人の気配が近づいてきた。おそらくはクリステルだろう。待てと言われておとなしく待っているような女

ではないし、そもそも飛び出していったところを無理矢理止めたのだ。急いで下山せねばならぬ何かがあるのだろう。

警告はした。それをどう判断するかは彼女の自由である。

無論、こちらの足を引っ張るような真似をされては困るが、頭の悪い女ではない。そうでなければ野放しにはしておかぬ。

クリステルがいると思しき辺りを振り返ってみれば、気配があるだけでその姿は見えない。身を潜めながら慎重にこちらにやってきているようだった。

が――

「セルジュ!!」

叫ぶなり、クリステルは飛び出した。

驚くイーヴを^{しりめ}後目に、落武者たちに向かって駆けていく。

落武者たちは驚き身構えた。

だが若武者が何かに気づいたらしい。驚き顔に、さらなる驚愕が浮かんだ。

「……クリス？ クリスなのか!?!」

どうやら知り合いのようである。

イーヴは^{あんど}安堵して、クリステルの後を追った。

突如現れたイーヴに、落武者たちは再び驚き身構えた。

「待って！ 彼は味方です」

クリステルが^{とど}留めた。

四人は安堵して構えを解いた。

しかしイーヴは^{ばっけん}抜剣して警告した。

「気を抜くなッ!! 追われているな!?!」

落武者たちの後方から、武装した男たちが六人やってくる。

追っ手であることは一目で見て取れた。獲物を追い詰める者特有の^{どうもう}獰猛さがある。不思議とどこか憶えのある感じがしないでもないが、^{ずいぶん}随分と泥臭く、野蛮な感じのする連中だった。おそらくは落武者狩りだろう。

「奴ら、もうそこまで！」

落武者たちも抜剣した。

イーヴは舌打ちをした。もはやこうなっては戦いを避けることはできないだろう。

己は部外者だと主張したところでどうなるものでもない。落武者狩りは、それ自体一つの商売なのだ。だったら獲物が多い方が良いに決まっているではないか。

イーヴはクリステルに目を向けた。頬が白い。表情が^{こわば}硬張っている。

なぜか不思議な衝動が胸の内から込み上げてきた。

クリステルの身を守らなければ。そんな考えが頭をかすめたのだ。

――らしくない。

そう思う。

これまでイーヴは一度も他者のために戦ったことはなかった。戦いとは全て「大いなる敵」へと続いているものであり、目の前の敵を倒すこと、それ以外のものが心に去来したことはなかった。

だが今はクリステルを守りたいと思う。

いや守らなければならない。

それは核心めいた強い思いだった。

なぜそんな思いが込み上げてきたのかイーヴには判らない。

この気持ちは何なのか。

興味はある。だが――考えている時間はなさそうだった。

「やつらが来る！」

若武者が叫ぶように警告した。その声に焦りは感じられたが^{おび}怯えは感じられなかった。

そのことは若武者が腰抜けではないらしいことをイーヴに感じさせた。

イーヴは右手に剣を持ち、自ら追っ手へと歩を進めた。

落武者たちを^{たす}救けてやる義理などかったが、あの

落武者狩りが己とクリステルを見逃すとは思えない。

連中にとっては利益になるか、ならぬかである。

要するにこの戦闘は成り行きであった。

落武者狩りたちが雄叫びを上げながら駆け寄ってくる。

一人目がイーヴに剣で斬りかかってきた。

それなりに速度も力も乗った一撃ではあるが隙だらけの動きである。

一応は剣技を身に付けているのかも知れないが、イーヴの目から観れば問題外の技倆であった。

これでは剣技も何もあったものではないと思えた。

イーヴは右に半歩動いて敵の剣をやり過ごすと同時に、下から喉元のどもとめ目懸けて剣を振り抜いた。男の頭が跳ねるが如くごとにがくんと上を向き、喉から血が噴き出した。

二人目が胸前から剣を突き出すようにして突進してきた。これも隙が大きい。

どうもこいつらは近隣の農民とか、そういう連中であるらしかった。

イーヴはそう判断した。戦士としての鍛錬をしている者たちとは思えなかった。

それなりに戦い慣れているような感じではある

が、その戦い方は、力と度胸に頼っただけの御粗末なものだ。

だが勢いはあるし迷いも無い。そして殺しに対する抵抗感がないというだけでも、下手な剣技の十倍は役に立つ。

つまり手加減をしてやる必要はないということだ。元元そのつもりもないが。

突き技は隙が大きい。

イーヴは敵の剣先を外しながら踏み込み、相手の右手首を切り落とした。

剣をひらりと回旋させ男の頸筋にと打ち込もうとしたが、その時間はなかった。三人目四人目が同時に斬り込んできたのだ。が、これまた連携も何もあったものではない動きだ。

二人の剣が振り下ろされるよりも速く、イーヴは一方に踏み込んでその頸を裂き、返す刃を、空振って体勢を崩したもう一方の頸筋に叩き込んだ。二人分の夥しい血を頭から被った。

それにしても、こうも容易く頸への一撃を許すとは……。

これでは到底、戦士とは謂えぬ。

五人目となるべき相手が、弱弱しい悲鳴をあげて逃げていくのが見えたが見逃した。追い駆けてまで殺す必要は無いし、敵は後二人いる。

しかし、見回してみればもう片は付いていた。落武者たちによって、手首を落とされた二人目は止めを刺され、残る一人も始末されたところであった。

クリステルを見れば、顔を青冷めさせて、恐れるような恨むような目でこちらを見ていた。

その理由は明らかであった。

人を殺したからだ。

しかし飛び出して出てこなかっただけ上等ではある。己の信条よりも状況判断の方が勝ったというところであろうか。それとも単に足が竦んだのか。

そう思って苦笑した。

——所詮、その程度のものだ。

実際の殺し合いの前では、ご立派な不殺のお題目など消し飛んでしまう。

殺し合いとはそれだけの重みがあるものなのだ。

とは言え信条など打っ遣って、己に正直であるのは結構なことだと思う。

自然なことだと思う。神殿の聖職者たちのように、禁欲だのなんだのと、己を虐めて生きるのはどうかと思う。

尤も、彼らとしてはその抑圧が堪らないようなので、イーヴとしては何も言うことが無い。心の中で変態だと思っのみである。

かたじけな
「忝い」

若武者が礼を述べてきた。

血と汗と埃にまみれているにも拘らず、爽やかな感じのする男だった。

金髪碧眼、目元は涼やかで、イーヴよりも少し小さく細身ではあるが、だからと言って頼りないというわけではない。締まった感じである。

どこかクリステルと通じるものがあるが、それはおそらく貴族らしさ、高貴さというものであろう。

「私はセルジュ。ジョルジュ・バルドールの息子、セルジュだ」

セルジュは礼儀正しく名告った。

「俺はエク族のイーヴ」

イーヴは打切棒な調子で応えた。

「貴様、その態度はなんだ！ この御方はバルドール伯爵であらせられるぞ！」

イーヴの態度に不満を感じたらしい。壮年の戦士の一人がイーヴにくってかかった。

セルジュは手を挙げてそれを制した。

「殿……」

壮年の戦士は怪訝な顔でセルジュを窺う。

「よい、下がれ」

「……御意」

壮年の戦士は渋渋と退き下がった。

セルジュはイーヴに向き直った。

「臣下が失礼した」

「……」

イーヴとしてはなんとも言い様が無い。

妙な茶番を見せられた気分だった。

だいたい「バルドール伯爵」などと言われても、
なんのことやら分らぬ。

「エク族と申されたな？ 失礼ながら、^{かぶん}寡聞にして
耳にしたことは無いが、しかし、なかなかの腕前。
さぞ——」

「セルジュ、話は後にしましょう。今はそれどころ
ではないのです。早急に下山しなくては」
クリステルが^{さえぎ}遮った。

セルジュは心なしか驚いた様子でクリステルを見
た。目の前にあるものが信じられないといった様子
で、クリステルを見つめる。

「……ああ」

そして^{ためら}躊躇いがちに何かを言いかけたが、それよ
りも先にクリステルの目がセルジュから離れた。

「——あなたも下山するのです」

この場を去ろうとするイーヴの背中に、クリステ
ルは言った。

イーヴは目だけをクリステルに向けた。

「同じことを何度言わせるつもりだ？」

「ご自分でも、もう解っていらっしゃるんでしょ

う？」

「『解っている』？ 何をだ？」

「この山には『大いなる敵』は居ない、ということ
を」

イーヴの顔が険しくなった。

返り血を浴びた顔がさらに凄惨になった。

——この山には『大いなる敵』は居ないのではな
いか？

一度ならずそう思ったことはある。しかし、思っ
ただけで認めたわけではない。

クリステルが言うように「解っている」わけでは
ない。思う度^{たび}にすぐさま打ち消してきた。

「『大いなる敵』？ なんだそれは？」

セルジュが興味深げに割り込んできた。

クリステルは無視して続けた。

「いえ、あなたが迷い込んだこの山には『大いなる
敵』は居ない、と言うべきでしょうか。あなたは
『大いなる敵』の居ない山に迷い込んでしまったの
です」

「……」

「下山しましょう。おそらく今なら下山できます。
ここに居てもなんの望みもありませんが、下山すれ
ば望みは出てきます。一度下山して再度入山すれ
ば、この山は今のこの山ではなくなるのです。ある

いはその山なら、『大いなる敵』が居るかもしれませんが。その望みに懸^かけてみませんか？」

ぐらりと心が揺れた。

そんな己に苦笑した。

荒唐無稽として却^{しりぞ}けてきたクリステルの話を、望みがあるというだけで信じようとしている。

いや――

荒唐無稽として却けた？ 本当にそうなのか？

この山には「大いなる敵」はいない。

そのことを否定したいがために却けたのではないのか？

「お前の話が本当だという……証拠は、あるのか？」

愚かな言葉が唇から漏れた。恥ずべき言葉だと思う。だが本音でもある。

クリステルは真っ直ぐな眼差しを向けてきた。

「父にお会い下さい。すべてはわたくしの父からお聞きになると良いでしょう。きっと納得なさると思います」

「……」

イーヴはクリステルの眼差しを不思議そうに見た。

なぜこうまで、この女は己を下山させようとするのか。

急いでいるはずだ。

説得している暇など無いはずだ。

話の分らぬ男として、さっさと見切りをつければよいものを。

この山に在って、共に過ごした仲ではある。と言っても別段、情を交わしたわけではない。状況に甘んじていたのならば、あるいはそうになっていたかも知れぬが、己もクリステルも諦めてはいなかった。そんな気分にはならなかった。共同生活者としての、好意と信頼があるだけだった。

人が好い^よのだろうと思う。

「あなたは『大いなる敵』を斃^{たお}さなくてはならないのでしょうか？ でしたらそのためにも、一度体勢を立て直した方がよいではありませんか？ あなたは問題にならないとおっしゃいましたが、あの時の傷だってまだ完全には癒^いえておりません。何よりも心身に疲れがありましょう」

痛いところを衝いてきたと思った。

傷はほとんど癒えている。普通に動く分には問題は無い。

だが闘いとなるとどうか。

万全だとはとても言えぬ。これは気合いや努力で何とかなる問題ではない。動かし難い事実だ。

何よりも、この山に入るまで己を支えていた張り

のようなものが、弛^{ゆる}んできているのではないかという不安がある。

クリステルの「心身に疲れがありましたしょう」という言葉は、そこをまさに言い当てていた。

「もう一度申し上げます。あなたはこの山を一旦^{いったん}出るべきです。確実に、あなたの敵と出逢うために」

「……お前の父親は何を教えてくれる？」

「あなたの求める答えをです」

クリステルは言い切った。真摯^{しんし}な眼差しを向けられて、イーヴは不思議な胸の痛みを覚えた。

すが^{すが}縋り付いていると思った。無論クリステルがではない。己がである。

「大いなる敵」に。たお^{たお}すべき、恐るべき偉大なる敵に。

だが……。

少なくとも今、この山に奴が居るとは思えない。

「わたくしたちとともに下山しましょう。今ならば下山できるはずです」

クリステルはセルジュの方に目を遣った。セルジュは戸惑いを隠せぬ様子であった。当然だが、会話の内容についてこれぬようである。

クリステルが息を吸う気配がした。意を決したように口を開いた。

「……縦^よしんばこの山に『大いなる敵』が居るとし

でも、今のあなたの前に姿を現してはおりません。そのことの意味をお考えになってはいかがでしょうか？」

縦しんば居るとしても姿を現していない——とは、どういう意味か？

イーヴは一瞬、クリステルの言葉の意味を掴みかねた。

だが、すぐに解った。

それは、「大いなる敵」が己を敵として認めてはいないということ、戦うに足る相手として認めていないということだ。

忿怒ふんぬの火が胸の中に燃え広がった。

赦ゆるせぬ。

殺気を含んだ眼差しでクリステルを見た。無論クリステルに対して怒っているわけではない。その言葉を無視できぬことへの怒りである。その言葉に幾いくばくかの妥当性だとうせいを認めざるを得ないからである。

呼吸が荒くなった。イーヴは目を閉じた。気を鎮しずめなくてはならない。怒りは正しく用いられなくてはならない。今は怒るべき時ではない。誇り高き戦士は怒るべき時に怒り、行動を以もつて示す。それが戦士の誇りである。

暫しばしの沈黙が場に流れた。

「……解った。お前と一緒にこの山を出よう」

はがき 歯牆の間から^{しほ}搾り出すように声を出した。

苦痛であった。それでも、今は他に取るべき手がない。

一方クリステルは、安堵の混じった^{よろこ}歡びの笑みを見せた。

「……話をついたようだな」

セルジュが口を開いた。^{さきほど}先程クリステルに無視されて以来、黙って成り行きを見守っていたのだが、どうも納得しかねるようであった。

少々不機嫌な様子で、イーヴをちらりと見た。見定めるような鋭い目だった。

の 除け者にした^{せい}所為であろうか、と、イーヴは思ったが、そんなことで^{いきどお}憤るような幼稚な男とは思われなかった。

「さあ、クリス」

セルジュは血にまみれた手袋を脱ぎ、常のことであるかのように、クリステルに手を差し伸べた。

クリステルはその手に手を伸ばしかけたが取ることはしなかった。静かに押し戻したのである。

「セルジュ、ここは都ではありませんよ」

^{ほほえ}微笑みながら言った。

セルジュは驚いたような顔をした。クリステルとイーヴを交互にさっと見て、

「……そうだな」

クリステルの微笑みに^{こた}応えるように微笑んだ。どこかぎこちない微笑みだった。

そんなふたりの遣り取りから、イーヴはふたりの仲の良さを感じた。恋人とまではゆかぬでも、それなりに親密な仲なのであろう。

イーヴは先に立って山を下り始めた。

第二章 第一節

——クーブランは暗殺されたのではあるまいか？

そんな噂が真^{まこと}しやかに宮廷内に流れていた。

「誰に」とは誰も言わぬ。

言わずと知れたことであった。

外務大臣ドニ・クーブランと内務大臣レイモン・ギュベール——ふたりが犬猿の仲であることは、周知の事実であった。

また、いまだ兵を集めている段階ではあるものの、折^{おり}しも隣国リンドベリとの戦時下にあり、戦略に関する激^{げき}甚^{じん}な意見対立もあった。

「気にすることはないさ。単なる噂だ」

友人たちはそう言ってくれるが、それが好意から出た慰めであることはクリステルにも解っている。

レイモン・ギュベールは、愛すべき自分の父である。噂如きで揺らぐような愛情など持ち合わせていないが、公^{おおやけ}では「単なる噂」で済むような噂ではない。

父は全くの異国人でありながら、まるで年来の友好でもあったかのごとくに、王家と誼^{よし}みを通じることに成功した才人である。

先王の寵^{ちやうあい}愛を受け、当時はまだ王子であった現王

ロドルフからも深く信頼されるまでになった。

それが面白くない者は多い。

ただでさえ、宮廷貴族たちには自分たちこそが宮廷であるとの自負がある。

そして普段は激しい派閥争いをしている癖に、いざ外敵が現れると一致団結して排除しようとするという、恐ろしい性質を持ち合わせてもいる。

もしも父レイモンと王家との間に、強い絆がなかったならば、素性の知れない異国人など^{たちま}忽ちの内に排除されていたろう。

クーブランに限らず父には敵が多い。

どこからともなく現れた流れ者であるのに、^{またた}瞬く間に出世した感のある父である。^{うら}恨まれたり^{うらや}羨まれたりするのは無理からぬことで、失脚の火種があれば、ここぞとばかりに^た焚き付けられ、大きくなることは目に見えていた。

政敵と言ってもいい外務大臣ドニ・クーブランの失踪は、父を敵視する人々にとって最高に美味しい話であった。

不名誉な噂が囁かれ、まことしやかな嘘が貴族たちの間を流れ始めた。

宮廷という池の色が淀み始めた、まさにその時を見計らうようにして、国王ロドルフは一石を投じた。

「クーブランは王家の禁足地に足を踏み入れたのだ」

宮廷人たちの間に動揺が^{はし}趨った。

クーブランは戦場視察に^{おもむ}赴いたはずであった。そしてそのまま行方不明となっているのである。

戦場と指定されたのはヴァルカンティとリンドベリ両国の国境付近である。

クーブランが名も無き一兵士であるなら、敵と遭遇して殺されたという見方もできようが、クーブランは大貴族であった。それも、その首を^と獲れば大きな名誉を得られるという^{たぐい}類の武人ではなく、殺すよりも捕虜にして身代金をふんだくった方が^{はる}遥かに得という類の文人であった。それゆえ暗殺説が^{ほの}仄めかされていたのである。

しかしながら王家の禁足地に足を踏み入れていても何の不思議も無い。クーブランが赴いた場所と、王家の禁足地はすぐ近くにあるし、王家の禁足地にして聖地であるジャン・ザ・ビオンには、一度足を踏み入れれば外に出られぬという噂と共に、王家の財宝が隠されているという噂がある。

——戦場視察と称して、宝探しに出掛けたのだ！

多くの者はそう考えた。行方不明の当人にとっては^{まこと}実に気の毒な話ではあるが、これは^{やゆ}揶揄でも嫌味でもなく、彼をよく知る宮廷人たちの、^{いつわ}偽らざる本

心からの感想であった。

つまりはクープランとはそういう類^{たぐい}の男であったのだ。

彼にとっては富とか世俗的な名声といったものこそがまず第一であり、神聖さへの畏怖^{いふ}とか、羞恥心といったものはそれらに比べて数等、優先度が落ちるのだった。

当然、彼のことを好きと言うよりも、苦手としている者の方が遥かに多いし、なお一歩進んで積極的に憎んでいる者たちも少なからずいるという話だった。

であるから今回の行方不明に関して、疑いの目が向けられるべき人物は、両手の指を使っても足りぬほどであるのだが、それでもやはり暗殺者として、父が有力な候補と見做^{みな}されることに変わりはない。

今までのクープランとの対立から、また父の急激な宮廷での出世、力の伸長から、人々の意識を集めてしまうことは理解できる。

それゆえ王の言葉は、寵臣^{ちょうしん}ギュベールを擁護するものであるとされた。

表立ってそう評する者はいないが、宮廷人の間では暗黙の了解となっていよう。

だから父による暗殺説が消えたわけではない。

現国王ロドルフは、父の手によって王位に就^ついた

と言っても過言ではない。王にとって父は、無くてはならぬ存在なのだ。

ともあれ、そうした噂が交わされるうちに進軍の途上にある領地以外の各領地から、都にそくそく続々と兵が参集してきた。

そしていよいよ戦場へ向けての出立の時を迎えたのであった。

＊

——ようや漸く、この時が来た。

はや逸る気持ちを抑えるように、クリステルは胸に両手を当てた。

その身みな扮りは貴族の姫君らしからぬものである。

金の髪はみみたぶ耳朶辺りまでの短髪で、衣服は男物の着古しである。そして、その細く小さな体には大き過ぎて、ほとんど、革の胸当てではなく革の胴巻きになってしまっている防具を、衣服の上から身に付け、腰には短剣を差している。元より自慢できるほどの胸ではないが、布を巻いて縛っているので、胸のふく膨らみはほとんど見えない。

見るからに、これがういじん初陣の従士といった風であった。

そのたちいふるまい立居振舞からは、よく教育がほどこ施されているら

しいことが判るが、貧相な武装をしているところを見れば、さしたる家の出ではないと見て取れる感じがある。戦^{いくさ}に必要なものはすべて自前であるから、そこを見れば家の力が一目瞭然なのである。

「坊主^{ぼうず}、祈りを捧げるのはまだ早^{はえ}えぞ」

いきなりばしりと背中を叩かれた。

息を詰まらせながら振り返ると、やたらと濃い鬚^{ひげ}面の、熊のような男が不敵な笑みを浮かべていた。ジュノン家に仕える騎士、アランである。

クリステルは従士として彼に付き随^{したが}うことになっている。

無論、今回限りの臨時である。従士は特定の騎士に仕えて騎士になるための修行をするのが普通であるから、これは異例と言えよう。この男は真相を知らぬが、友人の家の家臣に金を渡して、無理矢理軍の中に入れてもらったのである。

「しかしお前、本当に女みてえだな」

クリステルの背中を叩いた手をちらりと見て、アランは言った。

「ジャックの親戚ってことで加えてやったがな、輜^{しち}重隊^{ようたい}だからって甘く見るんじゃねえぞ」

アランはぎろりとクリステルを睥^{にら}んだ。

輜重隊とは物資の輸送と供給^{つかさど}を司る部隊である。

「そりゃあ、こっちから敵にぶつかって行くことは

ねえが、襲撃を受けやすいからな」

戦に必要な物資が無くなれば、戦を続けることはできなくなる。退かざるを得なくなる。だからこそ狙われやすい。

「ま、お前ひとり死んだところで、どうということもねえがな」

アランはクリステルが物見遊山で参加していると思っているらしかった。

そう思われるのも無理からぬことであった。

従士の仕事は、仕える騎士の身の回りの世話、武器の手入れや持ち運び、馬の世話などであるが、およそ従士らしからぬことに、クリステルは身の回りの世話以外のことは何もできないのである。騎士に仕える従士でないことは明らかであった。貴人に仕える見目良い小姓といったところだ。

クリステルは否定も何もしない。相手の思うに任せ、むしろそれに合わせている。人は自分が見たいものしか見ない。見たいものが見られれば安心する。だからそれでいい。

戦いくさに参加するつもりは端はなから無い。

すべてはジャン・ザ・ビオンに辿たどり着くためだ。

戦場ほどに程近いジャン・ザ・ビオンへ行くには、そこへ向かう軍の中に紛れまぎ込むのが一番安全だと思ったのである。

ジャン・ザ・ビオンへ行き、確認すべきことがある。

父レイモン・ギュベールが、本当にクーブランを暗殺したのか否か。

噂を真に受けたわけではない。

噂だけなら疑いもしない。

しかし、実際にこの目で見てしまった。聞いてしまった。

クーブランが戦場視察に向かった、その翌日の夜のことである。

なぜか眠れず、夜の邸内を彷徨さまよっていると、すっかり闇の中に落ちた我が家の庭に、人目を忍ぶように集ういくつかの影を見つけた。暗くてはっきりとは見えなかったが、父と、武装しているらしい男たちだった。

父は彼らに命じた。

——クーブランを追え。

と。

静かな声だった。

だが、夜の静寂しじまを破るには十分な声だった。

確かにそう言った。

今でも耳にはっきりと残っている。

聞いた時にはなんのことやらよく判らなかった。

それが噂によって明確な形を持った。

あの夜、父はクーブランの暗殺を命じたのではないか？

そう思い至って、クリステルは衝撃を受けた。

——お父様が人を殺した……!?

いったい、なんのために？

公私共に仲は悪いが、それだけの理由で殺すとは思えない。殺してよいはずもない。

クーブランのジャン・ザ・ビオン入りを阻止すべく殺したということも、あくまで要素のひとつとしては挙げられるが、やはり考えにくい。

父はジャン・ザ・ビオンの秘密を知っている。おそらくはこの世界の誰よりも知っている。

そこを踏まえて考えれば、阻止こそすれ、殺すことは無いという結論が出てくる。殺す必要などどこにも無いのだから。

ともあれ考え付くのはその二つくらいのもので、他に理由となりそうな要素を挙げることはできなかった。

となれば、後は自分が与り^{あずか}知らぬことが理由となっているのかも知れない。

しかし、殺さねばならぬほどの理由とは、いったいどういうものなのだろう？

クリステルにはまるで想像が付かなかった。

世の中には暴力でしかどうにもならないことがあ

る。哀しいことにそれが現実である。

それは理解しているつもりである。今ある戦^{いくさ}など、その最たるものだろう。

しかし、どうにもならないから、仕方無いからということをお免罪符とはしたくない。そこで諦めてしまったら、進むことができなくなる。愚かなままで立ち止まることになる。それでよいはずがない。

誰も死にたくなどない。ならば、誰も死ななくてもよい方法が、きっとあるはずだ。

クリステルはそう信じて疑わない。美しいものには触れたことのない、貴族の姫君らしい真摯^{しんし}さで。

その真摯さと盲目的な愛情から引き出されるのは、父は愚かな人間ではないということである。暴力的な手段を、それも暗殺などという卑怯^{ひきょう}な手段を、採^とったりはしないということである。

そう信じてはいる……いるのだが、面と向かって確かめる勇氣は無かった。

いや、仮にそうしたところで、うまく逸^{はぐ}らかされるかも知れなかった。

遠い異郷からひとりこの地にやってきて、伊達^{だて}に生きてきたわけではなからう。

父は淡淡^{たんたん}と事実しか語らぬが、そこに艱難^{かんなん}辛苦^{しんく}があったことは想像に難くない。にも拘^{かかわ}らず、そんな

ことはおくびにも出さないのである。

だから、直接、この目で、確かめる必要があった。

それは余計な行為であるかも知れない。わざわざ見なくてもよいものを見てしまう行為であるかも知れない。逸らかされてそれで納得するのが、お互いのためというものかも知れない。

しかし、疑念は生まれてしまった。

この先、愛すべき父を疑いながら生きていくのは嫌だった。

確かめなければならなかった。

たとえ
仮令、真実が自分の期待を裏切ることになろうとも。

第二章 第二節

セルジュは何度目かの深呼吸をした。

緊張している。

まだ敵と見えてもいないのに。

無理もなかった。

初陣である。

この戦に懸けているものもある。

手柄を立てて、認めてもらう。認めさせる。

宮廷貴族としての日々を取り戻すのだ。

宮廷への帰参を――。

彼女との結婚を――。

いや、まだその一步にしかない。

だが、確実な一步を得たい。

彼女――クリステルとは、幼馴染みであった。昔から仲が良く、家同士も昵懇じっこんしていたので、いずれは結婚するのが自然な風でもあった。

だが、それも今となっては昔のこととなった。

転機は五年前、王位継承争いの折である。

第一王子ロドルフと第二王子セドリックが王位を争うこととなり、貴族たちは三つの選択肢からの選択を迫られた。ロドルフに与くみするか、セドリックに与するか、そして、どちらにも与せず情勢を見守るか、である。

セルジュの家――バルドール家にとっては、厳しく難しい選択であった。

ロドルフと、クリステルの父レイモン・ギューベル、何やら意気投合するところがあるらしいこの二人を引き合わせたのは、そもそもセルジュの父、ジョルジュ・バルドールであった。その^{よし}誼みで、バルドール家はロドルフの覚えが良かった。

当然の如くロドルフ派に与したレイモンは、こちらに与するよう、ジョルジュを説得した。そこにはロドルフの期待もあった。

その一方で、バルドール家はセドリックとも浅からぬ縁があった。セドリックの母方の祖母はバルドール家の出で、つまりはセドリックとは縁戚関係にあった。

バルドール家は、双方に引っ張られる状態になってしまったわけである。

ジョルジュは悩みに悩んだ。

この選択には、^{かね}予てより^{れいらく}零落しつつある、家の存亡も懸かっていた。

ロドルフ派でもセドリック派でもない、第三派を選ぶのが無難と言えれば無難であった。しかし、それは双方に対して不義理というものである。

結局のところ血縁の義理を取ったわけだが、争いは民にまで及ぶような大規模なものには到らず、口

ドルフが王位に就き、セドリックは蟄居^{ちつきよ}させられることで終わった。

ギュベール家は大きく繁栄し、バルドール家は大きく零落することとなった。

ギュベール家は単に勝ち組に属していたというだけでなく、ロドルフの期待に多いに応^{こた}え、多大な功績を挙げたということもあって、王国重鎮^{じゅうちん}の座を与えられた。

バルドール家は単に負け組に属していたというだけでなく、ロドルフの期待を裏切る形でセドリックに与したということもあって、世間の目は殊更^{ことさら}に厳しく、ロドルフの覚えも悪くならざるを得なかった。

ロドルフは愚昧^{ぐまい}な男ではない。バルドール家の立場は理解している。しかしそれは理性の上での話で、感情の上ではやはり蟠^{わだかま}りがある。

レイモンはふたりの間を取り持とうと、今なお努^{つと}めてはいるものの、世間の目がそれを許さなかった。

かくの如く両家の社会的地位や立場は大きくかけ離れ、表立っての付き合いは憚^{はばか}られるものとなった。互いの親愛に変わりは無かったものの、これまた世間の目が両家の付き合いを許すはずも無い。セルジュにとってのクリステルは、手の届かぬ高嶺^{たかね}の

花となってしまったのである。

バルドール家は王都の邸を引き払い、己が領地に引っ込んだ。このことによって、ふたりは互いの姿を遠目に見ることすらできなくなってしまった。ギューベル家とバルドール家の領地は遠く離れているため、ふたりの付き合いは、共に王都に暮らしているということで成り立っていたからである。

ところがそれから約一年後のことである。十四歳となったセルジュは王都の宮廷に召し出された。近衛兵として仕えよという、王のお召しであった。

セルジュはごく少数の家臣と召使いを引き連れて、王都の邸に戻った。

だが、王都に戻ったからといって、そこからすぐに宮廷貴族として返り咲けるわけではない。

宮廷に戻れたわけではないのだ。

王から宮廷に帰参するよう命じられたわけではないからだ。

だからクリステルとの付き合いまで復活したわけではなかった。かつてのように互いの邸を往き来するなど、今や周りが許さぬことであつたし、ふたりも互いの立場をよく辨わえていた。

それでも、顔を合わせる事がまったく無かつたわけではない。王が主催する催もよおしでなら、会話をすることは無くとも、遠くから互いを確認することは

できた。クリステルは参加者として、セルジュは警備兵として、であったが。

ある時、王主催の夜会が催された。そこで久しぶりにクリステルの姿を見掛けたときのことを、今でもセルジュは印象深く憶えている。

いくら王による催しとは言え、本来は王の身辺警護が任務の近衛兵が、娯楽の催しの警備までするのは妙な話である。

だがそこにはちょっとした事情がある。兵の間で日常的に行われる賭け事で、当番任務が賭け対象となることはままあり、それで本来は当番でもないのに任務に就^ついているということがあり得るのである。

これには事情があった。さすがに近衛兵が^{かがりび}篝火の^{そば}傍で立ちん坊を決めこむことはない。それは一般兵の役目であり、近衛兵の仕事はそんな一般兵たちの監督である。そのため近衛兵は会が催されている広間にまで入ることが許されている。

そしてそのことを利用するのは、近衛兵たちにとっては当たり前なことでもあった。ほとんど参加者に等しい振る舞いをする者が多いのだ。

宮廷人たちの方でも、その辺は^{わきま}辨えているし、このような催しには軍人が花を添えられるという面も期待されているため、誰も文句を言う者は無いの

だった。

そういうわけでこの手の任務は近衛兵の間でも人気がある。だから賭けの対象になるのだが、セルジュは賭け事をする方ではない。

それでも当番外の警備任務が回ってきたのは、先輩近衛兵から押し付けられたからである。

それは先輩から後輩へのよくある贈り物とも取れるが、そこにはそれ以外のものも含まれていた。

近衛兵の多くは、王の近くに控えるがゆえに、王に取り立ててもらおうという気持ちを強く持っている。王のお気に入りになれば、さらなる地位や領地を与えられることもあるのである。

それがそもそも近衛兵となることすら難しいというのに、先の王位継承争いの件があるにも拘らず、しかもそれ以後もこれといった手柄を立てたわけでもないにも拘らず、セルジュは王の直々のお召しで近衛兵となったのである。

王の^{ひいき}贖戻は明らかであった。他の近衛兵からしたら、おもしろいはずもない。

……かくなる上は、^{そうそう} ^{つぶ} 早急に潰して領地に帰してやるのみである。

つまるところ任務の押し付けは、こうしたことの一環なのである。

好意のように見えて、実は悪意が含まれている。

これこそ宮廷風の作法と言うべき嫌がらせであった。

まるで砂糖菓子に一滴だけ垂らされた毒のように。

だからもしもセルジュが喜んで警備任務を引き受けたり、賭け事で任務を獲得しようとするような性格であったならば、このように任務を押し付けられることはなかっただろう。

もっともこれは、^{かずかず}数数の^{いじ}虐めや嫌がらせの中にあっても、かなり^{なまやさ}生易しい^{たぐい}類のものではある。

しかしこれには不幸中の幸いが隠されていた。

遠目ではあるが、クリステルを見ることができるといふ、それである。

王が退出すると催しの場からは堅苦しさが消える。それに乗っかって警備監督の近衛兵も、任務そっちのけでちゃっかり参加するのが通例なのだが、セルジュはそんなことはしなかった。いや、できなかった。

だからクリステルに近づくこともなかった。

無論、そうして近づくことができても、大っぴらに親しくすることはできない。さり気なさを^{よそお}装って飲み物を渡したり、一休みで外に出たところを^{つか}掴まえるのが^{せいぜい}精精であろう。

ともあれセルジュは根が生真面目な男であった。

押し付けられた任務であろうが、途中で投げ出したりはできぬ男であった。であるから、いつも隅の方に突っ立っているばかりなのである。

そうしたセルジュの目に映るクリステルは、いつだって華やかであった。多数の人々に取り囲まれていた。

そのほとんどは、彼女の心を射止めんとする男たちである。今を^{とき}時めくギュベール家の一人娘ということもあったが、なんと言っても、クリステルは美しく聡明な女であった。権勢があるというだけでも、美しく聡明であるというだけでも、心動かすに充分であるというのに、その二つを兼ね備えているのである。飛び付かぬ者が居ようはずもない。

こういったことは王位継承争い前にはあまり見られぬものであった。クリステルの^{そば}傍には、常に、当たり前のようにセルジュが居て、他の者たちを^{けんせい}牽制する形になっていたし、何よりもまだほんの子供であった。王位継承争いが起こったのは、ふたりが十二歳の時である。

王位継承争いの後、クリステルは日を追う^{ごと}毎に、見る見ると花開いていった。

美しい花を咲かせるであろうことは、元より充分に予想されたことであったが、それでもなお目を見張る変貌ぶりであった。

一年振りにクリステルを目にしたセルジュは、ただ呆然とするばかりであった。

あれは本当に己の幼馴染みなのであろうか？

信じ難い気持ちだった。

彼女と共にあったということが、どうにも想像し難かった。

そしてセルジュは、いまだかつてない感情が己の内にあることに気づいた。

クリステルと共にあった日々、その中にあった感情が、ひどく幼いものであったことに気づかされた。

——どうして今頃……。

苦苦しく齒噛みした。

そうと気づくと、遠くからクリステルを見ているのが、いよいよ辛^{つら}くなった。

辛いのなら見なければよい。このような警備の任務に当たらねばよい。

任務を務めるのは己でなくともいいのだ。

同僚をあたれば他にやりたがる者はいくらでもいるだろう。

それだけの話であるが、そうするのが怖かった。

ただの幼馴染みでしかなかった。

行く行くは結婚するのが自然だという空気はあったが、所詮は形の無い空気でしかなかった。はっき

りと、結婚の約束などしていなかった。

そもそもクリステルの己に対する好意は、幼馴染みとしてのそれでしかなかったに違いない。己も、今の今までそうだったのだから。

それゆえ怖かった。

ただでさえ遠くなってしまったというのに、この上顔を合わせることもすらなくなってしまったら、彼女から忘れられてしまうのではないか——そんな不安があった。

そして、そうした気持ちで顔を合わせてみれば、クリステルを取り囲む男たちのように、言い寄ることも近寄ることもできぬ己の立場を、無力さを、思い知らされるばかりであった。

脳天気にも、そうあるのが当たり前という顔をして彼女と共にあったことが、夢のようであり、腹立たしくもあった。よもやこんな日が来ようとは夢にも思わなかったのだ。あの頃は。

ただひたすら無邪気であれた時は、疾うに過ぎ去っていた。

今までの己のままでよいはずがなかった。

彼女は多くの男たちの心を動かすだけの女となっていた。

彼女にふさわ相応しい男にならなければならなかった。

セルジュはそうあるべく励み、己が力を発揮させ

られる時を、地位と名誉を得られる時を、待ち続けた。

そうして漸く訪れたその時こそ、この戦なのである。

夜明けの薄明の中、五千もの兵が、いよいよこれから始まる戦支度をしていた。

五千人ともなるとさすがに騒騒しい。朝の静けさはどこにも無い。

どこからともなく、食べ物を煮炊きしているような匂いも流れてくる。一面荒野のこの辺りは、水も食糧も乏しく、現地調達は難しいから、余裕を持って水と食糧を持ち込めた、どこかの大貴族だろう。

そういった贅沢さとは無縁なセルジュは、硬い干し肉を齧りながら、己が率いるべき兵らを見回した。

騎士五名、従士八名、歩兵五十名である。

騎士・従士らはともかくとして、歩兵らの武装は貧弱極まりない。歩兵は農民であるから仕方無いが、それにしても、どうにも頼りない戦力であった。

皆バルドール家の家臣と領民たちである。

——死なせたくない。

彼らの顔を見てそう思った。

しかし己は、彼らを生きて領地に帰すことができ

るのか……。

そう考えて振り払った。

己が不安になってどうする。不安なのは彼らの方だろう。

壮年の騎士ボードヴィルの輔佐^{ほさ}があるとは言え、率いるのは弱冠十七歳の若造、しかもこれが初陣という極め付き^{きわつ}である。それでいて、デボウ家の兵百人と併^{あわ}せて百六十四人ばかりで、敵左翼のある一角を惹き付けようというのである。

本来近衛は王の直参であり、王の身边を離れることはない。

それがこうして独自の部隊を率いているのは、誰もこの危険な役目を引き受けようとはしなかったからである。当然、王からは許可を得ている。

自ら請け負った任務であった。

危険は大きいが見返りも大きい。

家臣らも皆承知の上である。反対されるかも知れぬと思ったが、意外にも賛同してくれた。彼らもまたこの機会を待っていたのだろう。なんと言っても五年も不遇に甘んじてきたのだ。

従士に手伝われてセルジュが戦支度を整え終わると、ラッパの音が聞こえてきた。規則的なリズムで吹き鳴らされている。陣形形成を命ずる合図であった。

セルジュは大きく深呼吸をし、馬に飛び乗った。

第二章 第三節

イーヴは呆然とした。

これほどの建築物は見たことも無かった。

見上げるほどに巨大で堅牢な城壁であった。これに比べたら、部族の村の城壁など、城壁とも言えぬただの囲いである。

威圧感のある城壁を潜り抜けると、騒々しいほどの歓声で以て迎えられた。いまだ体験したことの無い、人いきれと騒がしさであった。城壁内に入る前から、鳥の大群が一斉に羽搏くような騒めきや、笛や太鼓の音などが響いてきていたが、よもやこれほどたくさんの人々でごった返していたとは思わなかった。

道の左右に店が並び、その前を人だけでなく馬が歩き、驢馬が歩き、犬が歩いている。その数が凄い。道の先、そのまた先にまで人や馬の姿が続いている。

かと思うと建物の二階の窓縁から、顔を出している者がある。玄関口からこちらを見ている者がある。

注目されているのだ。

だがそれも無理はない。

八百人ほどの兵と捕虜が、列を成して道を進んで

いくのだから。

^{がいせん}
凱旋であった。

列に付いて歩きながら、イーヴはどうにも落ち着かなかつた。

人にじろじろと見られるというのは、気に入らない――

＊

ヴァルカンティとリンドベリの戦いは、ヴァルカンティの勝利で終わった。

圧勝ではない。苦戦からの勝利であった。

ヴァルカンティ軍五千と、リンドベリ軍五千五百のぶつかり合いは、ヴァルカンティの死者千五百人、捕虜三百人、リンドベリの死者二千三百人、捕虜五百人、という犠牲を出して幕を閉じた。

リンドベリ軍が退却した後、ヴァルカンティ軍は解散し、^{おのおの}各各、^{みぐる}死傷者の身包みを^は剥いで戦利品に加えたり、戦利品をめぐって味方同士で小競り合いをしたりした。

なんと言っても戦の目当ては、こうした戦利品である。そこには大義など何も無い。

敵に侵略される側の領地の領主は、^{いやおう}否応も無く戦わざるを得ないが、そうでない側の領主にとって

は、所詮、対岸の火事ではない。契約を結んでいる王の召集であるから、契約通りに参加するというだけである。

なにしろ戦に参加するには金がかかる。その埋め合わせも必要だった。無論、活躍すれば王からの褒賞があるが、誰もが活躍できるわけではない。戦で家が潰れるのは珍しいことではなかった。

イーヴ、クリステル、セルジュらは、丁度そこへ、戦利品をめぐるあれこれが始まったところへ下山したのであった。

濛濛と舞い上がった土煙はいまだ収まらず、倒れ伏した兵や、その合間を彷徨く兵らに降りかかっていた。

土埃の臭いに重なって独特の臭気が拡がっている。

血と臓物の臭いであった。

糞尿と、血と、臓物の臭いが一体となって辺りに広がっている。それは家畜を解体する時の臭いに似て、しかし遥かに強烈な臭いであった。

単純に悪臭と言うには、その臭いが放つ存在感は強すぎた。

負傷者の呻き声が呪詛のように響き渡り、そこに抑揚を加えるかのように、掠奪者の怒鳴り声や、被掠奪者の悲鳴が、そこここからあがっていた。

セルジュは訝^{いぶか}しんだ。山のことを知らぬのだから、無理もなかった。無事に下山できたことが奇跡のような幸運であることも、山中で過ごした時間と外界との時間に差があることにも、彼は気づいていない。

「奴ら、いつの間に退却したんだ？　あまりにも早過ぎやしないか？　――とまれ、このままでは先を越される」

セルジュは三人の家臣らに目顔で指示した。

彼らは頷きを返し、戦利品の獲得に向かった。

セルジュはクリステルを振り返った。

クリステルは呆然と戦場を見ていた。

青冷めた顔で口を押さえていた。

が、堪^{こら}えきれずに吐いた。

「クリス！」

セルジュがクリステルに介抱の手を伸ばした。だがクリステルは思わず退^ひきそうになった。反射的に伸ばされたその手は、血にまみれた手袋をしたままだったのだ。目の前に転がっている屍体の一角が、この手によって築かれたのだと思うと、恐ろしくて堪^{たま}らなくなった。

セルジュは幼馴染みである。五年前を境にほとんど交流は無くなってしまったが、今でも仲良くしていた頃の気持ちに変わりはない。愛しい幼馴染みで

あると思っている。

そのセルジュに対して恐怖を感じてしまった。

そのことに強い衝撃を受けた。ひどく悲しい気分になった。

セルジュは騎士で、騎士は侵略者と戦うのが仕事で、その^{おかげ}御蔭で自分がのうのうと生きていられるということくらい承知している。

それなのに、思わずその手を払い^の除けそうになった。

そんな自分に嫌悪した。

「大丈夫か？」

セルジュが心配顔で^{のぞ}覗き込んでくる。

その顔に^{ひげ}鬚が浮いているのを見て、クリステルは少し驚かされた。幼い頃には見ることの無かったものである。当たり前のことだが、改めて、男の人なんだなと思った。

^{ずいぶん}随分と背が伸びていた。^{たくま}逞しい体付きになっていた。顔立ちも大人びて、勇ましい感じになっていた。

立派な騎士に見えた。^{よろこ}歡ぶべきことであった。

それなのに、それに戸惑いを感じている自分がいる。目の前の男は、もはや自分が知っている幼馴染みではないのではないかと、失望のようなものを感じている。

まったくもって身勝手な感想である。

そんな自分に吐き気がした。

そうしてますます顔色の悪くなるクリステルに、セルジュは^{ろうばい}狼狽した。

「ともかく、一刻も早くここを去ろう」

ここは戦場である。戦えぬ者が居てよい場所ではない。女となればなおさらである。残党がまだ居るかも知れぬし、味方であっても油断ならない。

セルジュはクリステルを^{うなが}促した。それでもクリステルは青冷めたまま動かない。判ってはいても、すぐには身体が動かない。

「クリス？」

クリステルは苦味のある唾を呑み込み、厳しい顔でセルジュを見た。

「……いえ、もうだいじょうぶです。あなたも行って下さい」

戦利品の獲得に、である。

セルジュの家の窮状は承知している。本来ここに居るべきではない人間の自分が、セルジュの足を引っ張るわけにはいかなかった。

「しかし……」

「ご自分のお仕事をなさって下さい」

クリステルは強く言った。

「こんなところに、君をひとりにするわけにはいか

ない」

セルジュもまた強く返した。

「いえ、ひとりではありません。彼がおりますから」

だから安心だと言うように、クリステルは戦場を眺めるイーヴを見た。

セルジュは驚いた。クリステルはこの男を頼りにしているのだろうか？ 頼りにするほどの仲なのだろうか？

この男は、クリステルのことを「お前」と呼んでいた。貴族とは到底思えぬ男が、貴族であるクリステルに対してだ。なんという身の程知らずだろうと思った。しかし、当のクリステルは、「お前」と呼ばれても意に介する風も無かった。

これらのことは何を意味しているのか？

「彼は……」

——何者なんだ？

と言いかけたが、さすがに本人の前でそれはまずかろうと思った。

当のイーヴは物珍しげに周囲を見回している。興味津津といった風である。

正直、セルジュは不愉快な印象を持った。

腕の立つのは認めよう。先程苦もなく追っ手を
ほふ 屠ったことから、その^{ぎりょう}技倆が^{ひとかた}一方ならぬことは判

る。

しかし戦場は……いや、詮無きことか。

所詮は殺し合い。そして殺し合いの^{こうふん}昂奮を楽しむ
^{やから}輩がいることも、動かしがたい事実なのだ。

家のため、領民のため、王のため、名誉のため、
そして……。

セルジュはクリステルの方を見た。クリステルは
気づいていない。硬い表情で戦場を見つめている。

どんな建前を持ち出したとしても、やっているこ
とは殺し合いなのだ。

そして死者の財産を、^は剥ぐ。

そこにどんな名誉があるだろうか。

何もありません。綺麗事^{きれいごと}で誤魔化^{ごまか}しているだけ
だ。

ならば戦うことのみに興味を持ち、貪欲に観察を
するこの男の方が、遥かに純粹で、誠実な人間であ
るとは言えないだろうか？

「……あいつらは何をやっているんだ？」

イーヴが尋ねてきた。指の先には屍体を^{あさ}漁ってい
る兵の姿が見える。

「死者の装備を剥いでいるのです」

クリステルが答えた。

イーヴは驚いたように見えた。が、すぐに鼻に皺^{しわ}
を寄せ、

「信じられないことをする」

唸るように吐き捨てた。

その言葉はセルジュの胸に刺さった。

「戦士の装備を剥ぐなど……」

驚きと軽蔑^{けいべつ}の籠^{こも}った声が聞こえてくる。セルジュは俯^{うつむ}いた。解っているのだ。そんなことは。

「戦士ではありません。兵士です。この者たちはそのために戦っているのですから」

クリステルの声が響いた。

「あなたの部族にあっては、戦って相手を斃^{たお}すことは名誉ある行為なのでしょう。ですが、わたくしたちの場合、必ずしもそうとは限りません。むしろ戦いは利欲のために起こることの方が多いのです」

クリステルの言葉にイーヴは首を振った。まったく理解できないという風に。

「まあ、お前たちの事情だしな」

「セルジュ」

クリステルはセルジュに顔を向けた。

「家臣たちに指示を下さなくてはならないでしょう。どうか気にせず行って下さい。わたくしのことはだいじょうぶです」

「しかし……」

「いえ、彼はわたくしの父に会う必要があるのです。それまではわたくしに無事でいてもらわなくて

は、彼も困るでしょう」

クリステルに言われて、イーヴはかすかに笑みを見せた。困ったような、呆れたような、しかしその言葉を諒承りょうしょうしたと取れる笑みだった。

「ですからだいじょうぶです」

「ではここを動かないでくれ」

この近辺では、粗方掠奪あらかたも終わっているからだ。辺りには下着姿の騎士や、兵士の屍体しかない。

「すぐに迎えに来る」

「解りました」

クリステルは頷いた。瞳に理解の色が見える。彼女のこの聡明さこそは、父親から譲り受けた美質の一つであると思う。いや、無論美質はそれだけではないが。

「貴殿にクリステル・ギュベール殿をお任せする」

「ああ解った。取り敢えず、死なれたら俺が困るからな」

威儀を正して口にした言葉も、町場のまちば伝法でんぼうな物言いで返されてしまった。

だが不思議と不快感は感じなかった。

悪い男ではないのだろう。ひよっとすると気が合うことすらあるかも知れない。

自分の考えに可笑おかしみを感じて、セルジュはわずかに頬ゆるを弛ませた。

「すまない。では後で会おう」

クリステルに言い、セルジュは家臣たちのいる方向へと駆け出した。

＊

^{ひとしき}一頻り戦利品を掻き集めると、諸侯らは自らの兵を引き連れて、^{おのおの}各各の領地へと帰っていった。

もちろん誰もが街道を通過して帰るわけであるから混雑する。特に都までの街道には諸侯の軍勢が集中し、長蛇の列となって連なった。

領地へ帰るセルジュらとは、都の手前で別れ、イーヴとクリステルはそのまま都入りした。

イーヴにとっては初めての都であった。ここが話に聞く都かと思うと、何か不思議な気分であった。行けるはずの無いところに来ているという、妙な現実味の無さがあった。見るものすべてが驚きに満ちており、それもまた現実味の無さに拍車をかけていた。どうにも己が異質な存在に思えた。

なんとも言えぬ落ち着かなさ気持ち悪さを味わいながら、^{そうそう}騒騒しくごみごみとした街を抜けると、凱旋の列は、これまでとは打って変わって壮麗な^{やしき}邸が建ち並んでいるところにやってきた。おそらくは貴族が住んでいる地域なのだろう。そこでクリステル

が、列から抜けるよう指示してきた。

クリステルの導きのままに、気持ち悪いほどに整備されている街並みを進んでいくと、一際^{ひときわ}大きな白い邸が見えてきた。どうやらそこに向かっているようである。

しかし、そのまま真っ直ぐには入らず、人目を気にしながら、ぐるりと廻^{まわ}って裏口から入った。いや、裏口と言ってよいのかどうか。石積みの塀の一角から、いくつかの石を引き抜き、そうしてできた穴から中に入ったのである。

穴を潜り抜けると、花と緑が^{あふ}溢れていた。草いきれと花の香りに満ちていた。

どこもかしこも石造りの中から、突如緑の中に入ったものだから、外へ出たのかと思った。だが外にしてはどうも様子が怪訝^{おか}しい。草木がやけに行儀良いのである。この辺の街並みのように、不自然なほどに整然としている。

そしてその中を通る石畳の道脇には、腰よりも低い高さの緑の垣^{かき}が^{めぐ}亘らされてあるのだが、よくよく見れば垣ではなく、垣のように平らで角張った低木なのであった。奇妙な木もあったものである。都ならではの木なのであろうか。

「ここが庭ですよ」

不思議そうに周りを見回しているイーヴに、クリ

ステルは答えを与えた。

「ほう……」

いつぞやのクリステルの話を思い出した。これが
カンショウ用の庭というやつなのか。

^{ずいぶん}
「随分と妙なものだな」

率直なその感想に、クリステルは微笑んだ。

「四角い木など見たことが無い」

「これは四角い木なのではなく、そのように刈り込
んだのですよ」

「ふうん？ 訳が解らんな」

「こうして形を整えませんか、あちこちに枝が伸び
てしまって、^{み ば}見映えが悪くなります」

「ふうん……」

これまた訳が解らなかった。

イーヴとしては、形を整えた方が見映えが悪いと
いうか、不自然で気持ちが悪い。

第一草木は生きており、放っておけば好き勝手に
伸びていくのだから、見映えの良い形とやらを保つ
には、手を加え続けなければならないはずである。
その労力を考えると、なんとも気の知れぬ話であっ
た。

しかもこの庭はかなり大きいようである。全体が
見通せないのでよく判らないが、部族の家が五十戸
以上は建ちそうだった。

「もしや、この庭全部、そうして形を整えているのか？」

「そうです」

半ば予想していた答えではあったが、イーヴは呆れた。

白と薄紅の可憐な花が咲き乱れているところにやってくると、クリステルは足を緩め、何かを探すように辺りを見回し始めた。

「どうした？」

訝しんで問うと、クリステルは、静かにするように、身を屈めるようにという、身振りをした。

イーヴはますます訝しく思ったが、取り敢えず指示に従った。

ほど無くして、クリステルは足を止めた。

「居た」

小声でそう呟く。

捜しものが見つかったらしい。

呆れるような、微笑むような顔をしているクリステルの視線の先を見れば、茂みに囲まれた芝生の上に、金髪の少女が倒れていた。

いや、倒れていると言うより、寝ていると言うべきだろう。

木洩れ日を浴びる顔はいかにも心地良さそうで、口を小さくぽっかり開けて、両手足を大きく投げ出

している。信じ難いほどに無防備な様子であった。

年の頃は十三、四といったところであろうか。質素な身^{みな}扮りをしているが、白いエプロンがやけに眩^{まぶ}しく見える。

「リリィ！ またさぼってるね！」

突如、クリステルが野太い濁^{だみごえ}声を出した。

イーヴが驚くと共に、少女も飛び上がった。

「ひゃあああっ！ すみません、アネットさん！」

あたふたと立ち上がり、身扮りを整え始めた。

が、その真^まん丸^{まる}い茶色い目が、茂みの向こうにいるイーヴとクリステルを映すと、さらに真ん丸くなり、ぱちぱちと瞬^{しばた}かれた。小兎のようだと思って、イーヴは苦笑した。

「クリステル、お嬢様……」

リリィと呼ばれた少女は、呆けたように言った。

が、やがて事態を理解したらしく、その顔がぱつと明るくなった。

「クリステルお嬢様！」

すぐさまこちらに駆け寄ってきて、クリステルの手を取った。

「お嬢様……ご無事で！」

安堵^{よろこ}と歓びに満ちた顔に、大粒の涙がぽろぽろと溢^{こぼ}れた。リリィは声をあげて泣いた。

そんなリリィを、クリステルは愛しげに見、その

胸に抱き締めた。

「もうだいじょうぶよ。わたくし、帰ってきたのよ」

＊

「もうしわけありませんが、少々お待ち下さい」

イーヴにそう告げると、クリステルはリリィを従えて庭の片隅にある物置小屋の中に入っていった。

理由は解らないものの、待てと言われたのだから仕方がない。

イーヴはおとなしくその場で待つ事にした。

リリィ以外の人間には、クリステルは友人の別荘に行っていることになっているらしい。それで少年のような^{かっこう}恰好でそのまま家に帰るわけにはゆかず、ここで人知れず^{みな}身扮りを整えようというのである。

「これから先、わたくしの父以外には、ジャン・ザ・ビオン……あなたがたがおっしゃるところのジャンザビついて、^{いっさい}一切お話にならないで下さい」

戦利品を獲得すべくセルジュが去り、ふたりきりになると、クリステルはそう言い出した。

「わたくしたちの間では、ジャンザビは王家の禁足地となっております」

なんともおもしろくない話であった。

ジャンザビが王家の禁足地であるなど、聞いたことも無い。「大いなる敵」が棲すまう山を、勝手に王家のものになどされては不愉快である。

「ジャンザビに居たこと、ジャンザビに棲すむ『大いなる敵』を斃たおすという目的があること、わたくしとはジャンザビで出会ったことなど、ジャンザビに関することは一切お話にならないで下さい。セルジュには、わたくしたちがジャンザビに居たことは口止めしておきます」

そしてクリステルは、捏でっち上げた話をイーヴに聞かせた。

「わたくしは、友人のエルザ・ベルと共に、彼女の別荘に行っていることになっています。わたくしとあなたは、そこで出でああったことにしましょう。狩りを楽しんでいる最中に、わたくしが猪いのししに襲われそうになって、あなたが救けて下さったということで。それでわたくしがあなたにお礼をさせていただきたいと申しますと、あなたは都をご覧になりたいとおっしゃるので、わたくしはあなたを連れて家に帰ってくるというわけです」

良くできた話であった。

不意に、扉が軋きしむ音がした。

「お待たせいたしました」

数日前のことを思い返していたイーヴは、我に

返って物置小屋を振り返った。

そして目を見開いた。

そこに立っているのはクリステル。

確かにクリステルだが……

——こんなに綺麗だったか？

汚れが落とされ、化粧が施された所為せ いもあろうが、それにしてもクリステルは美しかった。

化粧のことなどよく判らぬが、こってりと塗りたくって原型を留めていないというのとは程遠く、素地の良さを引き立たせている感じがある。短かったはずの髪は、明らかにそれ以上の長さがあるものとして頭の上にきっちりと纏まとめられ、柔らかな顔の輪郭と、ほっそりとした頸筋くびすじを浮き立たせている。肌は少し日焼けしているが、それでもそこら辺の女よりも断然白く艶つややかである。衣服は涼しげな薄水色のドレスで、特にこれといった装飾も無く、ごく簡素な感じのものだが、クリステルによく似合っている。

貴族の女なのだなあと、イーヴは今更ながらにしみじみと思った。

「どうされました？」

クリステルはわずかに首を傾かしげた。

イーヴははっとして、

「あ、いや……いつの間に、髪が伸びた？」

思わず思ったままを聞いてしまった。

我ながらえらく間抜けな質問をしたものである。

クリステルは可笑^{おか}しそうに微笑し、

「髪が伸びたわけではないのですよ。これは付け毛
です」

「……そうか」

「さあ、参りましょう。一度外に出て、今度は正面
からです」

クリステルは歩き出した。ドレスの裾^{すそ ひるがえ}を翻しながら。

イーヴはふと、手を差し伸べるべきなのではない
かと思った。幼馴染みであるというあの男、セル
ジュがしようとしたように。

しかしすぐさま思い直した。

己は貴族ではない。一介の戦士である。

似合わぬことはすべきでない。

イーヴはそのままクリステルの後に従った。

第二章 第四節

風呂、というものに、初めて入った。

人ひとりがすっぽりと入るほどの巨大な桶^{おけ}には、温かな湯が満たされていた。その中に入れと言われ
て仰天^{ぎょうてん}した。

召使^{めしつか}いの女たちに、寄^{たか}って集^{みぐる}って身包^みみを剥^はがされそうになり、観念^{あげく}して自ら脱いだ^{あげく}拳句^{けんく}のことである。

湯が満たされた桶の中に入る！

それはイーヴに、鍋の中の肉や野菜^{そうき}を想起させた。我ながら嫌な思い付きであった。

しかし、女たちが見守る中、素^すっ裸^{ぱだか}で立往生^{たちおうじょう}というのは、なんとも間抜けな光景である。なるようになれとばかりに入ってみた。

すると、いまだかつてない感覚がイーヴを襲った。

イーヴは戸惑いながら悩んだ。

これはいったい、気持ち良いのか悪いのか。

しかし、召使^{めしつか}いたちは黙って悩ませてもくれなかった。草を束ねたらしきもので、イーヴの体を擦^{こす}り始めたのである。

イーヴは堪^{たま}らず声をあげた。

が、聞き入れてもらえなかった。

クリステルの家の者であるから、殴り倒すわけにもゆかず、イーヴは黙って堪えざるを得なかった。

それにしても湯の中に入るというのは、心身共にふやけてしまうような、弛ゆるんでしまうような感じがして、どうにも好かない。やはり朝一番に川へ行き、夜の冷気を吸った水の中に飛び込むのが一番であると思った。

湯から出ると、真新しい衣服を与えられた。着ようとする、これまた召使いたちがあれこれと手を出してきた。もう抵抗するのも面倒になっていたイーヴは、されるに任せた。

拷問のような時間が終わると、一室に通された。ここでクリステルを待つということであった。

部屋の広さはイーヴの家くらいある。

無論、イーヴの家とは比べようもなく綺麗である。塵ちりや埃ほこりどころか、長く暮らしていれば致し方の無い、煤すす汚れや食べこぼしの染みなどといったものも見られない。

複雑な模様のふかふかの絨毯じゅうたんが床に敷かれ、長椅子やテーブルなどの家具が置かれている他に、絵や花などが飾られている。部屋の中にかすかに漂ただよっている匂いは、その花のものに違いなかった。

所在無しよざいなげに立ち尽くしていると、扉が甲高くたた敲かれた。

「入れ」

イーヴの打切棒ぶっきらぼうな言葉に反応して、木目艶つややかな扉が開かれた。

クリステルであった。

部屋の中に入ってきたクリステルは、イーヴに長椅子すわに坐ることを勧め、イーヴが腰掛けると己もそうした。

クリステルの後からは、庭で出会ったあの召使い、リリィが入ってきて、テーブルの上に飲み物を置いて引き下がった。

「何か、召使いたちに無作法でもありましたか？」

イーヴの不機嫌さを感じたのか、クリステルはそう聞いてきた。

「作法と言われても何も分らんが、気分が良くなかったことだけは確かだ」

「もうしわけありません」

「別にお前が謝ることは無い。俺が場違いなところに居るっていう、それだけのことだ。しかし、客の身で言うのもなんだが、できれば分相応の扱いをして欲しい。俺は貴族ではない」

「では、そのように」

「——で、お前の父親にはいつ会える？」

「それが……」

クリステルはわずかに目を伏せた。

「もうしわけありませんが、父は今、戦後処理に忙殺されているようでして、どうやら家にも帰ってきていないらしいのです。帰るのはいつになることが……」

イーヴは大きく溜息を吐いた。

肩透かしであった。

「……そうか」

「今は養生^{ようじょう}なさって下さい。ここなら薬草もいろいろありますし、衣食住の心配もありませんし、すぐに^{かいふく}回復なさると思います」

「ああ……」

「夕食までまだ時間があります。あなたの部屋はすでに用意してありますので、そちらで休まれるとよいでしょう」

それだけ言うと、クリステルは部屋を出て行った。

それと入れ替わるように召使いがやってきて、イーヴを部屋へ案内した。

＊

泥のように眠っていたらしい。

まったくもって恥ずかしいことだが、夕食のために起こされたことにも気づかず、朝まで眠り続けて

しまった。

「無理ありません」

朝露に濡れた庭を歩きながら、クリステルは言った。

確かに考えてみれば無理もなかった。ジャンザビには三ヶ月近くも居たのである。その間、気は張り詰め通しだった。疲れていないはずがない。

イーヴは庭の一角にある休憩所の椅子に腰を下ろしていた。クリステルはすぐ近くで花の様子を見て歩いている。

優雅な歩き方とはこのようなものを言うのであろう。

クリステルの動きには落ち着いた、しかし抑制された華やかさのようなものがあった。

昨日から感じていたことだが、クリステルはやはり貴族の女なのだ。

この邸に、この風景に、彼女は見事なまでに調和している。

ここがクリステルの居場所なのだ。

対してイーヴの方は落ち着かない。不愉快を感じるほどではないが、慣れぬことばかりで心がふらふらと彷徨^{さまよ}ってしまうような気がする。

例えば今、尻を置いている繊細で優雅な意匠^{いしょう}の椅子も、イーヴには無駄に凝^こった造りとしか思えな

い。

この休憩所とやらにしてもそうだ。なぜ、屋根があるのに壁がないのか。

「庭の風景を、四季折々の花々を、小鳥のさえず囀りを楽しむためです」

意味が分らない。

疑問を発しても万事この調子だから、答えが答えになっていない。

二日目にして、早くもイーヴは文化的な差違を認めるだけでなく、それを諦めて見送るつもりになっていた。

このまま都生活が続けば、心身的にかなり疲労することになるのではないだろうか。

そんな不安も覚えたが、しかし運はイーヴに味方したようであった。

今朝、クリステルの父、レイモンが帰館していることを報しらされたからである。

ふと、クリステルが館やかたの方を見た。釣られてイーヴも目を向ける。本邸と言われている館であり、昨夜イーヴが宿泊した館である。

尤ももっと、自分が寝たのがどこの部屋であるかなど、皆目かいもく分らないが。

「父が朝食を撮とったようです」

「なぜ判る？」

「召使たちの動きでそれとなく判るものです」

そういうものかと思った。

「随分^{ずいぶん}遅い朝飯だな」

「昨日帰るのが遅かったものですから」

「疲れていそうだな」

「ええ、おそらく。ですがあなたにお会いするそう
です」

その言葉に、イーヴは少し意外な感じを受けた。

「昨日会っているのか？」

「はい。あなたがおやすみになった後でしたが…
…」

イーヴは不満げに鼻を鳴らした。

己が疲れ果てて眠ってしまった後でも、事態が動
いていたというのがなんだか気に入らなかった。

いや、気に入らないと言うよりだらしなないと感じ
た。

「何かご不満でも？」

「いや、自分に嫌気が差したただけだ。気にしないで
くれ」

イーヴは手を振った。少し気恥ずかしかった。

「^{しばら}暫くの間、クリステルはそんなイーヴを静かに見
ていたが、やがて口を開いた。

「……父はぜひにとあなたとの面会を求めておりま
す」

「ほう。好かれたものだな」

「皮肉をおっしゃらないで下さい。これは真面目な話なのです」

「解っているさ。で、どこまで話した？」

「あなたから伺^{うかが}ったことはすべて話しました」

「そうか」

ならば説明の手間が省けるといふものだ。

ただ、そのことが自分にとって吉と出るか凶と出るかは判らないが。

「父は驚くべきことを申し上げると思います」

「構わんさ。驚くことにはもう飽きた」

イーヴは腰を上げた。足を館に向ける。

「お待ち下さい。父の用意が整い次第、召使いが呼びに来るはずです」

「すまんが俺にはそれだけの時間がない」

イーヴは館への道に戻り始めた。後からクリステルが追ってくる。ふたりして花の間を歩いていく。

自分を納得させる答えを持っているという男にこれから会うのだ。

美しい花も、もう目に入らない。

＊

扉が開いていたのでそのまま通った。

この部屋に入るのは初めてだが、昨日入った部屋にあったのとよく似た、大きなテーブルがある。

イーヴはその部屋で食事を摂ったのだが、この部屋もそうした用途で使うものらしい。

なぜ食事をする場所が二つもあるのか。

理解に苦しむが、この際そんなことはどうでもいい。

イーヴの姿に驚いたように、召使いの一人が慌てて寄ってきた。

「イーヴ様……」

言いながら、イーヴの前に立とうとするのを手で制した。今相手をするべきはこいつではない。

イーヴはテーブルに歩み寄った。無駄に大きなテーブルの端で、初老の男が食事を摂っている。

見るからに品の良い印象がある。いや、知性的と言った方が良いか。

なるほどこれがクリステルの親父、レイモン・ギュベールかと思った。

当然だが、どこことなくクリステルと^{おも}面差しが似ている。

それなりの^{とし}年齢ではあるのに、大層姿勢がよい。

骨柄も悪くない。大柄とまでは言えないが、肩幅などから考えて、立てば長身の部類に入るだろう。

上品な威とも言うべき雰囲気を持ち、世襲貴族に

ありがちな弛緩^{しかん}した雰囲気は微塵もない。

かといって戦士のような武張った風があるでもなく、強^しいて言えば切れ者の高等文官のようであるが、そんな者に会ったことのないイーヴには判らない。

「すまんね。もう少し待ってくれるかな」

外見通り落ち着きのある声だ。レイモンはイーヴに微笑みかけると、卵を手にとって剥^むき始めた。

「食事を邪魔するつもりはない」

「それはありがたい。昨夜から何も食べていなくてね」

召使いが困ったようにしているのを見て、レイモンは手を挙げた。下がって良いという合図だろう。安心したように召使いたちが退室していく。

部屋にはイーヴとクリステル、そしてレイモンだけが残された。

卵の殻を剥くぺきぺきという音だけが、豪奢^{ごうしゃ}な部屋の中に小さく聞こえている。

余計な人間が出て行ってくれた所^{せい}為か、イーヴは少し余裕を持ってレイモンと、この部屋を観察することができた。

レイモンは上等な服を着ているが、室内着である。

楽な恰好^{かっこう}をしているわけだが、部屋の装飾と同

様、その辺の区別はイーヴには付かない。

上等な服を着ているな、ということが分るだけだ。

部屋の中で視線を彷徨^{さまよ}わせているイーヴの様子を見て、興味を持ったのかレイモンが聞いてきた。

「無駄^かに華美^びに見えるかね？」

「ああ」

素っ気なく返事をする、レイモンは楽しげに微笑んだ。

「私もそう思う」

「お父様……」

「はは、すまん。だが本当のことだよ。クリステル」

レイモンは卵を食べ終わると、ボウルで指先を洗い、手早く拭いた。

そして真剣な眼差しをイーヴに向けてきた。

相手の正体を見極めようとするようなその態度は、本来は不躰^{ぶしつ}けなもののはずである。しかし不思議とそんな不愉快さを感じさせない。クリステルもそうだった。

灰色の瞳がじっとイーヴを見つめている。クリステルの瞳は青いから、そこは母親似なのだろうか。

「では用件に入ろうか。取り敢えず席に着きなさい。立ったままでは話しづらい」

イーヴはレイモンの近くの椅子を引いて腰を下ろした。

イーヴから見ると、レイモンが右斜め前に来る位置である。クリステルはそのイーヴの真向かいに腰を下ろした。テーブルが大きいいためか、その距離を少し遠く感じた。

「クリステルから聞いている話ではジャン・ザ・ビオン、君はジャンザビと言うのかな？ あの山に居たそうだが」

「ああ」

「私はなぜクリステルがそこに居たかは、まだ聞いていないんだ」

そうレイモンが興味深げに口にすると、目に見えてクリステルの顔に^{あせ}焦りが浮かんだ。

おそらく父親には知られたくない事情があるのだろう。

だからイーヴは^{とぼ}惚けることにした。

「……さあ、何でかな。たまたま^{であ}出遇っただけで、その辺の話は聞いていない」

「聞いたか、クリステル？」

イーヴに顔を向けたまま、レイモンは言った。

「彼は頭がいい。ちゃんとお前の立場を判って、^{かば}庇ってくれているようだぞ」

「……」

クリステルは何も言わなかった。だがその態度こそが、多くの事実を語ってしまっているのだ。

なるほどクリステルは頭の良い女だが、この父親に育てられたのならば、それもうなず頷ける。

レイモンは相当に頭が切れると見えた。

一代で今の身分を手に入れたということだが、それも解るような気がした。

まだまだクリステルの歯の立つ相手ではないだろう。

「さて、どこから話したものかな……」

軽くあご頷先に手をやりながらレイモンは少し思案した。どことなく子供っぽいそんな仕草が、妙に理知的に見えてしまう。

この男には人をひ惹き付ける力がある。そう感じた。

「結論から言おうか。私も君と同じだよ」

「どういう意味だ？」

「私もまたジャン・ザ・ビオンを、つまり君の言うジャンザビを抜けて来たのさ」

イーヴの表情が固まった。その意味するところを察したからである。

「そう。君と私は同類だということになるね」

第二章 第五節

叔父が訪ねてきているという。

セルジュは驚いた。

王位継承争い以降、領地に^{ひっそく}逼塞している叔父である。

その叔父が都のバルドール邸にやってきた。実に王位継承争い以来のことではあるまいか。

どういう風の吹き回しだろうと思った。

それに叔父は、己に会いたくなかったのではないのか？

戦^{いくさ}支度^{じたく}と凱旋^{がいせん}とで、二度も領地に帰ったにも^{かかわ}拘らず、叔父には^{きゅうかつ}久闊^{じょ}を叙することもできなかった。

戦の前は前でその支度に忙しく、戦の後は後で近衛兵として、すぐさま都に戻らねばならなかったというのもあるが、それでも挨拶くらいはできたはずだった。叔父が領主館に来ていれば。

叔父は怒っているのかも知れない、それで己に顔を見せぬのかも知れない——セルジュはそう思っていた。

叔父は義理堅く忠義深い人である。時流^{へつら}に諂い、^{かざみどり}風見鶏の如くあるのを好まない。

王位継承争いの後、セドリックに^{くみ}与していた多くの者たちは、新たな王に取り立ててもらおうべく^{ほんそう}奔走

した。

ロドルフにより赦^{ゆる}され、召し出された者たちは、多くがこれ幸いとばかりにロドルフの下^{もと}に馳^はせ参じた。蟄居^{ちつきよ}させられたセドリックを顧^{かえり}みる者など、ほとんど居なかった。

誰もが己の身は可愛い。しかも自分一代のみならず、家門^{えいたつ}の栄達と、家臣たちの行末もが懸かっている。たとえ内心^{わだかま}に蟠りを抱えていても、新王の召し出しとなれば無視するわけにはいかないのが現実である。

情や義理では権力^{てんびん くつがえ}の天秤を覆せないのだ。

それは宮廷に生きる者たちの法^{のり}であり、この世の^{ことわり}理でもある。

貴族たる者、それが分らぬはずはない。しかし世間のそうした有様^{ありさま}に、叔父は嫌悪感を隠せないようだった。

己を棚に上げて言うのもなんであるが、叔父は不器用であると思う。

王位継承争いが起きるよりも前から、叔父^{せいれん}は清廉忠義^{ちゅうぎ}の士として知られていたが、その世評には讃辞ばかりが含まれていたわけではない。

叔父を陰^{あざわら}で嘲笑う者たちがいることを、セルジュは知っている。

実際にはその者たちこそが恥知らずの愚者なのだ

が、残念ながら時流味方せず、叔父は不遇を^{かこ}啣っている。

セルジュもまた王の取り立てで近衛兵となった。断るところか二つ返事で近衛兵となった。

家中は喜びに満ちたが、叔父だけが複雑な様子であった。

都に復帰するセルジュに、家人らがギュベール家との縁を^よ繕り戻すよう望むに至っては、あからさまに嫌悪感を示した。

その気持ちはセルジュにも解るような気がした。裏切られたような思いがあったのではないだろうか。

王位継承争いが起きるまでは、父ジョルジュと同様、叔父は親しくギュベール家と付き合っていたのである。

レイモン・ギュベールを「^{すじょう}素性の知れぬ流れ者よ」と^{さげす}蔑む声がまだ多い頃から、叔父はそんな噂にまったく^{こだわ}拘ることなく、ギュベール家と付き合っていた。

下らぬ^{りゅうげんひご}流言蜚語には、一切惑わされることがなかったのだ。

元々そういう人なのである。

何が正しいか、何が間違っているかを、常に自分自身で確認する。そして納得するまで動くことはな

い。

王位継承争いが勃発^{ほっばつ}する直前から、そして始まってからも、父と叔父は、ギュベール卿から再三に互^{わた}る自陣営への参加誘いを受けている。

聡明な彼には当時から、現在の状況が予測できていたのだろう。ロドルフ殿下が王位に就^つかれることだけでなく、その結果宮廷の勢力図がどうなるか、バルドールがどうなるかまで判っていたに違いない。

ただし両家の付き合いに関しては好意的だった叔父も、セルジュとクリステルとの縁組みについては良い顔をしなかった。家中に縁組みは当たり前とする風があるのを、好ましく思っていないようだった。

理由は解らない。家格の釣り合いなどという、在り来たりなものではないだろうとは思うが、叔父は一言もその事について話さないし、誰も聞かないのでいまだに解らない。聞かないというより聞けないといった方が正しいか。

ともかく謎なのである。

尤^{もっと}も、今となっては己とクリステルとの間に縁組みの話があったことさえ、誰もが忘れてしまっているのだろうが……。

ともあれそうしたこともあって、セルジュは、叔

父が己に対して怒っているのではないかと思っていたのである。

だが実際のところはそうではないのかも知れぬ。何かしら事情があって、会いに来れなかったのかも知れぬ。それを残念に思って、わざわざ会いに来てくれたのかも知れぬ。

なんであれ、叔父の訪問が喜ばしくないはずもない。叔父夫妻に子がおらぬ所為もあろうが、まるで息子のように己には良くしてくれる叔父である。都まで出向かせてしまって申し訳ないと、セルジュは思った。

応接室の扉を開くと、その人、クロード・バルドールは端然とそこに居た。体格の良い、古武士然とした男である。

その身に纏^{まと}っている衣服を見て、セルジュは相変わらずだと思った。もはや流行遅れであるというのに、恥じるどころか堂堂と着熟^{きこな}しているそれは、前王から下賜^{かし}されたものだった。まったくもって義理堅く忠義深い人であった。

そうした性質が顔にも現れるものだとしたら、その頑^{かたく}なさ、生真面目さには、より一層磨きがかかっているに違いなかった。元より厳^{いか}めしい顔であったが、年相応の皺^{しわ}が刻まれ始めた所^{せい}為か、さらに厳^{いか}めしくなっていた。

しかし応接室に入ってきたセルジュを認めると、
虎が猫に豹^{ひょうへん}変したかの如く、円^{まる}やかな顔付きとなっ
た。

「ようこそいらっしゃいました、叔父上」

「うむ。息災にしておったか、セルジュ」

ふたりは久方振りの抱擁を交わした。

「随分^{ずいぶん}と遅^{たくま}しくなったな」

クロードはセルジュから離れ、その肩を叩いて
言った。

「叔父上にはまだまだ及びません」

叔父は確か、四十を越えたばかりであったと思
う。老いとはまだ無縁と過信して、足許^{あしもと}を掬^{すく}われる
ような齡^{とし}ではあるが、叔父はその限りではないと
思った。

その体に衰えたところは無く、力が漲^{みなぎ}っている。

仮^{たたか}に闘ったとしても勝てる気がしなかった。

無論、若さなら己の方が勝^{まさ}っている。

しかし修練の積み重ねによる力の差が、歴然とし
てあると感じた。

以前には存在感とか、肉体の厚みとして感じてい
たものだが、今のセルジュにはそれがなんであるか
が判る。

それは戦士としての力量の差、経験の差であろ
う。

^{いくさ}戦を体験した今では、はっきりとそう感じられる。

^{つくづく}熟熟と、叔父の戦振りが見られなかったのが残念だった。

当然のことだが、叔父は今回の戦に参加していない。セドリックに義理立てしている叔父が、王の召集に応じるはずもなかった。

そのことがまた叔父の立場を悪くするだろう。

王の心証も良くないであろうし、恥知らずの者どもは、まさに恥知らずであるがゆえに、叔父のことを^{あざけ}嘲るであろう。

^{こたび}「此度の戦での働き振り、耳にしておくぞ」

長椅子に腰を下ろしたクロードは、実に喜ばしげに言った。

叔父の向かいに腰を下ろしたセルジュは、恥じ入るようにその言葉を受けた。

^{ういじん}初陣ながら、セルジュは陽動の任を^{みごと}見事に果たし、それどころかリンドベリで名のある貴族を討ち取ってもいた。

王位継承争い以降初めての、バルドール家の大きな功績であった。

「堂堂と誇るがよい。初陣でこれ程の戦功を挙げるなど、そうそうあることではない。^{わし}儂はお前の叔父であることを喜ばしく思う」

「有り難く存じます。――しかし、初陣の身の私の力など、さしたるものではございません。右も左も判らず、戸惑うことばかりでございました。この度^{たび}の戦功は、弱輩の私を支えてくれた家臣らによるものです」

そうしたセルジュの謙虚な態度に、これまたクロードは喜びを隠せぬようであった。微笑を浮かべながら、何度も小さく頷いた^{うなず}。

「確かに家臣らの力もあろうが、力は闇雲に出てくるものではない。それを使う心あってのものだ。彼らの心を動かし、そしてその力を引き出したのはお前だ。信の置けぬ将には誰も従^ついてこぬ。見た目はどうあれ、心がな」

セルジュは含羞^{はにか}んだ。

が、少し表情を翳^{かげ}らせて、

「しかし、戦功を挙げたと申しましても、微妙な状態です。私は王家の禁足地に踏み入ってしまいましたので……」

セルジュらは敵部隊をぎりぎりまで惹^ひき寄せた。それがため、王家の禁足地であるジャン・ザ・ビオンに、已^やむを得ず逃げ込まざるを得なかったのだが、そのことが宮廷で取沙汰^{とりざた}されているのである。

仕方の無いことであったとされる一方で、どんな事情があれ禁足地に入るのは不届きである、禁足地

に入らずとも他に方法があったのではないか、という声が揚がっていた。

無論その中には、妬^{ねた}みや嫉^{そね}みもあったし、先の王位継承争いの件が尾を引いてもいた。

「……ふむ」

クロードは硬い表情で押し黙った。

そこへ召使いがお茶を持ってきた。

「遅くなりまして、もうしわけございません」

「どうした？ 何かあったのか？」

少し訝^{いぶか}しんで、セルジュは召使いに聞いた。

召使いは畏^{かしこ}まって、

「いえ、こちらの不備です。もうしわけございません」

客人の前では話せぬことなのだろう。

セルジュはそう察して、何も言わずに召使いを下がらせた。

「申し訳ございません、叔父上」

「いや、そう気を遣^{つか}わんでよい。身内ではないか。儂はなんの前触れもなく参ったからな。準備に時間がかかったのであろう」

召使いを思いやるように言うと、クロードは早速茶を飲んだ。

セルジュも飲んだ。飲んで些^{いささ}か驚かされた。随分^{ずいぶん}と旨^{うま}い茶である。こんな茶は久し振りに飲んだ。客

人用の茶葉に違いないが、思えばこの家に客人が訪れるのは、ここ数年では滅多めったにないことであった。

となれば、もしかしたら客人用の茶葉を切らしていたのかも知れぬ。買いに行ったにしては早過ぎるから、隣近所で物物交換してきたのかも知れぬ。

いずれにせよ情けない話であった。零落にある家には似合いの話ではあったが。

「お怒りなのではないかと思っておりました」

二口三口茶を堪能たんのうすると、セルジュは呟つぶやくように言った。

「ん？ なんの話だ？」

「私が陛下のお召しで近衛兵となったことです」

「……」

クロードの表情が硬くなった。

「領地に帰った際、叔父上やかたは館にお見えになりませんでしたから、てっきり私の顔もご覧になりたくない程ほどお怒りなのではないかと思っておりました」

「……いや、怒っているということはない。それは断じてない。お前が近衛兵として召されたことは、よろこ慶ばしいことだと思っていた。こう言ってはなんだが……今だから言えるが……バルドール家にはもう零落しかないと思っていたのだ。少なくともロドルフ王の御世みよにあっては、苦汁くじゅうを嘗なめ続けるしかないのではないかと。だから降って湧いたような驚きが

あった。王を過小評価しておったのかも知れぬな。
王は、王位継承争いに於ける派閥おに拘らず、分け隔かかわて無く有能な者へだを重用ちょうようされた。その王の慧眼けいがんに留まったのだ。実に光栄なことだ。王には感謝しておる。ただ……」

クロードは硬い表情のまま沈黙した。

何かを考えているようであったが、やがて、

「やはり、複雑な気持ちだった。セドリック殿下のことを考えると、手放しでは慶よろこべなんだ。お前に顔を見せなかったのは、そのように、気持ちに整理が付かなかったためだ」

「……」

叔父が怒るところか喜んでいたということに、セルジュは安堵したが、板挟み状態にある叔父の気持ちも解らないではなかった。

「……では、こうして私に会いにいらっしゃったということは、お気持ちに整理がお付きになったということなのでしょうか？」

セルジュは訝いぶかしみながら聞いた。

この叔父が、今更いまさらしゅうし宗旨替えをすることは思えぬ。家のこととセドリックのことを割り切れるとは思えぬ。

いったいどういう理由があって、己に会い来たのか……。

クロードはセルジュをじっと見つめた。

そして、どこか寂しげな微笑を湛^{たた}えて言った。

「お前の顔が見たくなかった——というのでは駄目か？」

セルジュは驚き、戸惑った。

「……あ、いえ、申し訳ございません。嬉しく存じます。私もお会いしたくございました」

セルジュは茶を一口飲み、話題を変えた。

「領地の様子はどうですか？」

「……うむ。相変わらず、デュバリー、フラヴィーニとの小競り合いが続いておる」

デュバリーとフラヴィーニは、それぞれバルドール領に隣接する地を治めている領主である。

王位継承争い以降、立場の悪くなったバルドール家は、必然、王や諸侯との繋^{つな}がりも弱くなった。いや、断たれたと言ってもよいかも知れぬ。

それをよいことに、デュバリー、フラヴィーニ両家は、バルドール領の強奪^{ごうだつ}に精^{せい}を出し始めたのである。実質、同盟者がおらず、援軍を頼みにすることのできなくなったバルドールは、これ以上にはない絶好の獲物であった。

「カントループの御蔭^{おかげ}でなんとかなんてはおるが…
…もう四年だからな。さすがのあやつでも、そろそろ限界ではあるまいか」

カントループはバルドール家の^{かさい}家宰である。今は亡き先代領主ジョルジュ・バルドールの片腕として働いていた男である。

今でも引き続きセルジュに仕え、主に政治面においてその手腕を発揮している。その^{れいり}伶俐さゆえに、ひどく冷徹な感じのする男であるが、主君に対する忠誠心は^{なみなみ}並並ならず、バルドール家になくってはならぬ存在であった。

「王に裁定をお願い致してはいかがでしょうか？」

貴族同士の問題——何も^も揉め事に限らず、結婚や、祭礼などのことまでを含めて、家と家の間で何かあった時は、王に裁定を^{あお}仰ぐのが通例である。貴族にとっては王の最も王たる^{ゆえん}所以は、そこにこそあるのだ。

「今の我らの立場でそのようなことがお願いできようか……」

クロードは寂しげに^{つぶや}呟いた。

王は裁定者であるから、法の下、^{もと}正義の下に公正中立な判断を下さなくてはならぬ。下すべき義務を負っている。

だが必ずしもそうなるわけではない。

そんなことは貴族であれば誰もが解っていることであった。そしてそれゆえにこそ、デュバリーとフラヴィーニの両家は大胆な行動を起こしているのだ。

ある。

彼らはたとえ裁定に持ち込まれたとしても、必ずや自分たちに有利な裁定が下ると信じているのであろう。

「陛下にご裁定を^{あお}仰げば確かにこの問題は決着しよう。だがその結果は、おそらくただに領地を奪われることと変わるまい……」

そこまで言うと、叔父は手元に目を落とした。

「いや、ただ領地を削られるだけならば、まだ良いとさえ言えるかも知れぬ――」

叔父の^{きぐ}危惧は^{もっと}尤もであると言える。

事実、王国の過去の歴史がそれを証明してきている。

持ち直した家がなかったとは言えない。再び^{こうりゅう}興隆を見ることになった家門とてある。

だが、消えていった家の方が^{はる}遥かに多いのだ。

「ロドルフ陛下は聡明なお方でございます」

「解っている」

クロードは茶を一口、口にした。カップを戻すと、再びきちんと^{こぶし}両の拳を卓上に置いた。

今ではあまり守られることもなくなった、騎士の作法である。

「陛下が^{すぐ}優れたお方であるということは、田舎に引っ込んでおる儂のところにも聞こえておる。お前

を近衛に加えるといった御判断にしたところで素晴らしいと思う。お気持ちまつりごとと政とは、正しく区別が付いておられるということだろう。英明さをお示しになられた。だが、領地争いの調定となれば、そうはいくまい」

たかだか一人の人間を近衛に加える程度ならば、個人的な裁量でなんとかなるという意味である。

しかし王本分の仕事、公の領地争いの裁定おおやけともなれば、したいようにできるとばかりは言えない。

そこにはより大きな意味での貴族同士の利害や、今後の情勢を見極めようという予測などが絡からんでくるからだ。

要するに多くの者が王の判断を注視する。これから先の政治姿勢を推測しようとするからである。

となればその裁定内容は、正義であるかどうかということよりも、今後の王権にとって有効に働くかどうかということに傾くことが多くなる。

ロドルフは聡明な王である。

何が得で、何が損かの区別ぐらいは疾とうに付いているだろう。

だからセルジュにも叔父の言いたいことは解る。政治においては小事が大事に優先するということは、無い。

非情だと言われるかも知れない。だが、政治にそ

もそも情など無い。

あるべきではない。

求められるべきは正しいこと、もっとも優先されるべき、合理的な選択がなされることだ。

だがそれでもセルジュには、王に懸^かけてみたいという気持ちがあった。

近衛とはいえ親しく口を交わせるわけではない。

しかし叔父よりは、己は王の近くにいる。

王の人と為^なりについては、得ている内容は叔父よりも多い。感じ取っているに過ぎぬにしても、それは事実である。

「……叔父上は、陛下をお信じになることができませぬか」

思い切って口にした。

叔父の顔に驚きの色はなかった。

むしろ当然のようにその言葉を聞いているようだった。

「……セドリック殿下が、どのようなお暮らしをしておられるか存じておるか？」

「いえ……」

恥ずかしながら気に留めたことすらない。その余裕がなかったというのが理由であるが、ある意味現在のバルドール家の在りようを、決定づけた人物であるのに。

「ブランドシェでお暮らしであるようだ。外出は制限されているものの、お健^{すこ}やかに暮らしであると伺^{うかが}っている」

突然話を変えるように、叔父はそんなことを言い出した。

ブランドシェは南西部の港町である。通商の拠点でもあり、王国にとっては大事な土地である。

そのため王の直轄領^{ちよっかつりょう}になっているが、町の高台には貴族たちの別邸が多く並んでいる。旅行や休養で訪れる者が多いからである。

「喜ばしいことです」

セルジュは安堵した。口に出すのも恐ろしいが、どこかの塔にでも幽閉されているのかと思っていたからだ。

権力争いに敗れた者の末路は悲惨である。巷間^{こうかん}、貴族でない者までそう言う。

それは真実だが、真実の一部しか映し出してはいない。

敗れた者の末路は想像を絶するほどに悲惨であるのが通例だ。

セルジュとてこの齡^{とし}になるまでに、いくつかはそんな話を聞かされ、書で読んできてもいる。それらは口に出すのも恐ろしいものばかりだった。

セドリックはそうはならなかったのだ。胸の中に

こうみょう

光明が差ししてくるように感じた。

やはり名君よ、と思った。

「儂もな、安堵したよ」

クロードはかすかに微笑んだが、

「だがな、それでも兵で囲い、監視を怠らぬことに
変わりはない。この先、何か事があれば、セドリッ
ク殿下のお命が脅かおびやされることは十分にあり得るの
だ」

一転して真剣な顔で言った。それでセルジュにも
解った。

ああ……この人は全てを解った上で、言っている
のだ。

王を信じないわけではない。その英明さを十分に
理解した上で、裁定を仰げばどうなるかを予想して
いるのだ。

叔父の予想は正しいかも知れない。

なぜなら、もしも王が正義を示すことを優先させ
る心積りこころづもならば、バルドールの領地問題は疾うに、
王自らのご提言によって決着をしていても怪訝お かしく
はないからである。

王の耳に入っていないとは思えない。となれば、
王は敢えて放置あしているということになりはすまい
か。

ならばそれが王にとって、王国の政まっとりごととして正しい

ということになりはすまいか。

「暗い話になってしまったな」

クロードはすまなさそうに漏らした。

「……さて、そろそろ暇いとましよう。長居したな」

やおらクロードは立ち上がった。

セルジュは驚いた。驚きながら、叔父に合わせて立ち上がった。

「お泊まりになってはゆかれぬのですか？」

「有り難いが、用事があるものでな」

「せめて夕餉ゆうげだけでも……」

「すまぬ」

「……そうですか」

残念そうなセルジュに、クロードは微笑んだ。

「次はゆっくりしていこう。今日は堅苦しい話ばかりになってしまったが、愉快的な話もしたい」

「ええ、次こそぜひ。お待ちしております」

クロードは二人の従者を引き連れて、バルドール邸を辞した。

セルジュは何やら妙な胸騒ぎを覚えつつ、馬に乗って遠離とおざかっていく叔父を見送った。

第二章 第六節

「仲間に出会えて嬉しいよ。ただ、君と私が同じであるかどうかは判らないが」

「どういう意味だ？」

「クリステルからどこまで聞いている？」

問われて、イーヴはクリステルの方を窺った。とくに動揺の様子を浮かべることもなく、クリステルは軽く頷いた。

「俺は、『大いなる敵』を斃すためにジャンザビに入ったんだ」

「その話はクリステルから聞かせてもらった。しかし『大いなる敵』、とは？」

レイモンは少し眉を寄せた。もっと情報が欲しいという風だった。

イーヴは順を追って話した。

エク族のこと、「大いなる敵」のこと、戦いを挑んだ偉大なる戦士たちのこと、己の父もまた、そうした戦士の一人であったこと――すべてを話した。

話を聞き終わるまで、レイモンは一言も口を挟むことはなかった。

「……『大いなる敵』に挑む者は一際傑れた戦士だけだ。それは最高の名誉であり、同時に、俺の部族にあっては死に急ぐ者という意味もあった」

イーヴは^{かす}微かに苦笑した。

「それも仕方あるまい。誰ひとり戻ってはこないのだからな」

「誰も勝てなかったわけか」

「俺が^{たお}斃す」

きっぱりと宣言した。何か^{こざか}小賢しい助言でも返ってくるかと思っていたのだが、レイモンは何も言わず、黙って頷いただけだった。

何も意見を言わず、ただイーヴの言葉を受け容れたのだ。その態度には好感が持てた。

「何か言うことはないのか？」

「言ったところで意味はない。あの山に敵がいる。部族の敵が、『大いなる敵』が。それだけで君は充分だろう？」

「あんたの娘は違うようだがな」

言って、イーヴは今度はクリステルに言われたことを話した。

ジャンザビが神秘の山であること、世界と世界を^{つな}繋ぐ乗り物のような^{まかふしぎ}摩訶不思議な場所であるということ、太陽が二つになるときにそれが起こること、そしてエク族の偉大な戦士たちは、その神秘に呑み込まれて消えてしまったのではないかということ。

山の近くで戦争があったこと、若い貴族を助けたことなども話したが、もちろん、クリステルが捜し

人のために入山したということは伏せておいた。

この時もレイモンは口を挟むことなく、黙ってイーヴの話聞いた。

自分が知っていること、クリステルに聞かされたことをすべて話すと、イーヴは軽く息を吐いた。かなり緊張していたようだ。咽^{のど}にも渴^{かわ}きがある。

それを察したのだろうか。レイモンが鈴を振ると、待ち構えていたように召使いが飲み物を持って入ってきた。

有り難い。

テーブル上に飲み物と、お茶菓子とが手際^{てぎわ}良く並べられていく。

独特な心地好い匂いがした。

「これかい？　これはショコラと言ってね。南の国から入ってくるものだ。身体^{からだ}に良いというので薬代わりに飲んでいるのだよ」

イーヴは興味惹かれたが、レイモンのカップからは湯気が立っている。今は暑い物は飲みたくないのので、「御用意致しましょうか？」と言う召使いの申し出は断わった。

替わりの希望を聞かれたので、できるだけ冷たい物が良いと言うと、驚いたことに氷を入れた茶が出てきた。

願ってもないことではあるが、この季節に氷があ

るなど信じられない。どんな魔法を使ったのか知らないが貴族というものは^{すご}凄いものだなと思った。

この邸や庭、部屋や家具や食器などよりも、イーヴにとっては^{よほど}余程、驚きと賛嘆に値することであった。

「君が身に付けているその護符だが、何か^{いわ}謂れがあるものかね？」

レイモンは不意にそんなことを聞いてきた。

勇者の^{あかし}證であり、護符たる竜の^{うろこ}鱗である。

「これか？ あんたの娘にも聞かれたが、これは『竜の鱗』呼ばれている。俺たちエクス族にあっては、特に^{すぐ}傑れた戦士だけが身に付けることを許されるものだ」

「なるほど。君は部族の中でも^{ひときわ}一際傑れた戦士であるというわけだ」

「でなければ『大いなる敵』に^{いど}挑めない」

「確かに。で、その護符だが、材料は何かな？ 本当に竜の鱗なのかな？」

^おか怪訝しな事を聞くと思ったが、イーヴは正直に答えることにした。

「馬鹿な。竜など居るわけがないだろう。これはガルナーガという峡谷で採れる石を^{たんねん}丹念に^{みが}磨いて削った物だ」

それを聞くとレイモンの目つきが鋭くなった。

「もう一つ聞きたい。君たちエク族は、いつから今の土地にいるのかな？」

「ああ？ そうだな……十代くらい前だと聞いているが詳しいことは判らない」

イーヴは首を振った。どうでもよいことのように思えたが、レイモンは真剣である。

ということは何かの意味があるということだ。

「それが何か関係あるのか？」

「君とクリステルは戦争を見たと言ったね。おそらくそれでクリステルは下山が可能だと判断したのだろうが……」

そこでレイモンはクリステルの方を見た。

「イーヴが斃した敵は、リンドベリ兵の^{かつこう}恰好をしていなかったのだな？」

「はい」

クリステルが頷くと、レイモンは^{うめ}呻いて^{てんじょう}天井を見上げた。

どうしたのだろうか。まるで何か苦痛を感じているかのように右手で額を押さえ、目を閉じている。

レイモンは^{しばら}暫くそうしていた。

「……イーヴ」

抑えた、暗い声だった。

「君がどこの者か判った、いや、何者なのかさえ判ったかもしれない」

イーヴを見つめる眼差しには、明らかな苦痛の色が見て取れた。

「まず君はこの世界の間人だ。そしておそらく、未来の間人だろうと思う。十代くらいというと、二百年ほど先になるかな」

「というと……俺は過去に来てしまったわけか？」

口に出しながらも、妙に現実感がない。

「そうだ」

「なぜそんなことが判る？」

「君の身に付けている護符だよ。それはアメリオと言ってね、君の言うガルナーガ峡谷で採取できる物だ。元々は平原族が交易に使っていたものでね。最近、ヴァルカンティの所有になった」

レイモンの言っている意味がイーヴには解らなかった。

「それで希少性が出たのだろう。選ばれた戦士以外は身に付けることができなくなったのは、そのためではないかと思われる」

「おい、どういう意味だ？」

「君の村に古いさいくもの細工物はなかったかな？ その中ではアメリオが、この石が使われている物があったはずだが」

確かにあった。村の祭りでいくつも見たことがある。

「元々は、君たち平原族にとっては、それほど珍しい物でもなかったからだろうね。だがヴァルカンティとの契約により、君たちはガルナーガ峡谷を失った。結果、希少性が出て、特に傑^{すぐ}れた戦士だけが、身に付けることを許されるという風になったのだと思う」

「確かに俺たちは今の土地に元々住んでいたわけではない。王と契約をしたとは聞いている」

その契約によって今の土地を得て、そしてそこで自由に暮らすことが認められたのだ。

当然、何者に対する納税の義務も、奉仕の義務もない。そこはエク族の土地なのだ。

「その王が今のヴァルカンティ王、ロドルフ陛下だ。尤も君にとっては過去^{もっと}の王になるがね」

「待て。俺の境遇があんたのこの世界と似通っているだけで、まったく違う世界の話だという可能性は残るんじゃないか？」

「察^{さっ}しがいいな」

レイモンは感心したようだった。確かにイーヴの言う可能性は残る。

ほとんど全ての点で、見知った事実に遭遇したとしても、そこが己の元居た世界であるかどうかは判らない。

話通りにジャンザビが、世界と世界とを繋^{つな}ぐ懸け

橋であるならば、一度入ったが最後、たとえ元居た世界に戻れたとしても、自分でそれを確認する術^{すべ}はない。

ジャンザビの向こうは無限の世界と繋がっているだろうからだ。

「もちろんそれは残る。だがごくわずかな、極めて微少な違いによる世界の区別など、さして意味はない。例えば今私が右を向くか、それとも左を向くかでも世界は分岐するとも言えるが、そんなことで区別をしても意味がないと思わないかね？」

「確かにな——」

だがそれでは、もう二度と元居た世界には戻れないということを認めることになる。

イーヴの胸の中に寂寥感^{せきりょうかん}のようなものが去来^{きょらい}した。

今更どうにかなるものではないが。

「我々の世界は、何重にも似通った世界が重なって存在しているということだよ」

「もう少し解りやすく言ってくれないか？」

「例えば、私が禿^はげている世界もあるわけだ」

「あんたは禿^はげてない」

「だから例えばの話だ」

クリステルが吹き出すのが聞こえた。

「何が可笑^{おか}しい？」

「真面目な話だぞ。クリステル」

「はい。もうしわけございません。引き続き黙っております」

澄まして言うクリステルに、レイモンは何か言いたげな様子だったが、結局何も言わずにイーヴに向き直った。

「いいかねイーヴ？ わずかな違いなどはどうでもいい。問題はもっと大きな違いだよ。そしてその意味に於いて、君は私たちにとって未来の人間だ。今の時代では我々が平原族と呼んでいる人々が、君の先祖になる」

「ほう。一度会ってみたいものだな」

イーヴは半信半疑である。クリステルと都に来た時点で、己がヴァルカンティの貴族と同道しているということは判ったから、ジャンザビによってこの身が運び去られていたとしても、己のよく知る世界とそれほどの違いはないと判ってもいた。

だからといって、護符のことだけで出自を決めつけられては、安易に過ぎると思えた。

「君は『竜の鱗』のことだけで私が決めつけていると思っているだろう？」

「違うのか？」

「それは理由の一つに過ぎない。だがその前に」

なぜかそこでレイモンは言葉を切った。

「『大いなる敵』を斃せたとして、君はその後どうするつもりだ？」

「考えていない」

イーヴはごく普通に答えたつもりだったが、レイモンは少し呆気にとられたようだった。

「勝てるかどうかとも判らないのに、先のことなど考えられるか」

イーヴとしてはごく当たり前の受け答えなのだが、二人はそうは感じていない様子だった。クリステルまでが驚いたような顔をしている。

「あなたは斃すとおっしゃったではありませんか」

「言ったさ。俺は奴を見つけ出し、殺す。ただ、できるかどうかは判らない。だからその後のことなど考えられない。だいたい、まだ出逢ってもいない相手を斃した後の話など、する方が怪訝おしい」

「相手に対して無礼であると？」

レイモンが聞いてきた。

「そうだ」

戦いそのものに対して不実でもある。狩りをする前から、捕った獲物の肉や毛皮を勘定するようなものだ。

「そうか……」

レイモンは椅子に背を沈めた。なんだか疲れているようにも見えた。

「君は誇り高き戦士だ。私は君を尊敬する」

そう言ったきり、レイモンは口を鎖した。

他に口を開く者はない。沈黙がその場を流れた。

部屋が豪華で大きいだけに、まるで周囲全体が、場の人間が言葉を発するよう、圧力を加えてくるかに感じた。

最初にその圧力に抗しかねたのはクリステルだった。

「……お父様のお考えをお聞かせ下さい。エク族の戦士たちがどうなったのか、『大なる敵』とはあの山自身であるという、わたくしの考えが正しいのかどうか、聡明なお父様のこと、すでにご自分のお考えを持っておられましょう」

「最初に言うておくが、今から話すことはあくまで私なりに整理した考えに過ぎない。つまり仮説だ」

イーヴとクリステルは頷いた。

「まず、山の神秘は太陽が二つあるかどうかとは関係ないようだ。少なくともこの世界ではね」

「それはお父様の元いらした世界では、ジャン・ザ・ビオンの神秘が生ずるのは太陽が二つある時だけだった、ということでしょうか？」

「そうだ。その件に関しては王立科学院の詳細な報告書があった。もっとも向こうの世界にはもはや残ってはいないだろうが……」

レイモンはやや遠くを観るような目をした。己のやって来た世界とやらに懐おもいを馳せているのかも知れない。

「ともかく山の神秘が、次元移動現象が発生する条件はこの世界では違うらしい」

「ジゲンイドウゲンショウ？」

父の口から出た単語を繰り返すかのようにクリステルが呟いた。その目には記憶を探るような色がある。どこかで耳にしたことがないかどうか思い出そうとしているようだ。

どうもクリステルにあっても聞き馴れない単語であるらしい。

もちろんイーヴも初めて耳にする単語であり、その意味するところなど全く解らない。

「君らには解らない言葉だったね。すまない。私の元いた世界はこちらとは色々と違うことが多くてね……」

不思議そうな顔をしている二人を見て、慌ててレイモンは詫びた。

「今は山の神秘の発生条件はいったん置くとしよう。それよりも『大いなる敵』だ。こちらの方がイーヴにとっては重要だろう」

イーヴは強く頷いた。

「結論から言えば『大いなる敵』については保留し

なくてはならない。それは今後のイーヴの行動によって、決まってくることなのだろうと私は考える」

「どういう意味でしょうか？」

「平原族の間で、今回の戦争に参加した者たちがいたらしい」

質問には答えずに、レイモンはそんなことを口にした。

おそらく山で^{であ}出遇った落武者狩りだろう。イーヴはそう思ったが、妙に引っ懸かるものを感じた。

「装備狙いで落武者狩りなどをやっていたようだが、その内のある者が、恐ろしい敵に出遇ったらしい。あっという間に仲間を斃され、一人だけ^{ようよ}生き延びたという話だ。平原族の間ではちょっとした話題になっているようだよ」

クリステルが考えるような顔をした。そしてすぐに何かに思い当たったのか、目を見開いてイーヴを見、そして父親の方を見た。レイモンは黙って頷き返した。

「そんな……」

クリステルの唇が^{ふる}顫えている。

二人の態度を見てイーヴは不安になった。

「おい、何か判ったことがあるのなら教えてくれ」

「平原族たちはこう言っている。『恐るべき敵』、

『大いなる敵』に出遭^{であ}ったと」

レイモンがイーヴの方を向き、はっきりと言った。

「……何？」

一瞬、何を言われているのか解らなくなった。

この男は何を言っているのか。

恐ろしい考えに突き当たりそうになって、それを回避した。その替わりに思考が纏^{まと}まらなくなって、眩暈^{めまい}のような感覚が襲ってきた。

「はっきりと言おう。『大いなる敵』とは、おそらくは変質し、伝説化した君のことだ。そしてエク族の戦士たちは、あの山に呑まれた。何処^{いずこ}とも知れぬ世界に飛ばされたか、またはあの山で朽^くちたか……いずれにしても、あの山に君の求める敵はいないはずだ」

「でたらめを言うなっっ!!」

イーヴは叫んだ。テーブルの向こうでクリステルが身を顫^{ふる}わせる。視界の端でそれを認めて、イーヴは微^{かす}かな罪悪感を覚えた。気持ちを落ち着かせようと努めた。

「『大いなる敵』を斃した者がいないということは、誰もその姿を見ていないということだろう？」

イーヴの先を制するように、レイモンが言葉を投げた。

「誰も見たことがない、会ったことがない者が、なぜ存在すると言い切れるのだ？」

「っ！」

イーヴは叫びかけ、しかし声を呑み込んだ。

叫んだところでどうにかなるものではない。この男の言っていることは正しいし、己にとって有用な話をしてきているのだ。

幼児のように叫んだところで何があるのか。

「ともかく、あの山に君の求める『大いなる敵』は居ないだろうと考えた方がいいだろう。伝承の発端となったのは君の行動、先日セルジュたちを救った君の働きによるものだ。言わば君こそが『大いなる敵』なのだよ」

握り締めた己の拳^{こぶし}が、白くなっているのに気づいた。全身を緊張させているのだ。身体^{からだ}が小刻みに顫^{ふる}えてきそうであった。

「君にとっては残酷だが、そう考えるのが最も筋^{すじ}が通っている。君ならばそれも解るだろう？」

答えずに、イーヴは立ち上がった。

ここには居られない。

「ここを離れるつもりならば考え直した方がいい」

レイモンが素速く言った。考えていたことを言い当てられて、イーヴは再び頭に血が昇るのを感じた。

「……どこへ行こうが俺の勝手だ」

「確かに。だがそれでどうすると言うのかね？ 寄
る^べ辺ないこの地で、この時代で。平原族の元へと向
かうかね。言っておくが、君の言葉では会話に問題
があるぞ」

「……」

「君の言葉は我々に近い。それもそのはずだ。君の
時代では、平原族はあの土地に居住しているわけだ
からな。しかも二百年くらい経っている。だから
ヴァルカンティの影響を受けて言葉が変質したのだ
よ。語彙^{ごい}が豊富になっただけでなく、言い回しなど
にも弱冠^{じゃっかん}の変化があると見た方がいい」

そう言われて、イーヴは思い当たることがあつ
た。ジャンザビでクリステルと話した時に、その言
葉にはずれと同時に、妙な一致をも感じ取ったの
だ。

「今の時代は違うぞ。平原族の言葉は我々とは結構
な差がある。通じないわけではないがね。君の言葉
は半ば以上我々のものだ。平原族と話す方が、我々
と話すよりも苦勞するだろう」

イーヴは絶句した。

「イーヴ、私に……任せてくれないか？」

気遣うようにレイモンは言った。

「君をこのままにするのは心苦しい。力になりたい

のだ」

「……それは、俺があんと同じ立場だからか？」

「私の場合は遥かに有利な立場だった」

「……」

「私の身の上を詳しく話してもいいが、今はそれよりも君の問題だろう。そのことが大事だ」

イーヴはテーブルに目を落とした。恥ずかしいような、情けないような気持ちになった。

クリステルは間違いなくこの男の血を引いている。

人が好いにも程がある。ほとんど見ず知らずの相手と言える人間に対して、どうしてこうまで好意を示すことができるのか。

まったくどうしようもない。

「あなた、よくここまで生きてこられたな」

呆れたことを示すつもりが、声にはなぜか柔らかさが加わってしまった。そしてそのことにまた、呆れた。

「どう思われようと構わないが、私は君の力になりたいし、なれると思っているよ」

「甘いな」

「時と場合によるよ」

イーヴは鼻先で笑った。だが、やはりそこに軽侮を籠めることはできなかった。

「取り敢えずは邸に留やしきまとどってくれたまえ。不自由はさせない。なんでも好きにしてくれていい。だから頼むから私たちの前から消えないでくれ」

「随分好かれたものだなずいぶん」

「君はあの山について、ジャンザビについてもっと知った方がいい」

これ以上何を知ると？

今聞かされた話は恐ろしいほどに的確だ。

「南にブランドシェという町がある。そこに行けばジャンザビの資料がある。私が話したよりも多くのことを知ることができるだろう」

「お父様それは……」

「王家の禁書目録だよ。幸い私は自由さいわに閲覧する許可を得ている。調べることになんら問題は無い」

「そこに行けば何か判るのか？」

「今私が話した内容は、いくら妥当性が高くともあくまで仮説だ。資料をあたれば何か新事実が判るかもしれない」

イーヴは何も言わなかった。ただ黙ってレイモンの顔を見つめた。

「その調査が終わるまで、せめてそれまでの間は、私たちと一緒にいてくれないか？」

レイモンには懇願するような様子があった。

クリステルに目を向けた。父親と同じような表情

をしていた。

イーヴは溜息^{ためいき}を吐き^つ、天井^{てんじょう}を見上げた。高い天井である。

そこには、穏やかな表情で天を舞う天使たちが描かれていた。

第二章 第七節

「クリステル」

イーヴと共に部屋を出て行こうとすると、父に呼び止められた。再び腰を下ろすと、父は驚くべきことを告げた。

「陛下からお前にご懇請があった。セドリック殿下のお相手をせよ、とのことだ」

セドリックは、現国王にして兄であるロドルフと王位を争い、敗れた王子である。確か、己とはそれほど^{とし}年齢が違わなかったと思う。王位継承争い前の、子供時代の彼なら幾度か見たことがある。黒い髪と青い瞳、そして色白という、印象的な色彩と美しさを持っている割には、ひどく印象の薄い少年だった。儂い^{はかな}というか、弱々しいというか、そんな感じで、常に何かに^{おび}脅えている感じもあった。

彼はこれから自分たちが向かう町、ブランドシェに幽閉されていると聞いている。誰にも会わずにひっそりと暮らしているらしい。

そうした男の元へ行き、その相手をせよとはどういうことなのかと、クリステルは訝^{いぶか}しんだ。

普通は、高貴な人間のお相手と言え、同じくらいの年頃の同性がするものである。それが、もう子供とは言えぬ、むしろ年頃と言える異性の相手をす

るといのは、やはり何かしら^{かんぐ}勘繰らざるを得ない。

——結婚。

その言葉がクリステルの頭の中に浮かんだ。

ぐらぐらと世界が揺れるような感じがした。

なぜか衝撃を受けているらしい自分自身に、クリステルは驚いた。

結婚話なら今までに幾度もあった。直接求婚されたことも数知れない。

どれも断ってはきていたが、結婚というものは自分ではなく父が決めることで、いずれはどこかの誰かのところに^{とつ}嫁ぐのだろうと思っていた。それが当たり前のことだと思っていた。

それなのに、いざその時が来てみたらこれである。

吟遊詩人の^{うた}詩にあるような、燃えるような恋だの愛だのに包まれて、意に染まぬ結婚から逃れて駆け落ちする男女とか……そういうのに自分は^{あこが}憧れていたんだろうか。

クリステルは苦笑した。

ひどく子供っぽい憧れである。

そんなことが現実にあったとしたら、吟遊詩人な

ど必要なくなるではないか。

しかし、結婚というのならまだよい。

気になる噂がある。

ごく内々の噂によれば、セドリックは身边に美しい少女を^{はべ}侍らせているとかいう話なのである。

そのようなところに自分が行くというのは、どうということなのか。

もしや――

いやまさか――

と、良からぬ考えが脳裏を^よ過ぎる。

自分は、その「美しい少女」とやらの替わりになるのだろうか。それとも、ひとりだけでは飽き足らず、ということのなのだろうか。

……。

いずれにしるあり得ない話だと思う。

父がそんなことを許すはずがない。

王がそんなことを自分に懇請するはずがない。

父は言わずもがなであるし、^{おそ}畏れ多いことに、王ロドルフは自分を妹のように扱^{あつか}ってくれている。

そんなことはあり得ない。

ならば、どういう意図があるのだろうか。

そうしてクリステルがさらなる考えを^{めぐ}回らそうとした時、突如、レイモンが吹き出した。

クリステルは驚いて父を見た。

父は何やら、堪え切れずに笑い出してしまった風であった。

「……お父様？」

啞然としつつ、クリステルは笑い続ける父を見た。

レイモンは一頻り笑うと、意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「いやはや、相変わらずお前はおもしろいな。さて、どんな想像を膨らませているのやら」

「お父様！」

見透かされていた、揶揄われていたと知って、クリステルは顔を真っ赤にした。

「青冷めていたところを見ると、どうも私は信用されていないようだな。……まあ、そうだな、お前は私になんの相談もなく、ひとりでこっそりジャン・ザ・ビオンに行ったくらいだからな」

不意にレイモンはそう言った。

「あ、それは……」

クリステルの顔が引き攣った。言葉が出てこない。というよりも、もはや何を言っても無駄なのだ。父は全てを見透かしている。

実際、レイモンは子供の悪戯を見つけたかのような顔をしている。楽しんでいるような、困っているような顔をしている。愛情深い父親の表情だ。

「それどころか、男を捕まえて帰ってくるとはな」

クリステルの顔が再び真っ赤になった。

「彼はそういうものではありません！」

「いいともいいとも、娘というものは所詮^{しょせん}そんなものだ。どれほど愛情^こ籠めて育てても、他の男に奪われるものと決まっている。そいつのために育てたのかと思うと、癩^{しゃく}だがなあ。まあよい、私にはまだミレーヌがいるからな。いよいよこの世に未練が無くなるうものだ」

ミレーヌはレイモンの妻であり、クリステルの母である。十二年前に、流行病^{はやりやまい}で亡くなっている。

「そんな風におっしゃらないで下さい」

クリステルは困り顔で言った。

「その……もうしわけありません。わたくし……確かにお父様を疑っておりました。決してあのような噂を信じたわけではないのですが、偶然見てしまったのです。庭で、お父様と怪しげな者たちがお話しているところを。それで、まさかと思いつつ、お父様に直接お聞きするわけにもゆかず……という、わけなのです」

レイモンは微笑した。

「それでジャン・ザ・ビオンまで確かめに行くというのが、お前らしいところだな」

クリステルは頬を染め、少し^{うつむ}俯いた。

「お前が見たという、その怪しげな者たちは、クープランを救うために動いてもらった者たちだ。あの山では何が起こるか解らん。多少手荒いことになってもよいから、クープランのジャン・ザ・ビオン入りを阻止せよと、彼らを向かわせた。……間に合わなかったがな」

レイモンは小さく溜息^{ためいき}を吐^ついた。

「……そういうこと、だったのですか」

政敵であっても救^{たす}けようとするとは、なんと優しいことだろう——などと考えるほど、子供でもないし、世間知らずでもない。そこには父なりの損得勘定があったに違いない。

それでもクリステルは、なおも安堵すると共に、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

救おうとしているのを殺そうとしていると思うだなんて……。あの時の自分はどうかしていたとしか思えない。

「ともあれ、お前が無事に帰ってきてよかった」

安堵^こを籠めてレイモンは言った。

そこに自分に対する愛情を感じて、クリステルは申し訳ないながらも嬉しい気持ちになった。

「陛下のご懇請、お受けいたします」

レイモンは驚いたようにクリステルを見た。

「今度はまた随分^{ずいぶん}と信用されたものだな」

「^{からか}擲揄わないで下さい。陛下のご懇請です。お断りする理由がありません」

「なんだ、私を信用したわけではなかったのか」

「わたくしの反応を見て楽しんでいらっしゃる方など、信用できるはずがありません」

クリステルは少し口を^{とが}尖らせた。

レイモンは笑った。

「すまん。この辺で^{かんべん}勘辨しておこうか」

レイモンは真面目な顔をして、改めてクリステルを見た。

「実はな、セドリック殿下は女性なのだ」

クリステルの目が点になった。

「セドリック殿下が美少女を^{はべ}侍らせているとかいう、下世話な噂があるだろう？ 彼女こそが、殿下御本人なのだ」

クリステルはただただ啞然とするばかりであった。

「しかし、殿下御本人がそうと望まれたのではない。殿下にはなんの罪もあられない。殿下は、権力争いの犠牲となった、哀れな王女に過ぎない。殿下の母方の実家ドゥブレーが、王位欲しさに、先王から^{さず}授かった^{おこ}御子を、つまりはセドリック殿下を、男子として押し通したのだ。このことは、王位継承争いが起こるかなり前から、私たち……私と陛下は^{つか}掴

んでいた。だから私たちは最初から判っていたのだよ。負けるはずがない争いだということを、争いにもならない争いだということを。ドゥブレーは神殿に虚偽の報告をし、神の御名^{みな}を汚した。これは致命的だ。王となるべき者は、神の御前^{みまえ}で王冠^{おうしゃく}と王笏を授かるのだからね」

「最初から判っていた……」

クリステルは青冷めつつ^{つぶや}呟いた。

「では、セルジュの家は、バルドール家は、そのことを知らなかったのですか？」

苦渋^{くじゅう}に満ちた顔で、レイモンは頷^{うなず}いた。

「陛下が……いや、私の責だろうな……。この情報がどれだけ強力な切り札か、解るだろう？ これを見せれば誰でも陛下に……ロドルフ殿下の側に、与^{くみ}したはずだ」

父の言わんとすることを察して、クリステルはさらに青冷めた。

「……試されたのですか？」

「はっきりそうとは仰^{おっしゃ}らなかったが、そういうお気持ち^{お気持ち}がまったくあられなかったということは無いだろう。ともかく陛下は……ロドルフ殿下は、私に口止めされた。――しかし、私はジョルジュにだけは言うべきだったのだ。私の恩人である、あの男にだけは」

レイモンはショコラに目を落とした。ショコラはもうすっかり冷めてしまっているに違いない。イーヴが去った後、召使いも下がらせたので、温ぬるくなくても取り替えられることがなかったのだ。

「……」

クリステルもまた俯うつむいた。

何も言えなかった。

父を責めることなどできなかった。

父は今までずっと、己自身を責め続けてきたに違いない。

「セドリック殿下の話に戻るが――」

レイモンは暫しばしの沈黙の後、再び口を開いた。

「陛下は、ドゥブレー家の勢力をほとんど完全に殺そぎ、ドゥブレー家を潰滅かいめつさせなさったが、セドリック殿下には、妹君には、同情しておられる。しかしだからといって、実は王女であるなどと、真実を公表するわけにはいかない。――解るだろう？」

クリステルは頷うなずいた。

セドリックの立場というものがあるし、もはや潰滅しているとは言うものの、ドゥブレー家の訴追そつ追も免れまい。母の家が潰滅したということだけでも哀しみは深かろうに、そこにさらに追い打ちをかけたら、セドリックの哀しみは底知れぬものとなろう。

「陛下は、今暫いましばらくの間は妹君に不自由をおさせにな

るが、折を見てセドリック王子は病死なされたとい
うことになさるおつもりだ。その上で妹君御本人に
は養女に出ていただくか、ご婚姻こんいんなどをお纏まとめにな
ろうと考えておられる。無論、信のおける家を探し
た上でのことだが、その選定も私と陛下とで大分進だいぶ
んでいるのだよ」

クリステルは相変わらずのロドルフの聡明さに感
心した。

ロドルフはセドリックを幽閉することでセドリッ
クに温情を見せ、同時に貴族たちを牽制けんせいしてもい
る。つまりは情と利益の両取りをしているのだ。

「それでお前が懇請されたのは、これまで殿下のお
相手を務めていた老婆が、暇いとまを願い出たからなのだ
よ。寄る年波としなみには勝てぬということだね。しかし、
事情が事情であるから、おいそれと誰かに頼むわけ
にはいかない。そこでお前というわけだ。お前なら
ば充分信用できるし、いろいろと辨わきまえているし、殿
下とは年齢も近いから、良い友達になれるのではな
いだろうか、陛下は期待されたのだよ」

「そういうことだったのですか」

詳しい事情を聞いて、クリステルは納得した。

「ご期待に沿えるよう、努めさせていただきます」

「奇くしくも、禁書の調査と重なることになるが、丁ちよ
度良うどかったのではないかな」

「そうですね。調査と言えば――」

クリステルは感じ入ったように微笑んだ。

「わたくし、お父様に感動いたしました」

「ん？」

「彼に対するなさりようです。やはり、似たような境遇の者は見捨てられないということなのではないでしょうか。禁書の調査までお許しになるなんて」

「ん……うん」

とレイモンは、なぜか微妙な笑みを浮かべた。

「しかしお前、そのことだけで感動しているのではないのだろうか？」

「どういうことですか？」

意味が解らず、クリステルはきょとんとした。

そんなクリステルに、レイモンは意地の悪い笑みを送った。

「私が彼を引き留めたということが一番なのではないかね？」

クリステルの顔がぱつとあから赧んだ。

「まだそんなことを！ 違うと申しているではありませんか！」

知らず、無気になって否定する。

「そうかそうか」

いかにもたの愉しそうにレイモンは微笑む。

「ブランドシェには私も行くが、お前たちの邪魔は

しないから安心したまえ。ブランドシェは、ふたりで盛り上がるには良い場所だ」

「もう知りませんっ！」

クリステルは勢い良く立ち上がり、すたすたと部屋から出て行った。

＊

王の身辺警護を司る^{つかさど}近衛^{このえ}に身を置きながら、ごく間近で王を拝顔することは、初めてのことだった。

近衛はあくまで王個人の軍隊である。通常は王の身辺警護が仕事であるといっても、常に王の近辺に待機しているわけではない。側仕えの小姓や召使いとは違うのである。

近衛になって日の浅いセルジュは、まだほとんど王と接したことがない。

改めて見ると、王は遠くで目にするよりもずっと威圧感があった。

かなりの長身である。瘦^やせてはいるが肩幅もかなりあり、体格には相当に恵まれていると言えるだろう。

顔は少々^{おもなが}面長であり、癖のある黒髪を長く垂らしている。頤髭^{あごひげ}も長めに伸ばしているために、実際の年齢よりも老^ふけて見える印象がある。

冷たいほどの意志の強さが窺える目は、^{うかが}清^{すがすが}清しい
ほどに青い。

黒っぽい^{かんとうい}貫頭衣^{まと}を纏ったその姿は、壁画に描かれた、遠い昔の古代の帝王を想わせた。

——これが王というものなのか。

知らず、セルジュの心は^{ふる}顫えた。

王から^{じきじき}直直に声を掛けられたのも、近衛として取り立てられた時以来であった。

声は、その外見と比べて^{ずいぶん}随分と若い感じがある。

しかし、よくよく思い返してみれば、王はまだ二十七、八なのであった。

「セドリックの身辺警護をせよ」

とのことであった。

その言葉にセルジュの全身は硬直した。

——試されている。

そう思った。

王は先の^{いくさ}戦^おに於ける己の働き振りを^ほ褒め、禁足地に踏み入ったことは不問に付すと述べた。配置替えを申し付けるのは、禁足地の件に関するごたごたからセルジュを遠ざけるための配慮であると述べた。

しかし、己がバルドール家の人間であること、身辺警護の相手がセドリックであること——これらがまったく無関係であるはずがなかった。

これは己にとって、バルドール家にとって、重大

な任務なのだ。

王の御前ごぜんから辞じした後も、呪文のように心の中で
そう唱えていた。

「殿、出発の御用意が整いましてございます」

召使しらいが報せにやってきた。

セルジュは頷き、己の部屋を出た。

第二章 第八節

部族の地である荒涼とした平原から、イーヴはいつも西の方を眺めていた。そこには、「大いなる敵」が棲ま^すうジャンザビがあったからである。そのさらに向こうに港町があることは聞き知ってはいたが、よもや訪れることがあろうとは思ってもみなかった。

想いもよらぬ光景と、嗅^かいだことも触れたこともない風に、イーヴはただただ呆然とするばかりであった。

まず一番驚かされたのは、「海」というものである。たくさんの水から成る海は、空のように青いと聞いていた。そこから海というものを想像していたのだが、やはり海と空は別物に違いなかった。海はきらきらと輝き、うねり、底知れぬその身内に、何かを孕^{はら}んでいた。塩気を帯びた、独特の匂いのする風は、ここから生まれているという。

海にはいくつかの大きな船が浮かんでいた。クリステルによれば交易船であるという。その船と岸辺の間を、たくさんの小舟が行き来している。岸から船へ、あるいは船から岸へ、交易品を運んでいるのだそうである。なんとも面倒なことだとイーヴは思った。

海に面する陸地側は、海に向かってなだらかに傾斜し、建ち並ぶ建物が階段状に見える。建物はどれもこれも白く、空の青、海の青と対^{つい}を成して、美しい光景を現出せしめていた。

高所にあるギュベール家の別邸からは、その様が良く見て取れた。

「海に行ってみてはどうですか？」

テラスから景色を眺めていると、邸の内からクリステルが声を掛けてきた。

振り返って見れば、机の上にたくさん積み上げられた羊皮紙の間から、クリステルが顔を^{のぞ}覗かせていた。笑顔を浮かべているものの、疲労がありありとあった。

それもそのはずである。ここ、ブランドシェにやってきて一週間、ほとんど徹夜で調べものをしていいる。それもたったひとりだ。禁書は貴族にしか読めぬ古語で記述されているため、イーヴには読めない、また、その性質上他の者には読ませられない——となれば、クリステルとレイモンが調べるより外無いのだが、レイモンは他の仕事で忙しいらしく、クリステルひとりが頑張っているという^{ありさま}有様であった。

イーヴとしては、一刻も早くジャンザビについて知りたい。もっと情報が欲しい。

レイモンから聞かされた話は、あくまで彼の推測とはいえ、恐ろしいほどに説得力があった。その内容はイーヴの想像を超えていただけでなく、^{あぜん}啞然とするほどに残酷でもあった。

もしレイモンの話が正しいとすれば、エク族の戦士たちは無駄に命を落としたことになるではないか。

勇者の^{あかし}證を持つほどの偉大な戦士たちが、自らの力を示すこともできずに朽ちていったと思うと、イーヴは胸が裂けるほどの悲しみと、^{むな}虚しさを覚えた。

何より彼らが求めた「大いなる敵」が存在しないだろうということ、しかもその伝説の^{ほったん}発端が、己にあるだろうことは、もはや悲劇を乗り越えて喜劇である。

レイモンの言葉を信じるか信じないかと問われれば、「信じない」と答えるだろう。

だがおそらくレイモンの言葉は正しい。

「ジャンザビにはまだ多くの秘密がある。王家の書庫にはそれらを記した書物がある。それを調べれば何か新たな事実が判るかも知れない。イーヴ、諦めるにはまだ早いと思うよ」

レイモンはそう言った。その心遣いは有り難かったが、調べるということで、果たしてこれは^{くつがえ}覆せる

ほどのものなのか？　とも思う。

クリステルはまだ何も教えてはくれない。

「今話してもただの推測になります」

そう言って、毎日時間の許す限り書庫の資料と向き合ってくれている。

期待と、恐れ――。

そうした気持ちがいつも心の中にあった。

クリステルはそれを察してくれているのだろう。

それがゆえの頑張りなのだろうと思う。

嬉しい気持ちと申し訳ない気持ちが^な縋^まい交ぜになり、イーヴは己に対する^{いらだ}苛立ちを覚えた。己のことであるというのに、何も手伝えないのが腹立たしかった。

手持ち^ぶ無^さ沙汰^たなイーヴに、クリステルはあれこれと気を回してくれる。そこら辺を散策してみてもどうか、海に行ってみてもどうかと、声を掛けてくる。

イーヴはその^{たび}度に断った。己のために^{じんりょく}尽力しているクリステルを置いて、遊ぶわけにはゆかぬ。

それに、実際のところは手持ち無沙汰にしているわけではない。時間のあるときは常に鍛錬をするようにしているのだ。実際、ここに来てからは生活の雑事がないだけ、村に居たときよりも鍛錬の時間は長く取れるとすら言える。

そうしてクリステルに付き合っている他は、邸の中庭で素振りをしているか、レイモンに話を聞かせているかくらいのものであった。

レイモンは、現在からイーヴの時代までのことを、つまりは未来のことを熱心に聞きたがった。それは興味本位と言うよりも、何かに活かそうとしている風だった。レイモンに話をするまで考えてもみなかったことだが、なるほど確かに、未来に起こることが判っていれば、有利に物事を進めることができるだろう。周囲の情勢になど、とんと興味を向けたことのなかった己の話が、どこまで有用かは甚だ疑問ではあるが。

そういえば今日はなぜかクリステルの話になった。

「君はクリステルをどう思っているのかね？」

などと聞かれて返答に困った。

どうと聞かれても何も無いのだ。

それに質問の意図も掴めない。

しかし今考えてみるとあれは、少しはクリステルを気遣ってみてはどうか、ということではないだろうか。親父なりに娘の身を案じてのことなのではないだろうか。

クリステルの頑張りようは尋常ではない。それははため傍目にも明らかだ。このまま続けていたら倒れてし

まうに違いない。

それなのに己は、気遣うどころか甘えていたのではないか。彼女を止められるのは、依頼者である己しかいないというのに。

だから、ここは彼女の提案を受け容れようと思った。

「……そうだな。行ってみようか」

クリステルは少し驚いたようにイーヴを見た。初めてのことだからだろう。

「では、リリィに案内させましょう」

言いながらクリステルは呼び鈴に手を伸ばした。

が――

「待て！」

イーヴは^{あわ}慌ててそれを制した。

あの小娘を呼ぶなど冗談ではない。

きゃっきゃと猿みたいに騒がしく落ち着きがなく、それだけでもうんざりだというのに、なぜかは判らぬが、どうもあの小娘は己を目の敵^{かたき}にしているようなのである。

――どうもあいつは苦手だ……。

相性が悪い、というやつなのであろうか。

そもそも都のギュベール邸にやってきたその日から、その徴候は現れていた。

リリィはクリステルが席を外してふたりきりにな

ると、

「当家的お嬢様は、そのご容姿、ご頭脳、ご性格、何をとってもまったく非の打ち所の無い、素晴らしいお嬢様です。たくさんの、やんごとない^{とのがた}殿方からご求婚いただいております」

イーヴを睥^{にら}みつけながら、いきなりそう言ってきたものである。

主人自慢^{かさ}を笠に、何か腹立ちをぶつけたらしかった。

何かの八つ当たりだったのかもしれぬ。

しかし何で己がその対象にならなければいけないのか、イーヴは理解に苦しんだ。

ともあれ嫌われていることだけは判った。

「……あいつは呼ばなくていい。お前が案内しろ」

クリステルは驚き、怪訝^{けげん}な顔をした。

「わたくしは調べものがありますから……」

「いくらなんでも根^{こん}を詰め過ぎだろう。少し休んだ方がいい」

「ですが……」

「俺がいいと言っている」

「……」

クリステルはなおも躊躇^{ためら}っているようだったが、やがて含羞^{はにか}むように微笑した。

「……では、お言葉に甘えて。準備してまいります

ので、少々お待ち下さい」

読んでいた書物を閉じ、^{かたわ}傍らの羊皮紙の束に^{おもし}重石を載せると立ち上がった。

そのまま部屋から出て行こうとするので、
「準備なんぞはいい。そのままがいい」

イーヴは引き留めた。

準備というのは着替えのことに違いなかった。

それはもう、毎日の、セドリック王子とやらの幽閉先への訪問で判っている。

外出するとなると外出用の服に着替え、それから家に帰ると今度は室内用の服に着替えるのだ。それもたっぷりと時間を掛けて。

息抜きに行くというのに、そんな馬鹿くさいことには付き合ってもらえない。

「こっちへ来い」

イーヴは部屋の出入口とは反対方向に、テラスの縁へ向かった。

クリステルが^{いぶか}訝しげな顔でやってくると、イーヴは二階にあるこのテラスから、^{てす}手摺りを越えて下に飛び降りた。

「っ！」

クリステルの息を呑む声が聞こえた。

イーヴは難なく着地し、二階のクリステルを振り返った。

クリステルは呆然とこちらを見ていた。

「お前もだ」

と言ってやると、クリステルは驚いた。

「わ、わたくしも同じことをするのですか？」

「受け止めてやるから大丈夫だ」

下から見上げてイーヴは両腕を開いた。

「え……」

クリステルは顔をあから赧めた。

イーヴは訝しんだ。なぜここで顔を赤くする？

「あの……なぜこんなところから？」

「ふたりきりで行きたいからだ」

クリステルの顔がさらに赤くなった。

イーヴはさらに訝しんだ。

「堂堂と表から出て行くとなれば、お付きの者がぞろぞろっ従いてくるだろう？ お前はそれでもいいかも知れんが、俺はうっとう鬱陶しい」

「……あ、そうですか」

何やら少し残念そうに言う。

「お付きが居ないと駄目なのか？」

「いえ！ 全然そんなことはありません！」

クリステルは首まで振って、強く否定した。

にも拘らず、何やら恥かかわずかしそうに俯うつむき、一向、

飛び降りる気配が無い。

イーヴは少しいらだ苛立った。

「おい、どうした？ 早くしろ」

急かすと、クリステルはびくりと体をふる顫わせた。

「……あ、あの……わたくし、このかっこう恰好ですから…
…飛び降りると脚が……」

クリステルは白いドレスを着ている。

「む……そうか」

飛び降りるとドレスがめく捲れて脚が見えると言いた
いのだろう。

面倒だなと思った。

「そしたら、体を横にして落ちろ。それならいいだ
ろ？」

クリステルは顔をあから赧めたまま、少しの間を置いて、こっくりと頷いた。

なんだかかわい可愛らしいな、と、イーヴは内心苦笑し
た。

クリステルは、てす手摺りに腰掛けながらそれを乗り越え、体を横にして仰向けに落ちた。

イーヴはうまく受け止めた。横向きのまま抱き上
げるような形になった。

クリステルを見ると、間近で目が合った。

クリステルの顔がさらに赤くなった。耳まで赤
い。

何やらイーヴも恥ずかしくなって、そそくさとク
リステルを下ろし、顔をそ外らしながら離れた。

「……行こうか」

「……はい」

＊

根^{こん}を詰めていたのは、彼のためばかりではなかった。むしろ自分のためだった。

——私が彼を引き留めたということが一番なのではないかね？

父があんなことを言うからだ。

確かに自分は、彼が留^{とど}まってくれたことに安堵した。喜んだ。彼にはどこにも行って欲しくないと思っている。

しかし、こうした状況は、今だけの一時的なものでしかないだろうとも思っている。

彼はひとつところに留まれるような男ではない。あの山で「大いなる敵」を求めて彷徨^{さまよ}ったように、何かを求めて彷徨い続けるのが、彼という存在なのではないかと思うのだ。父のあまりにも残酷な仮説が真実だとしても、彼は彼自身の「大いなる敵」を求めてどこかへ消えてしまうのではないかと思うのだ。

だから、彼が自分の傍^{そば}に居てくれる今この時は、
とても尊^{とうと}い時なのだ。

この時がずっと続けばいい。

そう思う。

彼を長く引き留めることならできる。

彼が今留まっているのは、ジャンザビのことを知りたいためなのだ。王家の禁書に書かれてあるであろうそれを、知りたいためなのだ。

彼は古語が読めない。彼に協力的で、なおかつ王家の禁書を閲覧できるのは、自分と父以外にいない。そして、その父は自分に協力的で、調査しているのは自分ひとりだけだ。

となれば、彼を騙^{だま}すことなど、容易^{たやす}いことだった。

頑張っている振りをして、怪しまれぬくらいにだらだらと調査し、何かが判っても口を噤^{つぶ}んでいればよいのだ。

王家の禁書はかなりの量がある。無論、ジャンザビに関する部分はそのごく一部に過ぎない。実際のところ、後一週間くらいで調査は完了するのではないかと思う。

しかし自分が喋^{しゃべ}らなければ、彼には判らない。彼が判るのは、見たままの、禁書の総量だけだ。引き延ばそうと思えば、一年は引き延ばせるに違いな

い。

それだけの時間があれば、何かしらの可能性が生まれてくる余地もある。

人の心に形は無い。それがゆえに移ろいやすい。地位や身分、姿形や環境という型に嵌^はめ込まれて、無^{むぎょう}形の心、真の己自身を保つのは、とても難しいことなのではないか。王らしくしていれば王になるし、騎士らしくしていれば騎士になる。

それが善いことなのか悪いことなのかは判らない。しかし、人は易^{やす}きに流れるものだ。型に嵌^はってしまった方が楽であることが多いし、形有るものは判りやすい。

例えば一年間。それだけの長い間、貴族の休養地であるここ、ブランドシェで、自分の傍に居続ければ、彼の心に何かしらの変化が生まれる可能性が、まったく無いということは無いのではないかと思う。

しかし、それを望む一方で、彼の心変わりなど見たくもない、そんなのは彼ではない、彼が心変わりするはずがないと思っている自分もいる。

まったくもって身勝手なものだが、自分でも自分がよく解らない。

ともあれ、彼を騙してできるだけ長く引き留めるということには、強烈な誘惑がある。

それはとても^{ずる}狡いことだ。彼に対する^{てひど}手酷い裏切りだ。彼は自分を信じて下山してくれたのに。

しかし、そうと解っていても心は揺れる。そんな自分に吐き気がする。

それがゆえに、根を詰めて調査に没頭するのだ。そうしていれば何も考えずに済む。誘惑に心揺れることも無い。彼のために頑張っているのだと、自分自身を騙すこともできる。

彼と共に居る時間を、失うことになってしまうが……

「おい、揺らすな！」

クリステルは我に返った。

大海原に^{たゆた}揺蕩う小舟の上である。イーヴが小舟の^{へり}縁に^{しが}獅噛み付いてる。

クリステルは笑った。海に出てからのイーヴは、始終そんな様子なのだが、何度見ても笑ってしまう。体格の良い屈強な戦士が、顔を引き^っ攣らせてそうしている姿は、あまりにも滑稽であった。

「わたくしは揺らしてませんよ。恐いのですか？」

意地悪そうに問う。

イーヴはむっとした。

「恐いものか。……ただ、海は初めてだからな。訳が分らんだだけだ」

言っていることが意味不明である。

ともあれそうして虚勢を張る姿もまた、えらく滑稽であった。

「可愛らしいですね」

クリステルは微笑んだ。

イーヴの目が点になった。

「なっ……！ 俺は戦士だぞ！ 戦士に向かって

『可愛い』とはなんだ！」

イーヴは憤然として顔を赧めた。

「でしたら、戦士らしくなさったらどうですか？」

「む!？」

「そんな風に獅噛み付いていたら、戦えないではありませんか」

イーヴはクリステルを睥みつけた。

クリステルは意地の悪い微笑みで応えた。

「見てろ……」

イーヴは恐る恐る舟縁から離れた。ゆらゆらと揺れる小舟の上は不安定である。両手を広げ、屁っ放り腰で立ち上がろうとする。なんとも情けない恰好であった。その上本人はえらく真剣な様子なので、これまた笑いを誘わずにはいられない。

と――

大波が来た。

小舟が大きく揺れた。

ふたりはそれぞれ悲鳴をあげた。

バランスを崩したイーヴが持ち直そうとして、なおも小舟は揺れ続けた。

てんやわんやの末に、気が付けばイーヴは仰向けに転がり、その広く^{たくま}逞しい胸の中に、クリステルが顔を^{うず}埋めていた。

体勢的には、ジャンザビでクリステルが足を滑らし、イーヴがそれを受け損なったのと同じである。

しかしクリステルは顔を^{あから}赧めながらも、胸を高鳴らせながらも、今度は離れる気は無かった。我ながら嫌らしいと思いつつ、これ幸いとばかりにくっ付いていた。イーヴの体温を、存在を、感じていなかった。

イーヴは戸惑っているようだった。クリステルに離れて欲しい気配を出していた。だがやがて諦めたようだった。

ゆらゆらと揺り籠^{かご}のように揺れる小舟の中で、微^{まど}睡^るみを誘う午後の陽射しを浴びながら、ふたりは暫^{しばら}くそうしていた。

「……流されて、ないか？ ……いいのか？」

イーヴが躊躇^{ためら}いがちにささやいてきた。

少し微^{まどろ}睡^るんでいたクリステルは、静かに目を覚ました。

確かに流されていると思う。

だが確かめる気はない。

そんなことはどうでもいい。

「このまま流されても……戻れなくなっても……別
によくはありませんか」

そんな言葉が口を衝いて出ていた。

「行く宛てなんて……戻れる場所なんて……どこに
も無いではありませんか」

「……」

風が吹いていた。細波が立ち、小舟をたぷたぷと
叩く。小舟がゆらゆらと揺れる。

「あなたはもう、元の世界には戻れません」

ゆらり……

「太陽が二つの時には決して入山してはならない」

……ゆらり

「禁書にはそう書かれてありました」

ゆらり……

クリステルは徐ろに身を起こし、イーヴの両肩の
上の辺りに手を着いて、イーヴの灰色の瞳を覗き込
んだ。

「ここに、居られませんか？」

クリステルの金髪が解れ、微風に靡いた。

イーヴはクリステルを見つめ返した。

その目はひどく冷えていた。

「戻るべき場所ならある」

小舟が大きく揺れた。

「『大いなる敵』が存在しないのなら、俺はジャンザビに戻らなくてはならない」

ゆらゆらと揺れる。

「この先、戦士たちはジャンザビに入山する。俺はそれを阻止しなければならない。俺は彼らに真実を告げなくてはならない。戦うために生まれた戦士が、むざむざと消えて良いわけがない」

クリステルは青冷めた。

歴史が彼を取り込もうとしている。

そう感じた。

「もしも……もしも、彼らが聞く耳を持たなかったら？」

イーヴは^{にがにが}苦苦しく微笑んだ。

「その時は……戦うしかないかもな」

クリステルは^{せんりつ}戦慄した。

それこそまさに「伝説」の完成である。

ひどい^{めまい}眩暈がした。眉間に^{みけん しわ}皺を寄せて、目を^{つむ}瞑っ

た。

^{しばら}暫くして目を開き、

「もう少し待って下さい。もう少し調べれば、何か
が判るかもしれせん」

「……ああ」

イーヴは静かに目を閉じた。

ふたりを乗せた小舟は、いつまでも揺れていた。

第二章 第九節

なんという^{さいわ}幸いだろう。

クリステルが、ブランドシェに居る。

それも、己が警護任務に^つ就いているところに、セドリックが幽閉されている邸に、毎日やってくる。

これが幸なのか不幸なのかは判断が難しいところであった。

己は任務中である。しかも己にとって、バルドール家にとって、重大な任務中である。

彼女の滞在先を訪ねるわけにはゆかぬし、ましてやあちらからやってきたところを捕まえて話し掛けるなど、^{もっ}以ての^{ほか}外である。

だが己としては彼女の顔を見られるだけでも充分ではあった。

この配置替えで当分彼女を見ることは^{かな}叶わぬに違いないと思っていたから、それこそ降って湧いたような幸いであった。

ところが手放しでは喜べなかった。

彼女は常に、あの男を、イーヴを、引き連れてやってくるのだ。

その様子からして、彼はどうやらギュベール家の^{しょっきやく}食客であるらしいが、彼が何者なのか、結局聞きそびれたままだった。

また、気になることはそれだけではない。

彼女はセドリックのお相手を務めているらしいのである。「お相手」ならずで居るというのに。

セドリックは身边に少女を^{はべ}侍らせている――

それは最初、同僚たちの噂として聞いていた。怪しからぬ噂であるが、てっきり彼らの^{ぶりょう}無聊なのだと思っていた。こう言っではなんだが、警護任務に派手さは無い。一日中ただひたすら立っているだけ、ということがほとんどである。何かしらの気晴らしも必要なのだ。

しかし、実際この目で見てしまったら話は違ってくる。

セドリックが住まう館は、王家の別邸からは少し離れて建てられていた。

ごく小さなものである。セドリックひとりが生活するだけのものに見えた。

外観からの推測ではあるが、通常の館のようにいくつもの部屋を列ねたものではなく、最低限必要な部屋だけを揃えたという感じであった。

広間や客間が存在しないということはあるまいが、おそらくごく質素なものであろう。

ここまで隔離する以上、無論、厨房やお付きの者たちの住まいなども別である。

その者たちはやはり同じ敷地内にある専用の別棟

から毎日通ってくる。

こちらも王家の別邸に通常仕えている者たちからは隔離されているわけで、セドリックは王族の敷地内に生活しているといっても、事実上の幽閉である。

それでも地下牢や、人里離れた辺境の塔に閉じこめられることを思えば、遥に優遇された状態であると言えよう。

身辺警護の兵士らにしても、その小さな館を外から護るだけである。

セドリックの姿を目にすることは無いし、彼が実際にどういう生活をしているかなど、まったく判らないし、判りようも無かった。判るのは館に出入りする人間と、館の窓辺の様子だけである。

ある時、その窓辺に女の姿を見た。

黒髪色白の、^{はかな}儂げな美少女であった。

ぴんと来た。あれが噂の美少女に違いない。貴人に侍っていても^お怪訝^かしくない様子であったし、何よりも、館に出入りする人間の中に、彼女の姿を見たことはなかった。

聞くとところに^よ拠れば、彼女はごくたまにしか、館からは出て来ないらしい。ほとんど四六時中、セドリックに侍っているというわけだ。

しかし幽閉されている人間が、その身辺に女を侍

らせるなど、あってもよいものなのだろうか。

そのようなことが罷^{まか}り通っていることが不自然に思えた。王がこのことを知らぬはずがない。それともこれは、セドリックに対する王のお目こぼしなのだろうか。

お目こぼしであるならば、それはそれで良い。

……いや良くない。たとえ王族と言えど、人としての倫理、自己に課する規律というものがあろう。

何よりそうして女を侍らせている男の元に、さらに彼女をお相手として派遣するというのがまったく解^げせない。

セドリックの周囲に配置される人員は、すべて王自らがご選定になると聞いている。

彼女もまた王命によって派遣されたに違いない。王のなさることであるし、王と彼女の父レイモンは公私共にごく親しく、彼女自身も王に可愛^{かわい}がられているから、彼女の身に危険が及ぶようなことはないとの判断が、当然あるだろうとは思う。

しかしそれでも、やはりどうにも不安がある。腹立たしくもある。

同僚たちもおもしろくなさそうであった。それはそうだろう。セドリックは王位継承争いに敗れた男である。普通ならば王から死をたまわるか、牢獄に入れられているはずである。

それが王の温情で生かされて、人並みの住まいに幽閉されるに留^{とど}まらず、美少女を侍らし、これまた美少女に相手をしてもらっているのである。

セドリックに罪は無いと解ってはいる。

あの王位継承争いも、本人にとっては意味すら解らなかったのかも知れない。

それでもこうして敗北の結果を甘受しなくてはならないのだ。セドリックは犠牲者に過ぎない。

どちらに味方するかに際してセドリックを選んだのも、父ジョルジュである。

現状にしても、つまり責任はバルドール家にあるわけであって、セドリックには無い。

だがそのことと、不幸な身の上であることと、本人の心根の持ちようは別の問題であろう。

閉じ込められ鬱^{うっくつ}屈しているからといって、その慰^{なぐさ}みに乙女をあてがうというのは、明らかに間違っている。

このままではいけない。

周りにとっても、セドリック殿下御本人にとっても。

何よりもクリステルの身が心配だ。

セルジュは溜息^{ためいき}を吐いた。まさかこんな形で、心に重荷を抱えることになろうとは……。

ここに来るまでは考えてもいないことであった。

無論緊張はしていたが、それはあくまでも重大な任務であるからであって、このような気持ちの問題とは無関係であるはずだった。

——もしや王はそこまでお解りの上で、私をお遣わしになられたのか。

そのように勘繰^{かんぐ}ってしまう。すべきでない勘繰りだと解ってはいるのだが。

窓から風が吹き込んできた。

先程^{さきほど}から書を拵げてはいるが、まるで頭に入らない。手元の燈^{あか}りのように心はゆらゆらと乱れ、時に小さく爆^はぜる。

一応、セルジュは警護の監督者という位置付けである。

最上位命令権を与えられているわけだが、ここは王家の別邸である。邸の警備をする兵たちは別にいて、そちらには別の監督役が配されている。そちらとの命令系統は完全に分断されているのだ。

セドリックの封印という意味合いが濃い職務上、仕方の無いこととは思うが、不便であることは間違いない。これでは何か起きた時に、命令系統の混乱が生じないとも限らないではないか。

それにセルジュはまだ赴任^{ふにん}して日が浅い。現場のことがよく解っているとは言い難い。

なるべく早く慣れようと努力してはいるが、実務

については古参の兵に任せきりの印象がある。今だって兵は外を巡回しているというのに、自分は部屋で書を読んでいるのだ。

「やることなんかありはしませんや」

実際に兵たちを取り纏^{まと}めている男はそう言う。

「さすがに酒はまずいですが……まあ部屋でのんびりしていて下さい。立ちんぼやるのは俺たちだけで充分です」

それでは兵に示しがつかないと言うと、

「それ、それですよ。若いお人は杓子定規^{しゃくしじょうぎ}でいけねえ。隊長さんが傍^{そば}にいるとかえって皆緊張するってもんです。まあここは俺たちに任せて、任期が切れるまではゆっくりしててくださいや」

背中を押すようにして、この部屋に案内された。御丁寧にワインまで用意してある。

「あとで何かつまみになるもん持って行かせますから」

酒はまずいのではなかったのか？ そう尋ねる前に背中で扉は閉まってしまった。

やる気が出ないというのは確かにあるが、これはさすがに問題ではなからうか。

酒に手こそつけなかったものの、のんびり書など開いて寛^{くつろ}いでいる。警護にあるまじき態度ではないか。

活かつを入れねばならぬ。自分自身に。

セルジュは書を閉じた。どうせ真面目に読んでいなかったのしおりで、葉を挟むこともしなかった。

兵には嫌がられるかも知れないが、気分転換も兼ねて様子を見に行こう。

暫しばらくの間、部屋でおとなしくもしていたし、もういいだろう。

セルジュは立ち上がり剣を取った。

扉を開けて廊下に出ると同時に、妙な胸騒お かぎを感じた。何かが怪訝お かしい。

「誰か居ないか！」

誰すいか何しながら廊下を歩いた。右手には見事みごとな庭が広がっているのだが、夜なのでその素晴らしさとらを捉えきることはできない。

空には月が懸かり、篝火かがりびの中で所々が浮き上がって見えるだけだ。

尤もっとも、これはこれで味のある景観だと言えるが――

篝火の数が足りないことに気づいた。

セルジュは怪しんだ、と同時に耳に金属音が響いた。肌あわが粟立った。

「隊長おっ！」

先程セルジュを部屋に押し込めた兵が駆けてきた。

「敵襲です！」

＊

「お疲れなのではございませんか？」

話題に区切りが付くと、セリーヌはそう言った。
下がり気味の細い柳眉^{りゅうび}をわずかに寄せて、気遣わし
げな表情^{かお}である。

クリステルは困ったような笑みを浮かべた。

「そんな風にお見えになりますか？」

「ええ。日に日にお糞^{やつ}れになっていらっしゃるよう
な……。もしや、わたくしのお相手がお負担になっ
ていらっしゃるのでは……」

「いいえ！ そんなことはけしてございません。僭^{せん}
越^{えつ}ではございますが、わたくし、姫様のお相手をと
ても楽しませていただいております」

「それならよろしいのですが……。でも、今日はこん
なに遅くまでお引き留めしてしまいましたわ」

「いえ、ご厚意に甘えて長居させていただいている
のはこちらの方でございます」

月明かりが射し込む、瀟洒^{しょうしゃ}な部屋の中である。ふ
たりの少女が、テーブルを挟んで向かい合っていた。

片や、月の光を集めたような金髪の、聡明な感じ

のする少女で、片や、闇の^{しんえん}深淵を^{のぞ}覗き込むような黒髪^{はかな}の、^{はかな}儂げな感じのする少女である。

つまりは、クリステルとセドリックであった。

セドリックを直接知る者たちは、彼女をセリーヌと呼んでいる。

もちろん事情が事情であるから、今現在この場でその名を呼べる者は、ほとんどいない。お付きの侍女と、クリステルくらいのものである。

クリステルが初めてセリーヌに^{はいえつ}拝謁した時、セリーヌは^{ずいぶん}随分と^{おび}脅えている様子だった。いや、そうとあからさまに^{おもて}面に出していたわけではないが、笑顔がとてもぎこちなかったのを憶えている。

人見知りする^{た ち}性質というよりも、長い間人を^{あざむ}欺いてきたために、過剰なほどに他人の目を気にするのが^{くせ}癖になっているのかも知れない。また、他人と話すこともあまりなかったのかも知れない。秘密を^{いん}隠蔽^{ぺい}するには、極力他人と関わらない方がよいに決まっている。

それでもセリーヌが打ち解けるには、それほどの時間はかからなかった。クリステルの手にかかれば、いと^{たやす}も容易いことであった。ふたりは今ではもう、ずっと前からの親友であるかのようだった。

王のなさりように間違いは無かった。セリーヌの暮らしぶりは悪いものではなかった。

小さく慎^{つつ}ましやかな館ではあったが、セリーヌ自身の部屋は、王女のそれとして恥ずかしくないものを与えられている。食べ物も質素ではあるが、素材自体は上等なものである。幽閉の身の上ではあったが、幽閉されているのは「セドリック」であって「セリーヌ」ではないため、セリーヌとしての外出なら、たまにしているようである。

そして驚いたことに、どうやら恋愛もしているようであった。セリーヌ自身がそうと口に出したわけではなかったが、そういうことは気配で判るものである。おそらくは外出先で逢瀬^{おうせ}を重ねているのだろう。

しかし、そのことに関しては一^{いちまっ}抹の不安を禁じ得ない。その恋人は何者なのか、どこまで事情を知っているのか。こんなことは考えたくもないが、セリーヌが騙^{だま}されている可能性も無いではないだろう。

実に嫌な心配だと思う。セリーヌは幸せを受けるに足る娘だ。権力争いのために剥奪^{はくだつ}された、女として当たり前前の幸せを、今、徐徐^{じょじょ}にはあるが取り戻しているところなのだ。これからの彼女は幸せであってよいはずなのだ。

しかし――

「わたくし……幸せになれるのでしょうか」

セリーヌは虚ろな笑みを浮かべてそう言う。

「取り返しの付かないことというものが、あるとはお思いになりませんか？」

「……」

「幸せになれるとしても、幸せになってもよいものなのでしょうか」

「……」

セリーヌは、母方の実家であるドウブレー家の有様を、ひどく嘆いている。無論、口に出しては言わない。ドウブレー家は王位を狙った逆賊ということになっているから、擁護するようなことは言えないのだ。クリステルの前であっても、彼女は辨えている。

セリーヌの境遇の原因は、ドウブレー家の野心にあったわけだが、それでもセリーヌにとっては肉親である。肉親だからと言って、血の繋がりがあからと言って、必ずしも情の繋がりもあるとは限らぬものだろうが、ドウブレー家と彼女の間にはあったのだろう。

そのドウブレー家は、今はもう潰滅状態にある。領地は配置替えされ、公職からは追放された。その結果、外国に逃げ出した者もいれば、世を儚んで自殺した者もいる。

そうした家の有様を横目に見ながら、自分だけが

幸せになどなれぬと、彼女は言いたいのだろう。

いくら彼らが自業自得であっても、彼女自身は彼らの被害者でしかなくても、家族であったことには変わらない。仲間であったことには変わらない。

彼女は彼らを^{うら}怨んでよいはずだった。しかし、彼女はそうしなかった。それどころか、怨まれるのは自分の方だと思っている^{ふし}節がある。だから、幸せになりたいと思っても、自分だけが幸せになるのが恐ろしいのかも知れない。

彼女はそうした気持ちを一生引き^ず摺って生きていくのだろうか。この先どれほど喜びに満ちたことがあるとも、そうした気持ちは影のように付き纏^{まと}っていくのだろうか。

そう思うとクリステルは、^や遣る^せ瀬無い気持ちになる。

王位継承争いが終わって日常が戻ってきても、それは表向きのものでしかない。一度起こってしまったことは、無かったことにはできない。何も無かったことにして、新たに一から始めることはできない。過去は必ず付き纏う。それは今現在を作り上げたものなのだから。

それでも過去に縛られて立ち止まったままでいてよいとは思わない。結局、すべては未来に向かって動いている。残酷なまでに、否応も無く。ならば、

前向きな方がいい。

「姫様は必ずお幸せになれます。どなたにもお憚りはばかになることも無く。陛下を……兄君を、お信じ下さい。兄君は決してあなた様を悪いようにはなさりません」

セリーヌの青い瞳を真っ直ぐに見て、クリステルは力強くそう言った。

「……陛下を信じていらっしゃるのですね」

寂しそうにセリーヌは呟つぶやいた。言葉に力が無い。

クリステルにはセリーヌが何を思っているか解るような気がした。

王を信じないというわけではないだろう。だが信じているというわけでもないのだ。

「もちろんでございます」

クリステルはセリーヌの手を握り締めた。

「陛下は慈悲深いお方でございます。常に姫様のことをご心配でいらっしゃいます」

「ええ……そう信じておりますわ」

「近い内にここをお出になれましょう。まだはっきりとした時期は申せませんが、そのように手配しておいでであるというお話でございますから」

「それは本当でしょうか？」

セリーヌの表情が動いた。驚きであろう。しかしその中に、わずかな希望の揺らめきがあるのをクリ

ステルは見逃さなかった。

「本当でございます。ですからここをお出になれば、ご自由にお暮らしになることが叶かないましょう。宮廷の方々は誰も姫様のご正体をお知りになりませんから、社交界への参加もできましょう。詩や音楽の会にご出席になることも、乗馬や舟遊きょうびにご興きょうじになることもおできになります。遊びや芸術に親しまれるだけでなく、恋を楽しまれることだって、きっとおできになります」

恋。おそらくセリーヌは今、想う人が居る。それは誰なのか。

本来ならば穿鑿せんさくすべきではない。それは当人同士の秘ひめ事であるはずだ。

しかしセリーヌの立場、王の立場を考えると、目を瞑つむって良い問題ではない。

「恋を……」

セリーヌは、何かを夢想するように目を細めた。心ここにあらずといった様子である。

クリステルは、そこへ隙すかさず斬り込んだ。

「恋をしておいでですね？」

セリーヌは目を見開き、頬を朱に染めた。その青い瞳は動揺に揺れている。

——やはり。

クリステルは確信を得た。

そして、さらに踏み込もうとした時――

「あなたほどではございませんわ」

不意を衝^つく言葉だった。今度はクリステルが驚く番だった。まさか斬り返されるとは思っていなかった。

「わたくしよりもずっと重い、お糞^{やつ}れになるほどの病^{やまい}を患^{わずら}っていらっしゃるご様子」

当てずっぽうだろうか？ それとも気付かれるような素振りを見せてしまったのか？

クリステルは驚いた。勘の良い少女だと感心するよりも、驚きと、そして羞恥^{しゅうち}の方が大きかった。

隠していた想いにいきなり触れられたのだから仕方ないとも言えるが、クリステルもまた頬を染めた。

セリーヌは優しく微笑みながらも、問い詰めるような眼差しを向けてきた。これはもう、こちらから問い詰められるような状況ではない。

クリステルは観念し、徐ろ^{おもむ}に口を開こうとした。

その時――

月が翳^{かげ}った。

いや、テラスに何者かが立ったのだ。

テラスを振り返ると、月光を背にした黒い人影が、いくつも立っていた。

訝^{いぶか}しむ間もなく、静かに扉が開かれた。影たちが

滑るように室内に入ってきた。

彼らが黒かったのは逆光の所為せいばかりではなかった。いずれも黒装束くろしょうぞくで覆面をしている。

その内の一人がセリーヌに向かって片膝を着いた。

「お迎えに上がりました、御姫おんひめ」

若い男の声。自分よりもわずかに齡上としうえといった程度だろうか。

セリーヌは驚いている。だが脅えおびの色は無いようだ。

つまり予想外の訪問者なのだろうが、知らぬ相手ではないということになる。

推測するに、セリーヌの恋の相手はこの男ではないだろうか？

クリステルは直感的にそう思った。

「……こちらの御婦人は？」

「クリステル・ギュベール嬢です。最近お友達になりましたのよ」

嬉しそうに言うセリーヌの言葉に対して、男たちは驚きと、そして怒りの反応を見せた。

「ギュベール！」

「奸賊かんぞくの娘か！」

嫌われることには慣れてしている。いや慣れていたと言うべきか。父も自分も、かつては侮あなどられる立場に

あったのだ。

今は羨うらやまれる立場にあるが、当時から決めていたことがある。

面と向かっての侮ぶべつ蔑には容赦しないということだ。

「父を奸賊と言いましたか――」

静かな怒りを籠こめてクリステルは言った。

「取り消しなさい！」

第二章 第十節

庭を横切ればセドリックの居室まではすぐである。セルジュは手に剣を提げたまま庭を駆けた。

報^{しら}せに来た兵の他は、警護の兵はほとんどが斃^{たお}されたようであった。

驚くやら情けないやら反応に困ったが、邸^{やしき}の方に動きがないのが気になった。

おそらく、邸の守備隊の方では事態を察知していない。

そう考えたセルジュは、兵にはそのまま邸の守備隊へと報せに行くように命じ、己は剣を手にセドリックの居室を目指した。

近くの篝^{かがりび}火は倒されていた。部屋の中に燈^{あか}りがなければ、テラスの位置を確認するにも少し戸惑ったかもしれない。

だが幸い、室内に燈りがあるらしく、ぼんやりとした光が庭に漏れてきている。セドリックは居室にいるのだろうか？

窓は開け放たれ、カーテンだけが閉められている。夜風^{ときおり}に時折それが揺れていた。

だが争う気配は伝わってこない。任務に就^つくにあたって、決してセドリックの近くには寄らぬよう厳命を受けている。セルジュは躊躇^{ためら}った。

何かが起きているのは判っている。ひょっとしたら賊そくはすでに殿下の元に……。

お命を奪うつもりだった場合、だとしたら間に合うまい。

バルドールの家のこと、自分の立場、王の命令——様々な人の、様々な期待や思惑が、セルジュに重くのし掛かってきた。

しかしその時、鋭い声が聞こえた。

「取り消しなさい！」

セルジュは耳を疑った。クリステル!? なぜここに? いや、こんな時間になぜ?

そこまで考えて、ぼんやりとした推測がいくつかに浮かんだ途端、セルジュは自分を抑えられなくなった。

ごめん
「御免！」

剣を抜いて一声大きく呼びかけ、テラスに上がった。カーテンを横に引くと、そのまま室内に踏み込んだ。

思ったより室内は暗かった。立つ人の姿が、すべて影に見えた。視界を助けるあか灯りとは言えば、東洋の壺つぼの中に立てられたろうそく蠟燭だけだ。これでは目が慣れるまで何もできぬ。

ぶすい
「無粋な」

静かな声が響いた。若い男の声だ。どこかで聞いて

たような気もするが思い出せない。

「貴様が牢獄の番人か」

男が言うのに応じるように他の影たちが動いた。暗い中でも金属のきらめきは見取することができる。剣を抜いている者が居るのだ。

セルジュはしまったと思った。己は月明かりを受ける位置にいる。対して襲撃者たちは薄暗い室内にいる。しかも闇のような黒い装束しょうぞくをしている。

視認という点において己が圧倒的に不利な立場に置かれていることが解った。

影の一人が動いた。この男も抜き身の剣をさ掲げている。その剣先が上がって己の方を向いた。

「クリス！ 君は無事か？」

大きな声で呼びかけた。

「わたくしはだいじょうぶです」

しっかりとした声。セルジュは安堵した。

「王をおそ畏れぬ不屈き者めら、今すぐに剣をす棄てよ。さすればその罪も軽くなるう」

「罪だと？」

男はせせら笑った。どうやらこの男がとうもく頭目であるらしかった。

「どちらに罪があるというのだ？ おんひめ御姫か？ それとも王にか……？ モーリス」

言われて体格の良い男が前に出てきた。黒装束に

覆面をしている。ブロードソードの鞘を払ってセルジュの前に突きつける。セルジュも剣を構えた。

「^{けい}卿にお任せしよう」

つまらないような言い方だった。自分が出るまでもない、そう言われている気がした。

——^{あなど}侮られている！

頭に血が昇った。目前の男を^{にら}睨み^す据えた。モーリスと言うようだが、無論偽名であろう。

「私はバルドール家のセルジュ。おそらくは貴公も名誉ある貴族であろう。馬鹿な^ま真^ね似はよせ。お互いに剣を引こうではないか」

怖れているわけではない。多少ではあるが目も慣れてきた。だがこの場にはクリステルが居る。斬り合いが始まれば、彼女の身が危うくなる。

自分一人では到底、クリステルの安全を確保できるとは言いがたいのだ。

少しは言葉が届いたのだろうか。己に向けられた^{きつさき}切先が揺らぐように感じた。相手に迷いがあるのだ。

「……貴公はバルドール伯なのか」

頭目とおぼしき男が呟いた。その一言で、心なしか黒装束の男たちに^{ためら}躊躇いのような微妙な空気が流れた。

「しかし我らはもはや^ひ退けぬ」

仲間の躊躇^{ためら}いを敏感に感じ取ったのだろう。確認をするように頭目らしき男が続けて言った。

それに応じたのかモーリスの剣先が滑るように動いた。淀^{よど}みがない。

——かなりの使い手！

思った瞬間、斬撃が繰り出されてきた。左に移動しつつそれを受けた。剣が打ち合う高い音が鳴り、火花が散った。

体勢を崩しこそしなかったが、二の腕^{しび}が痺れるほどの重さが乗った剣だった。

セルジュは驚くとともに強い焦りを感じた。他の連中も同程度の腕を持っているとしたら、自分一人ではどうにもならない。

いや、もうすでに劣勢^{ばんかい}を挽回^{ばんかい}をすることなどできぬかもしれぬ——銀光^{ひらめ}が閃き、再び剣が繰り出されてきた。

重さを乗せた一撃だが、決して全体重を掛けることのない剣捌^{さば}き。

相当にブロードソードを扱い慣れた人間でなければ無理な動きだ。

体勢を中程^{なかほど}に保ち、剣の重さだけを頼りに、振り抜く勢^{みごと}いを見事に操っている。

三合、五合と打ち合う中で、セルジュは妙な感触を持った。

この剣は……どこかで……。

セルジュは少し距離を取った。相手を観察する。
二人とも、半身に月光を浴びる位置にある。

モーリスはやや前傾しつつ、剣先をこちらの^{のどもと}喉元
に向けていた。剣を少し内へと^{ひね}捻りこむようにして
構えている。肩に力は入っておらず、がっしりした
体型の割には力みを感じさせない。

その姿には、確かに^{おぼえ}感覚があった。

「……叔父上」

かすれた声でセルジュは^{つぶや}呟いた。向けられた剣先
がぴくりと動いた。言葉よりも遥かに確かな、それが
答えだった。

驚きと、それを^{しの}凌ぐ悲しみとがセルジュを襲っ
た。

「どうして……」

声が震えた。胸が痛んだ。

庭から叫び声が聞こえてきた。剣が打ち合う音が
聞こえた。庭でも戦闘が始まっているようだ。

扉を開ける音が大きく響いた。直後室内にいる襲
撃者の一人が、剣を振り上げるのが見えた。

その近くで身を^{かば}庇うように手を差し上げる人の姿
がある。女性だ。

「クリスっ！」

叫んだ。間に合わない。

だが肉を裂く音は聞こえなかった。代わりに、剣が打ち合う高い音が鳴った。

「こりゃあどういうことだ？」

問い掛ける声。だがこの状況にしてはまったく呑^{のん}気^きとしか言えないような声。

まるで日常何でもない物事を聞くかのような…
…。

「イーヴ！」

クリステルの声が聞こえた。驚きと喜びの籠^{こも}った声だった。

「貴様も牢番の一人か？」

「何を言っているんだ？」

イーヴはまるで解らないと言ったように問い返した。そして少し男に近寄った。剣が届くかどうかという距離である。見事な間合い感覚であった。

男は何も答えず、近くに立っていた少女を庇うように後ろへとやった。今気付いたが、黒髪の少女である。噂に聞くセドリック殿下のお相手かもしれない。

少女は男のマントの裾^{すそ}を掴^{つか}んでいる。

男はそっと少女の手を取って、優しくマントから放させた。

「……御心配には及びません。すぐに片付けますゆえ、今暫^{しばら}くお待ち下さい」

今までとはうって変わったような優しい、思いやり深い口調である。

それだけで、この男が少女のことを、本当に大切に思っていることが伝わってきた。

^{さきほど}先程イーヴに剣を弾かれたのとは別の襲撃者が、再びクリステルに対して剣を振り上げた。

^{かんぞく}「奸賊の娘っ！」

イーヴが反射的に振り向いた。セルジュも駆け出そうとした。だがそれよりもモーリスの方がさらに早かった。そのブロードソードが^{ぎんこ}銀弧を描いた。クリステルへと振り下ろされようとしていた剣がそれで跳ね飛ばされ、部屋の奥へと飛んでいった。

「何をするっ！」

「……娘は関係あるまい」

押し殺した声は、やはり^{まぎ}紛れもなく敬愛する叔父のものだった。

「……どういう事情かは知らないが」

イーヴが言った。

「クリステルに手は出させない。俺の大事な人間なんでな」

大股で歩き、クリステルの前に立った。無造作な^{しよさ}所作だが付け入る隙が無い。

イーヴがかなりの使い手であることは、以前ジャン・ザ・ビオンで助けられたときに見知ってはいた

ものの、こういう駆け引きのような場に於^おいても適確な行動を取れるとは思っていなかった。少し意外に感じた。

襲撃者の頭目とイーヴとは、お互い庇^{かば}う女を背後にして向き合っていた。

「そちらの御令嬢は貴様の恋人なのか？」

男が問うた。

「違う」

イーヴの背後で、クリステルがびくりと身を固くするのが見えた。

「俺の恋人ではない。だが大事な人間だ」

「そうは見えぬがな」

男が剣を抜いた。自信のある動きだ。腕にかなりの覚えがあるのだろう。

イーヴの目が細くなったように見えた。

＊

肩から剣先に到るまでの線が、流れるように綺麗である。

ただ剣を抜いただけで、見事な存在感がある。

しかもその気配は、剣戟^{けんげき}の苛烈^{かれつ}さを帯びたものではない。どちらかと言うと優雅ささえ感じさせるものだ。静かな森のような、深みと静寂とを感じさせ

た。

できる——と、イーヴは思った。

「……大事な人間と言ったな？」

「ああ」

剣を構えながら答えた。後ろ手でクリステルを押しやった。近くに立たれては守れない。

「ならば守ってみろ。貴様の力でな」

男の剣先がイーヴに向けられた。冷たい風のような殺気が顔に当たる。額の中心に氷を付けているようだ。

これほどの相手と向き合うことは久しぶりである。

「お前、かなりの腕だな」

「いささかだが腕には覚えがある」

「いささか？」

イーヴは鼻で笑った。どうしてこう、貴族という者は持って回った言い方をするのだろうか？ 馬鹿らしい。

「お前は強いさ。だが俺はもっと強い」

「ほう……では試してみようか」

静かな言葉とは裏腹に、男は素速く動いた。靴音も立てずに距離を詰めてくると、鋭い突きを繰り出してきた。

首を捻^{ひね}って躲^{かわ}しざまに、イーヴは横^{よこ}薙^{なぎ}の一撃を見

舞った――が、躲された。男は大きく背後に身を引いてこれを避けた。並みの相手ならば腸はらわたをぶちまけているところである。

だがイーヴも躲されることは読んでいた。軽く手元で剣を返すと、下からの一撃を繰り出した。さすがにこれは避けきれずに、男は剣で受けた。

イーヴは男を蹴ろうとしたが、男は腕でその蹴りけんせいを牽制し、真横へと飛んだ。

「やるじゃないか」

イーヴは首を軽く鳴らした。だがこの程度なら、保って三十合というところか。その位で仕留める自信があった。

けれどこの男はまだ力を出しつくしてはいない。この男の力はこんなものではない。

長い勝負になるかもしれなかった。

楽しめそうだ。知らず、口元に笑みが浮かんだ。

「貴公の名を聞いておこうか」

「俺はエク族のイーヴ。勇者あかしの證を持つ者だ」

「勇者か……なるほど通りで見事みごとな剣だ」

「あんたの名は？」

「申し訳ないが名乗れぬ身だ」

「そうか。そいつは残念だ」

イーヴは本当にそう思った。

「だが安心しろ。たとえ名前が判らなくても、俺と

あんたが戦ったことは変わりがない。あんたのことは決して忘れないし、この戦いの名誉は消えることがない。あんたは勇者として戦うに足る相手だ」

それを聞くと男は剣先を下げ、構えを解いた。

「どうした？」

「……私は貴公に侘びねばならない。どうか赦して欲しい」

「はあ？ 何を言っているんだ？」

「私は貴公のことを、ただの傭われた野人かと思っていたのだが、そうではないと判ったからだ。貴公はその社会にあって尊敬を受けるに値する戦士なのだな」

「そうだ」

イーヴははっきりと答えた。謙遜する気にはならなかった。

それだけの努力をしてきた。日々、己の力を高めることだけを目的としてきた。

そして勇者の證を授かった。そこには己を超えた尊さがあるのだ。

「俺はエク族の勇者。俺に敗れても、決して恥にはならない」

男の方でもイーヴの力量を感じ取ったらしい。これだけの腕があるのだから当然だとも言えるが、わざわざそれを言明する理由が分からなかった。

剣技についての先程の言葉といい、貴族という者は、余程もったいをつけるのが好きらしい。

「貴公と剣を交えられることを光栄に思う」

「俺もだ」

男は背後の少女に振り返った。

「御姫。まことに恥ずかしき事ながら勝利を御約束することができません。もし私に万一のことあらば、仲間^{したが}に随ってお逃げ下さい。皆、信のおける同士たちでありますゆえ、決して悪いようには致しません」

少女が表情を硬くした。胸元で組み合された手が痛々しい。

「アド……」

口を開きかけた少女の口元に男は手をやった。少女に向かって、言葉を発しないように静かに首を振る仕草をした。

「御姫。まことに勝手なことながら、お願い申し上げます。どうか私に戦士として、騎士として恥じるころなき機会をお与え下さい。私は名も無き者であります。王からは賊^{そく}と蔑^{さげす}まれましょう。されど私は騎士であります」

男は剣を捧^{ささ}げ持ち、少女へと恭^{うやうや}しく差し出した。

イーヴの目にはひどく芝居掛かった光景に見えた。

馬鹿らしい。隙だらけだ。今打ち込めば容易に斃せるだろう。

だがそんなことをする気にはまったくならなかった。

どうせ長い時間ではない。待とうではないか。

この儀式が終わったとき、男はさらに力を増してイーヴの前に立つだろう。

その確信があった。期待があった。

少女の顔が歪ゆがんだ。口元を蔽おおって涙を流した。だが声はない。

きっと、いつもこうして泣くのだろう。イーヴは何となくそう思った。

男は首を垂れたまま、剣を差し出している。誰も動かない。

その場の誰もが、無言で状況を見守っているようだった。

「……許します」

少女のか細い声が響いた。

「ありがたき……」

言葉を含むように男は言い、ゆっくりと顔を上げた。

覆面をしているため顔は判らない。だが若く、秀麗な面立ちをしているであろうと察せられた。

突然少女が男の顔を抱え、その額に唇を押しつけ

た。ふる
顫えるような口づけだった。

「死なないで……」

かれん しゅしん
可憐な朱唇からは小さな、しかし精一杯の願いが
込められたつぶや
啖きが漏れた。

「もったいない御言葉……感謝致します」

男が立ち上がった。顔の正面に剣を翳した。^{かざ}

「エク族の勇者よ。お相手をお願いしたい」

「解った」

戦いの興奮に、からだ
身体がぐうっと盛り上がるように
感じたその時、クリステルが肩に手を置いた。

物凄く不安そうな顔をしている。

「なんだ？」

「……無理をしないで下さい」

「意味が解らない。だが後で話そう。今は忙しい」

「あとが、後があるのですね？」

「当たり前だ」

イーヴは口元に笑みを浮かべた。

「俺は誰にも負けない。『大いなる敵』を斃すまで
は、誰にも」

クリステルが目を大きくした。イーヴを凝視して
くる。驚きと、心配と、そしてそれ以外の何か。

様々な思いがその顔に現れているようだったが、
イーヴにはよく判らなかった。

言いたいことが数多くあるのだろう。だがクリス

テルはただ一言だけ言った。

「……信じます」

「ああ」

肩に置かれた手が離れた。イーヴは軽く剣を振り、それから男の前に立った。

「待たせたな」

「こちらこそ貴公をお待たせして申し訳ない」

「始めるか」

「お願いしよう」

男の返事が聞こえると同時にイーヴは動いた。斜め上から男の肩口を狙って剣を振り下ろす。男はこれを^{かわ}躲した。予想通り。すぐさま身を低くして、男の足元を切り払った。

しかしこれも躲された。男は宙に身を^{ひるがえ}翻したのだ。

殺気。

イーヴは左手を床について、全身を真横へと飛ばした。同時に男の剣が、今イーヴの占めていた空間を弧を描いて通過するのが見えた。

短く息を吐きながら背後に飛んで立ち上がった。だが攻撃に転じる^{ゆうよ}猶予は与えられなかった。男が前に出てきて鋭い突きを繰り出してきたのだ。

頭をわずかに動かして一撃目を^{かわ}躲した。男の剣は切り払いに来るのではなく、そのまま二撃目の突き

となって胸を襲ってきた。下から剣を跳ね上げてこれを弾いた。

男は怯まない。さらに突きを繰り返してくる。攻撃の間隔が短い。今までイーヴが体験したことのない攻撃方法であった。

頭部を狙う突きを躲すたびに、耳元で嫌な風切り音が鳴った。

胸を狙う突きを弾く。腕を、腿を、狙う突きを寸前で躲した。

だが完全には躲しきれない。傷は負っていないものの、服は何箇所も裂かれていた。

まるで銀の蛇のごとくに、男の剣は伸びてくる。

男の攻撃にわずかな間隔の開きが生まれた時を見計らって、イーヴは間合いを取った。

「大したものだな」

多少呼吸を荒くしながらイーヴは言った。

「私の剣を躲しきったのは貴公が初めてだ。その言葉、貴公にこそ値しよう」

「そうか」

今度はこちらの番だ。氣息を素速く整え、イーヴは前に出た。

鋭く踏み込んで再び横薙の一撃を加えたが、今回も男は背後に身を引いてこれを躲した。

その瞬間イーヴは剣を背後に回し、肩に担ぐよう

にすると、突然倒れ込むようにして上から振り下ろした。

腕と腕がぶつかった。

男は膝を着き、左の二の腕でイーヴの腕を受け止めていた。

すんでの所である。わずかに反応が遅ければ、男は胸元まで肩を切り裂かれていただろう。

「これをかわ躲したのはあんたが初めてだ」

「……それは光栄だ」

まさかこれも躲されるとは。イーヴは驚いていた。

お互い相手を警戒して少し距離を取った。剣を構えたままにら睥み合う。

とその時、人の気配が近づいてきた。庭からだ。

たいまつ松明もいくつか見える。二人の戦いを見つめていた室内の者たちも、それに気づいたようだった。

「勇者よ。残念だが……」

「決着はつけられないというわけか？」

「後日機会を与えられることを祈りたい」

「俺にか？ それともお前たちの神にか？」

「運命にだ」

男の言葉はイーヴには響いた。運命か……それも悪くない。

イーヴは剣を下げた。

「俺はあんたらの事情には関係ない。好きなようにするがいい」

「感謝する」

男は剣を鞘さやに収おさめた。周囲にいる黒装束の男たちが我に返ったように動き始めた。

「待て！」

一人だけいた甲冑姿かっちゅうの男が叫んだ。見たことのある顔だ。

たしかジャンザビの中で出遇であった——セルジュとか言ったか。クリステルとは友人であったはずだ。

「お前たちを行かせるわけにはゆかぬ！」

セルジュは剣を構えた。だが黒装束の男たちが素速くその周囲に立った。皆、剣を抜いている。しかも突きに入る体勢を見せていた。セルジュからは見えない位置の相手もあり、危険な状況だった。

助けに入るにはイーヴの場所からでは間に合わない。

「やめろっ！」

それを見てイーヴと剣を交えていた男が叫んだ。だがもう配下の黒装束は攻撃の動作を起こしている。

「セルジュ！」

クリステルも叫んだ。黒装束の男たちが抱き付くようにセルジュに近づいた。肉を深く突き刺す音が

した。曇^{くぐも}った呻^{うめ}き声。

黒装束の男たちが離れると、一人の男が崩れるように床に倒れた。それはセルジュではなかった。

黒装束の内の一入だった。

第二章 第十一節

——困まれた！

一瞬の間であった。普段ならばこんなことはない。賊とイーヴの、あまりにも見事な^{みごと}剣戟^{けんげき}に目を奪われた^{せい}所為か……。

黒装束の男たちはもう動き出している。いくつもの^{きつさき}切先が己に向けられているのを感じた。

恐怖が雷のようにセルジュを撃った。だが怖れている隙すらもないほどに時は無かった。

剣を振るって左右の突きを叩き落としつつ、テラスの方へと逃げようとした。黒装束の男たちの体がぶち当たってくる。衝撃。頭の中が白くなった。

やられたと思った。だが激痛は襲っては来ず、替わりに背中から抱き付いた男が、呻き^{うめ}声を漏らしながら床に倒れた。

「叔父上っ！」

セルジュは叫んだ。背後からの剣をセルジュに替わり、その身に受けたのだ。セルジュは剣を投げ出し、叔父を抱き起こした。

クリステルが悲鳴を上げた。

「モーリスっ！」

^{とうもく}頭目が叫び、クロードの^{そば}傍に^{ひざまず}駆け寄って跪いた。

「今肩を貸す。すぐに医者のところへお連れしよ

う。それまでは堪^{こら}えてくれ」

頭目の声には激しい焦りの色があった。

仲間を刺してしまった男はぶるぶると顫^{ふる}えている。

「剣を収^{おさ}められよ！」

頭目に言われ、男ははっとしたようだった。何度も頷^{うなず}いた。ぎこちない動作で剣を鞘^{さや}に収めた。

「行かれよ。姫様を……お願い申す」

懇願するようにクロードが言った。頭目がクロードの目を見つめた。わずかな時間、強い視線が交差する。

「……お赦^{ゆる}しあれ」

頭目はクロードの手を握った。そして苦しみを振り切るように立ち上がると、少女の元へ戻った。

その手を取り、テラスへと導いた。黒装束の男たちが二人を守るようにして後に続いた。

「エク族の勇者よ。機会があったならば、その時に決着をつけよう」

「ああ」

イーヴが頷^{うなず}いた。

「姫様！」

クリステルが叫んだ。

「いけません！ お行きになつては……！」

庭に並ぶ松明^{たいまつ}の光が部屋にまで差し込んできてい

る。今や人の姿を見て取るのに、不便がないほどの
あか
燈りだ。その中心に、頭目と少女とが浮かび上がっ
ている。

美しい少女だと思った。^{はかな}儚げで、愛らしい。

少女はクリステルに微笑んだ。寂しそうな、でも
ほんの少し幸せそうな笑いだった。

「……さあ、参りましょう」

少女は頭目の言葉に従うように、その身を預け
た。頭目は少女の体に手を回して抱き寄せ、庭に向
かって歩き出した。

黒装束たちがそれに従う。

何とかしなければ。事態が呑み込めぬが、このま
まにしてはいけない。それだけはセルジュにも判っ
た。

「……セルジュ」

叔父が呼びかけてきた。呼吸が荒い。かなりの深^{ふか}
で傷^でのようだった。

「行かせて差し上げろ。あのお方は、今までずっと
……不幸でいらした」

「叔父上、どうか口をおききにならぬようお願いま
す。すぐに医者をお願いしますから。誰か！ 誰か医者
を！」

大声を出したが、誰も^{こた}応える者がいない。庭の^{たいまつ}松明
が移動していく。どうやら襲撃者たちの一味だった

ようだ。

「俺が人を呼んでこよう」

言うが早いか、イーヴは部屋を出て行った。クリステルが^{そば ひざまず}傍に跪いた。

「……クロード^{おじ}小父様ですね」

ささやくように尋ねてきた。セルジュは頷いた。腕の中で叔父の^{からだ}身体が脈打っている。支えた腕が^{あふ}溢れる血で濡れていくのが判る。物凄い^{ふかで}深傷である。部屋の^{あか}灯りは弱く、松明の群れも去ってしまった為に、頼りになるのは月明かりだけだった。

クリステルがカーテンを思い切り引いてくれた。セルジュとクロードのところまで月明かりが届いた。

それでぞっとした。

足元はすでに血で黒くなっていた。^{ふかで}深傷どころではない。致命傷である。クリステルが息を呑む気配が伝わってきた。

助からない。

暗闇が、^{うず}渦のような恐ろしい闇が、セルジュの胸を引き裂いた。

なぜこんなことに……なぜ叔父がここにいるのだ！

叫び出したかった。だがセルジュは歯を食い縛った。

己が、己が冷静にならなければ……。

クリステルは立ち竦^{すく}んでいる。無理もないと思った。

「済まないが血を止められるものが欲しい。布か何か持ってきてくれないか？」

できるだけ冷静な声を出そうとしたが、みっともないほどに声が震えた。恐れと、悲しみが魂を焼いている。そう感じた。

「……お前が居るとは、思わなかった」

「どうか喋^{しゃべ}らないで下さい」

「いや……言わせてくれ」

苦しい息の下でも、叔父の声には穏やかさがあった。それが不思議だった。恐ろしかった。

「あのお方がセドリック殿下だ……セリーヌというのが、本名だと聞いた」

セルジュは驚愕した。なんと、それでは先程の少女が、警護すべき殿下だったということになる！

叔父は苦しそうに笑った。

「儂^{わし}もな……驚いたよ。始めから、バルドールに、勝ち目はなかったのだ……」

「それでは、それでは我らは無駄な争いをしたのですか？ 我らバルドールの一門は、勝ち目の無い戦いに賭けた愚か者だと？」

「そうは言わぬ……勝ち目がなかったのは、事実だ

が……当時はまったく知らなんだ。言っても詮^{せん}無き
こと……運が、無かったのだ……」

「そんな……」

それではなんのために。

なんのために屈辱に耐えてきたのか。始めから負
けると判っていた戦いに賭け、勝手に負けて家を傾^{かたむ}
かせたというのか。

それでは、それではいったいなんのために……。

「……誰も、誰も怨^{うら}んではならぬぞ。我らは自らで
決め、行動したのだ……すべての責はバルドールに
ある……」

「しかし叔父上……それではあまりにも……」

何ひとつ、バルドールには落ち度がなかったと言
うことではないか。むしろ嵌^はめられたに等しい。

それでも「怨^{おっしや}むな」と仰るのか。

「真実を……知らされて……儂は決心した。せめ
て、せめて殿下だけは……姫様だけは……お助けし
ようと……」

クロードは咳^せき込んだ。口から血を吐いた。人が
駆けてくる足音がした。だがどうでもいい。今は叔
父と……叔父の言葉を聞かなくては。

「……お気の毒な方だ。政争に利用され……御自分
の、幸せを、知らずに育てこられた……」

「あの男は何者ですか？」

尋ねたが、叔父は微^{かす}かに笑って答えようとしな
い。

「言えぬ。言えぬよ……」

「誰も部屋に入れるなっ！」

背後で大声がした。ギユベール^{きょう}卿の声だ。

医者が傍^{そば ひざまず}に跪いた。だが一目見て顔が暗くなっ
た。判っている。そんなことは疾^とうにセルジュには
判っているのだ。

レイモンを見上げた。その表情に動きはなかった
が、恪敏^{かくびん}をもって鳴る人物である。

何が起こっているか、おおよそ察してはいるよう
だった。

「名に恥じぬよう……生きてきたつもりだった。だ
が……所詮^{わし}……儂は、道化^{どうけ}であったようだ……お前
は、儂のようにならぬよう……注意するのだぞ…
…」

「叔父上は私の誇りでございます。誇り高く、礼節
と慈悲、勇猛さを常にお示しになりました」

「もったいない……言葉だ」

「本当でございます」

叔父はセルジュの憧れだった。騎士として、貴族
として理想だった。

陰で馬鹿にする者たちがいたのは知っている。だ
が恥知らずはその者たちだ。

叔父は決して、愚か者ではない。恥ずべきことなど一度もしたことはなく、常に正しい道を歩んできた。

それがなぜ、このような最期を迎えねばならないのか！

「儂はもう疲れた……宮廷は……すっかり、変わってしまった……儂の、居るべき場所など……^と疾うに無かったのだ……」

「叔父上……」

^{すす}啜り泣きが聞こえた。クリステルだった。ギューベル卿が肩を抱こうとしたが、それを拒み、再びクロードの傍に跪いた。

「小父様……どうか……どうか^{ゆる}赦して……」

「クリステル……お美しくなられた……今まで……済まないことをした」

「いいえ。いいえ。解っております。小父様のお気持ちはいつも、痛いほどに解っておりました」

クリステルは激しく首を振った。

「お父上に似て……ご聡明ですな」

叔父が腕を動かした。クリステルの手を取った。

「本当は……解っていたよ……認めて、やるべきだったのだ。儂の、愚かな……^{こたわ}拘泥りが、お前たちを……遠回りさせてしまったのかもしれぬ……」

そしてセルジュの手も取ると、クリステルの手と

組み合わせさせた。

「叔父上……」

「お前の気持ちは、解っていた……反対して……きたのは、儂の拘泥こだわり……愚かな拘泥こだわりだ……お前を縛って、済ゆるまなかった……赦ゆるして欲しい」

クロードは再び血を吐いた。

「あまり喋しゃべらせるのは……」

控えめに医者が忠告をしようとしたが、すぐにギュベール卿が医者の肩に手を置いて立たせた。医者が出て行くとギュベール卿は扉を閉め、その前に立った。

イーヴは部屋の暗がりに立っている。まるで、そこに居ないかのように気配を消していた。

「セルジュ……」

「はい」

「儂はもう逝ゆく……」

「……」

「バルドールを……頼むぞ……」

「はい！ 必ず！」

力強く答えた。それしかできることはなかった。

叔父の目は朦朧もうろうとしてきている。

「必ず、私がバルドール家を守ります」

耳元でもう一度言った。

叔父は安堵したような、静かな、深い息を吐い

た。

それが最期だった。

「叔父上っ……」

セルジュは覆面に手を掛けた。こんなものを身に付けたままで死なねばならぬとは……あまりにも……あまりにも……。

すぐ傍^{そば}でクリステルが泣いている。己も咽^{のど}が顫^{ふる}えているのが判った。だが声は出ていない。大声を上げて泣くことなど、許されない。己は騎士なのだ。

だがとめどなく涙^{あふ}が溢れた。溢れて溢れて止まらない。頬を伝い、頤^{あご}を伝い、首筋にまで流れてくる。

「……っっ!!」

声が漏れそうになった。口を利いてはいけない。今は一言も喋^{しゃべ}るべきではない。

クロードの亡骸^{なきがら}を腕に抱き、セルジュは無言で泣き続けた。

＊

扉が開いて兵が入ってきた。随分^{ずいぶん}と遅い到着だとイーヴは思った。斬り合いは結構前から起こっていたらうに、こいつらは何をしていたのか。

室内に踏み込もうとする兵を、レイモンが留め

た。

「ギュベール様……」

「今はいい」

「首謀者の一人が^{ひんし}瀕死だと聞きましたが」

「もう亡くなったよ」

「では正体を確かめねば……」

「その必要はない。ドゥブレー家の残党だ。表の者たちと同じだよ」

「はあ……」

一応この兵が^{とうもく}頭目らしい。納得できないような様子で立っている。

「あまり興味を持たぬ方がいい」

レイモンが言った。

「君のためにならない。意味は解ると思うが」

頭目と思しき兵は難しそうな顔をして立っている。迷っているようだった。

「この場は私が引き受けよう。君に迷惑はかからないようにすると約束する」

「ギュベール様がそう仰るのでしたら……」

「ありがとう」

兵たちは退室していった。レイモンが再び扉を閉めた。

「セルジュ、その亡骸が^{なきがら}クロード殿だと判ってはまずい。覆面を外すのはやめるんだ」

レイモンの言葉に、イーヴはかなり驚いた。

「あんた何を言ってるんだ？」

黙っているつもりだった。人の悲しみには介入したくない。何を言ったところで相手に替わってやることはできないのだから。

だからいつも手伝える仕事だけをこなして黙っている。それがイーヴの流儀なのだ。

「この男は恥ずべき死に方をしたのか？」

「恥ずべき死ではない。だがここで死んでは困るのだ」

「誰が困るんだ？」

「セルジュがだ」

セルジュが身を固くした。腕で涙を拭^{ぬぐ}って立ち上がった。

^{おっしや}「仰る通りです。ギユベール卿」

「……クロード殿は^{りょうゆう}猟遊中に事故死、とでもする外^{ほか}無い。ここで死んだのは名も無き^{そくと}賊徒。それでよろしいな？」

「お父様！」

「お前にも解っているはずだ。クリステル」

言われてクリステルは^{うつむ}俯いた。肩が震えている。

なんだこれは。

こいつらはなんだ。

なぜそんなことができる。

なぜそんなことに我慢できる。

「おい……」

声に忿怒ふんぬが籠こもった。怒鳴りつけてやりたい気持ちだった。だが堪こらえた。

己は部外者だ。当事者たちが納得している以上、口出しをするべきではない。

レイモンがこちらを向いていた。厳しい顔をしている。表情に何も表すまいとしているようだ。だがその目には深い、深い悲しみの色があるのにイーヴは気づいた。

イーヴは言葉を呑み込んだ。何も言わずそっぽを向いた。

気に入らない。馬鹿げている。大切な人の死まで、駆け引きに利用しなくてはいけないのか。

そのしきたりが気に入らない。貴族とは馬鹿の集まりだ。下くだらない。

「セリーヌ様はお逃げになったのだな？」

「ああ、その窓からさっさと出て行ったぜ」

「君も見ていたのか？」

「俺には関係ないからな」

レイモンは溜息ためいきを吐ついた。

「私が追います。許可をお与え下さい」

セルジュがレイモンに願い出た。イーヴはまたも怒りを覚え、加えて呆あきれた。

「お前には身内の^{とむら}弔いがあるだろう」

「イーヴ。私は姫を追わなくてはならない。それが王より^{さず}授かった役目なのだ」

「……それは身内の死よりも重いものなのか？」

「比べられるものじゃないさ」

イーヴは肩を^{すく}竦めた。もはや理解しようという気も失せた。

「勝手にしろ。俺は寝る」

「待って下さい。イーヴ……セルジュとて^{つら}辛いのです。そんな言い方はしないで下さい……」

「ならばなぜ弔いをしない？」

イーヴはクリステルを真っ直ぐに見つめた。

「俺なら仕事なぞ放り出す。お前たちはそうしない。お前たちの事情があることは解っている。だが俺には納得できない。だからお前たちは好きにしろ」

クリステルの顔が引き^つ攣った。また、イーヴの胸に痛みのようなものが走った。

「……すまない。お前を傷付けるつもりはなかった」

「いえ……」

「……俺にできることは無いようだ。部屋に帰ることにする」

「……はい。おやすみなさいませ」

イーヴは部屋を出た。扉は開け放したままだ。暗い廊下を早足で歩いていく。

おもしろくない。

悲惨な場に居合わせて、愚かな言動に腹を立てたとはいえ、クリステルを傷付けてしまった。それが気に入らない。

なぜこんなにも苛^{いら}つくのか——疑問を感じた途端、イーヴは答えを引き当ててしまった。

己と同じだからだ。

己とて、「大いなる敵」を斃^{たお}すことに取り憑^つかれているではないか。

その事のためならばどんな犠牲でも払うだろう。どんな犠牲でもだ。

それは、他の者から見れば意味の無いこと、場合によっては愚かで下らないことであるのかも知れない。

何が大切なことなのか、何が重要なことなのかは本人にしか判らない。本当には、本人にしか判らないことなのだ。

齒を食い縛って涙を流していたセルジュ——。

それでも「追う」と言ったのだ。それは王から命じられたからではない。

そのことが目の前の死者との絆^{きずな}だからだろう。

——悪いことをした。

己は考えが足りなかった。あの場での振る舞いはクリステルだけではなく、セルジュを傷付けたことだろう。あれは恥ずべき行為だった。

自分自身に腹が立つ。

イーヴは髪をぐしゃぐしゃと掻き上げた。気分がささくれ立っている。素振りでもしたいところだが、剣を抜く気にもなれない。

今夜は寝付きが悪くなりそうだ。だが諦めて、床とこに就つくしかない。

外に出ると、月が大きく天に浮かんでいた。あか灯りは持っていないが、ギュベール邸はすぐ近くだ。これなら問題なく着けるだろう。

不愉快な気分のまま、イーヴは夜道を急いだ。

第二章 第十二節

レイモン・ギュベールは自家の家臣を割^さいてセルジュに与えるだけでなく、手続き上の一才を素速く纏めて完了させてくれた。

元々の王家の邸の警護兵はもちろん、ブランドシェで港の警護にあたっていた兵などからも一部を供出させ、全てがセルジュの指揮下に入るように取り計らってくれたのだ。

これでブランドシェのほぼ全域に監視網を敷くことができた。

だからといって安心はしていない。セドリック殿下を攫^{さら}った賊徒がいつまでもこの港町に停まるとも思えぬし、いくらレイモン・ギュベールの後押しがあるとはいえ、今の体勢をいつまでも保ってはられないからだ。

——できれば数日、長くても一週間以内に勝負を付けなくてはならない。

セルジュ自身もそう考えている。内心の焦りは相当なものがあった。

叔父の死は、その事実だけを書面で実家に伝えた。

宛先は母でも祖母でもない。家宰^{かさい}のカントループである。

彼ならば文面からただならぬ様子を感じ取るだろうし、行間からセルジュの意図をを読み取ることも造作ないであろう。

詳しい話は帰館してから告げるつもりである。真実の全てを書面で伝えるのは危険であるというだけでなく、セルジュ自身あまりにも辛く苦しく、とても書くことができなかつたからだった。

それでも翌日にはもう涙は流れなかつた。セドリックを、いやセリーヌ王女を取り戻さなければならぬという責任感が支えとなっているのかもしれない。

しかし胸の奥からはとめどなく何かが溢れていた。

それは血のようでもあり、魂のようでもあった。心が引き裂かれる悲しみというものをセルジュは初めて知った。

——父上に続き、今また叔父上までも……。

いったいバルドールに何の咎^{とが}があるのか、これが神の仕打ちであるとしたらあまりにも厳しすぎる。

「……怨^{うら}んではならぬ。レイモンも、ロドルフ陛下も決して怨^{うら}んではならぬ」

父ジョルジュもそう言って死んでいった。

今では家に残っているのは己と、母と祖母と、そして幼い妹が二人だけである。

倒れるわけにはいかない。

何としても己が倒れるわけにはいかない。

たとえかつての栄光を取り戻すことが叶わなかったとしても、バルドールを己の代で終わらせることだけはできない。

急遽準備された執務室の中で、セルジュは壁に貼られたブランドシェの地図を睥んでいた。

潜伏先になりそうなところには既に目星を付けてある。今はそれらの場所へ差し向けた兵達による報告待ちの状態であった。

無論、潜伏先が判明すれば己が先頭に立って踏み込むつもりである。

セルジュは下着の上から軽い^{がいと}外套を羽織っただけの姿である。下着と言っても鎧の下に着込む物であり、軍装と言っていい。

さすがに甲冑こそ身に付けていないが、いつでも装備して飛び出せるように準備してあるのだった。

「閣下」

扉の前で声がした。何か報告があったのかも知れない。

「入れ」

許可を与えるとセルジュ付きの兵が室内に入ってきて敬礼した。

「殿下を攫った賊徒どもの居所が判明いたしましたし

た」

殿下か……正しくは姫と言うべきであろうな。内心そんなことを考えながらセルジュは頷いた。

「兵に準備をさせよ。指揮は私が執^とる」

「はっ」

再び敬礼をすると兵は退出していった

＊

海沿いの館、あるいは市の中心部から離れた建物や神殿などを想像していたのだが、セルジュの予想は外れた。

セドリックを攫^{さら}った黒装束の一党が潜伏していたのは、意外にもブランドシェの繁華街にほど近い場所であった。小綺麗な東部風の館であり、元は貴族の物ではなくてブランドシェのさる豪商の持ち物であったという。

現在の所有者もやはり商人ではあるが、ブランドシェの人間ではなく東部の人間で、年に数回ほどこの邸を利用しているということだった。

その商人が何者であるか、セドリック王子を推戴^{すいたい}していたドゥブレー家との繋がりはあるのかどうか、それらのことはまだ分からない。

今は賊徒ども取り押さえてセドリック王子、いや

セリーヌ姫を取り戻すことの方が大事だ。

「兵たちの配備終わりました」

副官がセルジュの元に来て報告をした。

「気取られてはいないだろうな？」

「邸の方には何の動きも見られません」

副官はにこりともせずそう答えた。セルジュは頷いた。

「よし。正門から入る。お前は残りを率いて周囲の警戒にあたれ。万が一にも逃がすな」

「ははっ！」

けして大きくはないが気合いを感じさせる声で答えて副官は敬礼をした。

兵を連れて邸の正門に回る。兵の数は全部で十一人。

セルジュを加えると十二人になる。邸の中にどれだけの黒装束が潜んでいるか知らぬが、これならば十分^こ伍することができるだろうと思えた。さらに用心のために予備の兵力を付近の建物などに配置してある。

「この邸の中にいる者どもは恐れ多くも王に弓引く^{やから}族である。容赦をする必要はないがひとつだけ注意しておく。中に捕らわれている女性が一人いるが、彼女に決して危害が及ばぬように心せよ」

セルジュが注意を促していると兵の一人が質問し

てきた。

「その御婦人は何者でありますか？」

セルジュは「貴様が知る必要はない」と切り捨てようと思ったが、すぐに考え直した。

隠すよりもむしろ情報を与えた方がいいと判断したのである。

下手に隠そうとすれば要らぬ臆測を生むし、それがどんな問題に結びつかないとも限らない。

「うむ。このことは他言無用だが、彼女はセドリック王子の想い人であるということだ。もしも彼女の身に害が加えられることがあれば、殿下はさぞお嘆きになることであろう」

「はあ……」

兵は納得がいかぬという様子であった。セルジュにはそれも判る気がした。

セドリックは王位争奪戦に敗れた敗北者なのだ。殺されぬまでも塔や地下牢に繋がれていてもおかしくない。

それが幽閉とはいえ王家の別邸を与えられて悠々と暮らしているのだ。

おまけに女にまで身边に侍らせているとなれば、怪しむどころか反感を持たれても不思議ではない。

それが「彼」自身には、まったく責任のない事柄であつてもだ。

「お前たちも不満であろう」

そのことを汲み取るように、セルジュは兵たちに向かって直接的な言葉を投げかけた。

「それは私にもわかる。私だって乙女を侍らせて昼間から酒を飲んで暮らしたいからな」

肩をすくめて薄ら笑いを浮かべて見せる。演技ではあったが上手くできたかは判らない。クロード叔父が目の前で無残な最期を遂げてからまだ数日も経っていないのだ。

たとえ演技ではあっても上手く表情を形作れる自信がない。どんな風に顔を動かすべきなのか、そんなことを考えてしまう。

兵たちの共感を得ることがいかに大切かを教えてくれたのは叔父だった。

もっともそのためには多少あざとい手段、例えば演技をすることも手であるとは教えてくれなかったが。

それを己に教えてくれたのは家宰^{かさい}のカントルーフだった。

芝居が功を奏したのか、セルジュは兵たちの間に気易い空気が生まれるのを感じた。それを感じつつ言葉を続ける。

「とはいえ仕事は仕事だ。陛下ご自身がセドリック殿下についての今のありようをお決めになったので

あるから、臣下である我らが異を唱えることなど許されぬ。それにだ、囚われの乙女には何の罪もない。彼女を怪我させぬよう助け出すのは当然のことである」

共感を得るための演技と区別するように、セルジュはやや厳しい口調を用いた。

「セドリック殿下のご意志とは関係なくな」

軽く溜息を吐いて締めくくった。

……まさしく「殿下のご意志とは関係なく」だ。己で言っているだけでも滑稽だと感じた。

「皆用意は良いな？」

無言で頷く兵士たち。邸の中に踏み込む部隊なので、^{ながえ}長柄の武器を持っている者は一人もいない。皆、^さ剣を提げている。

「ゆくぞ！」

気合いを籠めてセルジュは飛び出した。

セルジュが先頭である。すぐあとに門砕きの^{つい}鎚を持った兵二人が続く。

邸正面の門柵が目に入る。細かい細工が遠目にも見て取れる^{しょうしゃ}瀟洒な門だ。

^{きゃしゃ}華奢とも思えるその門柵に門砕きが叩きつけられる。黒塗りの門柵は一撃で大きく歪み、二撃目で鍵が弾け飛んだ。

敷地内にセルジュと兵達が入り込む。その時、窓

に人影が見えた。

「盾を掲げよ！」

反射的にセルジュは命じて自身も盾の陰に身を隠した。直後、盾を叩く感触があった。危なかった。盾に矢が突き立っている。

——弩ではない。

セルジュは安堵した。弩であったら盾ごと撃ち抜かれていただろうからだ。

「賊は弓を持っているぞ！」

近くで兵の一人が叫ぶ。仲間たちに注意を促すためだ。

邸は正面に見える母家と、左手の別棟とに分かれていた。セルジュは一瞬躊躇したが、やはり母家の方に行くべきであろうと思い、兵の半数を連れて母家に踏み込んだ。残りは別棟に向かわせた。

「邸内にある者たち！ 動くな！」

入ってすぐの場所は広間だった。その中央に立ってセルジュは叫ぶ。

「抵抗は止めよ！ ロドルフ陛下の御名において命ずる！」

素速く兵たちが左右に散って母家の搜索を始める。セルジュは背後に二人の兵を連れて階段を駆け上がった。

二階の廊下を進んで少し開けた場所に出た。大き

な絵が向かいの壁に掛けてある。

黒装束の男が二人現れた。剣を抜いている。

相手に言葉はない。セルジュにも言葉をかけるつもりはなかった。

警告は既にすませてある。

斜めから切り込んできた剣を受ける。同時に右に体を開いて回り込み、左手で相手の首元を強く打った。手甲を付けた腕による重い一撃である。呻き声を上げながら黒装束の男は倒れた。

もう一人は^{てだ}手練れであった。素速く片方の兵の太腿を剣で傷つけると、もう片方の兵の剣を^{かわ}躲した。そしてそれ以上の戦いを避けるように逃げだした。

「待て！」

セルジュは怒鳴ったが、黒装束が立ち止まるはずもない。

「ぐ……」

傷付いた兵が床に膝をついた。もう一人が傷の状態を確認ようとかがみ込む。

「負傷者は邸の外に避難させよ」

無事な方の兵に命じてセルジュは黒装束を追った。

黒装束は走りながら廊下の角を曲がった。駆ける足をゆるめる気配はない。

もしあの角から槍でも突き出されたら……。

そう考えると肝が冷えたが、セルジュも足をゆるめることはせずに廊下の角を曲がる。

伏兵に^あ遭わずに角を駆け抜けた。

邸の外周に沿っているのだろうか。少し長い廊下だった。廊下の先の扉を開けて黒装束の姿が室内に消えるのが見えた。

扉の少し手前でセルジュは足を止め、そこから室内の気配を探ろうとした。体を前に傾けた途端、

「入ってきてくれないか」

部屋の中から若い男の声で呼びかけられた。

意表を突かれてセルジュは驚いたが、なぜか^{ためら}躊躇う気持ちが生まれてこなかった。

扉の握りを回して室内に入ると、そこは南向きとおぼしき明るい部屋だった。

部屋の入口を入れて直ぐ隣の壁際に黒装束の男は立っていた。セルジュはぎょっとしたが男に攻撃の意思はないようだった。剣も鞘に収められている。

「ようこそ。バルドール伯爵」

セルジュを室内に招いたと同じ声が、開け放たれた窓の^{そば}傍から発せられた。

窓の傍には椅子とテーブルが置かれており、そこに二人の人物が席に着いていた。

一人はセドリック、いやセリーヌ王女であった。もう一人は若い男であり、セルジュには見覚えも

あった。

「……エーメ卿」

男はアドリアン・エーメ伯爵であった。

常に華やかな噂には事欠かぬ男であり、夜会や音楽会など宮廷の催しでは最も目立つ者の一人である。

色々と派手な噂をセルジュも聞き及んではいたが、まさかセドリック王女を拉致するという暴挙に出るとは思わなかった。

少なくとも無法なことはしない男だと思っていたのである。

「まずはその無粋な道具を仕舞ってくれないか？
御姫がおられるのでな」

セルジュは無言で剣を鞘に収めた。つかつかと二人の傍に歩み寄るとセドリックに向かって膝をついた。

威圧しないように己の身を低くしたが目は真っ直ぐにセリーヌを見つめた。

「セドリック殿下。王家の邸にお戻り下さい。今ならばまだ何事もなかったことにできまするゆえ」

セドリックという単語を耳にした途端に少女の顔が揺れた。悲しみとも諦めとも取れぬものが美しい顔を曇らせる。

「バルドール伯。できればセリーヌ姫とお呼び差し

上げていただきたい」

控えめだが情熱の感じられる口調だった。セルジュはそれには答えずにエーメ卿に問うた。

「なぜこのような真似をなされたのか？」

「その前に伯にお尋ねしたい。クロード殿は……どうされた」

叔父の名を耳にした瞬間、セルジュは全身が熱くなるのを感じた。怒りと悲しみが魂の傷口からまた血を滴らせる。

エーメ卿の質問には真摯な響きを感じられた。

そうでなかったら己は我を失っていたかもしれない。

セルジュは己を落ち着かせるために一度深く呼吸した。

「……叔父上は亡くなられた」

「そうであったか……」

エーメ卿の秀麗な顔に強い悲しみの色が浮かび上がった。どういう経緯があったのかは解らないが、叔父とエーメ卿との間には強い繋がりがあったのだろう。

それがセドリック奪還を通じた仲間意識だったのか、それともそれ以前から二人の間に友情があったのかは解らない。生前の叔父がエーメ卿との関係を語ったことはなかったからだ。

ただし、エーメ卿が妙な噂を立てられるたびにクロード叔父は「悪い男ではない」と言っていた。

だからおそらく、二人はセドリック奪還計画を通じる以前から付き合いがあったのではないだろうか。

そしてあの叔父が認めていたのだとすれば、エーメ卿は信用のおける人物だということになる。

エーメ卿は悲しみをこらえるように暫し瞑目した。

「立派な方であった」

しかし目を開いた時にはもう悲しみの色はなかった。

悲しみを越える情熱がエーメ卿を動かしているのだと感じた。

「始めの質問にお答えしよう。私とクロード殿がこのような暴挙に及んだ理由はただひとつ、他に手がなかったからだ」

「卿は陛下^{けい}を信用しておられぬのか？」

「信用するかしないかで言えば、残念ながら信用はできないと言うしかないな」

予想していた答えであった。

「王の慈悲深さとやらを耳にするたびに思うことだが、五年も御姫を幽閉したことをどう説明するのだ？ 我々がお救いせねば、それこそいつまであの

邸に閉じこめておくつもりだったのだ？ 許されるものならば直に王にお伺いしたいものだ」

「なるほど卿の言われるとおりであるかも知れぬ。だが、だからといって卿の行動が正当化されるわけではあるまい。王家の邸を襲って殿下を奪還するなど臣下にあるまじき行いであろう」

セルジュはエーメ卿を弾劾するつもりはなかったが、立場上どうしてもこのような言い方になってしまう。

エーメ卿は寂しげに首を振った。

「バルドール伯。貴公はまだお判りになられぬようだ」

「何がだ」

「陛下を信用するしないの問題ではない。私は見過ごせなかった。クロード殿もだ。始めに言ったであろう？ 他に手はなかったのだ」

セルジュは唇を噛みたくなった。話し合いという段階を越えているからこそ彼らは行動したのであるうし、己も今ここに居るのだ。

だからこそクロード叔父も死ななければならなかったのだ。

「バルドール伯の立場は理解しているつもりだ。だがその上で言おう。我々と共に来てはくれないだろうか？」

想像もしない提案であった。驚きに目を見開きながらセルジュは次の言葉を待った。

「ヴァルカンティには御姫の居場所はない。この五年でそのことがよく判った。そしてドゥブレー家にもな……伯にも想像が付いているだろうが、今回の件ではドゥブレー家の方々のご協力を受けている。いや、少なからずお力をお借りしていると言うべきだな。そして我々はヴァルカンティを離れるつもりなのだ」

「祖国を捨てられると言われるのか……」

「捨てるさ。己の居場所のない国など、不要だとは思わないか？」

「エーメ卿の居場所がないわけではあるまい」

「私の居場所は御姫の近くにしかありえない。だから御姫を^{ないがし}蔑ろにする国には私の居場所もないということさ」

セルジュはセリーヌ姫に目を向けた。姫は静かな表情でセルジュを見返してくる。

その顔に悲しみとも諦めともつかぬものが見えるような気がして、セルジュは目を合わせていられなかった。

それはセルジュが見たくない表情だった。母を、祖母を思い出してしまうからだ。

「御姫と共に私はヴァルカンティを捨てるつもり

だ。この国には……我々の居場所はない」

エーメ卿は悲しげに微笑んだが、国を離れるということに関しては完全にふっきれているようでもあった。

そしてセルジュに問いかけてきた。

「バルドール伯。王がなぜ貴公を近衛にお召しになったか、お考えになられたことは？」

胸がどきりとした。その質問の持つ意味は重かった。

近衛として仕えるよう命令を受け取った時にも考えた問いではある。

だが、その時と今とでは状況が全く違う。

もしも……王がエーメ卿一党の動きをあらかじめ掴んでおられたとしたら？

クロード叔父がエーメ卿と結託していることを知っていて己を取り立てたのだとしたら？

それはクロード叔父を牽制し、エーメ卿一党の力を削ぐためではなかったか？

いや、それどころかバルドールを取り潰す準備でさえあったのかもしれぬ。

そんな恐ろしい仮定が次々と心の中に浮き上がってくる。

「バルドール伯。席にお着きになった方がいい」

「いや……」

断りかけたが、テーブルの上に手をつけていた。

驚いた。眩暈を感じたわけでもない。体ではなく、心が支えを必要としているのだと思った。

「お顔の色がすぐれぬように見受けられますが…
…」

控えめな声だった。セリーヌ姫が言葉を発したのだ。

声を耳にするのは初めてだった。それとも先日の襲撃の時に声を聞いていたろうか？

いや初めてだ。姫の声を聞くのはこれが初めてだった。

セルジュは顔をあげてセリーヌ姫を見た。本当に心配げな様子だった。

心根の優しさが面に表れておられる……セルジュはそう感じた。

「お心遣い感謝いたします。姫」

セルジュは礼を言って席に着いた。この先どんな話になるかと思うと、立ったまま聞くのは恐ろしかったというのもある。

「ロドルフ王は非常に聡明なお方だ。それは私も認める。遠からず名君と呼ばれることになるであろうな。何がご自分にとってもっとも得であるかどうかを、常に理解しておられる」

そこでエーメ卿は何か迷うような表情になった。

逡巡しているようだった。

「……失礼ながらバルドール伯にも、ヴァルカンティにとどまるべき理由はないと思われるが」

バルドール家の内情を慮るおもんばかような物言いに、セルジュは神経がささくれ立つのを感じた。

離れから出てこなくなった祖母の姿を、疲れを隠すようにして妹たちの相手をしている母の顔を、実直なカントループの仕事ぶりを思い出した。

客足が絶えても広間には季節の花が飾られ続けた。

庭師のハンスはひときわ花に情熱を注いだ。

光に輝く薔薇の美しさを思い出した。それは少しでも主人一家を明るくしたいという、無骨な庭師の心遣いだった。

皆、悲しみに耐えていた。言葉に出す者はいなかったがそれは痛いほどに伝わった。

「……我らの居場所があるかどうかは我らバルドールが決めること。卿には関係あるまい」

「これは失礼した。どうか謝罪させてほしい」

エーメ卿は席から立って謝罪の礼をした。

右手を肩に寄せて腰を折り、胸を引くように頭を下げる。

ごく一般的な礼の作法であったが、これほど優雅に行なわれるのをセルジュは初めて見た。

エーメ卿が人々の目を奪う理由の一端が判ったような気がした。

「いや……こちらこそ失礼した」

きつい言葉になってしまったことをセルジュは恥じた。

「卿のお心遣いだけありがたく頂いておきたい。しかし私は王の近衛なのだ。卿の言われるとおりにな……陛下に、ヴァルカンティに忠節を尽くす義務がある」

「そうか……残念だ」

セルジュは無言で頷いた。エーメ卿も納得したようだった。

外からけんげき剣戟の音が聞こえてきた。その音でセルジュは現実を思い出した。

エーメ卿との対話は、ここに兵を伴って踏み込んできたという事実をセルジュに忘れさせていたのだ。

「どうやらこれ以上会話をする時はないようだな……」

「エーメ卿。決して悪いようにはしない。私と一緒に来て欲しい」

「バルドール伯のことは信用しよう。だがその言葉に従うことはできぬ」

再び、予想通りの答えだった。セルジュの胸の中

に悲しみが拡がった。

「せめて伯とは友好裏^りに別れたい。このまま我々を見逃してはくれぬだろうか？」

「それは……」

セルジュは言葉に詰まった。今までならば決して受け入れられぬ願いである。いや、今であってもそれは同じである。

立場上、一顧だにせずには退けるべき願いであろう。

「と言っても伯のご性格上、無理な願いであろうな」

エーメ卿は自嘲気味に微笑んだ。

「クロード殿から色々と聞かされたのだよ。よく貴公のことをお話になっておられた。さぞやご自慢であられたのだろうか」

「叔父上が……」

「ああ。私は飽きるほどあなたのことを聞かされたよ。セルジュ」

最後に名前を呼んで、エーメ卿はセルジュを黙って見つめた。

言葉にはできない様々な思いが、己とエーメ卿との間を交錯した気がした。

——！

首筋に冷たい物を感じた。刃の感触。

扉の脇に立っていた男だろう。いつの間にか背後に忍び寄っていたらしい。

「申し訳ないがどうあっても逃げさせてもらう」

「……馬鹿な真似はやめたまえ。卿とは話し合えるはずだ」

これが最後の忠告になると感じながらも、魅力的な言葉を生み出せない己を呪った。

こんなことなら詩学にもっと精を出すのであった。

動けぬセルジュの目の前で、エーメ卿はセリーヌ姫を連れて扉の方へと歩いていった。

黒装束の男は相変わらず無言でセルジュに剣を突きつけている。

「紹介しておこう。彼の名はテオドル・バロー。私の頼みとする臣下だ」

扉が開かれる。エーメ卿とセリーヌ姫の姿が廊下に消えるのと同時にバローもセルジュから離れた。そして剣を向けたまま後ろ向きに扉まで向かい、主人の後を追った。

セルジュは椅子に座ったまま三人を見送った。

追う気力は湧いてこなかった。

第二章 第十三節

黒装束の一味がセルジュの敷いた防衛線を突破したと聞いた時には驚いた。

クリステルは兵の配置を詳しく知っていたわけではないが、父が協力していたのだ。水も漏らさぬ布陣であったに違いない。

それでも突破を許したのは、黒装束の中に特に勇敢に戦った者たちがいたからであるらしい。

彼らは包囲網を突破するために死力を尽くした。三倍近い兵を相手に最後まで退くことなく剣を振るったという。

自身が逃げることを全く考えないその戦い振りは凄じく、包囲する兵たちの間に動揺と恐怖が広がったのだろう。その隙を突いてセリーヌ姫と他の黒装束たちは包囲網を破ることに成功したのだ。

仲間を逃がすために最後まで戦った者たちは全員が討ち取られたという。

「兵にもかなりの犠牲が出たらしい」

父の言葉には残念そうな響きがあった。父は流血を好まない。

問題というものは血が流れる段階まで行ってしまうと、もうどうしようもならない。

それが父の口癖だった。

だからこそ、血が流れる前の段階で問題を解決できるように知恵を絞るのだ。

「討ち取った賊徒の中に、中心人物の一人であると思われる者がいた」

「どなたでしょうか」

「ヴィクトル・ドーファン子爵であったということだ」

あの方が……。

クリステルの印象からは、話に聞く壮絶な戦い振りは想像できなかった。

「ドゥブレー家の御親族であったとは存じ上げませんでした」

「彼の妻がドゥブレー家の人間だったのだ。子爵自身ドゥブレー家の人々とも昵懇じっこんの間柄であったしな。しかしまさかこのような暴挙に荷担するとは思わなかった。私も陛下も子爵とドゥブレー家の関係を知ってはいたが、子爵自身はドゥブレー家の人間ではない。だから私と陛下は必要以上に累を及ぼさぬため、ドゥブレー家の直系だけを叩いたのだが、それがこんなことになるとはな……」

レイモンは軽く溜息を吐いた。

「子爵の胸からはセルジュに宛てた書状が出てきたよ。どうやら……クロード殿を誤って刺したのは彼であつたらしいな」

「書状を目にされたのですか？」

「いや、セルジュから聞いた。詳しい内容までは聞かされていないが、そのことについては私に教えてくれたよ」

「子爵はクロード小父様とご親交があったのでしょうか……」

「それはわからない。ただクロード殿を殺めてしまったことが、子爵の行動を説明する理由の一つであるとは思う……まったくやりきれんな」

「……」

おそらくは、セルジュに対する謝罪の言葉が書かれていたのであろう。

父の言葉ではないがまったくやりきれない。

「これを読むと益々気分が沈んでしまうよ」

言って父が指し示したのは、今朝早馬で王都から届けられた書状であった。目を通した時には気分が高揚して幸せを感じたが、子爵の死や、今の状態を思うと、果たしてこれは幸福の書状なのか、それとも運命の皮肉なのか判らなくなってくる。

「それで姫様たちの行方は……」

そもそも父に呼ばれた理由をクリステルは思い出した。

セリーヌたちの目的地が判明したから話があるといって呼ばれたのだ。

「ああ。よりによってジャン・ザ・ビオンへ向かったらしい」

レイモンは苦々しく言った。

予想外の動きであった。

セルジュを中心とする捜索隊は、包囲網を突破された後は活発な動きを見せていない。

おそらく血眼になって情報を収拾しているのだと思われるが。

しかし、先日会ったセルジュからは何故か覇気が感じられなかった。

クロードが死んだ翌日でさえも、セルジュは任務への責任感に燃えていたのに、まるで抜け殻のようになってしまっていた。

何か深い悩みがあるようだった。力になれればとは思ったが、あまりにも深刻そうな顔をしているので聞き出すことがクリステルには躊躇われたのだった。

いったい何があったのだろうか。

それにしても目的地がジャン・ザ・ビオンとは…
…。

「姫様は、ジャン・ザ・ビオンのことをご存知なの
でしょうか」

硬い表情でクリステルが言った。

ジャン・ザ・ビオンの神秘は王家の秘密となって

いる。

王家の禁足地としてその秘密を保持しているわけだが、王族であるセリーヌが、そのことを知っているもおかしくはない。

「いや、おそらくは御存知ではあられないだろう。ジャン・ザ・ビオンの秘密は、ご成人後にお明かしくることになっている。だからジャン・ザ・ビオンの神秘によってどこかへいらっしゃるおつもりはなく、ただ単に、王家の禁足地であることを利用して潜伏なさるおつもりであろうな」

クリステルは青冷めた。

「それではお止めしなくては！」

「うむ。……しかし、今から追いかけて間に合うかどうか」

ここブランドシェからジャン・ザ・ビオンまでは、そう遠くはない。

「可能性はあります。ジャン・ザ・ビオンには、容易に入ることができません」

それもまた、ジャン・ザ・ビオンの神秘のひとつであった。その姿が近くに見えていても、そのまますんなり入れるとは限らないのだ。セリーヌらが入山に手古摺てこずっていれば、追い付くことは可能である。

「しかし、間に合って陛下のお許しをお伝えできた

としても、お信じ下さるかどうか」

父のつぶやきに頷いた。クリステルの懸念も同じだった。

父が言っているのは今朝早馬で王都から届けられた書状である。

そこには襲撃者の可能性や、セリーヌの意思を優先させるべきことが書かれていた。

つまりは最終的には、全てをセリーヌにとって良いように取り計らうよう命じた書状であった。

クリステルは感動した。王のなさることに間違いはないと信じてはいたが、王がセリーヌの幸せを願って、確かに^{じんりよく}尽力していたことが判って胸が熱くなった。

だがそれも今では問題の芽の一つになっているように感じられた。

ドーファン子爵は死に、セルジュは今もセリーヌ姫を取り返すべく任務に当たっている。

そこにこの書状を持ちこむことはどういう意味を持つのだろうか。

クリステルには悪い冗談としか感じられなかった。

いまさら全てを無かったことにせよと言われても、それで収まりがつくものだろうか？

既に多くの血が流れているのだ。

「……陛下は全てを御存じであられたのでしょうか？」

「そんなはずはあるまい。ただ、ドウブレー家の残党に動きがあることは掴^{つか}んでおられた」

「では、お父様がここにいらしたのは、彼らの襲撃に備えてのことだったのですね」

クリステルの反応の良さを感心するようにレイモン^{うなず}は頷いた。

「上手くいかないものだ。全てが明るみに出た時には物事は纏^{もつ}れた蜘蛛の巣のようになってしまっている。いったい今からどうやって收拾する？ セルジュに何と言って伝えればよいのだ？」

「セルジュに伝える役目はわたくしがお引き受けいたします」

「そうか……考えてみればお前が適任であるかもしれない。私にもお前以外にこの役目を引き受けられそうな者が思い当たらないよ。すまないが頼まれてくれるか？」

「はい」

クリステルは頷いた。

「陛下は姫様のお相手についてはご存知であられたのでしょうか？」

セリーヌ姫の恋の相手についてはクリステルはずっと気になっていた。

襲撃の時の様子からは、姫の身を利用しようとするような悪漢とは感じられなかったが、印象だけで判断できるようなことではない。

「ドゥブレー家の残党から、殿下のお相手となりそのような者をお挙げになられてはいた。フェーヴル卿か、エーメ卿ではないかのご推察であった」

「エーメ卿！」

クリステルは声をあげた。

「そうです！ あれはエーメ卿でした！」

あの声、あの身熟^{みこな}しは、エーメ卿——アドリアン・エーメに違いなかった。

剣の腕前とその美貌で名高い、青年貴族である。華やかな場には必ずその姿があり、それでいてそれがよく似合っている男であった。最近はとんと見かけなかったが。

しかし——

「あの……お父様、だいじょうぶなのでしょうか？」

クリステルは不安げにレイモンに問うた。

「エーメ卿というと、その……いろいろと華やかなお噂が絶えなかったような……」

貴婦人たちの話題に、彼の名が上^{のぼ}らぬことはない。女たちの注目を一心に浴びる中、彼は華やかな恋物語をいくつも織りなしてきた。その物語の主人

公となることを夢見る女も、少なからずいた。

だからクリステルは案じているのである。セリーヌとの恋愛もその一環なのではないかと。

そんなクリステルにレイモンは笑みを向けた。

「悪い男ではない」

クリステルは驚いた。

^{ずいぶん}随分と簡単な言いようである。

確かに悪い男ではない。悪い噂を聞かないわけではないが、派手な活躍の割には人からひどく憎まれたという話は聞いたことがない。

が、それだけでは^{こころもと}心許ない。

納得のいかぬ様子のクリステルを見て、レイモンは言葉を重ねた。

「あのクロード殿が認めておられたのだ」

そうなのだ。曲がった性根を嫌い、^{すじ}筋の通らぬことを憎んだあのクロード^{おじ}小父様が、なぜかエーメ卿とは馬が合っていた。

クロード小父様の目に狂いがあったとは思えない。

「エーメ卿のような男はな、妻を得た途端、他の女など一切眼中に入らなくなる手合いだよ。表面的な部分に目を奪われては、彼の本質は見えてこないよ」

「お父様がそうおっしゃるのなら……そうなので

しょう」

「納得がいかないようだな」

レイモンは眉を下げた。

「ともかく彼ならば問題はない。それにこういうことは、何よりも本人たちの気持ちが大切だ。そうだろう？ クリステル」

父の眼差しに何かを感じて、クリステルは少し^{あせ}焦るような気持ちになった。

「……おっしゃる意味が解りません」

「イーヴに頼もうと思う」

今度こそクリステルはどきりとした。

「イーヴはエーメ卿と斬り合ったのだろうか？ お互い相通じるものもあるだろう。彼の人柄からして、イーヴの言葉ならば信じるのではないだろうか」

「それは……」

「軍隊で追わせるのは逆効果だ。単騎ならば早いし、怪しまれることもないだろう」

「それは……そうですが……」

仮眠すら取らずに働いているセルジュのことが思い浮かんだ。

セルジュは、この件に片を付けるのは自分でありたいと思っているはずだ。

己の手の届かぬ所で事態が収束するのは不本意だろう。いや、無念だろう。

「セルジュはどうなりますか？」

「さきほど彼の邸に使いをやった。もうすぐここに来るだろう。彼に書状を見せて……話はそれからだと言いたいが……」

レイモンは残念そうに言った。実際にはセルジュに事情を説明している時間などないのだ。

セリーヌ姫の一行は既にジャン・ザ・ビオンに向かっていることだろう。

もたもたしていたら到底間^{とうてい}に合うものではないのだ。何しろ今すぐブランドシェから追っても、間に合うかどうかという状況なのだから。

「セルジュには気の毒だとは思いますが、今からでは事態に追いつけまい。それに彼には何か悩むところがあるようだよ」

クリステルは無言で頷く。それは自分も感じていたことだったからだ。

「彼が自分の整理を付けて、それからセリーヌ姫を追うとなったら間違いなく手遅れになる。同情はするが、彼の気持ちを優先させることはできない」

「お父様のおっしゃるとおりだと思います」

セリーヌ姫を救わなくてはならないのだ。それはクリステルにも解っていた。

「……お前から話してくれないか？」

イーヴのことだと判った。

「イーヴは邸内にいるはずだ。お前から行って、事の次第を話して欲しい」

「……」

「もしイーヴに断られたら教えてくれ。他の方法を考えるからね」

……父が何を考えているかが解ってきた。

確かにイーヴは適任だろう。イーヴの話ならばエーメ卿も信じるだろう。二人が斬り合った時の様子からして、そのようになる可能性は充分にあると思えた。

だが問題はそれだけではないのだ。

ジャン・ザ・ビオンの^{そば}傍にまで行って、イーヴがそのまま戻ってくるかどうか……。

父もそのことを懸念しているのだ。そして何よりも父は、娘たる自分の気持ちに気づいている。

そうでなければこんな会話になるはずがない。

「クリステル……」

「かしこまりました」

父が言い終えるよりも前に、クリステルは答えた。

「わたくしから彼に話します」

言い終えるが早い父に背を向けた。動揺を見られたくなかった。

部屋を出て行こうとした時、背後から父が言っ

た。

「すまない」

クリステルは扉を閉め、イーヴを捜しに向かった。

＊

稽古でもしているかと思ったが、イーヴは珍しく部屋にいた。

テラスに立っている。海を眺めているようだった。

クリステルに気づくと振り向いた。

「お前か」

「お邪魔でしたか？」

「いや、構わない」

イーヴは再び海に向き直った。

「海を見ていたのですね」

「ああ……」

ここに来て以来、イーヴはよく海を見つめている。

それまで見たことがなかった所^{せい}為^いもあるだろうが、それだけではない何かを海に感じているらしかった。

海を見つめる時、イーヴはとても穏やかな表情を

していた。普段の鋭さは消えて祈りにも似たような、澄んだ表情を浮かべるのだ。

「あなたにお願いがあります」

「なんだ？」

クリステルは掻^かい摘^{つま}んで事の次第を話した。エーメ卿がセリーヌ姫を連れて逃走していること、イーヴの話ならば耳を傾けるであろう事など、そして——ふたりがジャン・ザ・ビオンを目指しているであろうことを。

「そうか」

イーヴは一言そう言った。クリステルの方を向いた。静かな顔をしていた。

「クリステル——」

胸が鳴った。名前で呼ばれた。だがその理由は？意味は解っている。解っているからこそ、胸が痛いほど疼^{うず}いた。

「世話になった」

その言葉は静かに響いた。

途端、遠くに聞こえていた潮騒^{しおさい}の音が、轟音^{ごうおん}となってクリステルの耳の中を通り抜けた。大波に攫^{さら}われ、岩壁に打ち付けられて、身体^{からだ}がばらばらに砕け散った気がした。

——ああ……ついに……

荒波に揉^もみくちやにされているような感覚の中

で、ひとかけらの冷静な意識が、この事態を受け止めていた。

だが何かを考えることまではできない。

クリステルは^{しば}暫し呆然と立ち尽くした。

^{うっ}虚ろな目をイーヴに向けると、イーヴはひどく静かな目でこちらを見ていた。

クリステルは羞恥を感じた。

自分は今どんな顔をしているのだろう。

衝撃を受ける自分の姿を、この人はこうしてじっと見ていたのだろうか。

同時に腹立たしくもあった。

なぜそんな目でこちらを見ていられるのか。

なぜそんなに冷静でいられるのか。

クリステルは唇を^{ふる}顫わせながら、ゆっくりと口を開いた。

が、声が出ない。何を言っているのか分からない。

そのまま息を吸い込み、息を吐いて目と口を閉じた。

そうして少し落ち着くと、クリステルはイーヴを真っ直ぐ見据え、再び口を開いた。

「結果を……調査結果をお伝えします」

イーヴは無言で^{うなず}頷いた。

「『大いなる敵』は……」

そこまで言いかけて、クリスエルは^{ためら}躊躇った。

頭の中が目まぐるしく動いていた。

彼を引き留める方法がないかと、ひたすら探し回っていた。

あるはずがないのに。今まで散々考えたというのに。今さら方法が見つかるわけがないというのに。

「大いなる敵」が存在しようとしまいと、彼はここを去っていく。自分の^{もと}許を去っていく。それは変わらない。きっと変わらない。

ならばせめて、彼の力となるべきである。彼にとって最善の助言をすべきである。それが彼に対する愛というものである。

それなのに、その言葉が出て来ない。

なんとなれば、それは自らの手で後押しすることに他ならない。話を進めていくことによって時間を進めていくのだ。別れに到る、この時間を。

イーヴはこちらをじっと見つめている。こちらに強い意識を向けてくる。

息が詰まりそうになって、クリステルは^{めいもく}瞑目した。^{みけん}眉間に^{しわ}皺を寄せ、祈るように。

そして^{ようよ}漸う^{しほ}声を搾り出した。

「『大いなる敵』は、存在します」

イーヴの目が見開かれた。そこに歓喜が^{あふ}満ち溢れる様を見て、クリステルは後ろめたいような胸の痛みと、絶望的な敗北感を感じた。

「……いえ、正確には、これから『大いなる敵』が存在します」

イーヴは訝^{いぶか}しんだ。

「これから？」

「『大いなる敵』に関することは、これから始まるのです。これから作られるのです。ジャン・ザ・ビオン内部の時間の流れは、外部とは関係なしに常に一定です。ですから一度起こったことがまた起こるということはありません。例えば、わたくしたちは屍体を発見しましたが、あれの前の状態、つまりは生前の彼には、何度入山を繰り返しても会うことはできないのです。なぜならわたくしたちが入山した時にすでにドニ・クープランは死んでいたからです」

「ジャンザビの中で死んでいたからか？」

「そうです」

クリステルは頷いた。

「すで死んでいる以上、会うことはできない道理です」

「だがやつが死ぬ前のジャンザビに入れれば会えるんじゃないか？」

「……残念ながらそれはあり得ません」

クリステルは辛さを堪^{こら}えて声を出した。

ジャンザビについて最も解りがたい部分の説明を

しなければならない。

果たしてイーヴは理解してくれるだろうか？

「……今お話ししたようにジャン・ザ・ビオンの中では時間は常に一定です。ですから入山した者が時間を溯って体験することはできないのです。たとえ何度入山しようとも」

「どういうことだ？」

「わたくしたちが入山した時にすでにドニ・クープランは死んでいました。それはつまりわたくしたちが屍体を発見したということ、屍体を発見した以上、そこから溯って生きていた頃に会うことはできません。あくまでわたくしたちは、ですが」

わたくしたちは、に力を込めてクリステルは告げた。このややこしさにはクリステルも考え込まされた。

つまりジャンザビでは入山者の時間には変化がないということなのである。

ある時間に入山すれば、そこを起点としてその者が山の中に在る時間が始まる。

山の中でのその時間が一定である、ということなのだ。

だから何度出入りしようとも、最後に下山した時より前には溯って入山はできないのである。

いったい古文書の、禁書の著者はどうしてこんな

秘密を知ることができたのか。

クリステルが王家の禁書をいくら読んでもそれは解らなかった。

ただ事実として書かれているのみで、説明はなかったからだ。

その意味では真実であるかどうかは判らない。間違いであるかも知れない。

しかもその真偽を確認することも難しいのだ。不可能と言ってもいいだろう。

下山の方法も一応記されてはいたがあくまで運任せであり、それとて常に正しい法則なのかどうか確かめる^{すべ}術はないのである。

「……では俺たち以外ならば、生きている頃のやつに会う可能性はあるわけだな？」

「はい。逆にその場合、屍体を発見することはありません」

「その代わり一緒に土砂崩れに巻き込まれる^{おそれ}虞があるわけだな？」

「はい。クープランと行動を共にし続けていれば、ですが」

「……するともし誰かが『大いなる敵』を斃していたとしても、その後に新たな入山者があった場合、そいつは生前の『大いなる敵』に遭う可能性もあるのか？」

イーヴは考えるような目をしていたが、思ったよりも呑み込みは早かった。

的確な質問にクリステルは安堵しつつ、恐れつつ話を続けた。

「はい。当然あり得ますが、あなた方エク族に限って言えばそれはあり得ません」

「どういうことだ？」

「ジャン・ザ・ビオンの神秘の一つに、ジャン・ザ・ビオン内部のことはその周辺に反映される、ということがあります。ジャン・ザ・ビオンの周辺で、ジャン・ザ・ビオンには『大いなる敵』が居るとい話があるのなら、それは事実を反映しているのです。そして逆に、周辺に敷衍ふえんされたジャン・ザ・ビオンの神秘は、ジャン・ザ・ビオン自体にも働きかけます。だからこそあなた方エク族は『大いなる敵』に挑戦を繰り返すことができたのです。ですからエク族の中で『大いなる敵』が斃うされたという認識が広がれば、エク族の人々が『大いなる敵』の存在するジャン・ザ・ビオンに飛ばされることはなくなります」

イーヴは真剣な面持ちで頷うなずいた。

「……ジャン・ザ・ビオンの神秘は時間についてだけではありません。ジャン・ザ・ビオンはわたくしたちの世界だけではなく、その他のあらゆる世界に

も存在します。そしてどの世界からも中に入ること
はできるのです。多様な植生や、見たことのない生
物もそうした特性の結果です」

これもクリステルには確めようのないことであっ
た。

だが禁書にはそのように記されているし、事実
ジャン・ザ・ビオンの中では見たことのない植物
や、動物を目にしている。

だから時間についての記述よりも、よほどすんな
りと信じられる内容だった。

「……それで？」

「現にわたくしの父は、ここではないどこか別の世
界からやって来ています。もちろんそれを確める術
はありませんが……禁書によればジャン・ザ・ビオ
ンは多くの世界にその入口を開いているとあります
から、今はそれを信じることにして話を進めます。
今、山中での時間の流れが一定であるとお話ししま
したが、飛ばされる世界についてもこれは当て嵌^はま
ります。一定の法則の下で同じ現象が繰り返される
のです。……父の言葉を借りれば次元移動現象とい
うことになるのかもしれませんが、わたくしにはま
だこの言葉の正確な意味はわかりません。そしてさ
きほどお伝えしたようにジャン・ザ・ビオン内部の
ことが周辺に反映される以上、『大いなる敵』は存

在するのです。もしも入山した戦士たちが彷徨^{さまよ}って消えるなり、朽^くちるなりしているのなら、周辺にはそのように反映されているはずなのです。

「では……！」

イーヴの顔にさらなる希望の光が差した。

クリステルの胸がずきりと痛む。

「……ええ。これから先の未来において、確かに『大いなる敵』は存在しますし、戦士たちは『大いなる敵』と出逢います」

イーヴは感じ入ったように目を閉じた。顔に手を当て、大きく息を吐いた。

そのようにイーヴが安堵する様を、クリステルは複雑な気持ちで見つめていた。

イーヴは暫^{しばら}くそうしていたが、何か思い当たるところがあったのか、再びクリステルを見た。

「……しかし、もう始まっているんじゃないか？ 『大いなる敵』はもう存在してるんじゃないのか？ 今現在のエク族、俺の先祖たちの間では、『大いなる敵』に出遭^{であ}ったということが噂になっているとかいう話だったじゃないか」

「その噂の『大いなる敵』は、あなた自身でしょう。彼らはあなたと出遭って、あなたを恐るべき敵と見做^{みな}したようですが、それはあなたがたエク族の伝説としての『大いなる敵』ではありません。それ

がいずれ伝説の『大いなる敵』と繋^{つな}がり、同一視されていく可能性は否定できませんが」

「……そうか」

イーヴは何かを考えるような顔をした。やがて首を傾げ、

「そしたら俺は……どうやって『大いなる敵』と逢えばいいんだ……？」

訝^{いぶか}しげにクリステルを見た。

クリステルは思わず目を外^そらしそうになった。

「大いなる敵」に挑むことに、すべてを懸けてきたというイーヴ。

その情熱の一端を、自分は目の当^またりにしてきた。ジャン・ザ・ビオンを必死に歩き回っていた彼を、父に「大いなる敵」の存在を否定されて激怒した彼を、この目で見た。

その彼に告げなくてはならないというのか――。

それもこの自分が――。

しかし、告げなければ彼は……

クリステルは痛ましい思いでイーヴを見つめ返した。

唾^{つば}を呑み込み、そして意を決して口を開いた。

「今のあなたは、『大いなる敵』と出逢うことはできません」

「……？」

何を言われたのか判らないといった様子で、イーヴはクリステルを見る。

その視線に心を^{わしづか}驚掴まれたような気がして、クリステルは息苦しくなった。

「通常ならば、あなたは他のエク族の戦士たちと同様、そのまま『大いなる敵』と出逢えたはずでした。しかしあなたは、太陽が二つある時に、ジャン・ザ・ビオンに入ってしまった。それが運命の分かれ道だったのです。あなたは、本来飛ばされるべき『大いなる敵』の居るジャン・ザ・ビオンではなく、『大いなる敵』の居ないジャン・ザ・ビオンに飛ばされてしまいました。そこにわたくしも飛ばされなければ、あなたは永遠にジャン・ザ・ビオンに閉じ込められたままでしたが、しかし幸いなことに、奇蹟的なことに、あなたが飛ばされたジャン・ザ・ビオンに、わたくしも飛ばされました。いえ、より正確には、わたくしが飛ばされるべきジャン・ザ・ビオンに、あなたがすでに飛ばされていた、ということなのですが。あの時にジャン・ザ・ビオンからの脱出方法が判っていれば、わたくしとあなたが^であ^あった時点で、すでに脱出できる状態でした。禁書に書いてあることが真実ならば、わたくしは入山した通りに下山すればよいだけだったのです。あなたはそのわたくしに^っ従^っていらっしやれ

ば、あなたひとりでは出られぬジャン・ザ・ビオンから出られたのです。しかし実際には、わたくしたちはセルジュの^{おかげ}御蔭で出られました。偶然にも、セルジュは入山した通りに下山したので、彼と一緒に居たわたくしたちは外へ出られたのです」

クリステルはそこで一端一息吐いたが、イーヴは^{うなが}続きを促すようにクリステルを見つめる。

「あなたはある意味運が良く、ある意味運が悪かったのかもしれませんが。あなたとわたくしの立っている地平は同じものでしたが、時間が、時代が、違いました。おそらくは数十年ほどの差で、今のあなたは『大いなる敵』との出逢いを無くしてしまったのです」

「数十年……」

イーヴは呆然と^{つぶや}呟いた。

待てぬ時間ではないのかも知れない。

だがそれは、^{とし}齢を取るには十分な時間である。

今、イーヴは若い。その肉体には、はち切れんばかりに力が^{みなぎ}漲っている。

しかし数十年後にはどうなるか？ どれだけの力がその肉体から失われていることか。

いや、果たして生きているのかどうか……。

その時間の重さを感じて、クリステルの胸は痛んだ。

「……しかし、ジャンザビで奴を待てばよいのではないか？ ジャンザビの内外では、時間の流れが違う。ならば、あるいは……」

イーヴは^{すが}縋るような目でクリステルを見た。

クリステルはわずかに目を外らしつつ、

「それはあまりにも危険な賭けです。ジャン・ザ・ビオンの内外、それぞれの時間の流れは一定ですが、それぞれの質はまったく別のものです。その違いまではわたくしにも判りません。それはつまり予測不可能ということです。それに、あなたが飛ばされたジャン・ザ・ビオンに、『大いなる敵』も飛ばされるとは限りません。それどころか、今ジャン・ザ・ビオンにお入りになれば、あなた自身が『大いなる敵』となってしまう可能性があります」

イーヴは大きく目を見開いた。そして^{いぶか}訝しんだ。

「……どういうことだ？ 俺は、伝説の『大いなる敵』ではないんだろう？ 今現在のエク族にとっての、単なる恐るべき敵というだけで」

「ええ。しかし今度は正真正銘、あなたが『大いなる敵』となる可能性があるのです。歴史の必然——とでも申しましょうか。未来において『大いなる敵』が存在するのなら、現在から未来に到る過程で、その存在は必要不可欠になります」

「それでなぜ俺が？」

「あなたと決まっているわけではありません。しかしジャン・ザ・ビオンに入れば、あなたは、『大いなる敵』となる可能性の中の一要素として組み込まれることになります。なんとすれば、『大いなる敵』はジャン・ザ・ビオンに存在することになっているのですから」

「それじゃあ、ジャン・ザ・ビオンに入らない限り、俺が『大いなる敵』になることはないということか？」

「その通りです」

「真実、俺が『大いなる敵』であるとして、もし、このままジャンザビに入らなかつたらどうなる？」

「それは妙な話です。成り立ちません。ジャン・ザ・ビオンに存在するからこそ『大いなる敵』なのです」

「しかし未来は確定しているものなのか？ 未来は、今現在の俺たちの行動から生まれるものだろう？ 俺たちの行動次第では、未来において『大いなる敵』が存在しないジャンザビに変わる可能性があるのではないのか？」

「確かに可能性はあります。しかしそうなると、この世界はあなたの世界の過去ではないということになります。極めて似通った世界ではありますが、この世界とあなたがいらした世界は別世界ということ

になります。そしてそれが事実であるならば、残念ながら、あなたが『大いなる敵』と出逢える可能性はほとんど無いでしょう。現在だけでなくこの先も」

「……」

「ですが別世界である場合のことを考えるのは、今は無意味です。判りようのないこと——確定されていない未来のことを考えても、仕方がありませんから。ですから同一世界として考えます。それでいくと、今ジャン・ザ・ビオンに入れば、あなた自身が『大いなる敵』となってしまう可能性があるのです」

「……」

「その可能性は低くはないでしょう。わたくしはそう見ています。最初に太陽が二つの時に入山してしまったあなたは、今一度、普通の状態で入山しても、自力で下山することはおそらく不可能になっています。そもそも今こうしてここにいられるのは、自力で下山した結果ではありません。ですから、この状態で再度入山しても同じなのです。……いえ、自力下山が不可能とは断言できませんね。太陽が二つの時に入山して帰ってきた者はおりませんでしたので、それに関する記録が一切無いのですよ。あなたが初めての例なのです。つまり、太陽が二つの時

に入山してなおかつ、ジャンザビの知識を得ている人間のところに現れた初の例です。ですから、今一度入山したところで『どうなるのか判らない』というのが正確なところなのです。しかし、わたくしは、あなたが元の世界に戻るのは無理なのではないかと思っています。なぜならばジャン・ザ・ビオンから脱出するためには、入山した時と同じような状況で下山する必要があるからです。太陽が二つという状況は、まずあるものではありません。百年に一度という話も耳にしています。それでも、その奇蹟に恵まれたとしても、本当に下山できるかは判りません。記録がありませんから。つまり太陽が二つという状況は、それほど特殊なものなのです。あるいは太陽が二つという状況でなくとも、何かしら大きな変化があれば……例えば、エク族を呪縛する『大いなる敵』を斃^{たお}せたとすれば……すべてが変わってくるのかもしれませんが。しかし、そうなったとて何が起こるかは判りません。戻れるのか、どうなのかは判りません。判りようもないのですよ。いずれにせよ閉じ込められることになれば、ジャン・ザ・ビオンに棲^すみ着^つかざるを得ません。それはまさに……『大いなる敵』としての条件を満たしていると思いませんか？」

クリステルが口を鎖^{とざ}すと、重苦しい沈黙が部屋の

中に満ちた。

にもかかわらず、遠くから聞こえてくる潮騒しおさいは、ひたすら穏やかである。

その中で、イーヴは表情を無くしたまま固まっていた。

クリステルの顔に、憐れみあわと苦渋くじゅうが満ちた。そんな彼を見るのはあまりにも辛つらかった。

「……イーヴ」

クリステルは静かにイーヴに近寄り、その遅たくましい腕に触れた。イーヴの体がぴくりと反応したが、その手を振り払うようなことはなかった。クリステルはイーヴの腕を取り、その腕に身を寄せた。

「だいじょうぶです」

「……」

「この世界にだって、『大いなる敵』あたに値するものがあるはずです」

イーヴの体が再び反応した。

「見て下さい」

クリステルは海を指し示した。

「あの海の向こうには、あなたがまだ見知らぬ世界があります。ジャン・ザ・ビオンの如き矮小わいしょうな世界ではなく、涯はてしなく広大な世界が。あそこにならきっと、あなたが求めるものがあるはずです。微力ながら、わたくしもお手伝いいたします。……共

に、新たな『大いなる敵』を捜しに参りませんか？」

思わず、すらすらと出てきたそうした言葉に、クリステルは我ながら驚き、感動した。

新たな「大いなる敵」を捜す、自分はその手伝いをする——なんという名案だろうか！ それに、彼を自分の傍そばに引き留めるのではなく、自分から彼にっ従っていけばよかったのだ。どうして今までそのことが思い浮かばなかったのか。

イーヴの顔を見上げてみれば、彼は呆然と海を眺めていた。その遠くに何かを見るように。心奪われるように。

ずきりと胸が痛む。

彼の心は自分には無い。

そのことを思い知らされる。

「海の向こうを旅して、再びここに戻ってきた時には、『大いなる敵』が存在しているということもあるかもしれません」

イーヴは無言である。クリステルの言葉が届いているのかいないのか、ただ海を眺め続けている。

と思いきや、不意に口を開いた。

「俺は……」

しおさい
潮騒が穏やかに響く。

「俺は、ジャンザビへ行く」

クリステルは耳を疑った。

^{あぜん}啞然としてイーヴを見上げる。

イーヴは、決意の^こ籠もった強い眼差しで、海を見ていた。

「……わたくしの話^をを聞いた上で……ですか？」

息が苦しい。声^{かす}が嘎れている。

イーヴは深く静かに^{うなず}頷いた。

「あなたが『大いなる敵』になってしまうかもしれないのですよ？ ジャン・ザ・ビオンに閉じ込められてしまうのかもしれないのですよ？」

思わず、^{きつもん}詰問するような口調になった。

イーヴは意に介する風もなく、

「……覚悟の上だ」

静かに答える。

クリステルは信じ難い思いでイーヴを凝視した。イーヴの腕^{つか}を掴む手に、力^こが籠もった。溢れ出し^{あふ}そうになる感情を抑えて、できるだけ抑えた声^{しぼ}を搾り出した。

「っ……なぜ……なぜなんですか？」

「仲間を見捨てられない」

「仲間……？ 『大いなる敵』に挑む戦士たちのことですか？ 彼らならば、なんの心配もございませ

ん。彼らは『大いなる敵』に出逢えるのですから」

「ああ。そのことには安堵している。——しかし、
新たな懸念けねんが生まれた」

クリステルは訝いぶかしんだ。

「何者が『大いなる敵』になるのか？——それが気き
懸がかりなんだ」

「……」

その先の言葉を予想して、クリステルは顫ふるえた。

「誰であろうと、今ジャンザビに入れば、『大いなる敵』になる可能性があるんだらう？」

「……は、い」

「今ジャンザビに入りそうな人間——それを考えていた。そしたらエク族に思い至った」

「……それは、考えにくいのではないですか？
今、エク族の間では、ジャン・ザ・ビオンに恐ろしい敵が居るということで持ち切りです。そんなところにわざわざ近づくはずがないではありませんか」

イーヴは含み笑うように苦笑した。

「仲間を殺されたんだぞ？ やられたままでいるわけがないさ。弔とむらいもある」

「あれからもうだいぶ時間が経っています。今さら手遅れではないでしょうか」

「クリステル、あんたは俺たちのことを知らない」

イーヴは首を振った。

「必ず^{かたき}仇^うを討つ。俺たちなら必ずだ」

それも同じようにしてだ。^{だま}騙し討ちならば騙し討ちで。堂堂たる決闘ならば同じ決闘で。

エク族ならば必ずそうする。それがエク族の誇りなのだ。

「ジャンザビの中で、俺は四人の^{どうほう}同胞^{ほうむ}を屠った」

知らぬことだったとは言え、状況的に致し方の無いことではあった。

しかもイーヴにとっては圧倒的に不利な状況である。

それでもイーヴは戦士たちを^{たお}斃し、その場を切り抜けたのだ。これはエク族にとっては最大級の尊敬^{あたい}に値することである。

「ならば一対一だ。次からはエク族の戦士たちが一対一で、俺に挑戦してくるだろう」

「一対一……」

クリステルは^{つぶや}呟いた。そのことの意味が、恐ろしさが解ってきた。

「あの落武者狩りのような^{ぬる}温い連中ではなく、本当の戦士たちがな」

一対一の、神聖なる決闘。

それこそまさに……「大いなる敵」との^{たたか}闘いそのものではないか！

「俺は戦士たちの挑戦を^{こぼ}拒むわけにはいかない。な

ぜなら俺もエク族だからだ」

「でもっ……だからと言って山に戻る必要はないのではありませんか？ 挑戦ならばどこでだって受けられますし——」

「クリステル」

イーヴはクリステルの発言を^{さえぎ}遮った。

「奴らは必ずジャンザビに入る。なぜならそこで俺と出会ったからだ。同じ場所で、同じ状況で闘おうとするのが作法だ。ジャンザビで^{であ}出遇ったからこそ、俺との闘いが生じたのだ。ならば戦士たちはジャンザビを目指す。間違いない」

「しかしそれでは、それではあなたが……」

「『大いなる敵』になってしまうというのだろうか？」

イーヴは静かな顔をしていた。

「だが俺が戻らなければ、ジャンザビに入った他の戦士がそうになってしまう。しかもその戦士は俺を求めてジャンザビに入るんだ。そして俺に出会えず、山を^{さまよ}彷徨うことになる」

イーヴはクリステルをじっと見つめた。

「クリステル——俺と同じだよ。それは、俺と同じことなんだ」

クリステルは言葉を失った。

「敵を求め、しかし出逢えず、^{むな}空しく山中を^{さまよ}彷徨う

……そんな犠牲は俺一人でいい。充分だ」

目の前が暗くなった。

暗く深い水底に、落ちていくような気がした。

——どうあっても止めることはできない。

判りきってはいたことだった。

しかし、絶望的な確信を持ってそう思った。

ならば……

クリステルは強い眼差しをイーヴに向けた。

「わたくしも、一緒に参ります」

イーヴの目が驚愕に見開かれた。

眉を^{ひそ}顰め、^{けげん}怪訝な顔でクリステルを見る。

「……あんた、何を言ってるんだ？」

「あなたがお仲間を見捨てられぬように、わたくしもあなたを見捨てられません。ジャン・ザ・ビオンに入れば、あなたは閉じ込められてしまいます。外からいつ人がやってくるのか、本当に人がやってくるのか、そんなことは判りません。あなたが『大なる敵』と確定されれば、エク族の戦士たちはあなたの元へ飛ばされることになりますが、そこには^{たたか}闘いしかないのでしょう？」

「ああ」

「ならば、あなたは、たったひとりでジャン・ザ・

ビオンに閉じ込められることになります。……もし
かしたら、いえ、おそらくは一生」

「覚悟の上だ」

そう言うイーヴに、恐れや動揺は見られない。完
全に^{はら}肚^すを据えているのだろう。あくまで静かだっ
た。

「あの山に、あなたがたったひとりで閉じ込められ
ると思うと……^{たま}堪りません」

「それであんたまで来るというのか？」

イーヴは驚く。

「気持ちは嬉しい。感謝する。——しかし、あんた
を連れて行くわけにはいかない。あんたにはあの男
が——セルジュがいるだろう？」

クリステルは^{がくぜん}愕然とした。

——セルジュ！

思いも寄らぬ名だった。

ぐさりと胸に刺さる名だった。

「いずれ、あの男と結婚するんだろう？ そんな女
を連れて行くわけにはいかない。あの男に^{うら}恨まれた
くもないしな」

「……」

セルジュもまた大切な人間ではある。

しかしイーヴとは違う。この、切ないような胸の
痛みは、イーヴにしか感じない。

どちらかに従^ついていくとなったら、迷わずイーヴに
従^ついていく。

襲撃のあったあの日、あの夜までの自分なら、そ
うだった。

だが今はどうだろう。

あの時の――クロード^{おじ}小父様の死^{しにぎわ}際が、心に焼き
付いていた。

瀕^{ひんし}死のクロード小父様の胸元で、セルジュと手を
組まされた。

あれがクロード小父様の願^{ゆいごん}いであり、遺言である
はずだった。

ギュベール家の人間として、クロード小父様には
とても負い目がある。父がセリーヌ姫のことを打ち
明けていたら、クロード小父様はあんな死に方をし
ないで済んだはずだった。

しかしそうした憐^{あわ}れみや贖^{しよくざい}罪でセルジュと結婚す
るのは、セルジュに対しても、クロード小父様に対
しても、バルドール家に対しても、侮^{ぶじよく}辱でしかな
い。それは解っている。だがそれでも、クロード小
父様の願^{にじ}いを踏^{にじ}み躪^{にじ}ることは、ひどく躊^{ためら}躇^{ためら}われるこ
とだった。

「そうだ。あいつに――セルジュに^{あやま}謝^{あやま}っておいてく
れないか。あの夜は^{ずいぶん}随分と身勝手なことを言ってし
まった。考えが足りなかった」

イーヴの声が遠くに聞こえる。

心が千々に乱れていた。苦しみで震えていた。感情が、涙が、ほんりゅう奔流となってあふ溢れ出しそうになる。

が、すんでのところでこら堪えた。呑み込んだ。

彼と共に行くことはできない。

彼を見送ることしかできない。

ならば、ここで泣いてはいけない。

この先にある苦難を乗り越えていけるよう、彼に力を与えなくてはならない。

見送りとはそういうものだ。

クリステルは静かに深呼吸し、イーヴを見つめた。

「……解りました。そのようにセルジュに伝えておきます」

イーヴは頷いた。

「あなたの無事を、元の世界に戻れることを、祈っております」

「ありがとう」

イーヴは微笑みと共にそう言うと、クリステルに背を向け、扉に向かって歩き出した。

——さようなら。イーヴ。

そう、クリステルは別れの言葉を口にしようとした。

だがどうしてもそれが、その言葉が出てこない。

じ
焦れたい想いでイーヴの背中を見送るうちに、
彼はもう扉の前に立っていた。ドアノブに手を掛けた。

クリステルは息を吸い込んだ。

「イーヴ、愛しております。いつまでも」

その言葉が衝いて出た途端、イーヴの姿が震んだ。涙が堰を切って溢れ出していた。

いけない！　　と思っただが、もうすでに遅い。涙は止め処なく溢れてくる。

イーヴはドアノブに手を掛けたまま、驚きと困惑が混じったような、呆然とした顔でこちらを見ている。

クリステルは激しい羞恥を覚えた。最後の最後に、なんという無様を曝してしまったのか！

クリステルは両手で顔を覆い、静かに深呼吸した。

心を落ち着かせなくては。

涙を止めなくては。

こんな風に見送るのはあんまりだ。

クリステルは自分を責めつつ、必死に、何度も、深呼吸を繰り返した。

その最中、不意に、温かく、力強いものに包まれ

た。憶えのある^{ぬく}温もり、匂い……気がつけば、イーヴの腕の中に自分がいた。

頭の中が真っ白になった。

息が止まりそうだった。

「……すまない。俺はあんたを色々と傷つけてきたと思う。だけど今だって、あんたを泣かせたくはないんだ」

^{みみもと}耳許で、そうささやかれた。

止まりかけた涙が再び流れ出した。

^{おえつ}嗚咽しそうになって、イーヴの胸の中に顔を^{うず}埋めた。

イーヴは強く、だが優しく抱き締めてくる。それに^{こた}応えるように、クリステルもイーヴの背に手を回し、イーヴを抱き締めた。

イーヴの温もりが^し滲み込んでくる。次第に心が落ち着いていく。

この温もりを覚えていたい。

自分の温もりを覚えていて欲しい。

そう思いつつ、イーヴの背に回した手に、力を^こ籠めた。

いったいどれだけそうして抱き合っていただろう。涙も^{ようや}漸く^か涸れ果てた時、イーヴはそっとクリステルから離れた。

クリステルが^{なごり}名残^お惜しそうにイーヴを見ている

と、イーヴは首から提げた「勇者の護符」の紐を引き千切った。そしてクリステルに向け差し出した。

クリステルは戸惑った。

「あの……」

「あんたにもらって欲しいんだ」

「そんな……いただくわけにはまいりません」

「要らなかったら棄ててくれ」

イーヴは微笑んだ。屈託のない笑み。あれほど大切にしてきた物なのに……。

涸れたと思った涙が再び込み上げてきた。

「そんな、棄てるだなんて！ ……大切に、大切にします。ありがとうございます……」

クリステルは「勇者の護符」を優しく手の中に包み込んだ。温かかった。イーヴを感じるような気がした。

「あんたがこんなに泣くとは思わなかった——」

優しい顔でイーヴは言った。

「すまない」

クリステルは頬を染めて俯いた。

「いえ……お見苦しいところをお見せして、もうしわけありません」

それから何かを思い付いたように顔を上げて、

「あの……わたくしの願いをひとつ聞いて下さいませんか？ 約束をして下さいませんか？」

クリステルは懇願するようにイーヴを見た。

イーヴは^{うなず}頷いた。

「俺にできることなら」

「もし……もし、元の世界に戻ることができたなら——」

と言ってクリステルは、^{きら}燦めく海を指し示した。

「あの海のように青い旗を、旗をあなたの部族の村に、目立つように立てて下さい」

「……解った。約束しよう」

イーヴは再び頷いた。それでもう、お互いに口を開くことはなく、^{しばら}暫く無言の時間が流れた。

クリステルはテラスに顔を向けた。視線をイーヴに^す据えておけなかった。このまま彼を見続けるのは、あまりにも^{つら}辛すぎると思った。

「クリステル」

名前を呼ばれてクリステルは振り向いた。

しかし呼んだだけで、イーヴは何も言わなかった。ただ静かにクリステルを見つめている。

やがてイーヴは目を閉じた。何かの想いを呑み込むようにも見えた。

^{しおさい}潮騒が響く。

^{しおかぜ}潮風が流れる。

「俺もあんたのことが好きだ」

小さな^{つぶや}呟きは、しかし衝撃となってクリステルの
からだ
身体を打った。

呼吸が止まるほどの衝撃だった。思考が分裂し、
ばらばらになった。

「さようなら。あんたにはこの場所が――庭の花々
がよく似合う。幸せに、生きてくれ」

イーヴは背を向けた。振り返ることもなく、部屋
から出て行った。

クリステルは動けなかった。運命がすり抜けてい
くのをただ見ていた。

「まっ……」

唇が^{かす}微かに動き、震えるような言葉が出てきた。

「待って……」

^{よろめ}蹠^{きざ}踵くように歩を刻んだ。だが部屋にはもうクリ
ステルしか居ない。

自分以外は誰もいない。

「待って……下さい」

腰が抜けたようにクリステルは^{ひざ}膝を着いた。

何も言葉が出てこない。何も考えられない。身体
の奥底から激しい悲しみが湧き上がってくるだけ
だ。

何もできない。

それを悟った瞬間、クリステルは泣き崩れた。

^{うづくま}蹲^{すす}って啜り泣いた。涙は^か涸れ果ててなどいなかっ

た。いくらでも溢^{あふ}れてきた。

潮騒^{しおさい}が絶え間なく響いていた。

クリステルを慰^{なぐさ}めるように。

第二章 第十四節

できるだけ急いで邸に来て欲しい——レイモン・ギュベールの使いが告げた言葉はそれだけだったが、ただならぬものを感じさせた。

セルジュは急いで支度を調べるとギュベール邸に向かった。

エーメ卿との会話は今もまだ重く心の中に残っている。

忠誠を尽くすべき王に対する疑念が、真実への恐れがセルジュをずっと苦しめていた。

心の乱れは任務の遂行にも影響を与えている。

昨日の戦いでは指揮の乱れを見事に突かれてしまった。激しい戦いではあったが、数の上でも布陣の万全さから言っても、あれで取り逃がすことは考えられないのだ。よほど愚かな指揮官でなければ。

愚かな指揮官か……。

セルジュは考える。まさしく今の己は愚かな指揮官であると。

死んだドーファン子爵の胸からはセルジュ宛の書状が出てきた。

願わくばバルドール伯お一人のみが御覧になられるよう——。

祈念体でそう表書きされた書状には、言い訳は一

言もなかった。

ただ謝罪の言葉が述べてあり、クロード叔父を讃える言葉が、そしてセリーヌ姫の行末を案じていると書いてあった。

真摯な人柄を感じさせる内容だった。それだけに辛かった。

果たして己はこのまま仕事を続けられるのだろうか。任務を完うできるのだろうか。

——軍籍を返上して故郷へ帰るべきかも知れぬ。

セルジュはそこまで思い詰めていた。

＊

ギュベール邸に到着するとすぐに応接室に通された。

「こちらでお待ち下さい」

「わかった」

執事に外套と帽子を預けてセルジュは窓際に歩いていった。

窓向こうの庭を見下ろした。以前来た時には庭で稽古をするイーヴの姿が見られたが、今日は見られない。

クリステルの話ではいつも稽古しているということだったが……。

「お待たせいたしました」

声の主はクリステルだった。

てっきりレイモン・ギュベールと会談すると思っていたのだが。

「クリス……」

挨拶をしようとして、そこでセルジュは言葉を呑んだ。

クリステルは見るからにやつれており、悲しみと疲れが彼女の上に重くのしかかっていることが判ったからだ。

先程まで泣いていたのだろうか。目が赤かった。

本来なら人前に出られる状態ではない。

それでもこうして己の前に出てきたのは、それほど重要な話があるということなのだろう。

「セルジュ……お仕事中お呼び立てして申し訳ありません」

いつもながら優雅に見えるその礼も、今はただ痛々しい。

「邪魔になど……それよりも君の方こそ大丈夫なのか？ ひどい顔色じゃないか」

「それはあなたも同じだと思いますわ」

クリステルは弱々しい微笑みを浮かべた。それを見てセルジュの胸は苦しくなる。

「まずはお座り下さい。あなたに見ていただきたい

ものがあるのです」

セルジュに席に着くように促し、クリステルは鈴を振って召使いを呼んだ。

すぐに扉が開いて召使いが入ってきた。金髪の少女である。確かクリステル付きの娘で、リリィという名前だったと記憶している。

「お客様にお飲み物を」

「……かしこまりました」

答えたものの、リリィはその場に立って心配そうにクリステルを見ている。はっきりと主人を心配している様子が見て取れた。

「リリィ」

「……はい」

リリィは悔しそうな、悲しそうな顔をして俯うつむいた。自分では力になれないのだろうか……そんな思いが込められている様子だった。

リリィが退室するとクリステルもセルジュの対面の席に着いた。

「駄目ですね……リリィにまで心配をかけて」

自嘲的に呟く声も弱々しい。

「本当に大丈夫なのかい？ 日を改めた方がよいのではないか？」

クリステルはゆっくりと首を振った。

「いいえ。今でなくてはなりません。今ここで全て

を終わらせたいのです……勝手なことだとは思いますが、お付き合い下さいますか？」

力強さは感じさせないが、有無を言わせぬ何かを持った態度であった。

子供の頃からの付き合いで、セルジュはこうした時のクリステルの^{かたく}頑なさを知っているし、またクリステルが無意味にその頑固さを表したりしないことも、そして知性が並外れて優れていることもよく知っていた。

「……わかったよ。話を聞かせてもらおう」

セルジュが了承すると、直ぐさまクリステルは懐から書状を取り出した。黙ってセルジュの方にそれを差出す。

「これは……？」

「陛下からのご書状です。どうぞ御覧になって下さい」

「ロドルフ陛下からの？」

どきりと心臓が鳴った気がした。己を落ち着かせようと深呼吸をする。

「……拝見いたそう」

セルジュは静かに羊皮紙を拵げた。王独特の細い流麗な筆跡が目に入った。元よりクリステルを疑っていたわけではないが、本物であることはそれだけで判った。

予想はしていたが書状はギュベール卿に宛てて書かれたものであった。

だがしかしその内容は驚くべきものだった。

もしもセドリックを連れ去ろうとする者が現れたとしても、セドリック自身が同行を望んだ場合には、その意思を優先させるよう命じてあったのだ。

「馬鹿な……これでは……これでは私の立場は……」

声が震えるのを感じた。これでは、己はまるで道化ではないか。

王は己に護衛を命じながら、その一方で全く反対の命令をギュベール卿に出しておられた……。

「バルドール伯。王がなぜ貴公を近衛にお召しになったか、お考えになられたことは？」

エーメ卿の言葉が耳の奥に^{こだま}に響いた。

突然。

目の前に叔父の最期が^{よみがえ}甦った。あの時の光景が、
交わされた会話が甦る。

——道化。

その言葉が強く、強く脳裏に甦る。

叔父上……私は……バルドールは……。

視界が歪む。椅子に座っていてなお体の平衡を

保ってられない。

いやふる顫えているのか。己はまるで熱病患者のように顫えているのか。

頭の片隅でぼんやりとそんなことを考える。

自分自身の全てが、音を立てて崩れていくような気がした。

だが突然、肩を強く掴まれる感覚でセルジュは我かえに反った。

「落ち着いて下さい。そして書状を最後までよくお読みになって下さい」

クリステルの声。

それに促されるようにセルジュは書状を読み進めた。指先の顫えを押し止めることができない。続きを読むのが途方もなく恐ろしかった。

「セルジュ」

再びクリステルの声。

「大丈夫です。落ち着いて、そして最後までしっかりとお読みになって下さい」

書状には続けてこう書いてあった。

ただしセドリック自身が嫌がるのにもかかわ拘らず、強引に連れ去ろうとするような相手であった場合には、セルジュ・バルドールと協力してその相手を捕縛、あるいは排除すべしとあり、それゆえにセルジュにだけは、セドリックが女性であることを明か

しておくことが書かれてあった。

末文にはどうか二人で協力して、秘密裏りに事態を解決するように頼む、と書かれてあった。

王命の證あかしとしてセルジュにはこの書状を見せておくことも書かれてあり、そして最後に「彼は余の近衛である」と結ばれてあった。

「……なぜもっと早く教えてくれなかったのだ……」

絞り出すような言葉になった。もっと早くに、この書状を目にすることができていたら……。

「セルジュ。その書状は早馬で今日届いたものです。日付をよくご覧になって下さい」

言われて目を落とすと、確かに書状の日付はセルジュが命令を下された日と同じではなかった。

あの賊徒の襲撃があった日の日付になっている。

当然、執務室でこの書状を書いていたであろう王が、襲撃の事実を知っているはずもなかった。

つまりその時点で王が知っていた事実、そしてそこから推測される事態を、先の状況を考えて書かれた内容だということになる。

それはつまり――。

「陛下はあなたのことを深くご信頼なさっておいでだということです」

セルジュの考えを裏付けるようにクリステルがそ

う口にした。

「クリス……」

瞳の中で幼馴染の姿が崩れた。自分が何を感じているのか解らない。喜びなのか、悲しみなのか。

もっと早くにこの書状を見ることができていたら、いやこの書状がもっと早くに、せめてあの日の昼に届いていたら……叔父はあのような最後を迎えることはなかったかも知れなかった。

運命に対する怒りと悲しみがセルジュの魂を揺さぶった。

だが、それと同時に大きな喜びとでもいうべきものも込み上げてくる。

王は決して己を、バルドールを見限っていたわけではないのだ。

道化としてもてあそんでいたわけではないのだ。己に期待し、汚名返上の機会を与えて下さっていたのだ。

そのことを理解すると体が熱くなった。再び小さな顫えが体を走り抜ける。

魂から込み上げてくるものは熱く激しく、喜びなのか怒りなのか解らない。

セルジュは自分が泣いていることに気付いた。

気付くと急に恥ずかしくなってクリステルに詫びた。

「……すまない。お見苦しいところをお見せした」

慌てて懐からハンカチーフを取り出して拭おうとするが、急いで出てきたために、甲冑こそ着けていないが軍装のままである。そもそも懐がなかった。

するとクリステルが無言でハンカチーフを差し出してくる。最近流行し始めたデザインの婦人用のものだった。

一瞬躊躇したがセルジュは受け取ってそれで涙を拭った。

涙を拭うと今度はおかしみが胸の内に拡がった。

不思議なものである。悲しんだり恐れたかと思うと、今度は喜んだり笑ったりする。

人の心はままならない。

「……君には敵わないな」

己の鼻声に小さく笑いが混じったのを聞いた。

ここでいつもならば何か気の利いた言葉が返ってくるはずである。いや、昔ならばと言うべきか。

クリステルはそういう利発な子供だったのだ。

しかし今回は何も言葉が返ってこない。少し不審に思ってクリステルに目を向けると、彼女もセルジュの方を見ていた。

視線が重なる。

それだけでセルジュには、もう以前のような軽口を言い合うことはないのだと、その日々は遥か遠く

に過ぎ去ったのだと判った。

クリステルはただ静かな、悲しみと優しさを含んだような目をして坐^{すわ}っているだけだったからだ。

「……お判りになったと思いますが、つまりもう殿下を追われる必要はございません」

セルジュは無言で頷いた。己の仕事は終わったのだ。

頭ではそのことを理解しはしたが、複雑な気分だった。

「ですが……」

クリステルは扉の方へと目を向けた。

人を気にしている？ 聞かれては困る話か？

セルジュはクリステルの仕草からそう察して立ち上がると窓の外を窺った。人の気配はない。

応接室の扉を開けると、ちょうどリリィがお茶の一式を持ってやって来たところだった。

「バルドール伯爵様！」

「ありがとう。続きは私が運ぼう」

「そんな！ いけません！」

慌てるリリィから半ば奪い取るようにしてお茶の一式に手を伸ばす。

「この部屋に誰も近づかないように見張っていてくれるかい？」

同時にリリィの耳元でそう囁いた。少女がはっと

した様子を見せた。

「頼むよ」

もう一度囁いて茶器一式を奪い取った。

「あ」

半ば啞然としているリリィを尻目に応接室に戻った。

状況に対応し切れてない様子が微笑ましくも、可哀相でもあったが、セルジュはリリィの目の前で応接室の扉を閉めた。

これで暫くは安心だろう。ここの壁は厚いし、声を潜めて話せば盗み聞きをされる心配はないと思えた。

「お心遣い感謝します」

「やはり内密の話なのか」

「はい」

クリステルは頷いた。

今読ませてもらった書状で問題は解決しているはずである。

この上何があるというのか。

「セリーヌ様たちの行方が判明したのです」

「なんだと!？」

セルジュは思わず声を上げてしまった。すぐにしまったと思った。

しかし自分でさえ掴んでいない情報を何故クリス

テルが……考えて、すぐに答えが出た。

レイモン・ギュベールであろう。

彼なら独自の情報網を持っていても不思議ではない。それならなぜその情報を己に知らせないのか……そこまで考えて己の鈍^{にぶ}さに内心舌打ちする。

だから今日、こうしてクリステルが己に面会しているのだ。

彼女自身、何か辛いことがあったらしいにも拘^{かかわ}らずにだ。

「……話を聞かせていただく」

「姫様はどうやらジャン・ザ・ビオンに向かわれるおつもりのようです」

「あの山は王家の禁足地ではないか」

「ええ。ですからそのことを利用して潜伏なさるおつもりなのでしょう」

上手い手であると思った。セルジュとしてはてっきり船で港から外国に向かうものだと考えていたのだが、完全に裏を搔かれる恰好だった。

「姫様を決してジャン・ザ・ビオンに行かせてはなりません」

クリステルの口調には焦りの感じがあった。

「なぜだ？ 禁足地である以上人目は避けられるし、従う者たちもいるだろう。別に危険はないのではないか？」

「いいえ。考えられる限り最悪の結果です」

首を振るクリステルの目には恐怖と言っていいようなものが見えた。

「……あの山には何かあるのか？」

「セルジュはあの山について何か聞いたことがありますか？」

質問には答えずにクリステルは問い返してきた。

不審に思ったがセルジュは記憶を探って、子供の頃に聞かされたジャン・ザ・ビオンについての話を思い出した。

「確か入ると出られなくなるとか……」

だがそれは王家が余人を立ち入らせないために流した噂か、または禁足の令が一人歩きして怪異譚へと姿を変えたものではないのか。

子供を怯えさせる役には立っても大人には通じない、そういう類たぐいの話だと思っていた。

「それは本当の話です。あの山に入れば二度と戻っては来られません。よほど運が強ければ別ですが」

「クリス……それは本当の話なのかい？」

クリステルは無言で頷いた。

「だが……この間私たちはあの山で会ったじゃないか。そして無事に出てきた。何事もなかったじゃないか」

「確かにそうです。ですがそれは条件を満たしたか

らに過ぎません。わたくしたちは運が良かったのですよ。それも途方もなく運が良かったとみるべきでしょう」

「しかし……」

「セルジュ、今はあの山について詳しくあなたに説明している時間はありません。それに説明してもすぐに納得してもらえるかどうか……」

クリステルは目線をテーブルへと落した。悔しそうな顔をしていた。

彼女がこんなことで嘘を吐くとは思えなかった。

だがすんなり信じるには荒唐無稽な話であることもまた事実であった。

「お信じになれないようですね」

「申し訳ないが……」

ためら
躊躇いつつもそう答えた。

「全ての話を聞かせてもらえないか？ そうしたら私も考えることができると思う」

いくら時間がないと言われても、このような話で兵たちを動かすわけにはいかない。

「そうおっしゃると思っていました」

クリステルは諦めたように息を吐いた。

「それにセリーヌ姫については父が既に手を打っています。ジャン・ザ・ビオンに入らぬように使者を使わしたのです」

セルジュは少々驚いた。手回しが良いにも程がある。

しかし己を差し置いてそのような手を打たれるのは正直面白くなかった。

「ご不満ではあるでしょうが、あなたに詳しい説明をして、納得をしてから動いていただくわけにはいかなかったのです。それに兵を動かして数で追ってはかえって逆効果ということも考えられましょう」

「しかし……」

反論しようとしたが、クリステルはやんわりと手を掲げてそれを制した。

「ですから今から全てをお話しいたします。ただしこの話は王家の秘事に関わることですので、決して他言しないようお願いいたします」

「わかった」

王家の秘事……その言葉にセルジュは身が引き締まるのを感じた。

「ジャン・ザ・ビオンについて話す前に、誰がセリーヌ姫を、エーメ卿を追ったかをお話ししましょう。イーヴです」

セルジュにはエーメ卿の名前が出たことが驚きだった。一体どうやって掴んだのだろうか？

「……セリーヌ姫は恋をしておいででした」

クリステルは寂しげに微笑んだ。

「そのお相手候補の一人としてエーメ卿が挙がって
いたらしいのですよ。陛下と父はそこまで情報を集
めていたそうです。ですがそれでもあの夜の襲撃ま
では予測できませんでした。襲撃の報告を受ければ
陛下もお嘆きになるでしょうね」

「うむ……」

いくら情報を集めて考えても、人の心は、その思
いは、予測する者の考えを越えてゆく。

……時には行動する己自身さえも。

まるで翼を持っているように――。

「……話しましょう。セルジュ。ジャンザビのこ
とを。イーヴのことを」

クリステルはひたりとセルジュの顔に視線を据え
た。

悲しいが深い瞳だった。彼女の身に何があったの
だろうか？

「そして、『大いなる敵』のことを――」

第二章 第十五節

平原を馬で駆けるのは久しぶりの気がした。

いや、実際久しぶりなのだ。エク族にとって騎乗はお手の物である。イーヴも例外ではない。

エーメ卿は女連れである。供回りが居るにしても多くはないだろうし、何よりも連中は搜索を攪乱^{かくらん}するするために時間を消費している。

急げばジャンザビの直前で捕まえられるだろうとの読みだったが、もろに当たった。一日で先行する騎群を見つけた。中央は馬車である。

イーヴが近づくと速度を上げた。このまま山に入り込むつもりなのだろう。

「俺だっ！ エク族のイーヴだ！ 話を聞いてくれ！」

こちらも速度を上げて、さらに大声を張り上げた。

それを二度ほど繰り返しただろうか。馬車は速度を落とし、停まった。周りの騎兵たちも馬を停めた。

イーヴは馬を降り、馬車に向かって歩いた。騎兵たちが警戒の色を見せたので、イーヴは腰から剣を抜いてその場に投げた。

危険だとは思わなかった。目の前の馬車にはあの

夜、剣を合わせた男が乗っている。

アドリアン・エーメというらしいが、信用できると思った。

「武器は持っていない。話がある」

馬車の扉が開いた。黒髪の男が姿を現した。

エーメ卿であろう。地に降り立つと、マントを外してぎよしゃ馭者に預けた。

「エク族の勇者よ。決着をつけに来たのか？」

美しい男である。貴公子と呼ぶにふさわ相応しい。

あれほど激しいけんげき剣戟を交わした相手とは思えないが、間違いなくこの男である。

「違う。これを読んでくれ」

イーヴはレイモンから手渡された巻物を手渡した。受け取って、エーメ卿はその場で読み始めた。

「とにかく山には入らない方がいい」

山の秘密は口止めされている。イーヴにはそれ以上は言えなかった。

しばら暫くの間、エーメ卿は真剣に巻物を読んでいたが、読み終わるとイーヴに言った。

「貴公のことは信じるが、これはギュベール卿の独断ではないのか？ 御姫の安全が保証されるかどうかは信じられぬ」

「そう言った場合はこれを見せろと言われた」

イーヴは言って、二通目の巻物を手渡した。エー

メ卿は再び食い入るようにその巻物を読み始めた。

これも読み終わると、エーメ卿は深い溜息^{ためいき}を吐いた。巻物を胸に抱くようにして天を仰^{あお}いだ。

「神よ……感謝いたします」

「納得したなら立ち去るがいい。レイモンのところへ行け。後はあいつが良くしてくれる」

「貴公はこれからどうされるのだ？」

「俺はこれからやることがある」

エーメ卿は眉を少し上げた。納得したようである。

「そうか……そうだったな」

「いや、勘違いをするな」

イーヴは手で制した。この男と闘うつもりはない。今はジャンザビに行かなくてはならない。

あの山で何が起こるのか、何かが起こっているのか、起ころうとしているのか。

それを見定めなければならないのだ。ここで強敵と戦っている余裕はない。

「だが、今を逃せば貴公と決着をつけることはできない」

「ああ、だが俺にはやらねばならないことがある。あんたにも、あるんじゃないのか？」

エーメ卿は胸を突かれるような顔をした。イーヴは黙って馬車に目をやった。

「……すまない。勇者よ」

「いや」

イーヴは微^{かす}かに笑みを浮かべた。悔^くいはない。殺しが、目的ではないのだ。

勇者の目的は名誉だ。戦うと言うことは剣を振るばかりではない。

目の前の男には名誉があると思った。だから今、剣を合わせる必要はないのだ。

「いつかまた相見^{あいまみ}えんことを」

エーメ卿は腰を折って礼をした。イーヴにとっては初めて見る所作^{しよさ}だったが、深い敬意が籠^こめられていることは判った。

「ああ。俺もあんたのことは忘れない」

「さらばだ」

エーメ卿は周囲の者たちに言った。

「皆聞いてくれ！ 事態は変わった。ブランドシェに戻るぞ！」

それを聞くと、周囲の騎兵の間に安堵したような雰囲気^{ふんぎ}が広がった。

エーメ卿は馬車に入る前に、再びイーヴの方を見た。

「御身^{おんみ}に神の御加護^{ごかご}が有らんことを！」

イーヴは手を挙げて応^{こた}えた。

馬車と騎兵たちが遠離^{とおざか}っていく。イーヴはそれを

見送った。

一行が小さな影になり、やがてただの靄もやのようなものになるまで、その場で立って見送った。

一人になった。

――さて。

イーヴは天を見上げた。鳥は疎おろか、雲の影さえない。

ジャンザビに目を転じた。あの時と同じだ。

行く手にジャンザビが聳そびえている。

起伏も緑も乏とぼしい荒野の中、一ヶ所だけこんもり青青としている。

「お前を連れて行っては悪いよな」

イーヴは馬の首を撫なでた。この馬まで神秘の犠牲にしては可哀相かわいそうだ。

馬の背から荷物を外して背負った。それから馬の尻を叩いてやった。

「行けよ。レイモンのところへ戻れ」

馬は数歩進んでから首を回めぐらしてイーヴの方を見た。鼻を鳴らした。

「気にするな」

手を振って歩き出した。馬の方は見なかった。ジャンザビだけを見た。

背後で蹄ひづめが遠離とおざかる音がした。良かった。通じたようだ。

今度もまた、何日も歩かされることになるだろうか。

いや、それはないような気がした。理由は解らないが、そんな気がした。

クリステルの言葉が脳裏を^{かす}掠めた。

ひょっとして己がジャンザビに戻ることを、ジャンザビ自身が望んでいるのではないだろうか？

だとしても構わない。他に採るべき道はない。

イーヴは真っ直ぐに、ジャンザビに向かって歩いた。

第三章

——^おか^か怪訝しい。

以前入ったときとは空気が違う。

イーヴはジャンザビを登っていた。

入山はまったく阻害されることがなかった。

驚くほどに簡単にジャンザビの麓^{ふもと}に着いた。そのまま中に入った。

だがその後が違う。山の雰囲気^{ふんいき}が激変していたのだ。

薄暗い、闇のような気配が周囲に垂れ込めている。

木々の姿が変わったとか、地形の起伏が変わったとかいう話ではない。

不気味な気配が辺りを^{おお}掩っているのだ。

空も暗い。雨雲とまではいかないが、灰色の低い雲が空を^{おお}覆っている。

これがイーヴを迎えたジャンザビの表現なのか、それとも何か別のものがあるのか……。

クリステルの話によればジャンザビの中の時間は一定であるという。

ならば己がクリステルたちと下山した時、その直後から始まらなければ^おか^か怪訝しいではないか。

今の山の様子はとても、あの下山した時の様子と

は違う。

全く別の山なのではないかと思えるほどだ。

太陽が二つの時に入山して帰ってきた者はいない……。

クリステルの言葉が思い出される。どうやら己は入山者の中でも例外に入るらしい。

時間が一定であるとか、その他の色々わけのわからぬジャンザビの法則にしても、己には当て嵌^はまらぬのかも知れない。

いずれにしても「歴史」はこれから作られるのだろう。何者かが入って来るにしても、または――。

イーヴは頭を振った。己が「大いなる敵」になるなど……。

馬鹿馬鹿しい話だと思う。だがその可能性は充分にあるのだ。しかも入山した以上、それは確定の条件かも知れない。

それでも、イーヴにはエク族の勇者たちを見捨てることはできなかったのだ。

クリステルを振り払ってでも。

胸が痛んだ。館^{やかた}での遣り取りを思い出すと、どうしようもなく胸が痛んだ。

だがあれしかなかった。他にできることはなかった。

道のような場所に出た。

以前も歩いたことのある場所だ。クリステルと共同生活をしていた時には、良く一緒に歩いた――。

ずきりと胸が痛んだ。思わず手で押さえるほどに。

イーヴは来た道を振り返った。草が茂り、木々が枝を伸ばしている。

闇があった。山の麓^{ふもと}は、もう見えない。

「……クリステル……俺は、あんたのことを――」

言いかけて、しかし口を噤^{つぐ}んだ。クリステルの顔が思い出された。衝撃に固まっていた姿が、涙に濡れた瞳が思い出された。

二度と言ってはならない。言う資格は己にはない。

あんなに悲しい涙を流させておいて、その言葉と言う資格などない。

イーヴは前を向いた。他に見るべきものはない。

この先には例の洞窟がある。

行くのは辛^{つら}いが、他に住居にできそうな場所を知らない。取り敢えずはそこを目指すしかないようだ。

イーヴは洞窟を目指した。

足元を見ながら歩き、何も考えないようにした。

やがて洞窟に着いた。そしてイーヴは、驚愕した。

「……っ！」

人が倒れている。入口の手前、洞窟に入る前の少し開けたところだ。

しかもエク族の服を着ている。怪訝おかしくはない。ジャンザビの中にあっては時間の法則が通用しなくなる。

ここはジャンザビの中、ジャンザビの時間……誰が居たとしても、怪訝おかしくはないのだ。

そのことをクリステルに聞かされて解ってはいた。解っているつもりだった。

だが、イーヴは荷物を放り出して駆け寄った。

「おい！ 大丈夫か!?!」

倒れているのは男だった。かなりの傷を負っている。見ると周囲には血が飛び散っていた。

ここで戦いがあったようだった。

イーヴは慎重に男を助け起こした。水を口元に垂らすと男は目を開けた。

「……おまえ、は……」

「俺はエク族のイーヴ。あんたは？」

「おれは……ヨルン」

イーヴは妙な気分になった。

エク族にあっては良くある名前ではある。怪あやしむには足りない。

しかしそれはイーヴにとっては、良く知った名前

なのだ。

ヨルンの胸元には「勇者の護符」が光っていた。
イーヴは息を呑んだ。動悸^{どうき}が激しくなるのを感じた。

「なぜ……ジャンザビに入った？」

「知れたこと……『大いなる敵』を、斃^{たお}すため……」

イーヴは全身が総毛立つのを感じた。

……なんだと？

この男は、「大いなる敵」を斃すためにジャンザビに入ったというのか！

いったい何が起きているのか。イーヴの頭は混乱した。

クリステルに聞かされた話を思い出そうとする。
しかし心の中で話が重なり合い、押し集まって輻輳^{ふくそう}している。何がなにやら解らない。

気持ちばかりが高まり、血が猛^{たけ}る。

いけない。興奮している。落ち着かなくては。

事態を把握しなくてはならない。

「……お前も、勇者か……」

ヨルンはイーヴの胸元を見た。しかしそこには「勇者の護符」はない。

「護符はないが俺は勇者だ」

「……護符はどうした……」

「女に与えた」

それを聞くとヨルンの瞳に驚きの色が表れた。そして苦しそうに笑った。口元から泡のような血が流れた。

イーヴは怪我の状態を素速く調べた。出血から言って相当な^{ふかで}深傷である。顔色も悪い。

今すぐに手当てをしても、助かるかどうか判らないだろう。ましてやここはジャンザビの中である。

ヨルンの^{いのち}生命は助からないと思った。

「……俺も、そうすればよかったよ」

「あんたにも好きな女が？」

「……妻がいる」

それを聞いた時、イーヴは稲妻に撃たれたかのような衝撃を受けた。

直感である。イーヴはヨルンの顔をよく見た。

苦しそうに^{ゆが}歪んだ表情を見せているが、顔立ちは判る。イーヴはじっと見つめた。

思い出そうとした。遠い日の記憶を。

母の腕に抱かれて見送った、あの日の記憶を。

「イーヴと……言ったな……」

「そうだ」

声が震えるのを^{おさ}抑えられなかった。

「……おれの……息子と同じ名だ……」

イーヴは固まった。動けない。言葉が出てこな

い。

ただじっと^{ひんし}瀕死のヨルンを見つめた。

違うかもしれない。これはまったく同じ名前で、ただの他人であるのかもしれない。

イーヴもヨルンも、エク族にあっては特に珍しい名前というわけではない。

だがイーヴにはそうは思えなかった。腕の中の男は父に違いない。そう感じた。

ジャンザビは、なんと恐ろしい仕打ちをするのか。

ヨルンの腰に巻かれた^{けんたい}剣帯に目が留まった。血で汚れたそれは、良く見知った^{いしょう}意匠のものだった。

エク族伝統の意匠。

そして母が得意としている意匠だ。

「……その剣帯は？」

「妻が……」

そうか。

やはりそうか。

ヨルンの呼吸が怪しくなってきた。

「ヤツの……足と、^{わきばら}脇腹に……傷を負わせた」

イーヴは^{うなず}頷いた。

「この洞窟の……奥に」

イーヴは頷いた。

「おまえが^{たお}斃せ」

ヨルンが見つめてきた。強い眼差しである。^{いのち}生命の、最後の輝きに思えた。

「ああ」

イーヴは、頷いた。

ヨルンが安堵したように笑んだ。

「おれの息子は……強くなるだろうか……」

「勇者になる」

「……そうか」

「あんたの息子だ。誰よりも強い男になる」

ヨルンは息を吐いた。すべての者がそうするように、静かな、長い息を吐いた。

「そうか……」

満足そうな、^{かす}微かな^{つぶや}呟きを残して。

イーヴの腕の中で、ヨルンは^い逝った。

涙は出てこなかった。^{のど}咽は痛かった。鼻が少し濡れているような心地がした。

だが涙は出てこなかった。

替わりに計り知れないほどの感謝と愛と、そして激烈な殺意が込み上げてきた。

「……行ってくる」

イーヴは立ち上がった。

洞窟の入口に向かって歩き出した。足元、血の飛び散った地面に、槍が落ちていた。

エク族の槍だ。穂先には赤い血が付いている。

ヨルンが、父が使った槍だと思った。

槍を拾い上げた。握り締めた。身体からだが小刻みにふる震えた。

心は冷めていると感じた。今、たった今受け取ったものは、それだけの心さずを授けてくれたのだ。それは解っている。

しかし身体は妙な心地だった。

——俺は恐れているのか？

冷静に思った。そして己が冷静であることを冷静に認識した。

つまりこれは恐怖ではない。武者むしやぶる奮いというやつであろう。

こぶし拳を握って開いた。思う通りに動く。腰にも浮ついた感覚はない。

——良し。

胸の中心に力を感じた。思う間に細かなふる震えは背中へと回り、首筋の辺りから消えていった。

イーヴは息を吐いた。洞窟の中へと、入って行った。

しばら暫くの間とは言え、己が暮らした場所である。途

中からはクリステルも一緒だった。

中の造りがどうなっているかはよく解っている。

少し入れば奥は広い空間になっていること。

天井の高さは檜^{ふたすじ}二筋分ほどもあること。

つまり、戦うに十分な広さがあることをイーヴは知っている。

問題は^{あか}灯りだけだがそれも問題はない。

なぜなら行く手は明るい。奥に光があるということだからだ。

洞窟の中に入った。かつて生活の場にしていただけだ。

イーヴは息を呑んだ。

壁全体が光を放っている。いったいどういうことなのか。

炎には遠く及ばない、あえかな輝きである。弱弱しく、その境界も定かではない、ぼんやりとした光が、周囲を^{ひた}浸すように照らしている。

これは何かの魔法なのか。魔法などというものをイーヴは信じたことはなかったが、もしもこれが魔法なのだと言われれば、今なら信じられる気がした。

光の中心には夜空があった。夜空には星があった。イーヴはそう思った。

ここは洞窟の中である。夜空など見えるはずがな

い。しかし一瞬そう思ってしまうほどに、目の前の存在は天の象を写し取っていた。

あるいは洞窟を満たすこの光は目の前の星々から出たものなのかもしれぬ。

全身を被^{おお}ったその輝きが、何であるのかは判らない。

だがイーヴは即座に理解した。今日にしているものが、己の想像を遥^{はる}かに超^{すう}える崇高な存在であるということ。

巨^{おお}きい。並みの男など、その体の中にすっぽりと収^{おさ}まってしまおうだろう。

頭部は雄^{おうし}牛であった。

天の星々がその体に^{きら}燦めいていた。闇のような黒一色の巨体には、余すところ無く天の星が輝いている。

このような生き物が存在するはずがない。少なくともイーヴの居た世界にはいなかった。

人は人、獣は獣である。獣と人と、その両者の力を併せ持つかのようなこの存在は、一体何なのか。

心臓が強く脈打ち、こめかみの辺りに痺れるような感覚が走る。

「……ジャン・ザ・ビオンはわたくしたちの世界だけではなく、その他のあらゆる世界にも存在します。そしてどの世界からも中に入ることはできるの

です。多様な植生や、見たことのない生物もそうした特性の結果です」

クリステルの言葉が脳裏に甦った。聞かされた時にはそんなものかと思っていたが、今はっきりとそれが真実であると納得できた。

目の前の存在はイーヴも、そしておそらくクリステルも知らぬ存在だ。あるいはレイモンならば知っているのかもしれないが、もはや確める術はない。

獣頭人身。

そんな生き物は、神話や物語の世界にしか存在しない。

誰も見たことがない、しかし、確かに人の心の中に存在するもの――

それが血と肉を纏^{まと}って今、イーヴの目の前にあった。

「大いなる敵」であった。

よろい たぐ いっさい
鎧の類は一切身に付けていない。腰の回りを獣皮^{じゅうひ}で巻いただけの姿である。

そして首の回りには、いくつもの「勇者の護符」が掛けられていた。

イーヴは全身の血が逆流するような昂奮^{こうふん}を覚えた。

「……俺はエク族の勇者イーヴ。ヨルンの息子イーヴだ」

己の声が震えている。恐れのためではない。畏れと、感動のためである。

「大いなる敵」は、重く、低い唸り声うなを漏らした。

言葉はない。人の言葉は話せないのではないだろうか。

だがイーヴの心は伝わったようだ。「大いなる敵」は立ち上がり、脇わきに置いてあった巨大な両頭斧りょうとうふを手に取った。人にはとても扱えぬあつかであろう巨大な戦斧せんぶである。

「大いなる敵」は戦斧を構えた。

その足元が血で濡れていることにイーヴは気づいた。

夜空の一角、脇腹わきばらから血が流れている。右の腿ももにも槍つらぬで貫かれたと思しき傷おぼがある。そこからもやはり血が流れ、洞窟の床へと滴したたっていた。

イーヴは「大いなる敵」へと槍を突きつけた。

「『大いなる敵』よ。俺はあなたを斃たおさなくてはならない。なぜならあなたはエク族の戦士たちを殺し、我が父の生命いのちを奪ったがゆえに」

「大いなる敵」が咆吼ほうこうした。洞窟の壁が震えた。瀑布ばくのように夜空が迫ってきた。

戦斧を振り上げつつ突進してくる。イーヴは左に回り込んだ。足の傷を見越し、「大いなる敵」の右側へと移動したのである。

からだ
身体が浮き上がるほどの衝撃が足裏に伝わった。

「大いなる敵」が打ち込んだ斧おのが、洞窟の岩盤を叩いたのである。

石の破片が降ってくる。尋常ではない。いや、人間の域を遥かに超えている。

打ち合いは不可能であるとイーヴは悟った。

ほ
吼えた。猛たける雄牛の咆吼である。

じょうき いっ
常軌を逸した速度で戦斧ふるが揮われた。横薙よこなぎの一闪いっせんである。姿勢を低くしてイーヴは躲かわした。爆風が同時に通り過ぎる。太刀風たちかぜなどではない。爆風である。

戦斧を躲した姿勢のまま、イーヴは槍を突き出した。「大いなる敵」は戦斧の柄えで穂先を弾いてこれを禦ふせいだ。死角から突き出したにも拘らず禦かかわがれたのだ。

尋常でないのはその膂力りよりよくだけではなかった。これは繊細さすら感じさせる卓越した武器の扱い方である。

ぎりょう
恐るべき技倆であった。

——やる！

イーヴは猫のように後ろに退さがって、やや低く構えた。

相手は大柄である。いや巨体である。下からの攻撃が有効だ。

「大いなる敵」は荒い息を吐きながら、イーヴに歩み寄ってきた。足取りが少し頼りない。

歩みの後には、血が点点と続いた。

本来ならば、万全の状態である時に挑むべきなのだろう。貴族たちなどはそう考えるはずだ。だがエクス族はそう考えない。

挑戦を掲げた時に、「大いなる敵」は迷わずそれを受けた。斧を手に取り、立ち上がった。

ならば決まりだ。戦うことになんの問題もない。避けるべきならば拒否の意を示せばよいのだ。

「大いなる敵」はそうしなかった。たとえ言葉は通じなくとも、不屈の戦意は確かにイーヴに伝わったのだ。

イーヴの少し手前で「大いなる敵」は立ち止まった。巨大な戦斧を構えた。足幅を広く取った。

——来る！

思った瞬間、戦斧が打ち込まれてきた。身を退いてイーヴは躲した。二撃目が来た。これも躲した。三撃目が来た。イーヴはしゃがみ込んで躲した。

戦斧が巻く風が凄じい。爆発するような音がするが、しかし洞窟に激突させることを避けているようである。破片が降り注いでこないからだ。

小刻みな連撃なのだろう。これでも。

己など掠っただけで死んでしまいそうであるが。

足元を払う一撃が来た。

イーヴは鋭く飛び上がると同時に、槍で突いた。

「大いなる敵」は首を大きく振ってこれを^{かわ}躲した。

巨体とは思えぬ身の^{こな}熟しの良さである。

イーヴは足で戦斧を踏むようにして横に飛んだ。

「大いなる敵」が己を壁際に追いつめようとしていたことなど、^と疾うに判っている。

濡れたような黒い瞳がイーヴの方を向いた。雄牛の瞳。何を考えているのだろう。

戦斧を大きく振りかぶった。^{ほうこう}咆吼を上げると、真上からイーヴに打ち下ろしてきた。

後ろには躲せない。^{とっさ}咄嗟にイーヴは斜め前に出るようにして戦斧を躲し、同時に「大いなる敵」の^{こぶし}拳^{めが}目懸けて槍で突いた。が、これも躲された。

なんと戦斧から手を離したのである。自由になった巨大な腕が、物凄い早さでイーヴに伸びてきた。

^{あわ}慌てて身を^ひ退こうとしたが、遅い。太い指が^{むなぐら}胸倉^{つか}を掴んでいた。

——しまった！

思う時にはもう、イーヴの足は洞窟の床から離れていた。イーヴとて屈強な戦士である。それを^{やすやす}易易と吊り上げた。今までの戦い振りからすれば当然の^{りよりよく}膂力ではあるが、驚嘆している場合ではない。

「大いなる敵」は^ほ吼えながら、宙高く持ち上げた

イーヴを、今度は地へと叩き付けようとしているのだ。

下は石の床である。落とされれば命はない。

考えている場合ではなかった。イーヴは槍を投げ捨てるのと腰の剣を抜き、それで「大いなる敵」の手首を引き切った。獣皮に刃が食い込む感触がした。この皮自体が、「大いなる敵」の身を守る^{よろい}鎧なのだ。人の皮膚とは分厚さが違う。

叩き付けられる途中で、その動きが狂った。イーヴは体を返し、両脚で地を蹴るような仕草をした。靴の踵^{かかと}が石を叩く音がして、衝撃が^{ひざ}膝から^{もも}腿までへと伝わった。

「ぐっ！」

イーヴは^{うめ}呻いて、床に手を着いた。だが立ち上がることができない。ともかく攻撃されないように素速く離れた。

「大いなる敵」が^ほ吼えている。

洞窟の壁にその影が^{おど}躍っている。手首を押さえ、苦痛の吼え声をあげ続けている。

膝から下に力が入らない。イーヴは壁に手をつけて立ち上がろうとした。骨が折れているのを恐れたが、^{さいわ}幸い骨折も^{ねんざ}捻挫もしていないようだった。

立ち上がると壁に背を^{もた}凭せ掛けた。

ふと右側に、がらくたのような物が^{たいせき}堆積している

のに気づいた。何かと思ったが、すぐに判った。クリステルが作った棚に違いない。叩き壊されたというよりも、^{けいねん}経年により自然と崩れたようである。

^{ひらめ}閃くものがあった。イーヴはしゃがみ込み、がらくたの山を^{あさ}漁った。

探し物はすぐに見つかった。期待外れの姿で。

クリステルが使っていたナイフだ。だが、ぼろぼろに^さ錆びてしまっている。とても武器としては役立ちそうになかった。

だが一瞬だけ機会を作るためならば、使えるかもしれない。

幸い^{ふしょく}腐蝕が進んではいるものの、形を^{たも}保っている。イーヴはクリステルに感謝した。

ナイフを^{てのひら}掌の中に握り締める。軽く床を蹴って足の感触を確めた。

イーヴは立ち上がった。「大いなる敵」は手首に布を巻き終え、戦斧を拾いあげていた。

「始めるか……」

両手で剣の柄を握るようにした。その内側にナイフを隠している。

「おおおおおっ！」

イーヴは大きく踏み込んで剣を振った。金属音が鳴った。「大いなる敵」は^{なん}難無くイーヴの攻撃を戦斧で受けたのだ。構わず二撃目を繰り出すイーヴ。

再び金属音。これも受けられた。

剣先が流れた。大きな隙を見せたことになる。

——来るか？

しかし「大いなる敵」は乗っては来なかった。何か感づいているのだろう。

戦斧を突き出し、押し出すようにしてイーヴと距離を取ろうとした。

その瞬間イーヴは足を上げ、戦斧に跳び乗った。咄嗟とっさの思いつきである。同時に手の内のナイフを「大いなる敵」の顔目懸けて投げつけた。

「大いなる敵」が悲鳴をあげた。

戦斧を放り出し、顔をおお掩っている。イーヴは戦斧と同時に床に降り立った。「大いなる敵」は警戒して、自由な方の腕を大きく振り回した。

大きな腕をか搔いくぐ潜るようにして避けながら、イーヴは剣を腰だめに構え、踏み込んで突きを入れた。

「大いなる敵」は絶叫をあげた。

右足の傷口を狙った突きである。ほぼ同じ場所に攻撃を受けたのだ。たま堪るまい。

イーヴは深く剣を突き刺すと、そのまま柄から手を離して距離を取った。

薄暗い床の上を、素速く目をは這わせる——あった。

イーヴは先程投げ捨てた槍の元へと走り、拾い上

げた。

「大いなる敵」が吼^ほえた。明らかに怒りが籠^{こも}った吼え声である。

鼻の近くから血を流している。ナイフは傷を与えることに成功したようだった。再び戦斧を構えると、イーヴへと間を詰めようとする。

しかし蹠^{よろめ}いた。たたらを踏んだ。その足元に血が拡がってゆく。

今の攻撃により、右足の傷はかなりのものになっている。

動きをかなり殺せたであろうし、もはや長くは戦えないだろう。

尤^{もっと}も、もしも人間ならば、という類推からの判断だが。

呼吸も荒い。だがイーヴを見つめる眼差しに変化はない。

元より雄牛の目である。何を考えているかは判らないが、戦いを始めたときと同じく変化なしなのだから、これはまだ闘争心を燃え立たせていると見た方がいいだろう。

イーヴは槍を構え、自分から見て「大いなる敵」の左側、怪我をしている側へと回り込もうとした。

しかし「大いなる敵」の方でもそんなことはお見通しらしく、イーヴに合わせて体を回してくる。広

いとは言っても洞窟なので、すぐにこれ以上回り込むことはできないという位置まで来た。

その時である。

「大いなる敵は」やおら戦斧を担ぎ上げると、イーヴに向かって投げてきた。これにはイーヴも驚いた。避けるためにはさらに左へと回り込まなくてはならない。だが考えている暇は無い。イーヴは前に出るようにして戦斧の激突を回避した——目の前に黒いものが、ぬうっと現れた。

「大いなる敵」の腕であった。危険を感知したときには手後れになっていた。丸太のような腕にしたたかに殴られて、イーヴは吹き飛ばされた。

洞窟の壁に当たって軽く跳ね返り、床へと落ちた。殴り飛ばされたことは判っていたが、尋常な一撃ではない。全身がばらばらになったかのようで、動くことができなかった。

どれだけの傷を受けたのかも判らない。

立てない。イーヴは呻いた。腹と胸に激痛が走った。内臓でなければいいが。

——「大いなる敵」を斃すまでは、俺は死ねない。

立たなければ、しかし身体が動かない。「大いなる敵」が近づいてくる。イーヴは焦った。

なんとか手を着いて身を起こそうとした途端、息

が止まるほどの痛みに襲われた。

それで判った。骨だ。おそらく^{あばら}肋が幾本か折れている。

つい先程は優位に立ったと思ったものが、今はこの^{ざま}様か……。

笑うことすらできない。油断したつもりはなかったのだが。

「大いなる敵」が近くに立った。イーヴは首を^{つか}掴まれた。そのまま吊り上げるようにして立たせられた。

「かはっ……」

息が詰まる。「大いなる敵」は力を^{ゆる}弛めない。持ち上げられてゆく。

その時イーヴと、そしておそらく「大いなる敵」とは、同時に驚いた。

イーヴは己の右手に。その感触に。「大いなる敵」はイーヴが右手に握っている槍に。

あの衝撃の中、槍から手を離さなかったのだ。偶然であろう。だがイーヴにとってはそんなことはどうでも良かった。

反射的に槍を突き刺した。胸に向かった穂先は、しかし「勇者の護符」に当たって^{はば}阻まれ――

そして、「大いなる敵」の首筋へと吸い込まれた。

曇^{くぐも}った呻^{うめ}き声が聞こえた。イーヴは槍を押し込んだ。首に回された指に力が掛かった。

「ぐあ……」

目の前が暗くなる。イーヴの足は完全に床を離れていた。

だがそれでも、イーヴは渾^{こんしん}身の力を振り擽^{しぼ}って槍を深く突き刺していった。

「大いなる敵」は首を絞める力を弛めない。イーヴを離して槍を抜こうとはしない。

どちらが先に息絶えるかの根^{こん}比べだった。

「ぐおお……」

耳鳴りがしてきた。もう何も見えない。両腕の感覚もない。

それでも槍を押し込んでいく。押し込んでいこうとした。

不意に自由になった。イーヴは床に落下した。激しく咳^せき込んだ。激痛が走った。折れた骨^{きし}が軋むような感じがした。唸^{うな}るように呻^{うめ}きながら、死にかけた虫のように丸まった。

漸^{ようや}く動けるようになった時、イーヴは目の前の巨体を見上げた。

動かない。

「大いなる敵」は疲れたような立ち方のまま、固まっている。

首からの出血が夥^{おびただ}しい。胸を流れ、腹を流れ、腰を被^{おお}う皮にまで、血が溢^{あふ}れるほどに染み込んでいる。

星々が輝きを失っていた。

その体に輝いていた天の星々は、流れる血に被^{おお}われて輝きを失っていた。

イーヴは洞窟を見廻した。武器を探した。

最初「大いなる敵」が坐^{すわ}っていた辺りで剣を見つけた。エク族の剣だった。

イーヴは剣を拾い上げ、「大いなる敵」を見つめた。

「大いなる敵」よ――。

――俺は、今あなたを斃す。

蹠^{よろめ}踵きつつも、イーヴは剣を構え、「大いなる敵」の胸元に体当たりをした。刃が埋^{うま}まっていく。狙いは心臓。だがその鼓動は、もはや止まっているようだった。

イーヴの攻撃を受けて、「大いなる敵」はゆっくりと倒れていった。巨体が背中から床に倒れていく。

地響きのような重い音がした。

「大いなる敵は」手足を拵^{かっこう}げたような恰好で倒れていた。

戦いは終わった。

イーヴは深い息を吐こうとして、そしてやはり痛み^{うめ}に呻いた。

「大いなる敵」の首に掛けられた「勇者の護符」。これがなければ槍は胸に刺さり、ひょっとしたらイーヴが先に死んでいたかもしれない。

血まみれの護符たちを、イーヴは静かに見つめた。

「さあ……帰ろう」

語りかけるように^{つぶや}呟いた。

剣を拾い上げた近くには、他にも「勇者の護符」^{うずたか}が堆く積み上げられていたが、とても今のイーヴに持ちきれぬ量ではなかった。

イーヴは「大いなる敵」の角^{つの}を切り取った。一本^{ふところ}を懐に入れた。もう一本は――父と一緒に埋めた。

墓を掘るのはかなりの労力を必要としたが、イーヴは遣^やり遂^とげた。これだけはしなくてはいけないと思ったからだ。

角と一緒に^{ほうむ}葬る代わりに剣帯をもらうことにした。何となく、そうすることを望まれているような気もした。

それらの作業をしている間、不思議と日が沈むことはなかった。

作業が終わると空白の時間がやってきた。

これからどうすればいいのか。まずは傷を治すこ

とだ。^{さいわ}幸い内臓に怪我はないようだし、骨も綺麗に折れているから、治りは早いだろう。

それからかつてのように生活の準備をしなくてはならない。「大いなる敵」の屍体と、血を片付けなくてはならないが、こちらは急ぐ必要がある。怪我の治りを待っている余裕はない。イーヴは溜息を吐こうとしてやめた。あまり大きく息をすると、痛い目を見ることになる。

洞窟の入口近く、父の墓の傍^{そば}で、イーヴはぼんやりと坐^{すわ}っていた。

虚脱するとはこういうことを言うのか――。

そう思ったとき異常に気付いた。

己の影が、左右に分かれている。

イーヴは右を向いた。^{かたむ}傾きかけた太陽が、ゆっくりと地へと向かっている。反射的に左を向いた。ずきりと痛みが走ったが無視した。

そこにも太陽があった。同じように、地に沈んでいこうとしていた。

「最初に太陽が二つの時に入山してしまったあなたは、今一度、普通の状態で入山しても、自力で下山することは不可能になっています」

クリステルの言葉が甦^{よみがえ}った。

「ジャン・ザ・ビオンから脱出するためには、入った時と同じような状況で下山する必要があります」

そうだ。クリステルは確かにそう言った。なればこそ、己は下山の見込みがないのだ。

なぜなら「裁きの刻^{とき}」は滅多^{めった}にあるものではない。数世代に一度という珍しい出来事なのだから。

入山したときに起こったそれが、なぜ今ジャンザビの中で見ることができるのか？

イーヴには解らなかった。しかし急がなくてはいけないことだけは判った。

イーヴは立ち上がると荷物を拾い上げた。最初に投げ出したままになっていた荷物だ。

墓穴を掘るのに使用した剣を鞘に押し込むと、荷物を持って歩き出した。

穴を掘ったり作業している間には全く動かなかった癖に、いざ動き出すとなると太陽の動きは速かった。上天を過ぎると一気に大地を目指して駆けてゆく。

おぼつか^{おぼつか}覚束ない足取りで、しかし必死にイーヴは山を下った。己が入山してきた場所を目指して。

痛みと疲労が何度も襲ってきた。身体^{からだ}だけでなく、精神をも打たれているようだ。

だがイーヴは歩みを止めなかった。何も考えず、ただひたすら山を下り続けた。

時間も判らない。音も消えた。

最後の茂みを掻き分けて前に出ると、そこは境目^{さかいめ}

だった。荒野と——ジャンザビとの。

己が入山したのは、ここからである。

左右には今まさに沈まんとしている太陽がある。

イーヴは荒野に踏み出した。

エピローグ

始めは、村の連中は大して驚きはしなかった。イーヴがジャンザビに入らず、引き返してきたと思ったのだという。

ぼろぼろの^{かっこう}恰好を見ても、獣か何かと戦ったのかという程度の認識であつたらしい。

最初に事情を話したのは母である。母はイーヴが帰ってきたことで泣き、剣帯を見せるとさらに泣いた。

村が大騒ぎになったのはその後である。

長老の前に呼び出され、イーヴは詳しい話をする事になった。

緊張をしたわけではないが、イーヴは長い話が苦手である。相手に解るように話そうと思うほどに舌が上手く動かず、何度も前後したり、補足したりしながら^{とつとつ}訥訥と話した。

長老はイーヴの^{つたな}拙い話をじっと聞いてくれた。

聞き終わると^{めいもく}瞑目して^{てんじょう}天井を見上げた。

「偉大なる勇者よ――」

声には震えがあった。

「我らの戦いは終わった」

^{おごそ}厳かな宣言だった。

こうしてイーヴの戦いは、エク族勇者たちの戦い

は、終わった。

イーヴは暫くは怪我の治療に専念するつもりだった。
た。

後のことはそれから考えればよい。

だが何よりも優先すべきことが一つ残っていた。

「旗を？」

長老は不思議そうな顔をした。

「青い旗を。三角に切った青い旗を村のあちこちに
立てて欲しい」

「構わないが、なぜだな？」

「約束をしたんだ」

「山の向こうで会ったという人にか？」

「ああ」

長老はそれ以上質問をしてはこなかった。イーヴの言う通りにすると約束し、その日の内に村のすべてへ報せを飛ばした。

翌日から作業が始まった。怪我があるのでイーヴは手伝わなかったが、皆喜んで働いてくれているようだった。

すべての旗が立つのに一週間かかった。

「どれくらいこうしていればいいのか？」

「さあな……」

イーヴは苦笑した。約束はしたものの、クリステルが何を考えていたのかは判らない。

そもそもクリステルは、レイモンは、彼らの家は
今どうなっているのだろう。

ヴァルカンティがあることは知っている。エク族
の土地もその領内に隣接しているからだ。

そして隣接領地を治める貴族が居ることも知って
いる。交易や裁判などで行き来があり、エク族とは
親しくしている。かつてヴァルカンティ王が、エク
族から税金を取り立てようとした時には猛反対をし
てくれたという。

「俺にも判らん」

長老は目を丸くしたが文句は言わなかった。

それから三日後、着飾った貴族の使者が村にやっ
て来た。

見たことのある紋章だった。^{くだん}件の貴族、エク族に
隣接する領地のバシェレリーという貴族である。

勇者イーヴにお会いしたい。

使者はそう言ったという。胸騒ぎがした。

村の者たちはイーヴのことが、「大いなる敵」の
ことが、貴族の間で取沙汰^{とりざた}されているのだろうと
言ったがイーヴはそう思わなかった。

一団はイーヴの家に来た。家の前には兵士たちが
列を作り、代表が家の中へと入ってきた。

「イーヴ様であらせられますか」

「ああ」

イーヴは^{うなず}頷いた。

「クリステルからの使いだな」

言ってみると、使者の顔に驚愕が浮かんだ。何か言おうと口を動かしたが、言葉にならないようだ。

使者はほとんど蒼白と言ってもよい顔色になっていた。

ぎこちない所作で膝を着くと、^{うやうや}恭しく^{はこ}匣を差し出した。イーヴも無言で受け取った。

「帰っていい」

「は、しかし……」

「何も頼むことはない。よく来てくれた。礼を言う」

使者に向かって微笑んだ。わずかの間、使者は呆けたようにイーヴを見ていたが、すぐに顔つきを改めた。

使者は^{いふ}畏怖するような眼差しでイーヴを見ていた。

「……^{かしこ}畏まりました。では^{わたくしめ}私目はこれにて失礼致します」

「ああ」

それだけが役目だったと言うように、使者の一団は来た時と同じくらい速やかに帰って行った。

村の者たちは話を聞きたがった。だがイーヴは丁^{ていち}重^{よう}に断った。誰にも話すつもりはなかった。

一人になってから匣^{はこ}を開いた。

中には、古びた羊皮紙が入っていた。

親愛なるイーヴ。この手紙を読んでいるということは、あなたは無事に戻れたのですね。

そして「大いなる敵」を斃^{たお}された。まずはお慶^{よろこ}び申し上げます。

過去に居るわたくしにとっては、遠く離れた未来のこと、あの別れの後、何があったのか、あなたが何と出遭^{であ}ったのか、「大いなる敵」とは何であったのかなど、興味は尽きませんが、どれも知る術^{すべ}の無いことです。

あなたが無事に使命を達成して、こうしてわたくしからの手紙を読んでくれているということが嬉^{うれ}しい。そのことだけで良しとしましょう。

イーヴ。わたくしは齡^{とし}を取りました。

信じられないことかもしれませんが、この手紙を書いている時点で、もう孫が居るほどの老人です。あなたの知っているわたくしは、すでに遠い過去のものとなってしまいました。

あの別れの後、わたくしは何日も泣き暮らしました。怨^{うら}み言^{ごと}を言うつもりはありませんが、それほど

の悲しみでした。それまでの暮らしに戻るまでには長い時間がかかりました。

陛下も父も、周りの人々は皆、大変良くして下さいましたが、あなたとの日々を忘れ去ることはできませんでした。

セリーヌ姫はエーメ卿とご結婚なさいました。なんと、バルドール家から嫁がれたのですよ。

そしてわたくしはセルジュと結婚いたしました。ですからセリーヌ姫とはご親戚ということになります。今でも親しくお付き合いをしております。ご夫妻にはすべてをお話し致しました。

エーメ卿はあなたとの決着を付けられなかったことを、今でも悔やんでおられます。なんだか子供みたいでおもしろいでしょう？

約束通り、セルジュにはあなたの言葉を伝えておきました。「感謝する」とのことでした。

彼は死ぬまで、あなたのことを案じておりました。「大いなる敵」と出逢えたのか、無事に斃すことができるのか、よく心配しておりました。

王のご采配により、バルドールとギュベールは一つの家となりました。

わたくしの他には父に子はおりませんし、養子を取ってまで家名を残すつもりもなかったようです。わたくしの結婚を機会に、すべての財産をひと纏め

にして、わたくしたち夫婦のものとして下さいました。

家名も改めました。バルドール家としては抵抗があるかと思いましたが、セルジュは快く^{こころよ}応じてくれました。今ではバルドールもギュベールも、公式の書類にしか記されることはありません。子供たちは^{もっぱ}専ら新しい家名を^な名告っておりますし、孫もそうです。多くの貴族たちと同様、バルドールもギュベールも、家の歴史を表す単なる記号となってしまうでしょう。

新たに追加される領地を選ぶ時、わたくしたちは迷わずトゥワイユの土地を選びました。そう、あなたの住む土地、エク族の土地に隣接する領地です。

そしてその新領地を居場所とすることにしましたのです。

以来数十年、わたくしたちはトゥワイユの土地を守り続けております。これから先も、そうでしょう。

わたくしたちの子供、孫、そのまた子供たちも、きっとこの土地を守っていつてくれると思います。

ありがとう。イーヴ。

あなたに出逢えたことは幸運でした。恋をしたことも、それに破れたことも、今振り返ってみるとすべてが宝石のように輝いて見えます。

恐れを知らぬ娘時代のことですから、思い出すだけで恥ずかしいこともたくさんあります。

それでもこうしてあなたのことを想うと胸が熱くなります。

あなたはわたくしの青春でした。宮廷の華やかな生活よりも、あなたと過ごした時間こそが、わたくしにとっては何よりも懸け替えのない記憶なのです。

ありがとう。イーヴ。

わたくしたちが再び会うことはもう無いでしょう。わたくしたちはお互いに、相手の記憶の中のみ生き続けることになるのでしょうか。

あなたの中でのわたくしはどんな姿ですか？

わたくしの中でのあなたは、海を見ていたあなたです。^{ただけ}猛猛しくエーメ卿と闘っていたあなた、ジャン・ザビ・オンでわたくしたちを守ってくれたあなた、そして舟の中で緊張していたあなた……^{さまざま}様々な姿が思い出されますが、いつも一番に思い出されるのは、テラスに立って海を見ていたあなたの姿です。

身辺が落ち着かれた後には、今一度海を見にゆかれてはいかがでしょうか。

父の邸で眺めたそれとは違っているかもしれません。^{やしき}父の邸で眺めたそれとは違っているかもしれません。わたくしたちの時代と、あなたの時代とでは海

も少しは変わっているかもしれません。

それでも、海は海でしょう。

年寄りの^{くりごと}繰言のようになってきてしまいましたね。もうしわけありません。

今、わたくしを呼ぶ声がしました。これから孫の結婚式なのですよ。晴れの日にこのような手紙を書くのはどうかとも迷いましたが、ずっと決めていたのです。

わたくしが子供を産み、その子供がまた子を産み、その子供が愛する人と結ばれる姿を見よう、それを確認するまでは生きようと。

そしてその日に、あなたに手紙を書こうと。

イーヴ。わたくしは幸せです。こんなにも多くの愛する人たちに囲まれて、^{すこ}健やかに暮らしています。

夫には先立たれましたが孤独ではありません。最近では昔のようにジャン・ザ・ビオンのことなど調べたりして、穏やかに過ごしています。目は少し悪くなりましたが、長い時間でなければ頑張れます。

^{めがね}眼鏡もありますし。

あまり書くと今の姿を想像されてしまいますね。用心しなくてはいけないかしら。

後どれくらい生きられるのかは判りません。

ですがきっと、最後までわたくしは幸せでしょ

う。そう信じています。

今ではあの日、あなたに出逢えたことがすべての始まりだったのだと思っています。お世辞^{せじ}ではありませんよ。本当のことです。

本当にありがとう。あなたの幸せと健康を、心からお祈り^おすることにして筆を擱^おきます。

いつまでもお健やかに――。

クリステル

イーヴは手紙を読み返した。二回目を読み終えると、三度目に入った。

そうして幾度も読んだ。何度読んだか己でも判らなくなった頃、漸^{ようや}くイーヴは羊皮紙^{はこ}を匣^{はこ}に戻した。椅子に深く腰掛^{つむ}けて目を瞑^{つむ}った。

不思議なことに、花の香りを嗅^かいだ気がした。

あの日、クリステルと歩いた庭で嗅^かいだ花の香りだ。

優雅に、美しい所作^{しよさ}で花々を見て回っていたクリステルが思い出された。

彼女はあの生活を続けたのだろう。それでいい。そうあるべきだ。

――幸せに、なったんだな……。

良かった。

本当に、良かった。

何も言葉は出てこなかった。思いだけが静かに、
からだ^{からだ}ひた^{ひた}身体を浸していた。

翌日、イーヴは村を出た。

海を――港町ブランドシェを目指す旅だった。

怪我はまだ治っていない。心配して供^{とも}に随^ついて行くと言った者たちもいたが、イーヴはこれも丁重^{ていちょう}に断った。

一人で出発した。途中で道^そを外れた。

ジャンザビを目指した。

馬である。半日もしない内にジャンザビの姿が目に入った。

緑少ない白茶けた荒野^{ただなか}の直中に、ただ一点緑^{あふ}に溢れたその姿を、イーヴは遠くから見つめた。

日差しは強い。

ここはヴァルカンティとリンドベリの古戦場。二百年前、両国の国境付近だったところだ。その戦いを、歴史的な合戦を、イーヴはこの目で見た。

かげろう^{かげろう}陽炎が立つほどの陽気^{ようき}の中、神秘の聖山がくっきりと姿を見せている。

地に落ちた影は一つである。

ふと――荒野^{さまよ}を彷徨う戦士の幻影が見えた気がした。

燃える陽炎の中、蹠^{よろめ}踉くようにジャンザビを目指す、ジャンザビへと入っていく、若い戦士。

しし四肢には力を。心には勇気を。そして胸には「勇者の護符」を――。

それはかつての己の幻影であった。束の間、幻影が今の己と重なりあう気がした。

まるで永遠のように。

イーヴは微かに微笑んだ。

もう――ジャンザビに入ろうとは思わない。

静かな気持ちだった。どこまでも広がって、そして透明で――何だか泣きたくなるような……。

馬が鼻を鳴らした。

「すまん。待たせたな」

イーヴは笑って、馬の首を撫でてやった。この暑さでは馬も辛かろう。

「行こうか」

海を見ようと思った。

あの日、クリステルと共に眺めた海を。あの青い無限の燦めきを。

海の燦めきが、優しい面差しと重なる。

胸の想いが、憧れとなって風に乗る。

「走れ！」

馬を走らせた。ジャンザビが遠離る。

イーヴは振り返らなかった。その目はもう、遙か

な海を見ていた。

了

奥付

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などとは、一切関係ありません。

※この作品を、個人的に楽しむ範囲を越えて、無断で、複製、転載、配布、改変、販売等を行うことを禁じます。

=====
=====

■作品名：伝説の敵

■著作者：琴乃つむぎ / WordsWeaver

■初版：2005-10-08

二版：2008-04-06……83枚加筆修正、新規エピソードとして第二章第十二節、第二章第十四節を追加

■ 掲 載 サ イ ト : WordsWeaver
<http://wordswearer.com/>

=====
=====